
東京ラビンス

瑞原唯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京ラビリンス

【Nコード】

N1566K

【作者名】

瑞原唯子

【あらすじ】

双子の兄妹である遙と澪は、17歳の誕生日、ある突拍子もないことを祖父に命じられる。それは、かつて世間を騒がせた絵画泥棒・怪盗ファントムの後継者となることだった。

作者本人による本家サイトからの転載です。

0・光の魔神

「お兄ちゃん、早く！」

「はしやぎすぎだよ、美咲」

橘 たちばな 大地 だいち は、振り返って手招きする美咲 みさき に目を細めながら、大きめのスポーツバッグを肩にかけ、彼女に続いてタラップを進んでいった。微かな潮風を頬に受けると、歩調を緩め、雲ひとつない空を見上げて微笑む。

「お兄ちゃんつてば！」

少しも急ごうとしない大地に、美咲は不服そうに口をとがらせた。タタタ、と軽い足どりでタラップを駆け戻ると、待ちきれないとばかりに手を引いて急かす。そのとき??。

「きゃあつ！」

後ろ向きに歩こうとしてバランスを崩したのか、彼女の体はぐらりと大きく傾いた。漆黒の髪がふわりと舞う。しかし、すんでのところで大地が抱き止め、ゆっくりと自分の胸に引き寄せた。こわこわと顔を上げた彼女の頭に、大地はぽんと手をのせて言う。

「ほら、だからはしやぎすぎだって」

「う、うん……」

気恥ずかしさからか、美咲は頬をほんのり染めながら、少しきまり悪そうに頷いた。しかし、すぐにニコツと笑顔を見せると、大地の隣に回り込んで手を繋ぎ、今度は二人並んで出航間近のフェリーへと歩き始めた。

美咲が橘の家に引き取られてから1年が過ぎていた。

初めの頃はよそよそしく遠慮がちで、笑顔を見せることも少なかったが、今ではすっかり橘の家族としてそこに馴染んでいた。特に大地にはよく懐いており、まるで年の離れた兄妹のように仲良くあった。

今回の船旅は、二人にとって初めての旅行である。

夏休みを利用してのんびりしようと、学生である大地と美咲の二人だけで、2週間ほど小笠原へ行くことにしたのだ。当初、大地は橋家が所有している軽井沢の別荘を予定していたが、海がいいという美咲の要望もあり、一度行ってみたいと思っていた小笠原に変更したのだった。

「わあ、すごい！ 船なのにホテルみたい！！」

美咲は船室に入るなり感嘆の声を上げた。ワンピースをひらめかせて部屋の中央に駆けていき、小躍りしながらあたりを見まわすと、大地に振り返ってニコツと微笑む。

「小さいときにフェリーに乗ったことがあるけど、こんなお部屋じやなくて、床に絨毯が敷かれただけのところで大勢の人たちと雑魚寝だったわ。寝転がるのがやっとだったの」

「この船でも2等はそうかな」

大地としては、この特等船室でも不満があった。手前に小さめのテーブルと椅子、奥にベッドが二つ、あとはユニットバスがあるくらいで、さして広くもなければ、内装もごくありきたりなものである。ルームサービスもないそうだ。美咲はホテルのようだと言ったが、せいぜいがビジネスホテルのツインルームといったところだろう。しかし、美咲が喜んでくれたことで、ひとまずほっと安堵する。「ちよつと、お兄ちゃん、どうしていきなり寝ちゃうの?!」

部屋の隅にスポーツバッグを下ろし、さっそくベッドに潜り込もうとした大地に、美咲はシーツを引っ張りながら抗議の声を上げた。不満を露わに膨れ面を見せる。大地はくすつと小さく笑うと、僅かに視線を流して言う。

「美咲も寝ておかないと体力が持たないよ。旅はまだ始まったばかりなのに、こんなところではしゃぎ疲れてはもつたいないだろう?」「うん、でも……」

美咲は一応は素直に頷きつつも、諦めきれないように、もぞもぞ

と反論したそんな様子を見せていた。そのことに気づいてはいたが、大地はあえて無視して言葉を繋ぐ。

「それに、今晚はお楽しみもあるしね」

「お楽しみって?」

「それはまだ秘密」

美咲は眉根を寄せて口をとがらせた。

「……じゃあ、船内を一通り探検して、それからお昼寝じゃダメ?」
おねだりするようにそう言うと、漆黒の瞳でじつと大地を見つめながら、ちょこんと首を傾げて見せる。こんな顔をされては降伏せざるをえない。敵わないな、と大地は密かに苦笑した。

「わかったよ」

「お兄ちゃん、ありがとう!」

美咲はパツと顔を輝かせると、ベッドに寝そべる大地に飛び込んで抱きついた。

外では大きく汽笛が鳴り、ゆっくりと船が動き出した。

結局、船内探検に時間を費やしすぎて、昼寝の時間はほとんど取れなかった。大地は部屋に戻ってから1時間ほど眠ったが、美咲は興奮のためか一睡もできなかったらしい。それでもまだ元気いっばいで、おなか为空いた、何か食べに行こうと、起き抜けの大地に容赦なくせがむ。

これだけはしゃいでいては、島に着く頃には疲れ切っているかな???

足どり軽く船内レストランへ向かう美咲について歩きながら、大地は苦笑しつつも優しく目を細めた。

「んー……眠くなってきた……」

食事を終えて部屋に戻った美咲は、目をトロンとさせてそう言うと、吸い寄せられるようにベッドに倒れ込もうとする。しかし、大地は背後から抱き止めてそれを阻んだ。

「まだ寝ちゃダメだよ」

「どうして？ ようやく眠れそうなのに」

「お楽しみがあるって言ったの忘れた？」

眠くて不機嫌になっていているらしい美咲は、口をとがらせて大地を睨んだ。今の彼女にとって、眠らせてくれない大地は、もはや敵も同然なのだろう。それでも大地はニコツと微笑むと、「おいで」と言って彼女の手を引き、半ば無理やり部屋の外へと連れ出した。

「どうです？ なかなかのものでしょう、溝端さん」

「これは……妻と息子にも見せてやりたいですな」

扉を開けて外に出ると、男性二人の会話が入ってきた。まだそれほど遅い時間でもないためか、甲板にはちらほらと人の姿が見える。おそらく、その多くが同じ目的で来ているのだろう。

大地は手すりに両手を掛けた。

夜の大海は空よりも暗くて黒く、まるで深い闇が広がっているかのようだった。じっと見ていると引きずり込まれそうな、そんな恐ろしささえ感じる。しかし、その上空には??。

「見てごらん」

眠い目をこする美咲の頭に、大地はぽんと手を置き、もう一方の手で空を指し示した。言われるまま、美咲はその指を追ってぼんやりと顔を上げる。しかし、その表情はみるみるうちに輝いていった。

「わぁ……」

彼女の大きな漆黒の瞳には、たくさんのまばゆい輝きが映っていた。

「すごい、こんなに星があるなんて……」

「本土と違って空気がきれいだし、まわりに光もほとんどないからね」

どこまでも続く紺色の空に、無数の星が散りばめられている。数えることなどとてもできない。無数という言葉の意味を初めて知った気がした。天の川がおとぎ話でないことを初めて実感できた気が

した。隣に視線を移すと、小さな口を半開きにした美咲が、ただただじっとその星空を見つめていた。

「美咲は覚えてる？ 僕たちが初めて出会った日のことを」

「うん、ここまでじゃないけど、星のきれいな夜だった」

美咲は空に目を向けたまま返事をした。

大地はふつと表情を緩めると、美咲の肩へと手をまわし、そつと懐へ引き入れて優しく抱きしめた。そのまま何も言わず、二人で同じ星空を見つめる。

それからどれくらいの間が過ぎただろう。

大地たちのまわりから人影がなくなつた。声もしなくなつた。耳に届くのは、船のエンジン音と波を掻き分ける音くらいである。この広い世界にたった二人きり??そんなありえない幻想さえ抱きそっになる。

大地は小さく呼吸をしてから口を開いた。

「美咲、僕はね、君を一目見たときから決めていたんだ??」

そう静かに語りかける大地の胸に、美咲はゆっくりと背中からもたれかかった。空を映した漆黒の瞳がそつと閉じられていく。やがて、話の終わらないうちに、彼女は立つたまま小さく寝息を立て始めた。

「美咲、そろそろ起きない?」

大地は自分の胸元で眠る少女にそう囁くと、柔らかい頬にそつと指を滑らせた。彼女は「ん……」と小さな声を漏らし、ぼんやりとベッドから体を起こすものの、深くうつむいたまま固まったようにじっとしている。大地は少し不安になり、起き上がって美咲を覗き込んだ。

「もしかして酔つた?」

「ううん、平気、眠いだけ」

美咲は小さく頭を振ると、顔を上げてにっこりと答えた。その笑顔にほつとして、大地は彼女の頭にぼんと手を置くと、ベッドから

降りてカーテンを開いた。シャツ、という軽い音とともに、白い光が溢れ込む。美咲はパアツと顔を輝かせると、素足のまま弾むように窓際に駆けつけた。

「すごい、東京とは思えないくらいきれい！」

ガラス窓に張り付いて海を眺める美咲の横顔を、大地は目を細めて見つめた。星空を映した瞳もいいが、キラキラと光る海面を映した瞳もきれいだと思う。

美咲はガラスに手をついたまま振り向いた。

「ね、甲板に出よう？」

「あとでね」

「今すぐ行きたい！」

「まず顔を洗わないと。それから服を着替えて、朝食をとって、そのあと外に出ようか」

「じゃあ、お兄ちゃんも急いで！」

美咲は待ちきれない様子でそう言うと、さらさらの黒髪をなびかせながら、軽やかにユニットバスへと駆け込んでいった。

大地たちは船内レストランでトーストとベーコンエッグを注文すると、窓際に席を取り、二人で向かい合って座った。テーブルも椅子も何もかもが安っぽく、レストランというより食堂といった方が相応しく思えるが、それでも清々しい陽光と微かな潮風を感じながらの食事は格別である。ひどく空腹だったこともあり、美咲と喋りながらだったが、大地はあつというまに平らげてしまった。

「じゃあお兄ちゃん、外へ行こう？」

大地のプレートが空になったことに気がつくのと、美咲は急かすようにそう言って立ち上がった。気持ちはすっかり外に向かっているようだ。しかし、彼女のプレートにはトーストもベーコンエッグもまだ半分ほど残っていた。大地は腰を上げることなく、穏やかな口調で美咲を窘める。

「ダメだよ、美咲、全部食べないと」

「もういい、早く行きたいんだもん」

美咲はテーブルに両手をついたまま、焦れつつそうに言う。

「ちゃんと食べないと成長できないよ」

「そんなに大きくならなくてもいいの」

「身長だけじゃなくて、いろんなところがだよ」

「……お兄ちゃんのエッチ」

美咲は非難するようにじりと睨み、口をとがらせた。頬はほんのりと桃色に染まっている。その様子から、彼女があらぬ誤解をしていることを悟り、思わず大地は肩を竦めて苦笑する。

「真面目に言ってるんだけどね」

「いいもん……子供のままで……」

美咲は急に声を暗くすると、斜め下に視線を落とす。その様子は、拗ねているというよりも、何か深く思いつめているように見えた。

大地は理由がわからず当惑したが、それでも彼女を安心させるべく優しく微笑む。

「そんな悲しいこと言わないでよ」

待ってるんだから??。

心の中でそう言葉を繋ぐと、うつむいた美咲の頬に手を伸ばした。

「わーっ！ 気持ちいいー!!」

美咲が朝食をきっちり食べ終わってから二人は甲板に出た。まだ早い時間のためかちらほらとしか人がいない。美咲は麦わら帽子のつばを両手で掴み、白いワンピースをひらめかせながら、軽い足どりで弾むように甲板を駆けていく。

「あんまりはしゃぐとパンツが見えるよ」

「お兄ちゃんのエッチ！」

左足を軸にしてくるりと振り返ると、先ほどと同じ言葉を、今度は屈託なく笑いながら言う。腰より少し短い黒髪が、軽やかにさらりと潮風に舞った。

大地は立ち止まった美咲に歩み寄って口を開く。

「そろそろ島が見えてくる頃かな」

「えっ、どこ？」

「あっちの方だよ」

手すりから身を乗り出した美咲の背後から、大地は大きく手を伸ばし、船の進行方向を指さした。しかし、そこには海と空が広がるばかりで、目を凝らしても島らしきものはどこにも見えない。

「お兄ちゃん、見える？」

「うーん、まだみたいだね」

大地はきまりが悪くなって苦笑した。腕時計に目を落として時間を確認すると、確かに少し早かったようである。船は白い波しぶきを上げながら着実に進んでいる。焦ることはないのだ。大地は小さく息をついて、絵に描いたような鮮やかな青空を見上げた。

美咲は手すりに置いた腕に頭をのせると、寂しげにぼつりと言う。

「お兄ちゃんとの旅行、これが最初で最後かな」

「まだ着いてもいないのに何を落ち込んだの」

「だって……」

何か理由を言いかけて、彼女は口をつぐんだ。帽子のつばに隠れて見えないが、おそらく朝食のときに見せたような、暗く沈んだ表情をしているのだろう。大地は不思議に思っつて首を傾げた。

「美咲、きのうの夜のこと覚えてる？」

「えっ？　一緒に甲板で星を見たこと？」

「そう、そこで僕は美咲に話したよね」

「……何を？」

美咲はきよとんと顔を上げて尋ねる。とぼけているわけではなさそうだ。話の途中で眠ってしまったことは承知していたが、冒頭の少しくらいは聞いていたのではないかと思っていた。いや、聞いてはいたが、忘れてしまったのかもしれない。

「じゃあ、美咲、あらためて聞いてくれる？」

「やめて、今はこの旅行を楽しみたいから……」

美咲は逃げるように視線を外すと、再び手すりに置いた腕に顔を

埋めた。

先刻からどうも様子がおかしい。まるで、これが二人で過ごす最後の時間であるかのような、そんな物言いを続けている。思い返してみれば、今日だけではなく、この数日の間にも似たようなことが何度かあった。

まさか、美咲はあの話を??。

ふと頭をよぎったその考えに、大地は眉をひそめる。

先日、伯母が大地に持ってきた縁談を、父は「すでに婚約者は決まっている」と一蹴したのだ。もし美咲がどこかでこの話を聞いたとしたら、もう大地とは一緒に過ごせなくなると、そんなふうに勘違いしてしまっても仕方がないだろう。

大地は美咲の隣に並び、手すりに両手を置いて顔を上げた。遙か彼方まで続く澄んだ青空を、目を細めて仰ぎ見ながら、優しくも力強さを感じさせる口調で言う。

「花は大地に根ざして美しく咲き誇り、大地は美しい花によって潤いと彩りを与えられる」

前置きもなく発せられた詩のような一節に、美咲は怪訝に振り向き、瞬きもせず上目遣いで大地を見つめた。そして、真面目な顔で小首を傾げると、薄紅色の愛らしい唇を開く。

「それって“美咲”と“大地”は離れられないってこと?」

「よくわかったね」

大地はにっこりと満面の笑みで答えた。

美咲は顔を隠すように深くうつむくと、くるりと身を翻しながら、軽く跳ねるように後ろに下がった。泣きそうなのをこらえるような笑おうとして失敗したような、何ともいえない微妙な表情を浮かべて、後ろで両手を組み合わせる。

「ずっと一緒にいてくれるの?」

「ずっと一緒にいるよ」

それでも美咲の表情は晴れなかった。瞳を揺らしてさらに問いかける。

「私を置いていなくならない？」

「美咲をひとりにはしないよ」

「もし私がいなくなったら？」

「あれ？ 美咲は忘れてるのかな？ もう引退したとはいえ、これでも僕は元怪盗だよ」

大地は大きく抑揚をつけておどけるように言った。

まわりに人はいなかったが、たとえ誰かに聞かれたとしても、本気になる人などいないだろう。年の離れた妹と遊んでいる微笑ましい光景としか映らないはずだ。その荒唐無稽な話が真実だと知っているのは、この船ではただひとり美咲だけである。

「でも、お兄ちゃんがそう思っていて……」

そのとき不意に突風が吹いた。

麦わら帽子が空に攫われ、慌てて美咲は手を伸ばす。

瞬間??。

ドオン!!

耳をつんざくような轟音とともに、硬いはずの甲板が激しく波打った。

大地の体は弾かれるように宙を舞い、視界は大きくぶれ、天も地もわからなくなった。反射的に鉄の柵のようなものを掴んでぶら下がったが、それも今にも外れそうになっている。体に容赦なくしぶきが叩きつけられた。

「美咲ーっ!!」

何の状況も掴めないまま、どこにいるかわからない彼女の無事を確かめるべく、あたりを見まわしながら必死に名前を叫んだ。しかし、返答はなく、姿も見当たらない。聞こえてくるのは船の悲鳴と荒れ狂う波の音だけである。

「うわっ!!」

大地の体が大きく旋回すると、とうとう掴んでいた鉄柵が外れ、

そこから勢いよく弾き飛ばされた。叩きつけられるように海に落ちる。その痛みで気を失いかけたが、何とか意識を保つと、海面に浮上して顔を出した。

そのとき、少し離れたところに白い布が浮かんでいるのが見えた。大地はそれが美咲だと確信した。

海水を吸った服が重く絡みつき、思ったように体が動かせず、焦る気持ちとは裏腹になかなか進まない。それでも、何とか彼女のもとまで泳ぎ着くと、背後から小さな体を抱きかかえて起こす。

「美咲っ！」

「ゲホッ」

美咲はむせながら水を吐くと、荒く苦しげに息をしながら振り返り、うつろな目で大地を見た。潤んだ漆黒の瞳は不安と恐怖に彩られている。それでも、彼女が生きていることに、意識があることに、大地は全身の力が抜けそうなほど安堵した。冷たい海に浮かんだまま、彼女の体をぎゅっと抱きしめる。

しかし安心できる状況ではない。

いつまでも海の中に浮かんでいるわけにはいかないのだ。どこか陸のあるところまで泳いでいくか、通りがかりの船に助けてもらえない。けれども、まわりには水平線が広がるばかりで、目印になるものなど何も無い。自分たちの乗ってきたあの船以外には？？。おそろおそろ、轟音の鳴りやまないその方に目を向ける。そこあったのは、海を割き天を貫く巨大な光柱により、おもちゃのようにあつけなく真つ二つに割られた船だった。片方は船首を上に向けて沈みかけ、もう片方は強烈な光によってバラバラに崩されていく。破片や人がゴミのように落ちるのが見える。穏やかな青空と海の中で、そこだけが異空間のように地獄絵図が映し出されていた。

現実とは思えない光景。だがそれは紛れもない現実。

今まで何が起こったのか理解できずにいたが、離れたところから状況を見てもやはりわからないままだった。常識では処理しきれないことが目の前で起きているのだ。大地の瞳には、光の魔神が雄叫

びを上げ、怒りまかせに暴れ狂っているかのように映った。

腕の中の美咲がぶるりと震えた。

その感覚で大地ははつと我にかえる。とりあえず出来るだけ船から離れなければならぬ。あの光がいつ自分たちの方に襲い来るかわからないし、そうでなくとも沈没時の渦に巻き込まれる危険もある。大地は凄惨な現場に背を向けると、美咲を抱えて必死に泳ぎ出した。

ドオン??。

縦になっていた船体が爆発し、炎と黒煙を上げながら海面に倒れ込んだ。真っ白な水しぶきとともに大きな波が起こる。それは生き物のようにうねりながら、大地たちに襲いかかった。

「美咲っ！」

大地は高波に背を向けて、美咲を庇うように頭から抱き込む。しかし、それはほとんど意味をなさなかった。高波はいとも簡単に二人をまるごと飲み込んでしまう。激しい水流に揉まれながら、それでも大地は美咲と離ればなれにならないよう、彼女を抱く腕に死にものぐるいで力を込めた。

1977年7月26日 午前8時すぎ

小笠原沖にて旅客フェリー・おがさわら号 沈没

死者 162名

行方不明者 481名

生存者 2名??。

1・怪盗ファントム

「遙、漣、おまえたちは今日で17歳だな。おめでとう」

「ありがとうございます、おじいさま。このドレスも」

橘 漣は、正面に座る祖父に笑顔で応えると、身に付けている薄いベージュのパーティードレスを軽くつまんで見せる。それを見た祖父の剛三は、満足げに頷きながら、広い執務机の上で両手を組み合わせた。

「二人ともよく似合っておるぞ」

「こんな服、どこで着ればいいわけ？」

漣の双子の兄である遙も、祖父からの誕生日プレゼントを身に付けていた。漣のパーティードレスと対をなすダークスーツである。しかし、漣とは違ってあまり嬉しそうにはしていない。もつとも、遙はいつもこんな調子であり、剛三は慣れているのか気にすることなく答える。

「心配せずとも機会ならいくらでもあるぞ。おまえたちも、そろそろワシの同伴でパーティに連れて行くこうかと思っておるのだよ」

パーティといっても、いわゆるホームパーティの類ではない。会社関係やその付き合いで呼ばれるレセプションのことである。詳しいことは漣も知らないが、取り立てて楽しいものでないことは想像がつく。少し気が重くなったものの、それを口には出さずに愛想笑いを浮かべた。しかし、遙の方は、無遠慮に言葉を吐き出す。

「興味ないけど。むしろ面倒くさい」

「そう言うな。いい社会勉強になるだろう。特におまえは橘の後継者なのだからな」

これという議論がなされたわけではないが、暗黙の了解で、男である遙が橘家の後継者として扱われていた。おそらく古い人間である剛三の一存なのだろう。

だが、それで揉めたことは一度もない。

いささか無愛想ではあるものの、聡明で思慮深く、冷静に物事を見通す力がある？？そんな遙を後継者とすることに、異を唱えるものは誰もいなかった。もちろん澪とて例外ではない。遙の方が相應しいということには納得していたし、それ以前に、橋家を継ぐことなどに何の興味も持っていないのだ。押しつけられなくて良かったと喜んでいるくらいである。

「社会勉強、頑張つてね」

「澪は気楽で羨ましいよ」

にこにこしながら発破をかける澪に、遙は溜息まじりで恨み言を口にする。実のところ、彼も後継者など乗り気でないらしいのだが、だからといって反発することはなく、仕方がないと観念しているようである。

「17歳か……」

剛三は肘掛けに両腕を置き、革張りの椅子に体重を預けると、遠くを見やりながら感慨深げに呟いた。そして、後ろに控えていた秘書の楠（くすのき）悠人（ゆうじん）に振り向いて口もとを上げる。

「とうとうこの日が来たな」

「ええ、準備は万端です」

そんな意味ありげな会話を交わすと、剛三はすぐさま澪たちに向き直った。怖いくらい真剣な眼差しで見据えながら、静かに重々しく切り出す。

「他言無用の大切な話だ。心して聞いてほしい」

16歳の誕生日のときには、似たような前置きのあとで、株式投資を始めるといふ話をされた。今回も、社会人としての勉強になる何かを始めさせるつもりなのだろう。やっかいなことではなければいいけれど？？澪は心の中で願った。

しかし、続く剛三の言葉によって、その願いは儚くも打ち砕かれる。

「今日からおまえたちは怪盗になるのだ！」

「……かいとう？」

漣と遙はきよとんとして顔を見合わせた。いきなりこんな突拍子もないことを言われて、驚かない人間などそうはいないだろう。普段はあまり感情を表に出さない遙でさえも、かなり困惑したような複雑な表情を見せている。

「それって演劇の話？ それとも仮装パーティー？」

「いやいや、仮装などではなく本物の怪盗だよ」

剛三は軽く笑いながら答えた。

「おまえたちは知らんだろうが、我が橋家が代々やってきたことなのだ」

「うそ……」

唖然とした漣の口から小さな言葉がこぼれ落ちた。その反応を愉しむかのように、剛三はニコニコとしながら、執務机の上で両手を組み合わせて説明を続ける。

「盗むといつても利益を得るためではないぞ。我々がターゲットとするのは、そこに籠められている思いを踏みにじられた不遇の絵画のみ。つまりは絵の尊厳を守るということだな」

「もしかして、怪盗ファントム？」

遙は顎に手を添え、ぽつりと言う。

それを聞いた剛三は、満面の笑みを浮かべて、誇らしげに大きく頷いた。

「よくわかったな。さすがは遙」

「何、そのファントムって？」

漣は瞬きをしながら、隣の遙に振り向いて尋ねる。

「もう20年以上前かな。絵画専門の怪盗がいたんだよ。鮮やかな身のこなしで、幻影のように消えたり現れたりすることから、ファントムって名前がつけられたらしいね」

「おまえたちはその怪盗ファントムの二代目というわけだな」

遙の端的な説明のあとに、剛三は嬉々として言い添えた。

しかし、遙の理解は追いつかない。

「私たちが二代目……？ 初代って誰だったんですか？」

「先ほど言っただろう、橘家が代々やっておるのだと」

「……もしかして、お父さま？」

これまでの話の流れからすると、また剛三の口ぶりからしても、その答え以外には考えられない。それでも澁は半信半疑だった。父親はどちらかといえばインドア派であり、鮮やかな身のこなしで夜を駆け巡る怪盗とは、あまりにもイメージがかけ離れている。想像がつかないのだ。

しかし、剛三は当然のように頷いて話を続ける。

「さよう、ファントムと名付けたのはどこぞのマスコミだったが、大地がえらく気に入ったようで、そのうち自らファントムと名乗って大々的に予告状を出すようになったのだ。ワシはそこまでするつもりはなかったのだがな」

そのときの状況が目に浮かぶようで、澁は妙に納得してしまい、思わず小さく肩を竦めて苦笑した。確かに父親には調子に乗りやすいところがある。大人になった今でもそうなのだから、若かりし頃であればなおのことだろう。

「美咲とも、怪盗ファントムの活動が縁で出会ったのだぞ」

「そういえば、お母さまの亡くなった父親は画家って……」

「そう、その相沢修平が亡くなったとき、未発表の遺作である娘の肖像画を、悪質な美術ブローカーが騙し取ってな。それをワシらが取り返してやったのだ。おまえたちも知っているだろう、大階段に飾ってあるあの絵だよ」

剛三の言う大階段の絵は、この家の人間ならば誰しも日常的に目にしているものである。描かれているのが美咲の少女時代であることも周知の事実だった。しかし、そのような劇的な逸話があったことは、少なくとも澁はこれまで知らなかった。

「ファントム、つまり大地が、美咲のところへその絵を返しに行ったのが、二人の最初の出会いだな。月下の淡い光に包まれながらベランダに降り立った大地は、驚く美咲に絵を手渡すと、黒のマントを大きく翻し夜空に舞い戻っていったのだ。その後、ファントムを

追ってきた刑事が美咲に言った。ヤツはとんでもないものを盗んでいきました、それはあなたの心です！」

剛三はこぶしをグツと握りしめ、前のめりになって熱く語った。しかし澪は、どこかで耳にしたようなその話を聞きながら、醒めた目を向けて胡散臭そうに言う。

「おじいさま、話を作つてませんか？」

「だいたい合つとるわい」

剛三はぶっきらぼうに答える。

その後ろで、秘書の悠人は声を立てず控えめに笑っていた。そこからは、何もかも知っているかのような、それを楽しんでいるかのような、そんな余裕が感じられる。

「師匠はご存知だったのですか？」

「僕はフアントムの影武者だよ」

「えっ?!」

突然なされた衝撃の告白に、澪は素つ頓狂な声を上げた。

だが、言われてみれば、十分に考えられる話である。大地と悠人は同じ年齢で、背格好もよく似ており、そして、何より悠人は様々な武術を修得している。フアントムの影武者にこれほどの適任はいないだろう。

隣で、澪は呆れたように溜息をついた。

「代々つてことは、じいさんもやってたんだね」

「無論だ。もつともワシは怪盗ではなくただの泥棒だったがな。そもそもワシが始めたことなのだよ。おまえたちは怪盗フアントムとしては二代目だが、絵画泥棒としては三代目ということになるな」
結局のところ、すべては剛三の独断だったようだ。ほとんど趣味といってもいいかもしれない。強引ではあるものの行動力と決断力があるというのが世間での評判だが、ありすぎるのも困りものである。

「それくらいじゃ、代々つていうほどでもないと思うけど」

「これから脈々と受け継がれていく予定になっておる。おまえたち

が歴史と伝統を作っていくのだよ。どうだ、わくわくするだろう？」

冷やかな遥とは対照的に、剛三は子供のように浮かれていた。

「おまえたちの任期は20歳までの3年。獲物の選定や作戦の立案はこちらで行う。おまえたちは指示に従って作戦を遂行するのが役目だ。良いな？」

「いいわけありません！ おじいさま、窃盗は犯罪です！！」

危うく流されそうになっていた澁は、ハッと身を乗り出して力説する。いくら祖父の命令とはいえ、犯罪に手を染めるわけにはいかない。祖父の間違った考えを改めさせなければならぬ。

「相変わらず澁は堅いのう」

「いくら不遇の絵画を救い出すためといっても、窃盗が許されるはずはありません。正当な手段で救い出すべきだわ。おじいさまならそのくらいのが出来ないはずは……」

「面白そうじゃん、僕はやるよ」

必死になって説得する澁をよそに、遥はさらりと軽く了承した。

「はっ、遥?!」

「遥ならそう言ってくれと信じておったぞ」

剛三はほくほく顔でそう言いながら、何度も満足げに頷いていた。澁は慌ててふたりの間に割って入る。

「遥、落ち着いてよく考えて。怪盗なんてやったら犯罪者になっちゃうのよ？ 映画や漫画とは違うのよ？ ヒーローでも正義の味方でもないんだから」

「わかってるよ。警察に通報する？」

その突き放したような物言いに、一瞬、澁はたじろいで小さく息を呑んだ。

「違うの、そういうことじゃなくて」

「澁はいいよ、僕ひとりやるから」

「遥だけに押しつけて知らん顔なんて、そんなこと出来ないよ……」
消えゆくようにそう言うと、沈んだ顔で目を伏せてうつむいた。

遥が何を考えているかわからず、泣きたいような気持ちになる。だ

が、ここで諦めるわけにはいかない。

「おじいさま、怪盗なんて馬鹿げたこと、本当にやめませんか？」

「遙ひとりでは何かと危険なのだがのう」

剛三は、溇の言葉に耳を貸すどころか、とぼけた口調でそんなことを言う。そうやって溇の弱点をつくことで、ファントムに引き入れようとしていることは明らかだった。

「二人であれば使える様々なトリックも、一人では不可能だからな」
「怪盗ファントムをやめてしまえば、万事解決するじゃないですか」
その声には露骨に苛立ちが滲んだ。

剛三はわざとらしく大きく溜息をつき、遙に目を向ける。

「すまんな遙、聞き分けのない薄情な妹を持ったと諦めて、大変だろうが一人で頑張ってくれぬか。溇さえ協力してくれれば、遙の負担も減るのだがのう。いや、実に残念だ。溇はせめて遙の無事を祈っていてくれないか」

「わ、わかったわよ……私もやる……」

不本意ながら、溇は追いつめられてしまい、そう答えるしかなくなっていた。せめてもの抵抗とばかりに、じとりと横目を向けて祖父を睨む。しかし、彼は少しも動じることなく、わははと豪快な笑い声を響かせた。

「よし、怪盗ファントム再始動じゃな！」

剛三は執務机にバンと両手をつけて勢いよく立ち上がる。そして、修羅場をかくぐつてきたことを窺わせるような凄みのある顔で、不敵にニツと白い歯を見せた。

剛三の書斎を後にした溇と遙は、並んで長い廊下を歩いていく。

溇はまだ気持ちの整理がつかず、浮かない面持ちで考え込んでいたが、遙はふと何かを思い出したようにくすつと笑った。

「溇が昔よく言ってたこと、当たらずとも遠からずだね」

「え？ 何だっけ？」

「私たち雑伎団に売られるよ、って」

小さな子供の頃から強制的に様々な武術や体術を習わされ、しかし何の大会に出ることも許されず、澪はそのことに大きな不信感を抱いていた。そして、子供なりに考えた結論が「雑伎団に売られる」だったのだ。ことあるごとに遙にそう言っていたが、当時は全く取り合ってくれず、いつも軽く聞き流されていた。もともと、澪の方も、成長するにつれてそんな考えは消えていき、今となってはすっかり忘れていたくらいである。

「別に雑伎団に売られるわけじゃないでしょう？」

「下心があつたって意味では似たようなものだよ」

確かに、武術を習わせていた目的が、怪盗ファントムにあることは間違いないだろう。ふたりの師匠はその影武者をやっていた悠人なのだ。最初から二代目育成という計画に基づいて進めてきたと考えるのが自然である。

「怪盗かあ……いろいろ驚きすぎちゃって、まだちつとも現実感がないわ。自分にはまったく縁のない世界だと思っていたのに、おじいさまはともかく、お父さまや師匠までそんなことをしていただなんて」

「じいさんは言い出したら聞かないから、父さんたちも仕方なくやることになつたんじゃないかな。さっきの澪みたいだね」

歩みを止めることなく、遙は淡々と語った。その声からはほとんど感情が窺えない。澪は長い黒髪をさらりと揺らして覗き込むと、小さく首を傾げて尋ねる。

「遙はどうだったの？ 嫌じゃなかったの？」

遙はちらりと視線を流し、僅かに口もとを綻ばせた。

「ここだけの話、僕はちよつと怪盗ファントムに憧れてたんだよ。活躍してたのは生まれる前のことだから、もちろんリアルタイムでは知らないけど、昔の新聞や本でそのときのことを読んでね」

めずらしく嬉しそうに語るその姿を見て、澪は乾いた笑いを浮かべて脱力した。聡明な彼が怪盗になることを了承したのは、もしかしたら何か深い考えがあつたのことではないかと勘ぐっていたのだ

が、実際は呆れるくらい子供っぽい理由だったのだ。

「でも、怪盗ファントムって名前は間抜けだよな」

遙はそう言いながら、赤絨毯の引かれた大階段を降り始める。

「どうして？ 私はそんなに悪くないと思うけど」

「英語だと Phantom the phantom thief

fだよ」

「え、そうなの？」

漣は思わず聞き返した。

もしかすると、父や祖父はこのことを知らずに名乗っていたのかもしれない。今もまだ知らないのかはわからないが、下手をするとややこしいことになりかねないので、二人には、特に剛三には黙っておいた方がいいだろうと思う。

「ねえ、遙、おじいさまにはその話……」

「わかってるよ。面倒は御免だからね」

遙も同意見だったのか、当然とばかりに軽く流した。そして、広い踊り場に降り立つと、その中央で足を止め、壁側に向き直って視線を上げる。

「この絵だよな、父さんが取り返した母さんの肖像画」

「うん……」

漣もその隣に並んで立ち、同じく肖像画を見上げて頷いた。

そこには10歳くらいの少女が描かれていた。可愛らしく上品な白のドレスを身に纏い、正面を見据え、破れたテディベアを抱えて椅子に座っている。肌は透き通るように白く、腰まである髪は艶やかな漆黒で、同じく漆黒の瞳には、子供とは思えないほどの鋭く理知的な光が宿っている。

「知ってる？ 少女の無垢な狂気が描かれているって評論があったこと」

「モデルの子供が実在してるのに、狂気っていうのもひどい話だよな」

肖像画を仰ぎ見たまま、遙は小さく笑いを含んだ声で言う。漣も

つられるようにくすつと笑うと、後ろで手を組み、大きく息を吸い込みながら背筋を伸ばした。

「でも、何となくわかるなあ。絵じゃなくて、お母さまの狂気ね」「どういうこと?」

遙はきよとんと振り向いて尋ねる。

「16になつてすぐに結婚して、高校を休学することなく私たちが双子を産んで、それから日本最高峰の大学に現役合格。そして今はノベル賞に一番近い日本人といわれる研究者。何だか凄すぎて狂つてるとしか思えない、なんてね」

最後におどけた口調でそう付け加え、遙は肩を竦めて見せた。

遙もふつと表情を緩めて言う。

「高校の方は学校側の特別な配慮があつたんだろうけど、母さんが凄いのとは間違いないよね。狂ってるっていうのはさすがに言い過ぎだと思っけど」

不意に、遙のポケットの中で携帯電話が震えた。

パールホワイトのそれを取り出し、背面のディスプレイを確認すると、遙はパツと大きく顔を輝かせた。折り畳まれた本体を急いで開き、通話ボタンを押して耳にあてがう。

「もしもし、誠一?」

『ああ……遙、家にいるのか?』

「うん、いるけど、どうしたの?」

『今から少しだけ会えないか?』

「いいよ、どこへ行けばいいの?」

『今、遙の家の前まで来てる』

「ホント? じゃあ、今から行くね。待ってて」

遙はそう言つて携帯電話を切った。それを二つ折りにしてポケットに戻しながら、すぐ下の玄関ホールを小さく指さす。

「誠一が来てるから行つてくるね」

「その格好で?」

二人ともまだ祖父のプレゼントを身に付けたままだった。つまり、

漣はパーティドレスを着ているのである。しかし、そのことを忘れていたわけではなかった。

「家の前で会うだけだから平気よ。せつかくだから誠一にも見せたいんだもん」

えへへと笑って、その場でぐるりと回る。レースをあしらったアンシンメトリーの裾が軽やかに舞った。そんな上機嫌の漣に、遥は無表情で冷や水を浴びせかける。

「別れた方がいいんじゃない？」

「えっ？」

「刑事なんだよね？」

遥の言いたいことはわかった。怪盗である漣と、刑事である誠一、つまり敵対する立場の二人が付き合うのは、何かと問題があるということだろう。

「んー……でも、殺人事件の担当みたいだから、怪盗の捜査はしないんじゃないかな」

多少の不安を感じなくてもなかったが、漣は心配ないとばかりに努めて明るく答えた。誠一と別れるなど考えられない。それほど軽い気持ちで付き合っているわけではないのだ。

「ね、遥は好きな子いないの？」

「いないよ」

「寂しくない？」

「別に」

遥の答えは、いつもと変わらない淡泊なものだった。はつきりとはそうは言わないものの、彼がこの手の質問を快く思っていないことはわかっている。それでも、今日の漣は引き下がらなかった。

「ねえ、富田とかどう？」

「……なに言ってるの？」

遥は思いきり訝しげに眉をひそめた。

「ほら、アイツいつも言ってるし、同じ顔なら私より遥の方がいいって」

「そんなこと真に受けてるの澪だけだよ」

人差し指を立てて明るく言う澪に、遙は呆れた目を向けた。しかし、澪はふざけているわけでも、冗談のつもりでもなかった。真面目な顔になると、今度は慎重に考えながら言葉を繋いでいく。

「別に彼氏彼女じゃなくてもいいんだけど……親友とかね、そういう自分にとって頼りになる存在がいた方がいいんじゃないかなって」

「余計なお世話。誠一、待たせてるんじゃない？」

「あっ！」

澪は口もとに手を当てて声を上げた。そして、慌ただしくじゃあねと手を振ると、母親譲りのしなやかな黒髪をなびかせながら、一段とばしで大階段を駆け下りていった。

「誠一！」

澪は弾けんばかりの笑顔を見せながら、屋敷の横の細道に回り込み、煉瓦塀にもたれかかる誠一に駆け寄った。名を呼ばれて振り向いた誠一は、澪の姿を瞳に映すと、驚いたようにその目を大きく見開く。

「澪、どうしたんだその格好……」

「おじいさまからのプレゼント。どうかな？」

澪はドレスの裾を軽く持ち上げ、踊るようにくるりとまわった。

それと同時に、橘家の敷地内からせり出している大きな木が、頭上でさわさわと音を立てた。誠一は目を細めて微笑み、ジャケットの内側に手を入れながら言う。

「よく似合ってるよ。ちょうど良かった」

「えっ？ ちょうど良かったって、何が？」

「澪、お誕生日おめでとう」

そこから出された手には、プレゼント用にラッピングされた細長い箱があった。薄いピンク色を基調とした包装紙に、白のリボンが掛けられている。澪の顔はパァッと輝いた。

「わあ、ありがとう！ 開けてもいい？！」

「もちろん」

誠一が小さく笑ってそう答えると、漣は胸を高鳴らせながら、出来るだけ丁寧に取り柄を外し、包装紙を剥がし、横開きの箱をそつと開いた。

そこには、淡いピンク色の上品な輝きがあった。

シンプルで控えめな、それでいて上質な存在感を放つペンダントである。

「あ、かわいい！ ピンクダイヤ？」

「よくわかったな」

誠一は驚きつつも感心したように言った。

しかし、漣が言い当てたのは偶然のようなものだった。母親が似たようなピンクダイヤのペンダントを持っていたので、そうではないかと思っただけである。宝石に詳しいわけではないのだ。それでも、ピンクダイヤが安いものでないことくらいは知っている。

「無理したんじゃない？」

「そういうことは聞くなよ」

きまり悪そうに苦笑する誠一を見て、確かに失礼だったと思い、漣は小さく肩を竦めてペロツと舌を出す。そして、あらためて「ありがとう」と心からの笑顔で礼を言った。

「貸して、つけてあげる」

誠一は箱からペンダントを取り出すと、漣の首に手をまわして留めて、僅かにずれていたピンクダイヤの位置を直した。そこに手を置いたまま、ペンダントを、それから漆黒の瞳をじつと見つめる。

「よく似合ってる……漣……」

熱のこもった囁きを落とす、ゆっくりと漣に顔を近づける。

しかし、漣は立てた人差し指を彼の唇に当て、悪戯っぽい笑みを浮かべて窘めた。

「外ではダメって言ったでしょう？」

「そう、だったな」

誠一は傍目にもわかるくらい意気消沈し、ごまかし笑いを浮かべ

た。その様子が何かとても可愛く感じられて、澪はくすつと笑うと、踵を上げて頬に軽く触れるだけのキスをした。それから、ゆっくりと彼の肩に額をつけて寄りかかり、小声でそつと尋ねる。

「今度、いつゆっくり会える？」

「近いうちに……必ず」

誠一は力をこめて最後の一言を付け加えた。そして、目を細めてふつと微笑むと、少し冷えてきた澪の肩を、あたたかい手で優しく包み込むように抱いた。

「……………」

少し空気が冷たくなってきた夏の終わり。

微かな風が吹き、豊かな緑の葉がさわさわと揺れる。

その緑に姿を隠しながら、遙は大木の枝に立ち、無表情で二人の一部始終をじつと見下ろしていた。澪と同じ漆黒の瞳を細めながら???

2・不条理な要求

「南野誠一さん」

聞き込みを終えて警視庁へ戻ろうとしていた誠一は、背後から名を呼ばれ、隣の岩松警部補とともに振り返った。こんな街中でフルネームを呼ばれるなど、そうそうあることではない。事件の関係者だろうかと思っただが、そこに立っていたのは、ブレザーの制服を正しく着こなし、学校指定のスクールバッグを肩に掛けている、見知った高校生の少年だった。

「遥くん、どうしたんだ？」

誠一は少し目を大きくして尋ねた。彼は付き合っている恋人の兄であり、何度か挨拶くらいは交わしたことはあるが、そう親しいというわけでもない。そんな彼が、なぜ声を掛けてきたのだろうか。偶然ならわからないでもないが、彼の自宅や学校から離れていることから考えても、おそらくは待ち伏せしていた可能性が高く、どうしても不可思議に思わざるをえなかった。

しかし、遥がその問いに答えるより先に、岩松警部補が横からひよっこりと割り込んできた。厳つい大きな体を屈め、愛嬌のある笑顔で人なつこく尋ねる。

「確か、キミは、漣ちゃんの弟だったかな」

「兄です」

遥は無表情のまま訂正を入れた。そして、ペコリと頭を下げ続ける。

「その節は妹がお世話になりました」

「いやいや、お世話になったのはこっちの方さ。あそこにしたのが漣ちゃんじゃなかったらと思うとゾツとするよ。おかげでこいつの首も繋がったしな」

岩松警部補は白い歯をこぼしながら、節くれ立った手で誠一の頭を鷲掴みにし、ガシガシと乱暴に撫でまわした。硬めの黒髪が逆立

ちボサボサになっていく。誠一は自分の失態を蒸し返された居たたまれなさに、為されるがまま、ただぎこちなく苦笑するしかなかった。

それは、今から一年半ほど前のことである。

誠一は、岩松警部補とともに、とある殺人犯を廃ビルに追いつめて手錠を掛けた。犯人を見つけられたのは、誠一の記憶力と観察力があつたからこそで、このことに関しては大手柄といっても差し支えないだろう。

問題はその後だった。

岩松警部補が本部に連絡を入れている間に、あるうことが気の緩んだ隙を突かれ、誠一は犯人に殴り倒された挙げ句に逃げられてしまったのだ。

暴走したその犯人は、手錠で両手首を繋がれたまま、隠し持っていたナイフを振りかざし、たまたま通りかかった当時中学生の溇に襲いかかる。が、溇は逆にその男を投げ飛ばし、地面にねじ伏せ、鮮やかな手並みで取り押さえたのだった。

それが溇との最初の出会いである。

彼女のおかげで事なきを得たが、岩松警部補の言うように、そこにいたのが溇ではなく、武術の心得など何もない少女だったら、最悪の事態になっていたかもしれない。そうなれば、誠一も刑事ではいられなかつただろう。つまり、誠一にとって溇は、恋人であると同時に恩人でもあるのだ。

「それで、遥くん、南野に何か用なのか？」

岩松警部補が覗き込んで尋ねると、遥は誠一を小さく指さしながら言う。

「少し相談したいことがあるので、お借りしてもいいですか？」

「ああ、構わんぞ。だが、遅くならないうちに返してくれよ」

「ちょっと、本人抜きで勝手に決めないでください！」

おおらかに笑って答える先輩に、誠一は抗議の声を上げた。借りだの返すだのと物扱いされていることも気に入らない。しかし彼は宥めるように、それにしても少し乱暴に、誠一の頭をボンボンとゴムまりのように叩く。

「話くらい聞いてやれよ。あの橋財閥のご子息なんだぞ？ おまえの首くらいなら軽く飛ばせるかもしれん。粗末に扱ってあとでどうなっても知らんからな」

「冗談めかした口調でそう言うと、カラリとした笑顔を見せて右手を上げた。

「じゃあな、俺は先に戻ってる」

「自分もすぐに戻ります！」

立ち去っていく広い背中に、誠一は慌てて声を張り上げる。

「ゆっくりしてきていいぞー」

岩松警部補は、振り返ることも足を止めることもなく、左手をポケットに突っ込んだまま、もういちど右手を上げてひらひらと振った。

「会いに来てくれるのは嬉しいけど、できれば非番のときにしてくれるかな」

誠一は密かに溜息をついてから、笑顔を作って振り返ると、角が立たないようにやんわりとそう言った。しかし、遥の表情は、相変わらず素っ気ないままである。

「非番の日も連絡先も知らない」

「君の妹に聞けばわかるだろう」

「漣には内緒だから」

さらりと流すような答えだったが、誠一はその言葉に引っかかるものを感じた。漣に内緒の話など見当もつかないが、遥の態度からすると、あまり良い内容であるとは思えない。

ごくりと唾を呑み込み、核心を尋ねようとしたそのとき。

不意に、遥がパツと車道の方に振り向いた。つられて誠一も彼の

視線を辿る。5、6メートル先の道路脇にいたのは、エンジンをかけたままの大型バイクにまたがり、フルフェイスのシールドを上げて、じつとこちらを凝視している長身の男だった。彼の双眸は、どうやら誠一ではなく遙を捉えているようである。

「知り合いか？」

「僕は知らない」

その男に目を向けたまま、遙は答える。

「もしかしたら誘拐しようと思ってるのかも」

「誘拐?!」

あまりにも飛躍した話に驚いて、誠一は素っ頓狂な声で聞き返した。

「もしかしたら、だよ。本当のところはわからないけれど、子供の頃には実際に誘拐されかけたこともあるから、ありえないことでもないかと思つて」

言われてみれば、彼は橘財閥のひとり息子であり、誘拐を企てられても不思議ではない立場の人間である。彼を見つめるバイクの男が、堅気とは思えない鋭い眼光をしているのも気になるところだ。

念のため話を聞いた方がいいかもしれないと思い、誠一はその男へと足を踏み出した。それとほぼ同時に、男は素早くシールドを下げて地面を蹴り、四輪車の間を軽快に縫いながら、鼠色のアスファルトを滑るように疾走していく。そして、あっというまに見えなくなつてしまった。

「行つちやつたね」

遙は人ごとのように言った。

これだけでは誘拐かどうかの判断はつかないが、男の不審な行動には何らかの意味があるような気がして、誠一は心配になつてきた。当の本人に危機感が窺えないのも不安である。

「気をつけるんだぞ」

「わかつてる」

遙はそう答えると、漆黒の瞳を細めてふつと小さく微笑んだ。

瞬間、誠一はハツと息を呑む。

普段の無表情ではあまり思わないが、微かに綻んだその顔は、溼と重なって見えるほどよく似ていた。顔立ちや表情だけでなく、身長も同じくらいで、体格もほとんど変わらないため、なおさらそう感じるのかもしれない。

「……何？」

「え？ いや、えっと……」

遙に訝しげに尋ねられ、誠一は狼狽して口ごもった。まさか本当のことを言うわけにはいかないだろう。彼にはもちろん、溼にも、他の誰にも、そんなことは知られたくない。

「そうだ、何か話があったんじゃないのか？」

「ああ、うん、溼と別れてもらおうと思って」

一瞬にして、誠一の愛想笑いは凍り付いた。あまりにも軽い口調だったので、何かの冗談ではないかと思っただが、彼には少しの笑みも見られなかった。それどころか静かに挑むような目を向けている。「……随分はつきりと言ってくれるな」

「まわりくどいのは好きじゃないから」

「とりあえず理由を聞かせてもらおうか」

誠一は出来うる限り冷静に尋ねた。本人に内緒でこんなことを頼みにくるなど卑怯であり、腹立たしく思ったが、感情的になるのは大人としての態度ではない。彼が間違っただ行動をとっているのなら、自分が諭さねばならないだろう。そう思っていたのだが？。

「29歳のオトナが、17歳のコドモと付き合い合ってもいいわけ？」

「うっ……」

言葉を詰まらせた誠一に、遙は冷ややかに畳み掛ける。

「付き合い始めたのは16になりたての頃だったよね？」

「あ、ああ……まあ……」

「マズいんじゃないの？」

溼とよく似た顔立ちの遙から、蔑むような眼差しを向けられて、誠一は体中から冷や汗が噴き出した。額から頬に伝い落ちていく。

それでも、グツとこぶしを握りしめると、強気に視線を返して答える。

「いや、俺たちは真剣に付き合っている。何の問題もないはずだ」
「そう……」

遙は無感情に相槌を打つと、突然、ボクシングのレフェリーが勝者にするように、その場で誠一の手を取って高々と掲げた。

「遙くん、何を……?」

「皆さん、こちらに注目ー」

彼が声を張り上げると、まわりに行く多くの人が振り向いた。わざわざ足を止めて振り返った人もいる。彼が何をしようとしているのか見当もつかず、また、いきなり視線を集めたこの状況に当惑して、誠一は手を掲げられたまま慌てふためいた。

「ちよっ……」

「皆さん、刑事つて見たことありますか？ ドラマではよく見ますが、本物の刑事には意外と会うことはないですよね。でもなんとこの人、本物の、しかも本庁の刑事さんなんですよ」

興味深そうに目を輝かせる人、つまらなさそうに去っていく人、横目を流して微妙に気にしている人、胡散臭そうに眉をひそめる人?? 向けられた反応はさまざまだった。誠一は耳元を赤らめてうつむき目をつむる。一刻も早くここから逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

しかし、隣の遙は容赦なく続ける。

「その優秀な本庁の刑事さんが、なんと、17歳のじょ……」
「わーっ……!」

ようやく遙の行動を理解した誠一は、それを掻き消すように全力で叫び声を上げた。掴まれた手を振りほどき、大慌てで彼の口をふさぐ。そして、まわりからの不審な目にごまかし笑い浮かべながら、遙を背後から抱え込んで後ずさると、人通りのない細い裏路地へ半ば強引に連れ込んだ。

「問題ないんじゃないの？」

膝に両手をつけて大きく肩で息をする誠一を、遙は冷ややかに見下ろしながら、小憎たらしくもそんなことを言う。

「公務員は何かと風当たりが強いんだよ。だいたい、真剣に付き合っていると言ったところで、この年の差では、そう簡単に信用してもらえないものでもないし……」

「へえ、誠一の真剣ってその程度なんだ」

その一瞬、誠一は本気で彼を憎いと思った。外見は濇と似ているが、内面はまるで違うようで、随分とえげつないことをしてくれる。遣る方ない腹立たしさが胸に渦巻き、奥歯をギリと強く噛みしめた。「こんなところで立ち話もなんだから、どこか喫茶店でも入らない？」

「……店の中でさつきみたいなのはやめてくれよ。本当に頼むから」

眉をひそめながらそう懇願するものの、遙は何も答えないまま、逃がさないとばかりにしつかりと誠一の手首を掴んで歩き出した。

「これ、喫茶店じゃなくて、アイスクリーム屋……」

遙に連れてこられたのは、ショッピングビルの一角にある小さな店だった。カウンターには様々なフレーバーのアイスクリームが並んでいる。どう見てもアイスクリーム屋としか言いようがない。一応、イートインもあるにはあるが、テーブルも椅子も簡素なもので、喫茶店ほど落ち着ける場所ではなさそうに思えた。

「僕はストロベリーパフェ。誠一は？」

「いや、俺はいい……」

もはや何も言い返す気になれず、誠一は溜息まじりに答えた。

「そう、じゃあ、僕は席を取っておくから」

遙は軽くそう言つと、誠一を残して奥のイートインへと足を向けた。

その背中に、誠一は疑問を投げかける。

「……俺が奢るのか？」

遥は僅かに振り返ると、冷たい目を流してぽつりと言う。

「女子高生」

「わかった、わかったよ」

誠一は開いた両手を顔の横に挙げて見せると、投げやりに降参の言葉を口にした。

どことなく嬉しそうにパフェを食べる遥の向かい側で、誠一はむすつとしながら腕を組んで座っていた。目の前のパフェに夢中なのか、少しもこちらを見ようとしない彼に、じとりとした視線を送って尋ねる。

「美味いか？」

「誠一もひとくち食べてみる？」

遥はようやく目を上げると、山盛りの生クリームとイチゴがのつたスプーンを差し出し、真顔でそんなことを尋ね返してきた。からかっているのか、それとも本気なのか、彼の様子からは判断がつかない。誠一は小さく溜息をついて、無言で首を横に振った。

「さつきから気になっていたんだが、誠一と呼び捨てにするのはやめてくれないか」

「遥はそう呼んでる」

生クリームを自分の口におさめながら、遥は悪びれることなく答えた。

「遥は彼女だから特別だ。君とは何度か挨拶した程度で、特に親しいわけでもない。こっちの方が10歳以上も年上なんだから、『南野さん』と呼ぶのが常識だろう」

少しムツとしてそう切り返すと、遥はちらりと視線だけを寄こした。

「敬称って敬つてもない人につけるものじゃないと思うけど」

「そんなことを言っていては、社会に出てやっていけないぞ」

「その辺は抜かりないからご心配なく。誠一に敬称をつけることに

何のメリットも見いだせないってだけのことだよ」

「あ、そう……」

誠一は腕を組んだまま盛大に溜息をつき、そのままぐったりとうなだれた。彼と話をするだけで疲れて仕方がない。眉間に深く皺を刻みながら、ぶつくさと不満を独りごちる。

「つたく、何が楽しくてアイスクリーム屋で男と膝をつき合わせねばならんのだ」

「女と一緒にだつたら楽しいんだ？」

「少なくとも今よりはな。まわりをしてみる。どう見ても俺たちは浮いているぞ」

狭い店内を見渡してみても、店員以外は若い女性しかいない。スーツと制服の男性二人が向かい合っている姿は、明らかに異質といえるだろう。しかし、遙はまわりを見ようともせず、パフェをすくいながら平然と言う。

「人の目なんて気にすることないんじゃない？ 悪いことしてるわけでもないんだし」

確かにそれは正論だった。だが、少しくらいはこの状況に居心地の悪さを感じたりしないのだろうか。誠一は彼を見つめたまま思考を巡らせると、ゆっくりと、同意を求めるように尋ねかける。

「たとえば、君は、男と二人でデイズニールランドへ行きたいと思うか？」

「気の合わない女と行くくらいなら、男と一緒にの方が気楽でいいけど」

「……………」

期待とは正反対の答えに、誠一の目論見は外れてしまい、ただ黙り込むしかなかった。がっくりと落とした肩に、無情にも、遙は冷ややかに追い打ちをかける。

「誠一は女なら誰でもいいんだね。遷に言っておく」

「えっ……………」

誠一は絶句した。しかしすぐに首を左右に振ると、大慌てで否定

する。

「いや、いや、そうは言っていない」

「似たようなことは言ってたけど」

思い返してみれば、確かにそう取られても仕方のないことを口にしていた。だが、それは本意ではないのだ。とっさに苦し紛れの言い訳をする。

「こっ、言葉の綾だ……」

「言葉の綾って、失言をごまかすって意味？」

「うぐっ……」

遙の追及は容赦なかった。感情的ではなく理性的なのが尚更たちが悪い。的確にダメージを与え、反論の術を奪っていくのである。もはや何を言っても勝てる気がしなかった。

「誠一、次はチョコレートパフェが食べたい」

「……わかった、買ってくればいいんだな？」

誠一は半ば自棄になってそう答えると、テーブルに手をついて立ち上がり、鉛のような足を引きずりながらカウンターへと向かった。

「遙くん、君、橘財閥の御曹司なんだから、パフェくらい自分で買えばいいだろう」

買ってきた二つ目のパフェを遙の前に置き、椅子に腰掛けながら、誠一は溜息まじりに文句を垂れた。そういう問題ではないとわかっではいたが、どうしても何か言わずにはいられなかったのだ。しかし、遙は眉ひとつ動かさずに、空になったグラスを脇に寄せると、新しいパフェのチョコレートアイスを山盛りすくった。

「確かに家が裕福だったのは認めるけど、僕たち子供はそんなに甘やかされていないよ。何でも買ってもらえるわけじゃないし、お小遣いだって常識的な金額だし」

それは本当なのだろうと誠一は思う。澁を見てそう感じていた。古くからの執事が仕えているとか、何部屋あるのかわからないとか、家の話については想像を超えるものがあるが、彼女自身はいたって

普通で、一緒にいても橘財閥の令嬢であることなどほとんど忘れていくくらいなのだ。

「だからって、脅迫は良くない。立派な犯罪だ」

「17歳の子供と付き合うのも犯罪だと思うけど」

「真剣に付き合っただけなら犯罪にならないんだよ」

今度は動揺を見せることなく言い返した。

16歳になれば女の子は結婚だってできる??それが漣の言い分であり、誠一も一応は納得している。だからこそ漣と付き合っているのだが、本当に問題ないのかどうかは、今ひとつはつきりとした自信が持てずにいた。どちらにしろ、一般的に理解してもらおうのが困難だということはわかっている。遥には強気な態度に出ているが、相手によってはこうもいかないだろう。だから、これまで二人の関係を誰にも漏らしたことはなかった。もつとも、漣の方はそうでもないように、遥や友達に話しているようだが??。

遥はスプーンを持つ手を止め、じつと誠一を見つめた。

「犯罪はどんな理由があっても許せない?」

「当たり前だろう、これでも俺は刑事だぞ」

「ふーん……」

遥は意味ありげにそんな相槌を打つと、再びパフェをすくいながら軽く言う。

「やっぱり漣と別れてよ」

「なんでそうなるんだよ」

誠一はわけがわからず眉をひそめた。犯罪が許せないから漣と別れるなど、もはやただの言いがかりとしか思えない。黙々とパフェを口に運んでいる遥を、じつと睨むように見つめる。

「誠一ってロリコン?」

「なっ……、違う違う、断じてそれは違うぞ」

意表を突かれて、誠一は慌てて否定する。これまで同級生と付き合い合ったこともあり、年下でなければならぬとか、まして十代以下でなければ受け付けないなどということは決してない。たまたま漣

が一回りほど年下だっただけのことである。

「じゃあ、年相応の彼女を見つければいいよ」

「……君、誰かを好きになつたことないの？」

「ないよ」

遙はパフエから目を離さず答えた。それを聞き、誠一は鼻先で笑つて腕を組んだ。

「なるほどな」

「何？」

遙は顔を上げると、怪訝に尋ねた。

「君、人のことをロリコンとか言うが、本当は自分がシスコンなんじゃないのか？ 可愛い妹を取られたのが悔しくて、なんとか取り戻そうとして、こんな自分勝手なことを頼みに来たんだらう」

誠一は勝ち誇つたように言う。ようやく遙より優位に立てると思つた。だが？。？。

「……浅ましいね」

「あさ……っ?!」

「確かに、遙のことは好きだし、大事に思つてる。でも、それは家族として当たり前のことだよ。それをシスコンだなんておかしくない？ 病んでるんじゃないの？」

そう言いながら、遙はぞつとするような軽蔑の眼差しを向けた。

「理由は言えないけど、このまま誠一と付き合い続けていたら、遙はいずれ苦しむことになる。遙のために別れてって頼んでるんだよ」

その静かな迫力に圧倒され、誠一はうつすらと額に汗を滲ませた。組んだ腕の中で握りしめた手も、じわりと湿り気を帯びてくる。それでも、とつてつけたような理由に納得できるはずもなく、落着いた態度を装いながら反論する。

「俺が別れを切り出したなら、遙は苦しむことになると思うが？」

「ずっと付き合っていた方が、結果的には苦しむことになるの」

遙は迷いなくきっぱりと言いつつ、大きな漆黒の瞳で、じつと心の奥までも覗き込むように見つめた。

「とにかく、漣のことを大事に思うなら別れてよ」

誠一は眉根を寄せる。

「遙……俺の何が気に入らないんだ？」

「誠一のは好きだよ。二人でデイズニーランドに行ってもいいくらいにはね」

遙は上目遣いでそう言うと、悪戯っぽい妖艶な笑みをその唇にのせた。それは、一瞬、彼が男であることを忘れてしまっくらしいものだった。だからといって、漣と重なって見えただけでもない。

「冗談は抜きにして??」

不覚にも動揺していた誠一をよそに、遙はすぐに真顔に戻って続ける。

「漣にしてはまともな人を選んだと思ってるよ。できれば僕も反対なんてしたくなかった。上手くいってほしいと願ってさえいた。ついこの前まではね。でも状況が変わったからさ、仕方ないと思って諦めて」

なぜここまで別れさせたがるのだろうか? 誠一は単純に疑問に思った。もしも今の遙の言葉が本心ならば、彼個人の感情が理由ではないということになる。年の差を問題視しているわけでもなさそうだ。漣と付き合い続ければ彼女が苦しむことになる、というのが本当だとしたら、それは一体どういうことなのだろうか。

「……せめて、理由を教えてくださいな」

「理由は言えない、って言ったはずだよ」

「そんな都合のいい話があるか!」

誠一はカツとしてテーブルに右手をついた。しかし、その手をグツと握りしめると、前のめりになる気持ちを抑えながら、ゆっくりと引いて膝に下ろした。納得したわけではない。漣と別れるの一点張りで、その真意を一向に話そうとしない彼に、苛立ちと不安は募る一方だった。

「忠告はしたから」

遙は突き放すようにそう言うと、空になったパフェグラスに放り

投げるようにスプーンを戻した。カランカラン、と耳障りな音が二人の間に響き、そして、水を打ったように静けさが広がる。

「ごちそうさま」

感情の窺えない義務的な声が、うつむいた誠一の耳に届いた。

遙は紺色のスクールバッグを肩に掛けて立ち上がると、座ったままの誠一を一瞥し、振り返ることなくアイスクリーム店を出て行った。

テーブルには二つの空のグラスが残されていた。

誠一は眉を寄せてそれを見つめながら、奥歯を噛みしめ、先ほどの遙との会話を心の中で反芻する。肝心なことは避けているものの、彼の言葉は基本的に率直だった。少なくとも嘘を言っているようには思えない。

もしも、本当に自分と付き合うことが、澁を苦しめることになるとしたら??。

誠一はテーブルに肘をついて祈るように両手を組み合わせると、その上に額をのせ、細く息を吐きながらゆっくりと目を閉じた。

3・互いの秘密

ピンポン??。

広くはないアパートの部屋に、電子的なチャイムの音が響き渡った。

「はい」

誠一は軽い調子で返事をする、読んでいた新聞を床に置き、はやる気持ちのまま足早に玄関へと向かう。その日は非番だったため、洗いざらしのシャツにジーンズというラフな格好ではあるが、清潔感を損なわないよう、それなりにこざっぱりと身なりは整えてあった。

それというのも、澁が来ることになっていたからである。

平日なので学校を終えてからになるが、ここ、誠一の部屋で一緒に過ごそうと約束していたのだ。澁はまだ高校生なので、夜までというわけにもいかず、いられるのはせいぜいが一時間ほどである。それでも、互いの休日が重なることの少ない二人にとっては、切り捨てることのできない貴重な時間だった。

誠一は鍵を開けてドアノブをまわす。

他に尋ねて来る人間に心当たりもなく、ちょうど予定の時間だったこともあり、澁が来たのだろうと疑いもしなかった。何の警戒もなく、大きく扉を押し開く。

だが、そこにいたのは、外見だけはよく似た別人だった。

「……遙?」

予想外のことに混乱して、誠一は目をぱちくりと瞬かせた。あたりを見まわしてみるものの、彼ひとりきりで、澁と一緒に来たというわけではないようだ。訝しげに眉を寄せると、それに答えるように、遙は無表情のまま口を開く。

「会いに来るなら非番のときにしろ、って言ってたから」

「それは、そうだが……どうしてここを知ってるんだ?」

「漣に聞けばわかるって言ったの、誠一だよ」

確かにその通りであるが、職務中に押しかけられると迷惑だと言いたかっただけで、家に来てほしいなど思っていたわけではない。第一、あれからまだ二日しか経っておらず、来るにしても早すぎだと言わざるをえない。

「それで、何の用だ？ まだ話があるのか？」

「せっかく来たのに、上げてくれないの？」

まるで小さな子供が何かをねだるときのように、遥は大きな瞳でじっと見つめて尋ねた。さっさと話を終わらせて帰ってもらうつもりだったが、やはり一筋縄ではいかないようだ。誠一の表情に抑えきれない苛立ちが滲んだ。

「これから漣が来るんだよ」

「だから追い返すつもり？」

どうやら遥はそう簡単に諦めるつもりはなさそうだった。口では彼に敵わない。他の住人の目もある玄関先で、いつまでも不毛な押し問答を続けるわけにはいかないだろう。

「漣が来るまでだぞ」

誠一は溜息まじりにそう言うと、入口を塞いでいた自分の身を退けて、不本意ながら、独り暮らしの部屋へ彼を招き入れた。

遥は何の遠慮もなく中へ進むと、スクールバッグを下ろして、小さな丸テーブルの前に座る。わかっているのかいないのか、いつも誠一が使っているクッションを、ちゃっかりとその下に敷いていた。「僕はコーヒーでも紅茶でもどっちでもいいよ」

「……待っている」

誠一は完全に遥のペースに巻き込まれていた。深く溜息を落とすと、すぐそばの流しに向かい、ヤカンに水を入れてコンロの火にかけた。

「遥、言うておくが、漣と別れるつもりはないからな」

誠一はマグカップを棚から取り出しながら、低い声でそう切り出した。

遙が今日ここへ来たのは、おそらくその話に決着をつけるためだろう。だから、先手を打って、自分の気持ちを伝えておこうと考えたのだ。漣が苦しむことになると言われて、多少は悩んだが、漣本人に無断で別れを決めるなど出来るはずもない。そもそも、この話自体が、遙のハツタリである可能性も捨てきれないのだ。

「ねえ、誠一の趣味ってゲーム？」
「えっ？」

唐突にまったく別の話題を振られて、誠一はインスタントコーヒの瓶を持ったまま、きよとんとして振り返った。いつのまにか、すぐ近くに遙は立っていた。そして、その手には??。

「うわああああっ!!!」

絶叫ともいえるくらいの悲鳴を上げて、誠一は、すさまじい勢いで遙が持っていた箱を取り上げた。今さら手遅れであるが、とつさにそれを背中に隠す。熱湯と氷水を一気に頭からかぶせられたような、目まぐるしく混乱した感覚が誠一を襲った。

「どこから持ってきた?!」

「寝室の机の引き出し」

「勝手に漁るなっ!!!」

それは、18歳未満が遊ぶことを禁じられている、いわゆる美少女ゲームと呼ばれるものである。パッケージにも、裏側に小さくではあるが、そういうイラストが掲載されている。当然ながら、これがどういふものであるか、遙にも察しがついたのだろう。

「漣はこのこと知ってるの？」

「知ってるわけないだろう。君と違って無断で引き出しを開けたりしないからな。別に隠しているわけではないが、あえて言うようなことでもないし、それに、漣はまだ17歳だし……」

「ふーん」

その相槌は凍えるほど冷たかった。誠一は唾を飲み、眉を寄せて

尋ねる。

「溇に告げ口しようと思ってるのか？」

二人を別れさせたがっている遥である。こんな格好の材料を逃すはずはないだろう。もしかすると、そういう弱みを探すために、部屋に上がり込んだのかもしれない。

「言っておくが、そのくらいで壊れるような俺たちじゃない」

「そう、良かったね」

感情のない遥の言葉が、着実に誠一を追いつめる。これしきのことで溇が愛想を尽かしたりはしないだろうか？そう信じているが、何かしら負の感情を持たれることは避けようがなく、そのことを考えると恐怖感は禁じ得ない。

「……あの、遥くん？ やっぱ黙っててもらえるかな。パフエ奢るから」

「自信ないんだ？」

遥は突き放すようにそう言うと、僅かに顎を上げ、蔑むような冷たい目を向けた。凶星を指された誠一は、返す言葉もなく、うつむき加減で唇を固く結ぶ。自分の不甲斐なさに、そして彼の卑怯なやり口に、徐々に苦々しさがこみ上げてきた。

ピンポーン??。

本日、二回目のチャイムが鳴った。

緊張の糸が切れたように、誠一は重い吐息をもらす。

「溇が来たみたいだな。君はもう帰れよ」

溇が来るまでという条件であり、短かったが、約束の時間は終わりである。持っていたゲームの箱を、扉のついた戸棚に押し込むと、遥をその場に残して玄関に向かった。

「こんにちは」

「いらっしやい」

今度こそ、訪問者は溇だった。大きく開いた肩口に、短いプリー

ツスカートという、やや肌寒そうな格好ではあるが、茶色を基調としたコーディネートは、十分に秋らしさを感じさせた。

澪がここに来るときはいつも私服である。そうするように言っているのだ。

制服姿の女子高生に出入りされるのは、さすがに世間体が悪いと自覚している。どんな噂を立てられるかわからない。悪くすれば、通報されてしまうかもしれないのだ。私服であれば、はっきりとした年齢がわからない以上、多少若く見えたとしても、むやみに騒ぎ立てられることはないだろう??。

澪との交際に問題はないと主張しておきながら、これだけ気を遣っているという事実には、誠一は胸の内でごっそりと苦笑した。遥には絶対に秘密である。人の弱点をとことん衝いてくる彼に、こんなことを知られてしまえば、どんな行動を起こされるかわかったものではない。

誠一は扉を押さえたまま、澪を中へと促した。彼女は弾むように足を踏み入れ、靴を脱ごうと視線を落とす。そのとき、誠一のものより小さな革靴に気づき、屈んだ姿勢のまま、やや困惑ぎみに誠一を見上げた。

「誰か来てるの?」

誠一は右手を腰に当てながら、乾いた笑いを浮かべて答える。

「君のお兄さんだよ」

「遥、さっそく来てるの?」

澪は大きな漆黒の瞳をぱちくりさせた。その口ぶりからすると、遥が彼女にこの場所を聞いたというのは、どうやら本当のことのようだった。

「いらつしゃい、澪もコーヒーでいいよね?」

湯気の立つヤカンを片手に振り返り、遥は真顔でそんなことを言った。まるでこの家の主であるかのように振る舞っているが、彼がこの家に来たのは今日が初めてである。しかし、澪はこの状況を疑

問にも思わず、「うん、ありがとう」と当たり前のように笑顔を返していた。

「……君、何やってるの？」

誠一は低い声でそう言い、早く帰れと目で訴えた。眉間に深い皺が刻まれる。それでも、遥は少しも意に介することなく、マグカップに熱湯を注ぎながら平然と答える。

「お湯が沸いたから、コーヒー淹れておこうかと思って。マグカップ、二つしかないみたいだけど、誠一の分はどうすればいいの？」

「いいよ、なくて」

誠一はもう言い返す気にもなれなかった。

しかし、漣は無邪気に誠一と腕を絡めると、嬉々として声を弾ませる。

「じゃあ、私たち一緒に飲むことにするね」

彼女の屈託のない明るさは、いつも誠一の救いとなっていた。疲れたときも、沈んだときも、彼女といるとあたたかい気持ちになれる。それは、付き合い始めの頃から、今もずっと変わらなかった。

漣はふと思い出したように、肩にかけた鞆から、茶色の紙袋を取り出して言う。

「これ、櫻井さんから。マフィンだって」

「ああ、ありがとうと伝えておいてくれ」

「うん」

櫻井さんというのは、橘家の執事である。老人といっても差し支えないくらい年の配の男性で、漣が生まれるずっと前から、もう何十年も橘家に仕えているそうだ。お菓子作りが得意らしく、これまでも何度か漣が持ってきていたが、実際、どれも本職が作ったものと遜色ないくらいに美味しかった。

「たくさんあるから、遥も食べてね」

漣はそんなことを言いながら、うきうきと紙袋からマフィンを取り出し始めた。もはや遥に帰れなどとは言えない状況である。誠一は観念して小さく溜息をついた。

二つのマグカップから香ばしい湯気が立ち上る。

軽食の準備がなされた小さな丸テーブルを、三人は均等に囲んで座っていた。

クツシヨンは二つしかなかったので、漑と遥に使ってもらい、誠一はフローリングの床にそのまま腰を下ろしている。そのこと自体は構わない。しかし、せつかく漑と過ごせる貴重な時間なのに、いつまでも遥が無遠慮に居座っていることには、どうしても不満を感じずにはいらなかった。

「誠一、もう一つクツシヨンとマグカップを買っておいてよ」

「ああ、そうだな」

誠一は投げやりに答えを返した。まさかこれからも度々来るつもりなのだろうか、と不安が頭をもたげたが、藪蛇になるかもしれないと思い、あえて口には出さなかった。

そんな二人を眺めながら、漑は嬉しそうにニコニコと頬杖をついていた。

「良かった、遥と誠一が仲良くなってくれて」

「どこが！ と全力で突っ込みたかったが、彼女を落胆させるのも気が進まず、その言葉をすんでのところで呑み込んだ。遥も気持ちと同じだったのか、肯定も否定もせず、黙々とマフィンを食していた。

「誠一も食べて」

「ああ」

漑はいつもと変わらず明るかった。素直で屈託のない笑顔も、はつらつとした行動も、華やかで凜とした声も、まったく普段どおりで少しもおかしなところはない。だが。

このまま誠一と付き合い続けていたら、漑はいずれ苦しむことになる??。

先日の遥の言葉が、抜けない棘となって、誠一の心に疼きを与えていた。いずれというのはいつなのか、何について苦しむのか、ど

うして苦しむことになるのか、彼女の様子からは何一つとして見当がつかない。今日、このことを漣に聞いてみようと思っていたが、ただでさえ切り出しにくい話なのに、遙に同席されていてはなおさら困難である。

「どうしたの？ なに考え込んでるの？」

「いや……、何か、変わったことはないか？」

「別に、ないけど……？」

漣はマグカップを両手で持ったまま、小首を傾げ、斜め上に視線を向けて考えを巡らせた。そして、「あ、そうだ」と独り言のように小さく声を漏らすと、マグカップをテーブルに下ろして誠一に振り向く。

「ここに来るときなんだけどね、バイクに乗った人が、私のことをじいっと見てたのよ。それだけなんだけど……見とれてたって感じでもなかったし、何かちよつと気になっちゃって」

えへつと照れ笑いする漣とは対照的に、誠一と遙の表情は途端に険しくなった。

「それ、どんな男だ？」

「え？ うん、えつと……」

誠一の真剣な問いかけを受けて、漣は少し面食らったようだったが、すぐに記憶を辿りながら言葉を繋いでいく。

「かなり背が高くて、鍛えられた感じの体格？ ヘルメットをかぶってたから、目のあたりしか見えなかったけど、けっこう端正な顔立ちで格好良さそうだったよ」

後半、漣の声は少し弾んでいた。そのことに自分でも気がついたのか、慌てて顔の前でふるふる両手を振り、力をこめて必死に弁明する。

「心配しないで、私にとっては誠一が一番だから！ 人間、外見じゃないもんね！」

思わず誠一は苦笑を浮かべた。あまりフォローにはなっていないが、悪気があるわけではなく、あくまで漣の率直な考えなのだろう。

自分の容姿がごく平凡であることは自覚している。彼女が外見を重視するのなら、間違いなく他の男を選んでいるはずだ。だからといって、なぜ自分を選んだのかは、いまだによくわからないが??。

「こうなると、冗談抜きで誘拐かもね」

「それどういうこと？」

二人の声で、誠一は現実を引き戻される。

漣はマグカップに両手を添えて、遥の方へ身を乗り出して誘拐などと物騒な言葉を聞いたせいも、不安そうに眉がしかめられている。そんな彼女を見ながら、遥は表情一つ動かさずに淡々と答えていく。

「おととい、たぶん漣が見たその男だと思うけど、僕も同じようにじっと見られてたんだよ。僕だけでなく漣もとなると、橘家の何かが目につてことになるんじゃないかな。だから、僕たちは気をつけないとつて話」

彼の話聞きながら、誠一はそのときのことを鮮明に思い出していた。

「あの獲物を見定めるような目の鋭さは、堅気とは思えなかったしな」

低く静かに落としたその言葉に、漣は少し目を大きくする。

「それつて、そのとき誠一も一緒だったつてこと？」

「まあね、たまたま誠一と会つて挨拶してたんだよ」

遥はさらりと嘘をついた。さすがに、あのような勝手きわまりない行動を、漣には知られたくないとみえる。誠一はしばらく考えたあと、目を伏せ、小さく呼吸をしてから口を開いた。

「漣と別れる??」

「えっ？」

「遥はそう言いに来たんだ」

一瞬、遥は鋭く刺すように誠一を睨んだが、すぐに無表情に戻り、何も言わずコーヒーを口に運んだ。それでも漣のことは気にしているようで、ちらりと視線だけを隣に向ける。

澪は、思いつめた顔でうつむいていた。

この反応からすると、何か心当たりがあることは間違いなさそうだ。澪が苦しむことになるという話が、ただのハツタリであればいいと願っていたが、どうやらそうではなかったらしい。

「澪……」

「大丈夫だから、別れないから！」

澪はパツと弾かれたように顔を上げ、前のめりになり、ひたむきに畳み掛けるように訴えた。それは、まるで自分自身に言い聞かせているようにも見えた。その必死さが、逆に誠一の不安を煽る。

「澪、もし何かあるのなら、俺にも話してくれないか？」

「……ごめんなさい、誰にも話してはいけないことなの」

頼りなげな声からも、伏し目がちな表情からも、彼女の苦悩が滲み出ていた。そして、視線をさまよわせながら、戸惑いがちに付言する。

「家の、事情だから」

「そうか……」

誠一には、澪の言葉が嘘だとは思えなかった。少なくとも何かを誰かに口止めされているのは事実だろう。それに、橘ほどの大きな財閥ともなれば、他言無用の事情があつても不思議ではない。

そのとき、ふと頭をよぎった可能性に、誠一はそつと眉をひそめる。

もしかしたら、彼女に、政略結婚まがいの話が出ているのではないだろうか。政略結婚は言い過ぎでも、家の事情で結婚相手を決められることは、ありえない話ではないように思う。

もしもそれが本当で、どうやっても逃れられないのだとしたら？

まわりが見えないほどに深く考え込んでいると、不意に、澪が首に腕をまわして抱きついてきた。その腕にぎゅつと力をこめて、誠一の肩口に顔を埋める。胸元に当たる柔らかい感触と、首筋にかかる吐息に、誠一の体は熱くなった。

「漣、お兄さんの前だぞ」

「僕のことはお構いなく」

遙は茶色の紙袋に手を突っ込みながら言った。どういつつもりかはわからないが、お構いなくなると言われても、構わないわけにはいかないだろう。恨めしそくに横目で睨むが、彼はこちらに目を向けることなく、袋から取り出したマフィンをちぎって口に運んでいった。

「別れないもん」

「漣……」

頼りない華奢な背中を、誠一はそつと抱きしめた。手のひらに艶やかな黒髪が触れる。隣の遙が気にならないわけではなかったが、それよりも、今は漣を落ち着かせることを優先させた。

次第に漣の体から力が抜けていった。そのまま身を預けるように誠一に寄りかかる。

「帰りたくない」

「……………っ！」

彼女の小さな一言に、誠一は大きく動揺した。二人きりのときなら構わないが、兄の目の前である会話ではないだろう。いや、この際、その兄に何か言ってもらえば？ 遙に助けを求めるように視線を送るが、彼はこちらを見ようとせず、涼しい顔でマグカップに口をつけていた。

「僕のことはお構いなく」

再びそう言うと、空になったマグカップを持って立ち上がり、流しに向かって、勝手にヤカンで湯を沸かし始める。もしかしたら、彼なりに気を遣ってくれたのかもしれない。

誠一は小さく息をついた。

「あんな、漣」

「わかってる。帰らないといけないんでしょう？ 私がまだ高校生だから」

漣の声はとても落ち着いていたが、その中には、どこか寂しげな

響きもあつた。彼女は現実がわからないほど子供ではないが、簡単に割り切れるほど大人でもない。誠一の胸は小さくズキリと痛んだ。

「ああ……」

「ごめんね」

それは何に対しての謝罪だったのだろうか。帰りたくないと言ったことなのか、自分が高校生であることなのか、それとももっと他の何かなのか??。

「なあ、漣」

「ん？」

漣の頭が少し動いた。漆黒の黒髪がさらりと流れる。その黒髪を梳くように、ゆるりと指を通してながら、誠一は遠くを見つめて目を細める。

「漣が高校を卒業したら、一緒にどこか旅行でも行かないか？」

漣はパツと体を離し、目を丸くして誠一を見た。

「うん、行きたい！ 行こう！」

「まだだいぶ先の話だけだな」

すぐにでも準備を始めそうな漣の勢いに、誠一は思わず苦笑しながら言い添えた。それでも彼女はおかまいなしに、人差し指を立てて、とびきりの笑顔で声を弾ませる。

「じゃ、忘れないように約束ね」

その可愛らしい言葉とともに、首を伸ばして、誠一の唇に軽く口づけを落とした。

「あまり身内のそういうトコ、見たくないよね」

いつのまに帰ってきていたのか、コーヒ―を淹れ直した遙が、元の場所に座りながら言う。そのときはかりは、誠一は全面的に申し訳なく思い、きまり悪さに身を小さくした。

しかし、漣は納得のいかない様子で、唇をとがらせて反論する。

「お構いなくて言ったの、遙だよ？」

「そうだけど、漣は構わなさすぎなの」

遙は少し呆れたように言い返した。その光景はごく普通の兄妹の

ようで、言い合いではあったが、かえって微笑ましさを感じさせるものだった。

誠一がその光景に表情を緩めていると、遥は嘆息し、それから真剣な顔で振り向いた。

「誠一に、ひとつだけ約束してほしいんだけど」

「何だ？」

つられるように誠一も真剣な顔になった。

「『家の事情』を詮索しないで。今度、澪に訊こうとしたら、問答無用で別れてもらうから。そして、もしそれを知ってしまった、受け入れられないと思ったら、何も言わずに澪の前から姿を消してほしい」

「……わかった。約束する」

遥の要求は今一つ腑に落ちないものだったが、呑むしかないだろうと誠一は思った。彼女に何が起こっているのか、不安は募るものの、大丈夫だと言った澪の言葉を、無理にでも信じるしかなかった。「これで問題はなくなったね」

澪はテーブルに腕をつけて、上機嫌でニコニコと微笑んだ。

しかし、遥の態度はつれなかった。

「そうでもないよ」

軽く受け流すように言うと、どこからか取り出した箱を、無言でポンと澪に手渡す。

「なにこれ……同級生……？」

「ちよつ、まつ、おいっ!!」

それは、例の美少女ゲームだった。誠一は焦って取り上げようとしたが、澪は軽くそれをかわした。身のこなしは澪に敵うはずもない。青ざめる誠一の前で、彼女はそのパッケージにじっくりと目を落としていた。

「じゃあ、僕はこれで」

「おいっ!! 遥っ!!……!!」

遥は素知らぬ顔で立ち上がると、手を伸ばして呼びとめる誠一を

無視し、スクールバッグを肩に掛けながら部屋を後にした。

廊下の先で、玄関の扉が、ガチャンと重く冷たい響きを立てた。

4・二人でひとり

「結局、誠一とは別れなかったの？」

「あれくらいで別れるわけないよー」

赤絨毯の引かれた大階段を軽やかに上っていた澁は、くるりと振り返ると、明るくそう言っただけで遙の質問を笑い飛ばした。流れるような艶やかな黒髪が、高窓からの光を受けてきらりと輝く。

「別に怒ったりしてないもん。まあ、少しは驚いたけど……でも男の人ってそういうものでしょ？ みんなやらしい本とかビデオとか隠し持つてるんだって、綾乃もそんなこと言ってたし」

「……澁、それは偏見。みんなってのは言い過ぎだから」

「それもそうだね、隠さず堂々としてる人もいるもんね」

「そうじゃなくて……」

遙は眉を寄せて反論しかけたが、諦めたのか、深く溜息をついて口をつぐんだ。肩からずれたスクールバッグを掛け直し、澁に続いて静かに大階段を上っていく。

「修羅場になってないなら、どうしてあんなに帰るの遅かったの？」

「それは、ちよつとね」

澁は肩を竦めてごまかし笑いを浮かべる。その表情だけで察したのか、それとも興味がなかったのか、遙はしつこく追及しようとはしなかった。上目遣いでちらりと視線を送ると、立ち止まっている澁を追い越しながら忠告する。

「今回は僕にも責任があると思ったからフォローしたけど、もうこれきりだからね」

「うん、ありがと」

澁は屈託なく笑って答え、先に行く背中を追いかけた。

遙から聞いた話だが、昨晚、帰りの遅い澁を心配して、執事の櫻井が搜索願を出そうとしていたらしい。仕事で忙しい両親から家を預かっている身としては、その大袈裟なくらいの心配も無理からぬ

ことかもしれない。申し訳なかったな、と漣は素直に反省していた。

「ねえ、遥」

「何？」

遥は目を伏せたままだったが、それでも漣は構わず続ける。

「もう別れさせようとししないで？ 私、本当に大丈夫だから」

自分を案じてくれるからこそその行動だとわかっているので、責める気持ちはないが、誠一と別れることについては絶対に了承できない。それゆえ、こうやってひたむきに懇願するしかなかった。

「漣は自分自身のことがわかってないんだよ」

「そんなことないよ。私だって考えてるもん」

「どちらにしろ、僕が何か言いたくくらいでダメになるなら、その程度の仲だったってことじゃない？ 遅かれ早かれ別れることになると思うよ」

「……そっか、それもそうだね」

漣はあっさりと同調した。別れることに納得したわけではなく、誰に何を言われても自分たちの関係は壊れないという、根拠のない自信があったのだ。後ろで手を組み合わせると、ニコニコとして遥を覗き込む。長い黒髪がさらりと肩から流れ落ちた。

「遥の妨害には負けないからね」

「ホント、漣はノーテンキだね」

遥は呆れ顔で横目を流して言う。溜息まじりの冷めた口調だったが、その中には、どこか包み込むような温かさも感じられた。そして、いつも彼がそうやって自分を見守ってくれていることを、漣は知っていた。

二人は肖像画の掲げられた踊り場を通り過ぎ、二階へ足を進めると、突き当たりにある大きな扉の前で立ち止まった。そこは剛三の書斎である。今日、学校が終わったら来るようにと言いつけられていたのだ。

コンコン、と遥は強めに扉をノックした。

「入れ」

中から剛三の低い声が聞こえた。遙はすぐに扉を押し開け、続いて漣も足を踏み入れる。だが、いつもいるはずの正面の執務机に、彼の姿は見えなかった。

「こつちだ」

声のする方に振り向くと、その一角には、先日まではなかった打ち合わせスペースが出来ていた。机も椅子も小さな会議室で使用するような簡素なもので、この重厚な書斎には不釣り合いな、いかにも急ごしらえという安っぽい雰囲気漂っている。その奥の席から、剛三は意気揚々と手招きをしていた。そして隣には、秘書の悠人が温厚な微笑みを湛えて座っている。

しかし、そこにいたのは彼らだけではなかった。

二人の向かい側には、漣の見知らぬ若い男性が、妙に馴染んだ様子でざつくばらんに腰掛けていた。会社関係の人間ではないだろう。シャツにジーンズというカジュアルな格好をしており、髪も栗色に染められ、少なくとも本社に勤務するにはありえない姿である。それに、外見からするとかなり若そうで、漣たちとそれほど年齢が違わないように思えた。

「あの……」

「遅かったな。何をやっておったのだ」

意図的ではなかったのだろうが、漣が切り出した言葉を遮るように、剛三はよく通る低音を響かせた。そこには、非難というほどでもないものの、はつきりとした不満の色が滲んでいた。

「学校で勉強だけだ」

「私たちまつすぐ帰ってきました。今日は8時限までであったんです。素っ気ない遥の返答に、漣はすぐさま続けて補足する。

だが、剛三は理由を知りたいわけではなかったようだ。自分から訊いたにもかかわらず、興味なさそうに「まあ良い」と流し、空席を示しながら二人に座るよう促す。

先に遥が右端に座り、漣は中央に腰を下ろした。

その左隣は例の見知らぬ男性の席だった。涼しい顔をして頬杖をついている彼に、漣はちらりと横目を流すと、左手で小さく指さしながら剛三に尋ねる。

「あの、この人はどなたです？」

「おまえは本当にせつかちだな」

剛三は呆れたようにそう言うと、軽く咳払いをしてから続ける。

「それではさっそく紹介するでしょう。怪盗ファントムの一員として、我々を手伝ってくれることになった志賀篤史君だ。彼は大学生ながら経験豊富なハッカーだな」

あまり聞き慣れない怪しげな単語に、漣の眉は反射的にしかめられた。

「ハッカーって、コンピュータで悪いことをする犯罪者？」

「それはクラッカー」

間髪入れず、篤史が訂正する。

「ハッカーっていうのはコンピュータやネットワーク技術に精通した人のことで、必ずしも犯罪者ってわけじゃない。まあ、俺の場合、多少ヤバいことをやってきたのも事実だけだな」

「……………」

臆面もなく悪事を告白する彼を、漣は浅ましそうに睨んだ。

「おじいさま、こんな犯罪者まがいの人を仲間にしていいんですか？」

「そういうおまえだって、今から犯罪に足つっこもうとしてんだろ？」

「そつ、それは……………」

篤史から思わぬ横やりを入れられ、漣は返す言葉もなく口ごもる。自身が望んでのことではないが、やがて同じ穴の貉となる以上、どんな反論も空疎な言い訳にしかなりえない。

剛三は豪快な笑いを響かせた。

「高度情報化社会の時代、こういう人材もなくてはならんだよ」
確かに、そういう方面に詳しい仲間がいれば、頼りになることは

間違いないだろう。それでも澪はあまり気が進まなかった。彼を信用することも、彼に好感を持つことも、自分には出来そうになかったのだ。だからといって、剛三に訴えても聞き入れられるとは思えない。

「わかりました。おじいさまがそう言うのでしたら」
「澪々ながら澪は折れた。剛三は満足げに大きく頷く。

「ふたりとも仲良くしてくれよ。同じファントムの名を持つものどうしなのだから」

「それどういう意味です？」

「ああ、彼はハッカーをやっているときには『phantom』と名乗っておったのだよ。そのことが、彼に目をつけた理由の一つでもあるのだが」

澪はきよとんとして篤史に振り向いた。

「ただの偶然？」

「さ、どうか」

篤史は口もとに薄く笑みを乗せてはぐらかす。そこまで興味のあつた話ではなく、問い詰めようとまでは思わないが、その思わせぶりの言動に腹立たしさを感じ、澪は片眉をしかめて唇をとがらせた。

「まずは簡単な案件で感覚を掴んでもらおうと思う。いわば実地研修のようなものだ」

剛三は真面目な顔になり、机の上で両手を組み合わせた。

真つ当な会社の新人教育みたいなことを言っているが、その内容は反社会的な怪盗としての仕事である。もう開き直ったつもりではいたが、現実として自分たちが犯罪者になるかと思うと、澪は否応なしに暗澹とした気持ちになった。

「悠人、写真を」

「はい」

剛三の指示を受けて、悠人は手元のファイルから一枚の写真を取り出した。少し頬がこけた細身の男性と、小学生くらいの女の子が、

仲睦まじそうに笑顔を寄せて写っている。

「誰？ この人たち」

「先日、夭逝した洋画家の高塚修司と娘の春菜だ。妻はとうの昔に亡くなっておつて、二人きりの家族だったそうだ」

「じゃあ、今は娘さん一人ぼっちなんですか？」

澪が心配そうに尋ねると、剛三も眉を寄せて重々しく頷いた。

「親戚が引き取るか、施設に預けるか、まだ決まっていらないらしい。どうやら親戚とは疎遠だったらしく、誰も春菜とは会ったことがなかったそうだ。それに、高塚修司は天才画家といわれてはいたが、寡作だったため、遺産と呼べるものはほとんどない状態でな。それも、皆が春菜を引き取りたがらない理由の一つなのだ」

「そんな……」

短い身の上話を聞いただけでもかかわらず、澪はすっかり春菜に同情していた。彼女の寂しさ、悲しさ、不安などを想像すると、自分まで泣きたいような気持ちになってくる。それは、相手に面識があるうとなかろうと関係のないことである。

「とりあえず本題に入ろう」

剛三は冷静に言葉を継いでいく。

「不治の病で先が短いことを知った高塚修司は、娘への最後のプレゼントとして、文字通り命を削って彼女の肖像画を描き上げたのだ。だが、それに目をつけたのが自称親友で画商の浅沼でな。画商というよりブローカーと云った方が近いかもしれんが」

その吐き捨てるような語尾には、やるかたない忌々しさが滲んでいた。

「奴は金のためなら悪辣なことも平気でやる男で、今回も高塚修司が亡くなると、管理のために預かるなどと言って、その未発表の肖像画を持ち帰ったのだ。後日、春菜が返してくれるように頼んだが、そんなものは知らんと……ようは騙して手に入れたということだな」

「ひどい！ 詐欺じゃない！」

澪はカッと頭に血をのぼらせると、前のめりになって、ギョツと

こぶしを握りしめる。正義感の強い澪には、とても冷静でいられる話ではなかった。

その隣で、遙は胡散臭そうな目をしていた。

「そんなのすぐにバレるんじゃないの？」

「そうでもないぞ。春菜が何を言っても証拠はないからな。逆に浅沼なら売買契約書の捏造くらいはやるだろう。おそらく何年か寝かせておいたのち、寡作の天才画家の遺作として大々的に発表し、最大限に価値が上がったところで売り払う寸法に違いない」

「ふーん……」

彼は無感情に相槌を打つと、視線を澪に移して言う。

「なんか似てるね、こないだ聞いた母さんの話と」

「あ、言われてみれば、ホントそっくりだね」

先日聞いた母親の過去と、今日聞いた春菜の話は、細かいところは違うのだろうが、話の骨子はまったく同じといっても過言ではない。偶然とはいえ、ここまで立場や状況が重なることもめずらしいだろう。

「どうだ、力になってやりたいと思うだろう？」

「私、俄然やる気が出てきたわ！ その肖像画を取り返すのね？」
澪は身乗り出して言う。もはや自分が怪盗であることなどすっかり忘れていた。それどころか、逆に正義の味方にもなったかのように、騙された少女を救うのだと意気込んでいた。

剛三は力強く首肯する。

「そう、おまえたちにはこの肖像画を盗み返してもらおうのだ！」

よく通る声を響かせながら、芝居がかった所作で大きく右手を伸ばす。その先には、悠人が掲げた大きな肖像画があった。どこか気恥ずかしそうな微笑みをたたえた少女が描かれている。それが高塚の娘であることは一目でわかった。

「……えっと、どうしてその絵がここにあるんですか？」

「レプリカじゃない？ それと同じ絵を盗めって意味だよ」

遙は当然だと言わんばかりだった。確かにそう考えるのが自然だ

ろう。しかし??。

「いや、これが本物だ」

「どういうことですか?」

漣は訝しげに眉をひそめて聞き返した。遙も口にはしていないが、同じ気持ちなのか、追及するようにじつと祖父を見つめている。

剛三はニヤリと口の端を上げた。

「先日、悠人と篤史に盗んできてもらったのだ。あやつのところには、こちらで用意した贋作を代わりに置いてある。短い期間で悠人が頑張ってくれてな」

「ずいぶん大掛かりな準備してるね」

感心しているのか、呆れているのか、どちらともつかない口調で遙は言った。

「何ごとも慎重かつ大胆にやらねばならんだよ。この案件についてはひと月以上も前から準備を進めていてな。客として何度か訪問し、家の構造やセキュリティを調査して攻略し、もう自由に出入りできるようにになっておる」

その説明を聞いても、漣は肝心な部分で合点がいかなかった。

「もう盗んだのなら行く必要ないじゃないですか」

「馬鹿者っ!!」

ダン、と勢いよく両手で机を叩きつけ、剛三は唾を飛ばしながら一喝した。

「ただ盗むだけではコソ泥でしかないだろう。我々は怪盗なのだぞ。派手に、華麗に、盗まねば意味がない! 最高に素晴らしいパフォーマンスを皆に見せつけるのだ!!」

「はあ、そうですね……」

暑苦しく力説する剛三についていけず、しかし無下な態度をとることもできず、漣は当たり障りのない相槌を打った。それでも剛三は意に介することなく、一方的に話を進めていく。

「二代目は美少女怪盗というコンセプトで行こうと思っておる」

そう言うと、悠人のファイルからイラストボードを取り出して皆

に見せた。そこには、長い髪をなびかせた澗そっくりの女の子が、東京の夜景を背にして、凜々しくビルの上屋上に立っているイラストが描かれていた。高校の制服を黒くしたようなジャケットと短いプリーツスカート、その中には赤シャツと白ネクタイ、脚には黒のニーソックスと革靴、手には白手袋、頭には赤のリボンが巻かれた黒のシルクハットという、地味なようであるが意外と目立つ格好をしている。

「どうだ？　なかなか良いだろう。初代以上に話題沸騰すること間違いないだ」

喜色満面の剛三とは対照的に、澗の表情は引きつっていた。おそらくそうだろうと思いつつも、一縷の望みに縋るように、おずおずと上目遣いで尋ねる。

「もしかして、私がこの格好をするの？」

「おまえ、今さら何を言っておるのだ」

剛三は呆れたような目つきで睨みをきかせる。そこには、拒否は許さないという、怖いぐらいの気迫が満ちていた。どう足掻いても回避など出来そうもなく、澗は乾いた笑みを貼り付けさせるしかなかった。

二人の会話を聞いていた遙は、つまらなさそうに頬杖をついた。

「じゃあ、僕は裏方ってことだね」

「裏でもあり、表でもある。そのあたりの詳細は、これから説明するわい」

剛三は持っていたボードを机の中央に置き、隣の悠人と視線を合わせると、意味ありげに口もとを上げた。篤史は左腕を机につきながら、遙に視線を流してニヤニヤと厭らしく笑う。その場に流れる奇妙な空気に、遙は困惑した様子で、微妙に顔をしかめて小首を傾げた。

「へえ、けっこういい家。画商って儲かるのかな」

「誠実でないほど儲かる職業なのかもしれないね」

後部座席で呟いた漣の独り言に反応し、運転席の悠人はにこやかに皮肉を言った。

漣、悠人、篤史の三人は、乗用車で浅沼の家に来ていた。といっても、訪問するわけではなく、前をゆつくりと通り過ぎるだけである。悠人と篤史はすでに飽きるほど訪れているが、漣はまだ見たことがなかったため、先に軽く下見をすることになったのだ。

その家は小高い丘の上にあった。

外はすっかり暗くなっていたが、家には煌々と灯りがついており、庭もところどころライトアップされていて、こちらから照らすことなくある程度の観察ができた。敷地はかなり広いようだ。建物自体はそうでもないが、庭だけならば橘家よりも大きいだろう。しかし、そこには特に凝ったものはなく、ただひたすら芝生が続いているだけだった。

「予告状は出したって言うてましたよね？」

「もちろん、怪盗ファントムの名前入りだね」

「そのわりには静かね」

あたりに人の気配はほとんどない。予告状を出したとなれば、警官や警備員が大挙して出動し、報道陣が押し寄せ、野次馬も集まっているような、騒がしく物々しい状況を予想していたが、現実はまだたくの肩透かしである。

篤史は膝に載せたノートパソコンを操作して、そのディスプレイにシステム画面や隠しカメラの映像を次々と映し出した。しばらくじつと確認して言う。

「警察はいないけど、一応、警備員は二人呼んでるな。半信半疑ってところなんだろう」

「美術関係者で怪盗ファントムを知らない者はいないと思うけど、もう20年以上も活動してなかったからね。悪戯を疑うのも至極当然のことだよ」

ハンドルを切りながら、悠人は穏やかな声で解説する。

しかし篤史は、小馬鹿にするように小さく鼻を鳴らすと、頭の後

るで手を組み、背筋を伸ばしながらシートにもたれかかった。

「狙われているのが騙し取ったものだから、警察に通報しづらいつてもあったんだらう。そして警備員を雇うには金がかかる。何億もする名画ってわけじゃないし、来るか来ないかわからない怪盗のために、そんなに金はかけられない。あのケチなおっさんなら、そんなところだと思っぜ」

「そのあたりも見越して、剛三さんはこれを実地研修に選んだんだよ」

悠人はそう言うと、ちらりと漣に視線を向けて微笑む。

「派手なデビュー戦はちゃんと用意してあるからね」

「えっ？ いえ、そんなに派手なのはいらないです！」

慌ててそう答えたものの、自分の心を見透かされたようで、漣の頬はほんのり紅く染まった。派手なことをしたくないというのは事実だが、それと相反する気持ちも心の片隅に潜んでいる？？認めたくはないが、その自覚はあった。

「贋作ってことはバレてないみたいだ。大事そうに例の透明ケースにしまっただけだよ」

「それでは予定どおりプランAでいこう」

ノートパソコンを眺める篤史の報告を聞き、悠人は事務的な口調で決断を下した。

漣は窓枠に頬杖をついて首を傾げる。

「よくバレなかったね。画商なんでしょう？ その人」

「彼に絵を見る眼力はないよ。良い絵ではなく、良い値がつく絵を嗅ぎつける才能は持っているみたいだけど。絵は単なる儲けの道具でしかない、という考えだからね」

「つくづくサイテーな人ね。やる気が出てきたわ。ぎゃふんと言わせなきゃ！」

悠人の話を聞いて、漣はますます浅沼という人間に嫌悪感を募らせた。力強くこぶしを握りしめて気合いを入れると、耳に装着したイヤホンマイクを軽く押さえ、別の場所で待機する遙に電波を通し

て話しかける。

「頑張ろうね、遙！」

「遙じゃなくてファースト」

イヤホンから無愛想な返答が聞こえた。

「あ、そっか。遙はファースト、私がセカンド、ハッカーがサード、師匠が副司令、おじいさまが司令ね。なんかめんどくさいなあ」

漣が溜息まじりに不満を漏らすと、隣の篤史が咎めるような目を向ける。

「遊びじゃねえんだぞ。一応スクランブルは掛けてあるが、誰に聞かれてるかわからないんだからな。本名で呼び合うなんて、捕まえてくださいって言うてるようなもんだぜ」

「わかってるわよ、サード」

漣は嫌みたらしくイヤホンマイクに向かって言った。

「でも、コードネームを使うのはいいとしても、もう少しわかりやすく素敵なのはなかったのかなあ。ファースト、セカンド、サードって野球？ オヤジくさくて格好悪いよ」

「野球だったら司令じゃなくて監督だよ」

「だったら、これ何なんです？」

笑いながら答える悠人に、漣は思わず食ってかかる。

「さあ、剛三さんの一存だからね」

悠人は軽く受け流しながら、標的の家からほど近い駐車場に入り、車を停めてエンジンを切った。いくつかある残りの駐車スペースは空のようだ。一通りあたりを見まわして確認すると、イヤホンマイクを通して剛三に報告する。

「ポイントBに到着しました。問題はありません」

「よし、さっそく作戦開始だ。総員配置につけ！」

「了解」

テンションの高い剛三とは対照的に、車の三人はそろって淡泊な声で返事をした。

澁は屋敷の裏側に張り付いて待機していた。外に警備員はおらず、監視カメラも門と玄関にしかついていないため、敷地内に侵入するのは容易だった。その気になれば小学生でも可能だろう。

すでに怪盗ファントムの衣装には着替えてあった。ほぼコンセプトイラストどおりだが、シルクハットだけは身に付けていない。逆に、追加されたのは、顔全体を覆う白い仮面である。薄気味悪くて澁は気に入らなかったが、素顔を晒すわけにもいかず、心ならずも受け入れざるをえなかった。

「セカンド、家の構造は頭に入ってるか？」

「もちろん」

「作戦の手順も？」

「当然よ」

澁はイヤホンマイク越しに篤史と短い会話を交わす。家の構造も作業の手順も、今日の打ち合わせで聞いたばかりだが、すぐさま頭に叩き込んだ。遙ほどではないが、澁も記憶力はいい。この程度のことならば難なく覚えられるのだ。

「一応こちらで指示を出すけど、現場では想定外のことが起こる。そういうときは、自分の判断で臨機応変に対応しろ。捕まらないことが最優先だ」

「できるかなあ」

「今さらなに言ってるんだよ。自信を持ってやれよ」

弱音を吐露した澁を、篤史は静かに叱咤する。ぶっきらぼうな言葉遣いではあるが、どこか思いやりが感じられて、澁は少し胸があたたかくなった。こくりと頷いて「うん」と答える。

「そろそろ予告の時間だ。セカンド、ベランダの柵の上に立て」
ベランダは二階にあるが、悠人に鍛えられた澁にとっては問題ではない。少し下がって助走をつけると、凹凸を利用しながら外壁を駆け上がり、音を立てないようにベランダへと飛び移る。そして、柵の上にくっくと立ち、右手を腰に当てた。

「オッケーよ」

澪が声をひそめて報告すると、篤史は40からカウントダウンを始めた。澪はそのポーズを維持したままで、彼の声を聞きながらじつと待つ。カウントが10を切ったあたりから、次第に鼓動が速くなってきた。

「5、4、3、2、1……」

次の瞬間、敷地内の灯りがすべて消えた。部屋の中から、浅沼と思われる男の叫び声が聞こえる。警備員にもヒステリックに怒鳴り散らしているようだった。

「ライトアップ」

篤史の冷静な声と同時に、澪は背後から強烈な光で照らされた。光源を直接見ているわけでもないのに、眩しくてまともに目を開けていられないほどである。

「いいぞ、セカンド、いいシルエットだ」

おそらく、部屋の中に設置してある隠しカメラの映像で、カーテンに映る澪のシルエットを見ているのだろう。先ほどまでの彼とは違い、少し気持ちが高揚してきているようだった。

「マントを羽織った方がいいんじゃないですかね」

「検討しておくよ」

篤史と悠人は呑気にそんな話をしているが、当然ながら、部屋の中の浅沼もシルエットには気がついていない。彼は慌てて窓に駆け寄って、乱暴にカーテンを開け放った。そして、柵に立つ澪の姿を視認すると、ギョロ目をよりいっそう大きく見開いて、口をカクカクと震わせた。

「お……女……?!」

驚愕と困惑の入り交じった表情で、その光景に圧倒されるように、浅沼はよろめきながら数歩後ずさった。警備員たちもその後ろで呆然と立ちつくしている。

「セキュリティは切った。糸を引いて上の窓を開ける」

浅沼が窓を開いた場合はそこから入ることになっていたが、その気配がないため、準備してあった別手段を取るよう篤史が指示する。

事前に聞いた話では、漣が立っているすぐ右側にある柱に、テープで釣り糸が留めてあり、それを引くと上部の窓が開くからくりになっているとのことだった。

ちらりと右側に目を向けると、強烈な光を浴びた釣り糸が、キラリと小さな輝きを放っていた。漣はさつとそれを掴み、大きく振りかぶって引き下ろす。すると、上部の窓がすうつと静かに開いた。おそらく浅沼たちからは、ファントムが手を振り下ろしたただけで、触れることなく窓が開いていくように見えたのだろう。だらしなく口を開けてポカンとしている。

「飛び移れるか？」

篤史は少し心配そうに尋ねた。その開いた窓はかなり高い位置にある。ガラスを割らずに飛び乗るのは至難の業だ。しかし、打ち合わせのときに、漣ならば出来ると悠人は断言してくれた。師匠に信じられている以上、やるしかない。漣は腹をくくる。

軽く柵を蹴ってベランダに降りると、その流れのまま助走をつけ、最適な位置を見極めて強く踏み切る。

ダンッ??。

長い漆黒の髪をなびかせて、漣の体は宙に舞った。

窓枠に掛けた両手にグツと力をこめ、体を引き寄せるようにしてそこに飛び乗ると、勢いを止めることなく再び大きく飛び上がる。

そして、浅沼と二人の警備員の頭上を越えると、くるりと宙返りをし、部屋の中央付近に軽やかに着地した。

すぐ隣に目的のものがあつた。

それは四角い透明ケースの中にあり、開けるためには、電子錠を解除しなければならない。暗証番号は篤史に聞いてあつた。浅沼が開けるところを隠しカメラで見えていたらしい。

「0141だ、急げ」

早口で篤史が指示を出す。言われなくても覚えていたのに、と漣は少しムツとしながら、素早く4桁の数字を入力して解除ボタンを押す。ピピッと電子音が鳴った。迷わずケースを跳ね上げると、中

に鎮座していた肖像画を抱えて走り出した。

一連の大胆で鮮やかな手口に、浅沼も警備員たちもただただ見入っていた。

「なっ、何をやっとするかあっ！ 取り返せっ！！」

我にかえった浅沼は、怒りで顔を真っ赤にして、二人の警備員に怒鳴り散らす。それでようやく彼らも自分の仕事を思い出し、部屋を飛び出したファントムを追って、一目散に駆け出していった。

「なかなか落ち着いて良かったよ」

「まだ終わったわけじゃないでしょ」

せっかく褒めてくれた篤史に、漣は全力で廊下を走りながら言い返す。今はまだ作戦続行中であり、喜ぶのは早いし、何よりそんな状況ではない。ちよっとした不手際が命取りになりかねないこの作戦を成功させるには、雑念は捨て去り、自分のすべきことに集中しなければならなかった。

やがて奥に行き当たった。左右に部屋はあるが、廊下は途切れており、近くには扉もない。振り返ると、二人の警備員が全力で走ってくるのが見えた。

「追いつめたぞ！！」

警備員の一人がそう言うと、もう一人とともに、漣を押さえ込もうと飛びかかる。

しかしそれは空振りに終わる。

肖像画をその場に残し、漣は身軽に一步下がって二人から逃れると、バランスを崩してつんのめる警備員の背中を踏み台にし、勢いよく上方へ跳び上がった。そして、あらかじめ取り付けてあった天井の小さな手すりを掴むと、足を振り上げて点検口を蹴り飛ばし、そのまま天井裏に飛び込んで着地する。

漣の身のこなしに警備員たちは啞然としていたが、ハッと我にかえると、そのうちの一人が置き去りにされた肖像画を慌てて拾い上

げた。それが無事であることを確認し、大きく安堵の息をつく。重
そうな体を揺らして追いかけてくる浅沼に、彼はその肖像画を頭上
に掲げて見せ、嬉しそうに声を弾ませて報告する。

「取り返しました！」

「汚い手で触るな！」

その瞬間、ズサツという音がして、肖像画に深々とナイフが突き
刺さった。天井裏から淺沼が放ったものである。ナイフにはメッセー
ジカードも刺してあった。

浅沼は声にならない悲鳴を上げた。

青ざめて凍り付く警備員を突き飛ばし、ナイフを抜いて黒いカー
ドに目を落とす。

?? 本物はいただきました 怪盗ファントム

「おのれ、いつのまにっ……！」

浅沼は奥歯が削れそうなほどにギリギリと歯がみした。持ってい
たナイフで偽物の肖像画をズタズタに切り裂き、二人の警備員を睨
みつけて濁声で叫ぶ。

「おまえら何をやっとする?! 追え!!」

「は、はいっ! 梯子は……」

「跳び上がれ!!」

「無茶を言わないでください!!」

浅沼は頭をぐしゃぐしゃに掻きながら梯子を探しに走り、その間
に警備員たちは肩車をして、一人だけでも天井裏に這い上がろうと
奮闘していた。

淺沼は身を屈めながら、天井裏を早足で進んでいく。まわりの空気
は、少し湿っぽくカビ臭い。だが、思ったより埃は少ないようだ。

「一応、軽く掃除はしておいたからな。感謝しろよ」

「至れり尽くせりね」

こそこそと天井裏を掃除する篤史たちの姿を想像し、思わず肩を
竦めて苦笑する。

「目的地はわかるか？」

「目印、ちゃんと見えてるよ」

天井裏はほとんど暗闇と違っていい状態だったが、所々に蓄光テープが貼ってあり、漣の進むべき道をわかりやすく示してくれていた。そのテープを回収しながら進んでいくと、やがて、隅に隠すようにスクールバッグが置いてあるのを見つけた。

「鞆、あったわ」

「よし、警備員のやつらは振り切ったか？」

「うん、やっと天井裏に登ったところかな」

背後を確認してみるが、まだ姿は見えず、音も遠くに聞こえるだけである。目印はすべて回収済みなので、広い天井裏のどこに怪盗ファントムがいるのか、見つけるのは困難だろう。

「じゃあ、セカンドそこから下に降りろ」

篤史の指示どおり、漣は足元の点検口を開き、鞆を抱えて飛び降りる。そこは来客用のお手洗いだ。大きな屋敷に見合うだけの広さがあり、内装もそれなりに立派で、きれいに清掃もされている。「降りたよ」

「あとは打ち合わせどおりいけるな。おまえはそこで着替えて、見つかからないようこっそり外に出る。そしてA3番から戻ってこい。

仮面は敷地を出るときに外すこと。いいな？」

「うん……」

「何か問題でもあるのか？」

歯切れの悪い漣の返事を聞いて、篤史は不思議そうに問いかけた。漣はぎゅっと鞆を抱えてあたりを見まわしたあと、少し言いにくそうに切り出す。

「もしかしてここにもカメラついてる？ サード、見てたりしてない？」

「はあ？ アホなこと抜かしてないでさっさと着替える！」

思いきり呆れたような声がイヤホンから聞こえた。しかし、肝心の質問には答えておらず、凶星を指されてごまかしたとしか漣には

思えなかった。

「やだ！ やっぱり見てるんだ！！」

「見てねーよ！！」

「セカンド、そこにカメラはついていない。僕が保証する」

これまで黙っていた悠人が口を挟んだ。いつもどおり感情の窺えない声で、何を考えているのかは読めないが、彼がこんなくだらな
いことで嘘をつくとは考えられない。

「師匠がそう言うなら……」

「師匠じゃなくて副司令」

「はい」

漣は軽い口調で返事をする。これまで面識のなかった篤史ならサ
ードと呼ぶのに何の抵抗もないが、物心ついた頃から師匠と呼んで
いた悠人のことを、急に副司令と呼べといわれてもなかなか難しい。
「セカンド、納得したなら早く着替える。グズグズすんな」

「はいはい、わかりました」

漣がうつとうしがって投げやりに答えると、イヤホンの向こう側
で盛大な溜息が落とされた。しかし、確かに篤史の言うようにグズ
グズはしてられない。漣は白い仮面を取り、素早く服を脱いで着
替え始めた。

「さ、出番だ、ファースト」

「りょーかい」

今度は遥の方に指示が出される。もう覚悟は決めているのだろう
が、面白くはないらしく、あからさまに気乗りのしない返事をして
いる。怪盗ファントムをやると言ったことを後悔しているのもし
れない。

バリバリバリバリ??。

上空から轟音と強烈な光が降りそそいだ。その振動が屋敷にも伝
わってくる。

「あっちだ！ 何をやっとる！ 追え！！」

その轟音の正体が何であるか、浅沼はすぐに理解したのだろう。

必死に警備員に怒号を飛ばして急ぎ立てていた。しばらくして、溇の潜んでいるお手洗いの前を、いくつかの足音が通り過ぎる。計画どおり、彼らをもうひとりのファントムのもとへ誘導することに成功したようだ。

「頑張つてね、ファースト」

ちょうど着替え終わった溇は、長い髪を後ろに流しながらそう言うのと、くすつと笑って白い仮面を手を取った。

「その女だ!! 捕まえろ……っ!!」

浅沼は息を切らせてヨロヨロになりながら、前を走る警備員たちに命令する。

広大な庭の奥には、本物の肖像画を抱えた怪盗ファントムが、すぐ上でホバリングするヘリコプターの風を受けて、長い髪を激しく舞い上がらせながら立っていた。左手に持っていた黒いシルクハットを被ると、ヘリコプターから下ろされた縄はしごに足を掛ける。

「逃がすなっ! 飛びつけっ!!」

捕まえられるかもしれない、と期待できるくらいまで、警備員たちは怪盗ファントムとの距離を詰めていた。浅沼に言われたとおり飛びつこうとする。が、その瞬間??怪盗ファントムは、メッセージカードの刺してあるナイフを、ダーツのように素早く警備員に向けて投げた。サクツと草を切る音とともに、彼らの足元付近に突き刺さる。

怯んだ隙に、ヘリコプターは高く上昇していった。

警備員たちは啞然とし、浅沼は地団駄を踏む。そんな彼らに、まるで自らの姿を見せつけるように、怪盗ファントムは縄はしごにかかったまま遠ざかっていった。

「ただいま」

溇が剛三の書斎に戻ってきたとき、打ち合わせスペースには、篤史と遙がすでに座っていた。遙はまだ怪盗ファントムの衣装を身に

着けたままである。

「大成功だったね」

漣はニコニコしながら、空いていた篤史の隣に腰を下ろす。席が決められているわけではないが、何となく、二人とも最初の打ち合わせのときと同じ場所になっていた。

「おまえはもうちょっと真剣にやれよ」

「やってるよ!!!」

漣はムツとして篤史に言い返すと、隅にひっそり座る遙に振り向いた。

「ねえ、遙、いつまでその格好でいるつもり？」

「じいさんが反省会が終わるまで着替えるなって」

遙は顔を上げることもなく、腕を組んだまま、むすっとふてくされて答えた。さすがに仮面とシルクハットは外してあるものの、ジヤケットもスカートもニーソックスも、おまけに長髪のカツラまでそのままである。自分そっくりのその姿に、漣はどことなく落ち着かないものを感じた。

「カツラくらいなら取ってもいいんじゃない？」

「冗談じゃない。まだこのままの方がマシだよ」

なぜカツラのままがいいのかわからなかったが、めずらしく機嫌の悪い遙を刺激しない方がいいだろうと、漣はそれ以上のことは言わなかった。

「おお、漣も帰ってきたか」

肖像画を抱えた悠人を伴って、剛三は書斎に入ってきた。打ち合わせスペースに座ると、篤史、漣、遙と順に視線を送り、誇らしげに大きく頷く。

「皆、ようやってくれた」

滑舌のいい聞き取りやすい声で、彼はまずは労いの言葉を掛ける。口先だけでなく、心からの言葉であることは、その表情を見れば一目瞭然だった。

「怪盗ファントムはこのまま続けていけそうだな」

「はい、問題ないでしょう」

悠人は静かに同意すると、にっこりとして続ける。

「なかなか人目を引くものがありましたね」

「いいアイデアだっただろう、美少女怪盗。顔を隠さねばならんのが惜しいくらいだな。せつかく二人は顔もそっくりなのにくらぶ。むしろ脚の方が気になるくらいだ」

「……脚？」

その意味するところがわからず、澪は不思議そうに首を傾げた。

すると、剛三は不意に残念そうな面持ちになり、芝居がかった深い溜息を落とすと、机の上で両手を組み合わせながら答える。

「遙の方がな、少しだけ脚が細いのだよ」

「うそつ、そんなことあるわけないよ！」

「では、並んで立ってみい」

「うっ……それ、は……」

澪は言葉を詰まらせて視線を落とした。そう言われてしまうと自信はない。もしかするとという不安がむくむくと湧き上がる。そんな澪に、篤史は容赦なく追い打ちをかける。

「胸もつめすぎなんじゃねーの？ 澪より大きいように見えるけど」

剛三と悠人はそろって澪と遙の胸を見比べようとする。澪は慌てて胸元を腕で隠した。篤史を睨みつけて無言で非難するが、彼は悪びれることもなく、頬杖をついて涼しい顔をしていた。

「悠人、あとで調整しておいてくれ」

「承知しました」

からかわれるのはもちろん嫌だが、だからといって真面目に議論されるのも微妙である。澪はわずかに頬を紅潮させたまま口をとがらせた。

「それより盗んだ絵はどうするんです？ 本来の持ち主に返すんですよう？」

「無論だ。我々が利益を得るためにやっているわけではないのだからな」

胸を張って答える剛三の隣で、悠人は肖像画をあらためて机の上に置いた。すでに額装までされている。今日盗んだわけではないので、もう何度も目にはしているはずだが、それでも剛三は心を奪われたようにその肖像画に見入った。

「見れば見るほどいい絵だな」

「ええ」

「いつもは鋭く深く迫力のある絵を描く高塚修司が、このような柔らかい絵を描くのはめずらしい。何かを感じ取った娘の不安な内面が繊細に描き出されているが、それを優しい愛情で包み込むように彩っており、それゆえこのような深みのある温かい絵になったのだらう」

熱っぽい視線を注ぎ、饒舌に語る剛三を見ると、その絵に相当入れ込んでいる様子が伝わってくる。そもそも絵画泥棒などやるくらいであり、絵が好きだということは想像がつくが、だからこそ溥は少し心配になった。

「おじいさま、まさか返すのが惜しくなったなんて言いませんよね？」

「ちゃんと返すわい。取り返してやったんだ、眺めるくらい良からう」

剛三は面倒くさそうに言い返すと、無言のまま座っている遙に振り向いた。

「遙、今からおまえが返してこい」

「僕が？」

「異議は認めんぞ」

剛三にそう言われては、遙も観念せざるをえない。せめてもの自己主張なのか、大きく溜息をついてから立ち上がった。そして、うざったそうに長髪を後ろに流しながら尋ねる。

「この格好で行けばいいの？」

「いや、男性版の衣装も用意してあるので、それに着替えて行くが良からう」

何が嬉しいのか、剛三はニコニコと表情を緩ませる。しかし、彼が微笑むときはろくなことがない。遥は疑惑と警戒の眼差しでじりと祖父を見下ろした。

コンコン??。

ベッドで横になつていたものの、寝付けずにいた春菜は、不思議に思つて体を起こした。ガラス窓がノックされるような音が聞こえたが、ここは一軒家の二階である。ベランダはあるが、梯子がかかっているわけでなく、隣の部屋とも繋がっていない。気のせいか風のせいだろうと、自分を納得させようとした。

コンコンコン、と再びノックの音が聞こえた。今度は明瞭だった。気のせいなどという言い訳はもう通用しない。怖いと思う気持ちがあつたものの、確かめない限り、気になつて眠ることはできないだろう。音を立てないようにベッドから降り、おそるおそるカーテンを開けて外を覗いた。

そこには、月明かりに照らされた、黒スーツ姿の男性が立っていた。

春菜はビクリとして後ずさつた。薄く開いたカーテンの隙間から、漆黒の瞳がじつとこちらを見つめている。逃げようと思つものの、足が凍り付いたように動かない。

そのとき、漆黒の瞳の下に、絵画らしきものが掲げられた。

春菜はハツとする。

「お父さんの絵……！」

細く開いたカーテンの隙間からでは、ほんの一部しか見えなかったが、それだけでも一瞬でわかつた。亡くなつた父親が唯一自分に遺してくれた絵だと。大切にしたかつたのに、浅沼に言葉巧みに騙し取られ、それ以来ずっと馬鹿な自分を責めていた。そして、これから責め続けるのだろうと思つていた。なのに、その絵がなぜここに??。

彼は白手袋をはめた人差し指で、何かを指さしていた。どうやら

窓の鍵を開けると云っているらしい。冷静に考えれば危険なことである。だが、春菜は父の絵に会いたい一心で、疑問を持つ間もなく鍵を外して大きなガラス窓を開け放った。

冷たい夜風が静かに滑り込み、そつと頬を撫でた。肩より少し長い髪がさらさらとそよぎ、パジャマが微かに風をはらんで揺れる。

春菜の視線は真つ先に絵を捉えた。

「お父さんの絵……本当にお父さんの絵……」

それが本物であると春菜は確信した。大切に大好きな絵を見間違えるはずがない。触れられるほどの距離で直に見ることは、もう二度と叶わないだろうと思っただけに、春菜の胸には熱いものがこみ上げてきた。

不意に、その絵が差し出された。春菜はきよとんとして顔を上げる。

「くれる、の……?」

「もう二度と離すなよ」

「……ありがとう!」

春菜は震える手で絵を受け取り、目を潤ませて、顔をくしゃくしゃに綻ばせた。つられるように、黒スーツの男性もふつと小さく笑みを漏らす。そして、すぐに背を向けると、軽々と舞うようにベランダの手すりに飛び乗った。すらりとした細身の体躯が、月明かりに浮かび上がる。

「待って! お兄さんは……誰……?」

春菜の問いかけに、彼は何も答えなかった。僅かに振り返ると、立って人差し指を唇に当てて見せる。内緒だ、ということなのだろうか。それでも春菜は諦めきれなかった。

「誰にも言わないから、名前だけでも教えてください」

「……怪盗ファントム」

少しの躊躇いを含んだ声で、彼はぼそりとそう答えた。

ザワザワ、と木々の葉擦れが聞こえる。

瞬間、突風が吹き込んできて、春菜は思わず強く目をつむった。

前髪が額に打ちつけられる。風が過ぎ去りそろりと目を開けると、もうそこには彼の姿はなかった。慌ててベランダに飛び出すと、ぐるりとあたりを見まわす。しかし、どこにも彼はいなかった。

「怪盗ファントム……」

春菜は噛みしめるようにそう呟くと、くすりと小さく笑って目を閉じ、大切な絵をそっと抱きしめながらベランダに座り込んだ。

5・復活した幻

「おう、おはようお二人さん！」

「……何やってんのよ、サード」

その日は休日だった。

朝のトレーニングを終えた漣と遙が、ジャージ姿のままダイニングに入ると、なぜか当たり前のように篤史がそこにいた。執事の櫻井が用意した洋風の朝食を、お世辞にも上品とはいえない食べ方で頬張っている。漣が両手を腰に当てて睨み下ろしても、少しも気にする様子はなく、クロワッサンをちぎりながら平然ととぼけた答えを返す。

「何って見りゃわかるだろう。あ、櫻井さん、コーヒーおかわりね」

「かしこまりました」

橘家の人間でもない篤史に、背後に控えていた櫻井は恭しく一礼する。それを目の当たりにした漣は、少しムツとし、テーブルに両手をつけて前のめりに身を乗り出した。

「櫻井さん、こんなやつ放っておけばいいんだからね」

「いえ、お嬢様。こちらの篤史様も家族同様の扱いでお世話をしよう、剛三様より仰せつかっておりますので」

「そういうこと」

篤史は澄ました顔で目玉焼きを口に滑り込ませる。

その勝ち誇ったような態度が、漣の癢に障った。両手を腰に当てて背筋を伸ばし、よりいっそう冷たい目になると、怒りのこもった低い声で切り出す。

「サード」

「コードネームは作戦遂行中のみだろ」

篤史にもっともな注意をされ、漣は不愉快ながらも言い直す。

「じゃあ篤史」

「呼び捨てかよ……まあいいけど……」

失礼は承知の上である。篤史が自分より年上であることはわかっていたが、先輩らしさは欠片もなく、どうしても敬称をつけて呼ぶ気にはなれなかった。

「どうしてウチで朝食してるのか教えてくれる？」

「きのう夜遅くまでじいさんと悠人さんにこき使われて、アパートに帰るのも面倒だったから泊まらせてもらったんだよ。じいさんはいつそこに住めって言うし、俺もそうしようかと思ってる」

「はああ?!」

あまりの急転直下な展開に、漣は全力で素っ頓狂な声を上げた。

「得体の知れない男を一つ屋根の下に住ませるなんて、おじいさまってばどうかしてるわ! 若い娘がいるのよ? 襲われるかもしれないって考えなかったのかしら!」

「いや、それ無理だから。逆に殺されるから」

篤史は顔色一つ変えずに言い返す。その冷静さに、漣の腹立たしさはいや増した。

「そんなのわからないわよ。篤史はハッカーなんでしょう? 隠しカメラで撮った恥ずかしい映像をネタに体を要求するとか、いくらでも姑息な手段があるじゃない」

「……おまえ、変なドラマの見過ぎじゃねえの?」

篤史はテーブルに肘をつくと、フォークの先を漣に向ける。

「だいたい自意識過剰なんだよ。みんながみんな、おまえに興味あるわけじゃないんだぞ。まあ、スタイルいいし、顔もきれいなのは認めるけど」

「あ……ありがとう」

不意打ちのように褒められ、漣は当惑しつつも礼を述べた。

「でも、俺としては色気と知性がないと食指が動かないんだよなあ」
篤史はフォークをくるりと指で回してニツと笑う。

心なしか馬鹿にされているような気がして、漣は眉を寄せた。しかし、知性はともかく、色気のなさは自覚していたので、それについては何の反論もできない。

「別に篤史に気に入られなくたっていいし……ていうか、その篤史の好みに合うのってたとえば誰？ 知性と色気のある人なんて、そんなにいないと思うけど」

「わかりやすいのでいえば峰不二子」

「ああ、ってそれアニメでしょ？」

確かにわかりやすいといえればわかりやすいが、非現実的すぎて実際のイメージが湧いてこなかった。そんな漣の勝手な言い分にも、篤史は不満を口にすることなく、じゃあ、と斜め上を見つめて考え始める。

「あつ、おまえの母親もなかなかいいな、橘美咲」

「お母さま？ 色気なんて全然ないと思うけど……」

挙げられたのは予想外の名前だった。確かに知性には文句のつけようもないが、色気となると大いに疑問である。体は華奢で小柄な方で、特に胸が大きいわけでもなく、顔も美人系というよりは可愛い系であり、峰不二子とはまるきり正反対のタイプなのだ。

しかし、篤史はニヤリと笑みを浮かべて言う。

「お子様にはわからないんだろうなあ、あの滲み出る色気が」

「……………」

漣は啞然としていたが、やがて険しい面持ちになり口を開く。

「やっぱりウチに住まわせるのは危険ね。お母さまには興味津々みたいだし、何もしないなんて言っても、そのうち欲望に負けちゃうかもしれないもの」

「おまえな……」

篤史は小さく溜息を落として、無造作にフォークを置いた。

「何でもかんでも勝手に先走って決めつけるなっ……」

「危機管理のために推測してるだけよ」

遙には「おかしな心配ばかりしてる」とよく言われるが、漣としては起こりうる危険を真面目に考えているつもりだった。もちろん今回もそうである。だが、篤史に非難されたことで、少し言い訳がましく付け加える。

「別に篤史のことが嫌いだからじゃなくて、知り合ったばかりでどういう人なのかもよくわからないし、いろいろ疑っちゃうのも仕方ないじゃない？ もっと一緒にいて篤史のことがわかってくれば、そんな人じゃないって思えるのかもしれないけど……」

篤史とは浅沼邸のときに初めて顔を合わせ、その後、次の仕事のために何度か打ち合わせをしたくらいである。それもあくまでチームとしてであり、個人的には言葉を交わしておらず、互いの人となりがわかるほどの付き合いはしていなかった。

しかし、何を勘違いしたのか、篤史は頬杖をついて辟易した顔で言う。

「おまえ、そんなに俺と一緒にいたいのかよ」

「なんでそうなるわけ?! 誰もそんなこと言っていないし! そっちこそ、知性も色気もないとかバカにしてるけど、本当は私に構ってほしいんじゃないの? だからわざとそんなこと言ってるんじゃない?」

あくまで強気に応酬する澁に、篤史は片手をひらひらと振って見せる。

「冗談。おまえみたいにするさい女の相手する趣味はねえの。マジで付き合いたくないタイプだし。こう言っちゃ何だが、男とわかってても遥の方がよっぽどマシだぜ」

「なっ……」

澁は絶句した。顔を赤らめながら、体の横でこぶしを震わせる。

「篤史までそんなこと言うんだ?!」

堪えきれずにそう感情を爆発させると、くるりと背を向け、怒りを隠すことなくズンズンと扉に向かっていく。足を踏み出すたびに、漆黒の黒髪が大きく左右に揺れた。

「おーい、朝食しに来たんじゃねえの?」

「先にシャワー浴びて頭ひやしてくる!」

澁はドアノブに手を掛けて振り返り、呑気な声を投げる篤史をキッと睨みつけて言った。後ろ髪を引かれつつも、朝食の匂いの立ち

こめるダイニングをあとにする。根性の足りない正直なおなが、
ぐう、と小さく音を立てた。

「他のヤツからも言われたのか？」

澪が出ていくのを見送ったあと、篤史は二杯目のコーヒーに手を
伸ばしながら、無表情で立ったままの遙に尋ねた。澪が口にした「
篤史“まで”」という言葉に対する疑問なのだろう。遙は、隣に腰
を下ろして答える。

「学校で男子によく言われてる」

「なるほどな」

小さく笑ってそう言う篤史に、遙はじとりとした視線を流す。

「僕と違って澪は何でもすぐ本気にするから、からかいたくなる気
持ちはわからないでもないけど、あんまり苛めないでくれる？」

「努力しまっす」

篤史は微塵も努力しなさそうな軽薄な笑顔で答えた。しかし、ふ
と真面目な顔になると、近くの折り畳まれた新聞に手を伸ばし、そ
れをバサリと広げて遙の前に置く。

「それよりこれ見たか？」

彼が何を指して言ったのかは、よく見るまでもなく一瞬でわかっ
た。

「予告状？」

「らしいな」

先日、剛三が予告状の重要性について熱く語っていたことがあり、
何か予感はしていたが、いきなりここまで大仰なことをやると思
わなかった。あらためて紙面に目を落として黙読する。

本日、夜9時

高杉近代美術館の「湖畔」を戴きに参上します

???怪盗ファントム

その文章が、全国紙である毎朝新聞の中一面に大きく掲載されていた。どうやってこれを掲載したのかはわからない。まさか普通に広告掲載依頼を出したりはしないだろう。しかし、悠人が手配したのであれば抜かりはないはずだと思う。

ただ、別の意味で少し心配になった。

「慣れないうちから、こんなに派手にやって大丈夫なのかな」

「ま、準備は万全に整えてあるけどな」

篤史は涼しい顔でそう言うと、椅子の背もたれに体重を預けながら、湯気の立ち上るコーヒーを口に運んだ。

篤史や悠人の仕事ぶりには、遙も一目置いている。だが、重要な役割を担うのが不慣れな澪である以上、想定外の事象に対処するのは難しく、そのことを考えるとやはり不安は拭いきれなかった。

「せっかくの休日なのに……こんなにいいお天気なのに……なんで犯罪の打ち合わせなんかやらなきゃいけないのよう」

安っぽい会議机に両手を投げ出して突っ伏したまま、澪は恨み言を口にした。薄いレースのカーテンの向こう側には、澄みわたった秋晴れが広がっている。外はさぞかし爽やかで気持ち良いだろうと思う。

「遊びに行きたいよう」

「グチグチうつせーぞ」

隣に座る篤史が、資料に目を落としながら冷ややかに言った。

澪は口をとがらせる。

今日は澪と誠一の休日が重なる貴重な日である。本来であれば、ずっと誠一といられるはずだった。久しぶりにどこかへ遊びに行きたいと思っていた。なのに、嫌々やらされている怪盗フロントムのために、その楽しみを潰されてしまった。多少の文句をこぼしたくなるのも当然だろう。

もつとも、兄の遙以外はそんな事情を知るよしもない。恋人がいることさえ言っていないのだから??。

「待たせたな」

しばらくして、剛三がにこやかに右手を上げて書斎にやってきた。いつものように悠人を従えている。すでに集合時間を10分ほど過ぎていた。時間厳守を命じた張本人が遅れてきたことに、澁はムツとして眉を寄せたが、言っても無駄だろうとあえて抗議はしなかった。

「いよいよ今日が二代目ファントムのデビュー戦だ」

剛三は机の上で両手を組み合わせて静かに言う。

厳密に言えば前回の浅沼邸がデビュー戦となるが、剛三としては、やはりあれは実地研修という位置づけのようだ。浅沼も後ろめたさからか警察には届けなかったようで、世間的には事件は認知されておらず、そういう意味では今回がデビュー戦といっても間違いではないだろう。

「皆、準備はできておるな？」

「一応、特訓はしてきました」

澁は三日間の山ごもりについて控えめに答えた。しかし、指導役の悠人からすでに報告を受けていたのか、剛三は結果を尋ねることなく、たいそう満足そうに大きく頷いて言う。

「私の見込みに間違いはなかったようだな。澁、おまえならすぐに習得できると思うっておったぞ。幸いにも今日は天候が良く、風も強くないので、さっそく成果を披露してもらおうとしよう」

「あの、本当にやるんですか？」

冗談であってほしいと願いつつ、澁はおずおずと尋ねる。

「目立って格好良かろう」

「別に目立ちたくないし」

「目立たねば怪盗の意味がないだろう。何度言えばわかるのだ」

剛三はいかにも当然のように説教する。いかげん彼の考えはわかっていてるものの、やはり釈然とはせず、澁は、はあ、と溜息とも相槌ともつかない曖昧な吐息を落とした。

「遙には本当にすまないと思っておる。せつかくのデビュー戦にもかかわらず、おまえの見せ場を作ってやれなくて。いずれ、どんと派手なのを用意するので待っておってくれ」

「いや、むしろ要らないから」

剛三の独りよがりな心遣いを、遙は冷ややかに一刀両断した。

「そう言うでない。みな楽しみにしておるのだからな」

「意味がわからないんだけど」

うざったそうに仏頂面で突き放しても、剛三たちはそろって笑顔を浮かべ、特に篤史は思わせぶりにニヤニヤしている。遙の活躍を見たいというよりも、単に女装させたいだけなのかもしれない。遙も大変だな、と遙は苦笑しながら少し同情した。

「それでは今回の標的について復習しておこう」

剛三がそう切り出すと、悠人はA3のクリアファイルを開いて机の中央に置いた。

「今回、狙っておるのは、この『湖畔』だ。有名な作品で教科書などにも載っておるから、おまえたちもどこかで目にしたことがあるだろう。色彩の魔術師と呼ばれた故・天野俊郎の代表作でな。その大胆な色彩と細やかな筆致は、まるで音楽が聞こえてくるかのようだ」と云われておる」

剛三の話を聞きながら、遙はクリアファイルに挟まれたカラープリントに目を落とす。ただのプリントなので本来の色や迫力までは再現できていないだろうが、剛三の言うことはわかるような気がした。

「『湖畔』は娘である花さんの所有だったが、事業に失敗した彼女の息子が勝手に売り払ってしまったのだ。そのせいというわけでもないだろうが、花さんには認知症の症状が現れ始めているという。なのに、厄介者扱いされるばかりで、まともに病院へも連れていかしてもらえない有り様だ」

その話を聞いたのは初めてではなかった。だからといって慣れる

ことはなく、何度聞いても気分が悪さは変わらない。澪は無言のまま僅かに眉を寄せた。

その瞬間、剛三はしたり顔で口の端を上げる。

「せめて、彼女の心の支えであった絵を、我々の手で取り戻してやるのではないか」

「ええ、やりましょう、花さんのために頑張りましょう!」

先ほどまで全く意欲のなかった澪が、いつのまにかやる気を漲らせ、両のこぶしを握りしめて気炎を上げる。あまりの変貌ぶりに、遙は呆れ顔で溜息をつき、篤史は声なく苦笑した。

「もし、まんまと『湖畔』が盗まれるようなことがあれば、『其の瞳に映るもの』を引き揚げさせてもらおうと思っておる」

洗練された品のよい応接室の中で、ひときわ存在感を放つ革張りのソファに、剛三はゆったりと腰掛けてそう言った。穏やかな口調ではあるものの、どこか相手を威圧する雰囲気を漂わせている。隣には、いつものように温厚な笑みを湛える悠人が付き添っていた。

二人がいるのは高杉近代美術館である。

明日からここで天野俊郎展が開催されることになっているが、その天野俊郎の流れを汲む作品として、相沢修平の『其の瞳に映るもの』も展示されることになっていた。少女時代の美咲を描いたあの絵である。売買の話にはいっさい応じてこなかったものの、貸与は惜しまず、これまでも何度か全国の美術館に展示されてきたのだ。

「……仕方ありません」

館長の中川はうつむいて静かに言葉を落とした。

「そのときは、この企画展自体を見直すことになるでしょうし」

今回の天野俊郎展は、高杉近代美術館が『湖畔』を購入したことで企画されたものであり、対外的にも名画『湖畔』が最大の呼び物となっている。それを盗まれたとなれば、この企画展の意義が失われるといっても過言ではない。

「しかし、そうはなりませんよ。万全の警備体制を敷いております。

怪盗ファントムかその名を騙るものかは知りませんが、必ずや『湖畔』を守ってご覧に入れます」

静かに闘志を燃やす中川を見て、剛三は唇に薄く笑みをのせた。

「それは頼もしいな」

「恐れ入ります」

中川は慇懃に頭を下げて応える。彼は一介の美術館館長であり、財閥会長の剛三と簡単に相まみえる立場にはない。それでも、必要以上にへりくだった態度を見せることなく、常に自己を保ちながら思慮深い振る舞いをしていた。

「もう一つ頼みがあるのだが、聞いてもらえるかな」

「何でしょうか」

端然と聞き返す中川に、剛三も目を逸らすことなく答える。

「犯行予告の時間に、我々も展示室に立ち会わせてはもらえんだろうか。君たちを信用していないわけではないが、そこには我々の絵もあるのだな。不安に思う気持ちも察してほしい」

「承知しました」

本来ならば、このような身勝手は許されるものではないし、不愉快に思ったとしても当然のことだろう。しかしながら相手が剛三となれば断るのは難しい。それがわかつたうえであえて剛三はこの話を持ちかけたのである。今夜の計画の一部として??。

「怪盗ファントムか、その名を騙るものか、あるいはその名を継ぐものか……いずれにしても楽しみだな」

剛三はふつと鼻から息を漏らしてそう言つと、節くれ立った両手を腹の上で組み合わせ、弾力性のある背もたれに身を沈めていく。茶色の滑らかな革が、小さく濁った摩擦音を立てた。

夜の帷が降り、濃紺色の空には星がささやかに煌めいている。

溼は高杉近代美術館から少し離れたビルの屋上で待機していた。

秋も深まってきたこの時季、夜ともなれば、だいぶ冷え込みが厳しくなってくる。怪盗ファントムの衣装だけでは肌寒い。しかし、そ

れもあとしばらくの辛抱だろう。行動を開始さえすれば、むしろ暑いくらいになるはずである。

双眼鏡で美術館まわりの状況を窺う。

大勢の野次馬で人垣が出来ている??ということとはなかった。それでも、明らかに予告時間を待っていると思しき人たちは、多くはないがちらほらとはいる。カメラを抱えた報道関係者も何人かは来ているようだ。

「セカンド、準備はできてる?」

「問題なし、いつでもいけるよ」

今回、指示を出すのは遥である。近くに剛三も悠人も篤史もおらず、すべて彼がひとり判断することになる。これだけ重要な役割を任せているのは、剛三たちが彼の能力を信頼していることに他ならない。

「サード、そつちはどう?」

「潜入成功。警備員は事前情報どおり30人、それと制服警官3人を視認した。おそらく近くの交番連中だろう。刑事は来てないみたいだな」

篤史の役割は、警備員に紛れて美術館内に潜入し、内部から種々の工作を行うことだった。警備体制などの情報は事前にハッキングして得ており、それを見た彼が、この計画で行けると最終決定を下したのである。

潜入のための制服や身分証はあらかじめ用意し、また、警備会社のデータベース情報も書き換えておくなど、事前の準備は万端である。しかし、実際に警備員になりすましての潜入など、ただのハッカーである彼に出来るのだろうか??溲はそのことに懐疑的だったが、偶然か実力か、今のところは上手くいっているようだった。

「鍵は?」

遥は続けて篤史に質問する。

「外した。だけど警備員が頻繁に巡回してるし、いつバレないとも限らない。かけ忘れだと思ってくれれば、まだいいんだけどな」

「鍵をかけられちゃったら、裏側の窓を割って入れればいいのね？」

漣は事前に聞いた計画を確認する。正面側の窓はどれも頑丈で簡単には割れないが、裏側の事務室や応接室の窓は一般的なガラス窓であり、もしものときはそこを蹴破って侵入することになっていた。「そのときは指示する」

「あんまり使いたくない手だけだな。スマートじゃないし」

冷静に答える遙に、篤史は溜息まじりに言い添える。

漣としても出来れば使いたくない手である。生身でガラスを蹴破るなど、破片で負傷しかねない危険なことだ。しかし、剛三にいくら猛抗議しても「避ける」の一言で却下されてしまう。彼の強引さと身勝手さには、腹立たしさを感じずにはいられなかった。

「おじい……じゃなくて、司令と副司令はどう？」

「問題なく展示室に入り込めてるよ。だからプランAのまま変更なし」

コードネームが「司令」と「副司令」である二人だが、今回は実行部隊である。標的の中心地に堂々と乗り込んでの活動となるため、イヤホンマイクはつけていない。その代わり、悠人が小型で高性能の盗聴器をつけており、彼らの周辺の音は、実際の司令塔である遙に伝わるようになっていたのだ。

「わかった、了解」

漣としてはもう少し詳しい状況を聞きたかったが、師匠なら心配の必要もないだろうと思いつき、とりあえずは自分の役割に集中することにした。

「正規の出入口は3箇所。窓はありません。他、換気口や通風口など、人の出入りが可能な穴は、すべて完全に塞いであります。3箇所の出入口さえ固めておけば、絶対に盗まれることはありません」

穏やかながらも自信を窺わせる口調で、中川館長は断言した。

3箇所の出入口には、それぞれ内と外に二人ずつ、計12人を配置している。しかも、頑強な扉には鍵が掛けてあり、その鍵は、複

製も含めてすべて展示室内にいる中川館長が持っていた。

「なるほど。これではダイナマイトで吹っ飛ばしてもしない限り、展示室に侵入することは出来そうもないな」

剛三は背中で手を組み、ぐるりと展示室を見回しながら言った。

その瞬間、中川館長は目を見開いて凍り付いた。

「はは……、恐ろしい冗談をおっしゃらないでくださいよ」

苦笑しながらそう言うと、頬を伝う冷や汗をハンカチで拭う。彼だけでなく入口を固める警備員たちも、こわばったぎこちない笑みを浮かべ、それぞれ額に汗を滲ませていた。

「まもなく予告時間だな」

剛三は腕時計に目を落として言った。その口角は、僅かに吊り上がっていた。

「セカンド、そろそろ時間」

「うん、いつでもいけるよ」

「40秒前になったら合図するから飛んで」

「了解！」

澁は凜とした声で返事をする、白い仮面を被り、白いハンググライダーを持って柵の上に立った。少し冷たい風が、夜空よりも黒い髪をさらさらと揺らす。

「60、59、58??」

遙のカウントダウンが始まった。澁は深呼吸する。

「46、45、44」

ばさりとハンググライダーを広げ、手すりを掴む手に力をこめた。

「43、42、41、40 飛んで」

その合図と同時に、澁は柵を蹴って夜空に飛び出した。ハンググライダーで風を切りながら、高層ビルを避け、緩やかな弧を描くようにすつと美術館へ降りていく。

米粒大だった野次馬の人影が次第に大きくなる。

彼らの方も気づいたようで、わあっ、きゃあ、おおっ、という歓

声がバラバラと上がった。シャッター音のようなものも聞こえた気がした。

漣はハンググライダーで野次馬の頭上を越え、警備員のいる正門を越え、美術館の真正面に静かに滑り込むように降り立った。背後から驚きと興奮のどよめきが聞こえる。応援されているわけではなく、面白がられているだけだろうが、それでも悪い気はしなかった。背後から、正面から、警備員がこちらを目掛けて走り出す。

漣はハンググライダーをそこに捨て置き、正面の警備員たちに突撃するかのよう駆け出した。彼らの足が怯んで止まる。そのタイミングを見計らって強く地面を蹴り、低く身を屈めてその間を突っ切った。そして、先端に錘のついた縄を二階ベランダに投げて巻き付け、それを手繰り寄せながらあつというまに柱を駆け上がり、手すりを蹴って軽やかにベランダに着地する。

すぐに大きな両開きのガラス窓を引く。そこは篤史が鍵を外しておいたところであり、何の問題もなく、漣を迎え入れるように開いていった。

「二階だ、急げ!!」

置き去りにしてきたハンググライダーのまわりで、警備員が大声を上げて走り出した。館内からも階段を上がってくる複数の足音が聞こえた。

漣は開いた窓から中に飛び込むと、彼らを引きつけるために速度を落として回廊を駆けていく。幾度となく飛びかかられたり警棒で殴りかかられたりしたが、漣の身のこなしに敵うはずもなく、そのすべては空振りに終わった。

「はさみうちだ!!」

前方の角から3人の警備員が姿を現した。しかし、漣はむしろ速度を上げて突進していく。同じ手を喰うかとはかりに、警備員たちは横一列に並び、表情を引き締めつつ姿勢を低くして身構えた。しかし、漣とて同じ手を使うつもりはない。床を蹴って跳び上がると、膝を抱えるように宙返りし、軽々と彼らを跳び越えて着地した。

「何をやっている、おまえたち！」

後ろから漣を追ってきた警備員が怒声を上げる。しかし、彼らも漣を捕まえられずにいるのだから似たり寄ったりである。挟み打ちにするつもりだったようだが、今はひとかたまりとなって後ろから追いかけてきていた。

よし、今だ??。

漣はポケットに手を入れて目的のものを掴むと、振り返りざまにそれを噴射した。

「うわあっ!!」

高い天井にいくつもの悲鳴が反響した。そして、それはすぐに呻き声に変わる。警備員たちは目を押さえながら次々とその場に崩れ落ちた。

漣の噴射したそれは、催涙スプレーだった。

実際には人に向けて噴射したのはこれが初めてである。どうなるか話には聞いていたが、その効果は想像以上に絶大だった。あの様子では、しばらくまともに目を開けないだろう。

「ごめんなさい??！」

漣は心の中で詫びながら、その罪悪感を振り切るように、全力で目的地へ向かって駆け出していった。

「セカンド、振り切った？」

「うん……」

漣は展示室近くに身を潜めながら、イヤホンからの声に歯切れの悪い答えを返す。

「どうしたの？ 気がかりなことでもあった？」

「ん……催涙スプレー、痛そうだなと思って」

「まあそうだね、痛くなければ意味がないよ」

遙の言葉は淡泊なものだったが、その口調からは、漣を落ち着かせようとする優しさを感じられた。本来ならば、そんなことを気にしている場合でないと怒られても仕方がないのに??。

「おまえそんなこと気にしてる場合じゃないだろう」

「わかつてるよそんなこと。ちよつと思っただけ!」

呆れたように割り込んできた篤史に、つい澪は気色ばみ、声をひそめながらも強気に言い返した。遙に言われたのなら素直に謝つただろうが、篤史ではどうしても腹立たしさが先に来てしまう。

しかし、遙は気にせず粛々と作戦を進める。

「セカンド、サード、準備はいい?」

「オーケー」

「大丈夫よ」

二人とも真剣な声になつて答えた。今がどんな状況であるかは理解しており、それを無視して口論を続けるほど愚かではない。この作戦を成功させたい気持ちは一致しているのだ。気を引き締めて待機する。

次にすべきことは頭に入っていた。

澪にしても、篤史にしても、それぞれの役割はさほど難しくなく、失敗が許されないという重圧に負けさえしなければ、何の問題もないはずである。それよりも、懸念すべきことは他にある。

「サード、落として」

遙の指示とほぼ同時に、館内の灯りがすべて落ちた。

もちろん展示室内も例外ではなく??。

「うるたえるな! 各自持ち場を死守しろ!!」

何も見えない真つ暗闇の展示室に、剛三の威厳に満ちた声が響き渡った。この主は中川館長であるが、当然のように指示を出す剛三に、警備員たちは誰も疑問を挟まなかった。

「は、はいっ!!」

「扉から離れるでないぞ」

「わかつております!!」

警備員たちはなかなか職務に忠実なようである。若干怯えている様子は窺えるものの、逃げようとする輩もパニックを起こす輩もい

ない。ここまででは計算どおり?? 剛三は闇に紛れてほくそ笑んだ。

「非常用電源はまだか?!」

中川館長が誰にともなく苛ついた声を上げた。腰につけたトランシーバを手探りで掴み取ると、すっかり余裕をなくした様子で命令を送る。

「Aチーム、電源を見てこい!」

しかし返事はない。ザーツというノイズが聞こえるだけである。

「Aチーム! 応答しろ!!」

「……もつ、申し訳ありません…… 怪盗フロントムらしき人物に、何かのスプレーを掛けられてしまい…… 目が痛くて…… 今しばらくは動けそうもありません!」

「なんだとっ?! Bチーム、応答しろ!」

「彼らも我々Aチームと同じ状況です」

「Cチーム!!」

「は、はいっ!」

「地下に降りて配電盤を見てこい!」

電源は別系統の非常用も含めて、すべて篤史によって落とされていた。配電盤を見たところで簡単にわかるものではないだろう。そちらの方は彼の得意分野であり、取り立てて心配はしていない。むしろこの作戦の鍵となるのは??。

悠人、おまえならやれると信じておるぞ。

ひっきりなしに無線でやりとりする声の響く中、剛三は後ろで手を組むと、不自然でない程度に足音を立てながら、暗闇の展示室をゆったりと行ったり来たりした。

灯りが消えてから3分が過ぎた。

コンコンコンコンコン??。

イヤホンから聞こえたノックのような五連音に、待機中の遙はハツと息を呑む。それは悠人からの合図だった。持っている盗聴器を爪で弾いて五回叩くことによって、作業の終了を知らせる取り決め

になっていたのだ。

「サード、灯りをつけて」

遙は少し早口で指示を出す。

オーケー、と篤史が声をひそめて答えた瞬間、敷地内の照明がいつせいに元に戻った。一度闇に沈んだ建物は、まるでスポットライトを浴びたかのように、停電前よりもいつそう眩く輝いて見えた。

展示室に暖色のやわらかい光がともる。

中川館長は安堵する間もなく3つの扉に視線を移した。どの扉にも元のまま警備員が張り付いており、鍵もかかったままで、開けられた様子はなさそうである。鍵束がずっと自分の懐にあったことも確認していた。

ようやく彼はほっと息をついた。

そして、一難去った『湖畔』へと目を向けた？？つもりだった。

「なっ……?!」

しかし、そこにあつたのは額縁だけで、中の『湖畔』は忽然と消えていた。額縁に囲まれた壁の中央には、黒いメツセージカードが貼り付けられていた。中川館長は手にしていたトランシーバを滑り落とすと、全力で駆けていきメツセージカードを覗き込む。

『湖畔』は確かに戴きました

怪盗ファントム

「まさか……どうやって……」

半ば放心状態で空の額縁を見つめながら、うわごとのように言葉をこぼした。壁についた左手の指先は、力を入れすぎて血の気が失せている。額からは一筋の汗がポタリと床に落ちた。

「ファントムだ!!! 絵を抱えてるぞ!!!!」

展示室のすぐ外の廊下で、篤史は大声を張り上げた。そして、近

くで待機する溇に親指を立てて見せると、音を立てないようにと素早く走り去っていく。同時に、反対側からはいくつもの焦ったような足音が近づいてきた。

師匠が頑張ったんだから、今度は私が頑張らなきゃ??。

溇は表情を引き締めて、すつと背筋を伸ばした。黒い布に包まれたキャンバスを持つ手に力をこめる。正確にはキャンバスではない。コンパクトに折り畳める薄いステンレスの枠に薄布が張ってあるだけのものである。『湖畔』に見立てるために懐に忍ばせていたのだ。黒い布が外れてしまえば、それが『湖畔』でないことも、キャンバスでさえないことも、一目で見抜かれてしまうだろう。それゆえ少しの失敗も許されないのである。

「いたぞ! 『湖畔』を取り戻すことが最優先だ!」

角を曲がってきた先頭の警備員が、怪盗ファントムを目にするなり声を上げる。展示室の扉を守っていたうちの一人だ。そのあとから続くのは、溇が催涙スプレーを噴射した警備員たちだった。まだ目も鼻も赤い。痛さのためか、恨みのためか、皆一様に険しい顔をしている。

溇は黒い布に包まれたキャンバス??に見立てたもの??を脇に抱え、彼らに背を向けて走り出した。ガラス張りの回廊を駆け抜け、奥の扉を開け放つと、裏側のベランダへ飛び出していく。そして、片手にそれを抱えたまま、手すりやひさしに次々と飛び移りながら、あつというまに屋上へ上がっていった。

そのタイミングを見計らって、待機していたヘリコプターが、縄ばしごを垂らして降下してきた。溇は助走をつけて跳び上がると、片手で縄ばしごを掴んで足を掛ける。長い黒髪がうねるように舞い上がった。

「ま、待てっ!」

ようやく屋上へよじ登った警備員の一人が、息を切らしながらも、腹の底から大きく声を張り上げる。もちろん、そんなことを言われなくても待つわけにはいかない。彼らをそこに残したまま、ヘリコプター

―はみるみるうちに空高く上昇していった。

「そつか、逃げられたか……」

報告を受けた中川館長は、大きく溜息をついて肩を落とした。随分と落ち着きは取り戻していたものの、憔悴していることは傍目にも明らかだった。しかし、剛三は同情する素振りも見せず切り出す。

「中川館長、こんなときに何だが、約束どおり『其の瞳に映るもの』は引き揚げさせてもらって構わんかな」

「どうぞ、お約束ですから」

中川館長は力なく愛想笑いを浮かべて答えた。

「悪く思わんでくれ。これは我々にとつてかけがえのない大切な絵なのだ。また機会があれば声を掛けてほしい。中川館長とは、今後とも末永く付き合いを続けていきたいと考えておる」

そこには剛三の本音も入っていた。彼についてはなかなかの好物と評価している。絵画についての造詣が深く、また愛情も持っており、美術館館長を務めるに相応しい男であるか？。今回のことは、本来なら彼には関わりのないことであり、いずれ何らかの形で埋め合わせをするつもりでいた。

「ありがとうございます」

中川館長は礼を述べると、丁寧に頭を下げた。

「悠人、行くぞ」

黒い布に『其の瞳に映るもの』を包み終えたのを確認すると、剛三はそれを抱えた悠人を従え、展示室の正面入口からゆつたりとした足どりで出ていく。

展示室の外には、スーツに着替えて白手袋をはめた篤史が待ち構えていた。深々と一礼して剛三を出迎える。あまりにも彼らしくない態度だが、これは運転手という設定を演じているにすぎない。剛三は目配せして彼を従えようと、悠人とともに、三人で堂々と美術館をあとにした。

「本当に来たのか、怪盗ファントム……」

高杉近代美術館の前に到着した誠一は、残されたハンググライダーや遠ざかるヘリコプター、そして引き揚げる野次馬たちを眺めながら、誰にもなくそう呟いた。

今朝の朝刊を見て、誠一は飲みかけのコーヒーを嘔き出しそうになった。

もちろんすぐに信じたわけではなく、胡散臭いとは思っていたが、それでも予告時間が近づくにつれて居ても立ってもいられなくなり、ついにはアパートを飛び出してしまった。仕事をしていれば忘れられたのかもしれないが、非番だったため、そのことで頭がいっぱいになってしまったのだ。

だが、少し遅かったようで、到着したのはすべてが終わったあとだった。

「やっぱり美術館のプロモーションじゃない？」

「まさか、ここまで大掛かりなことやるかよ」

隣の若い男女が歩きながらそんな雑談をしている。怪盗ファントムをリアルタイムで知らない世代なら、この馬鹿らしいくらいの大胆な犯行を、にわかには信じられないのも無理はないだろう。

しかし、正門の前に立つ年配の男性は、鼻息荒く両手を広げて天を仰いでいる。

「怪盗ファントムの復活だ！ このときを待っていたぞ！」

単に面白がつたり憧れたりするのではなく、怪盗ファントムを心から崇拜するような危険な連中も少数ながらいたらしい。この男性もその一人なのかもしれない。今まで20年以上ずっと待っていたのだろうか。それとも、あの予告状のせいで当時の熱が再燃したのだろうか。

近くにいた大学生らしき五人組は、その男性を胡散臭そうに一瞥すると、そそくさと小さく寄り集まり、仲間内で声をひそめ合って議論する。

「でも昔のと違くない？ 昔は男だったんでしょ？ さっきの女の子じゃん」

「そうそう、それもかなり若そうだったよな。20代前半くらいじゃないか？」

「モデル並みにスタイル良かったよなあ…脚きれいだったよなあ…」

「まあ、怪盗ファントムの真似をしたニセモノってところだろうな」「いや、もしかすると後継者かもよ。弟子とか子供とかさ」

別人か??。

耳をそばだてて聞いていた誠一は、胸の内で小さく息をついた。安堵したのか残念に思ったのか、それは自分でもよくわからなかった。

まだ小さな子供だった頃、誠一は『怪盗』の意味もわからないまま、夜を駆け巡る怪盗ファントムに憧れていた。特撮ヒーローでも見るかのような気持ちで??いや、実際に区別がついていなかったのだろうか??テレビにその姿が映るたびに釘付けになって目を輝かせていた。

大人になり刑事になった今なら、パフォーマンスに目を惹くものがあったても、結局のところはただの犯罪者であり、憧れる対象でないことは理解している。ただ、幼い頃に抱いた純粋な感情を、完全に消し去るのは難しい。

「すみません」

正門から美術館へ向かおうとする制服警官を見つけ、誠一は警察手帳を見せながら呼び止めた。敬礼した彼に事情を訊く。

やはり『湖畔』は怪盗ファントムを名乗る者に盗まれてしまったそうさ。警備に当たっていたのは、民間の警備員と所轄の警官だけで、警視庁の人間はいないらしい。しかしすでに連絡は済ませてあるので、間もなく来るだろうとのことである。

警視庁も信じてはいなかったのだろう。

本当に怪盗ファントムが復活したのかわからない。しかし、鮮やかな手口で絵画を盗む輩が現れたのは事実である。これから世間が騒がしくなるだろう。そして、自分のまわりも??誠一はそんな予感がしていた。

「篤史、車をまわしてこい」

その貫禄のある声に反応して、誠一は美術館の方に振り向いた。

そこには、声に違わぬ佇まいを見せる初老の男性がいた。スーツ姿の男性二人を従えて、美術館から出てきたところらしい。付き従う二人のうちの若い方、篤史と呼ばれた運転手らしき男性が、黒革の鞆を携えて足早に正門を出ていった。もう一方の、誠一より少し年上に見える男性は、黒い布で包まれた大きくて平たい何かを、大事そうに両手で抱えている。

??絵画……か？

誠一は無性にそれが気にかかった。職務中でなかったこともあり、少し躊躇いはしたものの、意を決して彼らに歩み寄ると、軽く一礼して警察手帳を見せる。

「すみません、警視庁捜査一課の南野と申しますが」

「一課？ 担当が違うのではないか？」

初老の男性は胡散臭そうに誠一の全身を見まわす。担当外の捜査ということだけでなく、ジーンズにブルゾンという、およそ刑事とは思えないその格好も訝しんでいるのだろう。一瞬、誠一は言葉に詰まったが、それでも引き下がりはしなかった。

「捜査権があります。申し訳ありませんが、その中を確認させていただきますませんか」

黒い布に包まれた物体を左手で示しながら、誠一は丁寧な口調で要請した。

しかし、剛三は鋭い眼光で責めるように睨めつける。

「我々を疑っておるのか？」

「念のための確認です」

誠一は表情ひとつ変えずに答えた。このくらいで怖じ気づいていては、刑事など務まらない。挑戦的な視線から逃げることなく静かに見つめ返す。

長くはなかつただろうが、張りつめた沈黙が続いた。

それを打ち破ったのは、青ざめながら美術館から飛び出してきた男性だった。

「君っ！ 警察か?!」

「はい、あなたは……」

誠一は警察手帳を掲げて尋ねた。彼は少し息を整えてから答える。「館長の中川だ。いいか、この方たちを疑うのはまったくのお門違いだ。その中身は先刻まで当方が借り受けていた絵画で、盗まれた『湖畔』ではない。私も包むところを見ている。第一、そのときすでに『湖畔』は怪盗ファントムに持ち去られていたのだからな」

「念のための確認です、ご協力を」

融通のきかない堅物のように、誠一は先ほどと同じ言葉を繰り返した。自分の目で確認するまで納得してはならない。それが先輩刑事の岩松から教わったことのひとつだ。

中川館長の顔はますます渋いものになった。

「君、この方は橘財閥の会長なのだぞ」

それまで動じることのなかつた誠一が、途端に目を大きくした。肩書きに驚いたわけではない。さすがにこれほどの大物だとは思わなかつたが、名のある人物だということは察しがついていた。それよりも、誠一が驚いたのはこの巡り合わせである。

この人が、澁の祖父??。

まさかこんな状況で会うことになるとは思わなかつた。いや、そもそも会うこと自体が想像もつかなかつた。思わずまじまじと眺めてしまう。しかし、それでも??。

「相手がどなたであろうと関係ありません」

「悠人、見せてやれ」

剛三はちらりと後ろに目をやって言う。

悠人は穏やかな表情のまま頷くと、それを誠一に向けて抱え直し、黒い布を上部からめくった。そこから姿を現したのは、立派な額縁に入った絵画だった。ただし、それは『湖畔』ではなく??。

「『其の瞳に映るもの』、所有者は我が娘の橋美咲だ」

「……失礼いたしました」

誠一は深々と頭を下げた。実際に目にしたのは初めてだが、その絵については澗から聞いたことがあった。母方の祖父は有名な画家だったらしく、子供の頃の母親を描いた絵が家に飾られていると。

中川館長の話とも矛盾はない。『湖畔』が見つからなかったことは残念だが、それよりも安堵する気持ちの方が大きかった。

「行かせてもらうぞ」

剛三は低く威厳のある声でそう言うと、背中を手を組み、正門に向かつて悠々と歩き出した。その後ろを、絵画を黒い布で包み直した悠人がついて歩く。

誠一は腰を折った姿勢のまま、二人を見送った。

「このことは警視庁に抗議させてもらうからな」

残った中川館長が、苦々しげに誠一を睨んで言い捨てる。自分の美術館で橋財閥の会長に失礼をはたかれては、許せない気持ちになるのも無理はない。間違ったことをしたつもりはないが、この場は反論しない方がいいだろうと、誠一は口をつぐんだまま再び頭を下げた。

中川館長が美術館に戻ったのを見届けると、誠一も正門から外に出た。ふう、と大きく息をつき、頭上に広がる濃紺の空を仰ぎ見る。頬を掠める冷たい風が心地良く感じた。

澗とは会えないのに、その祖父に会ってしまおうとはな??。

ふとそんなことを考えて苦笑する。

今日はめずらしく澗と休日が重なったにもかかわらず、彼女に用事があつて会うことが出来なかったのだ。家の事情と言葉を濁していたので詳しくは聞いていないが、家族とどこかに出かけるような

ことを言っていた。しかし、この時間なら用事は終わっているだろう思い、胸ポケットから携帯電話を取り出した。

「あっ」

澪は短く声を上げて、内ポケットから震える携帯電話を取り出した。背面のディスプレイを確認すると、顔をパツと輝かせ、折り置かれた本体を手早く開いて耳に当てる。

「もしもし、誠一？」

「ちよつと、澪！」

隣に座っていた遙がハツとして振り向き、咎めるように名前を呼んだ。僅かに眉を寄せて非難の眼差しを向ける。そのことに澪も気づきはしたが、もう電話に出ってしまったため、とりあえず誠一との会話を優先することにした。

『澪？ 何かすごい音がしてるけど……』

「ごめん、いまちよつと移動中なの」

澪たちがいるのはヘリコプターの中だった。エンジンやプロペラの回る音がうるさく、それが送話口を通して誠一の方にも届いているのだろう。

「隣には遙もいるよ。替わろうか？」

『いや、それはいいよ……』

電話の向こうで誠一は苦笑しているようだった。つられて澪も笑う。

「それで、どうしたの？」

『いや、別に用はないんだけど、澪の声が聞きたくなって』

「うん、私も誠一の声が聞けて嬉しい」

自然と澪の顔はほころんでいた。会うことが出来なくて気が滅入っていたが、声を聞けただけで、そんな気持ちも忘れてしまいそうになる。我ながら単純だな、と少し呆れつつも、そういう自分のことが嫌いではなかった。

『じゃあ、もう切るよ』

「うん、それじゃあね」

『ああ、またな』

漣はくすつと笑って電話を切った。折り畳んで内ポケットに戻すと、いまだに遙が冷たくじとりと睨んでいることに気がついた。

「漣、ケータイ持ってきてたの？」

「作戦遂行中は電源切ってたよ」

「そういう問題じゃない」

遙はいつになく厳しい声でピシヤリと言う。

「まず、現場に落としたらシャレにならない、ってのはわかるよね？ それに、ケータイは持つてるだけで居場所の特定ができるから、それで正体がバレる危険性も少なからずあるんだよ。家を出てから帰るまでが作戦遂行中だから気を抜かないで。こんなところで電話に出るなんてもってのほか」

「うん、ごめん……」

遙の説明はわかりやすく、そして説得力があり、漣は素直に反省するしかなかった。

「もう二度とケータイは持ってこないこと」

「わかった、約束する」

少し気落ちした声でそう答えると、遙は小さく息をついて額を押さえた。

「ごめん、きつく言い過ぎた」

「ううん、悪いのは私だもん」

漣は開いた手を左右に振った。遙に言われたことに傷ついたわけではなく、何も考えていなかった自分を恥ずかしく思っただけのことである。謝られては逆に申し訳ないような気持ちになる。

遙は窓枠に頬杖をついて外を向いた。

「じいさんには内緒にしとく」

「ありがと、遙」

ぼつりと言葉を落とした彼に、漣は明るくそう言って寄りかかる。長い黒髪がさらりと流れた。彼は振り向きはしなかったが、嫌がる

こともなく、そのままの姿勢で漣を受け止めていた。
ヘリコプターは夜空を切りながら、目的地へとまっすぐに飛んでいった。

「上手くいったんですよね？」

「少しヒヤリとしたけどね」

打ち合わせスペースで漣が両肘をついて尋ねると、悠人は黒い布に包まれた絵画を机に置きながら、いつものように穏やかに笑って答えた。丁寧な黒い布を外す。そこには立派な額縁に入った肖像画があった。とりあえず大きな傷や汚れはついていないようだ。

「お母さまの肖像画も無事で良かった」

漣は胸を撫で下ろした。この計画を聞いたとき、最も心配したのは肖像画のことだった。万が一、損傷するようないことがあれば、母親に申し訳が立たない。考え直すよう祖父にも進言したが、当然のように聞き入れられることはなかった。

悠人は額縁をひっくり返して裏板を外す。その中には、肖像画より一回り小さいもう一つの絵画が入っていた。布で保護されたそれを取り出し、机の上に立てると、丁寧な手つきで包みをめくっていく。

現れたのは『湖畔』だった。

篤史が美術館の灯りを落とした間に、展示室にいた悠人が、肖像画の額縁の中へ『湖畔』を移したのだ。その後、何食わぬ顔で、肖像画ごとそれを持ち出したのである。

「きれいな絵……」

漣は率直な感想を吐いた。本物の『湖畔』を見るのは初めてであり、印刷や写真ではわからなかった力強さ、繊細さ、質感、そして色の鮮やかさに、思わず目を奪われてしまう。

そんな漣の様子に、剛三は満足げに頷いた。

「天野俊郎の風景画は青が特徴的でな。この透き通るような、それでいて深みのある青は、彼にしか出せんと云われておる。彼の作品

はどれも人気が高いが、特にこの『湖畔』は、その題材や見た目の美しさから、絵画に詳しくない者にも受けが良く、病院や公共施設によくレプリカが飾られておるのだよ」

「おじいさま、今回はどうやって返しに行くんですか？」

前回は遥が返却担当だったので、今回は自分かもしれないと思い、
漣は尋ねた。

しかし、返ってきたのは思いもしない答えだった。

「今回は返さん」

「えっ……？」

「これは報酬として私がもらい受けることにする」

「そんな！ 話が違います！」

漣はバンと両手をついて立ち上がり、剛三を睨みつけて強く抗議する。

「花さんのために取り返したはずですよね?!」

「そう目くじらを立てるな。悪いようにはせん」

カッカする漣を、剛三は愉快そうに笑いながら宥める。しかし、そんな矛盾した言葉を信じられるはずもない。悪いようにしないと
いうのは、彼自身にとってという意味でしかないように思えた。

それまで黙っていた遥が、小さく溜息をついて口を挟む。

「何か考えがあるのなら説明してくれない？」

「そうだな、悠人、漣たちに説明してやってくれ」

剛三が笑顔のままですら促すと、悠人は頷いてファイルを開く。

「漣、とりあえず座って」

穏やかだが有無を言わさぬ口調。漣は師匠の指示に従い、素直に腰を下ろした。そして、疑いの拭いきれない眼差しを向けつつも、
彼が始めた説明に黙って耳を傾けた。

「良かったですね、花さん。ここは優しい人ばかりよ」

白を基調とした清潔感のある小綺麗な部屋。その南側の大きく開いた窓からは、柔らかな日射しが降りそそいでいる。少しひんやり

した風が滑り込むと、レースのカーテンがふわりと丸みを帯びるように揺れた。

澪は、窓際の椅子に腰掛ける花に微笑みかける。

彼女は戸惑いがちに小さく微笑み返し、秋らしく色づいた外の風景に目を向けた。

ここは高齢者用の医療介護施設である。

それも、空気がきれいな落ち着ける環境のもと、明るく家庭的な雰囲気、質の良い介護が受けられるという理想的な施設だ。当然ながら相応に高額であり、誰でも入所できるわけではない。

花は、剛三の援助でここに入所することになった。

画家・天野俊郎のファンとして、その娘の治療を援助させてほしい？ 剛三が天野家にそう申し入れると、そちらで全面的に面倒を見てくれるなら好きにしてくれて構わない、という突き放した返答があった。

厄介払いができて清々しているのだろう。

そのことを思うと腹立たしかったが、花が心安らかに過ごせることが第一である。彼女にとってはこれが最善なのだと、澪は自分にそう言い聞かせた。

「お願いしてあった絵の件ですが」

澪たちの後ろに立っていた悠人は、隣の少しふくよかな介護士の女性にそう切り出した。彼女は柔らかな笑みを浮かべ、わかりやすく頷きながら答える。

「ええ、この部屋に飾れるよう手配いたしますわ」

「それでは、よろしくお願いいたします」

悠人は黒い布を丁寧を外し、額縁に入った『湖畔』を彼女に手渡す。

「あら、この絵……盗まれたって話題になっていたあの絵じゃ……」

彼女はまじまじと眺めながらそう呟く。澪はさすがにドキリとし

だが、悠人は少しも動じることなく、にっこりと完璧な微笑を浮かべて言う。

「レプリカですよ」

「ですよねえ」

ほほほと笑いながら彼女は応じる。少しも疑ってはなさそうだが、たとえ本物だと言ったところで信じはしないだろう。世間的には、本物は盗まれて行方不明のままであり、まさかこんなところにあるなどと思ひもしないはずである。

「花さんにとって思い出の絵だと聞いて用意しました。彼女の心の支えになればと思ひまして。さすがに本物というわけにはいきませんでしたが、忠実に再現したものですので……」

「お心遣い感謝いたします。花さんもきつとお喜びになると思ひますよ」

彼女にとって重要なのは、誰の所有かではなく、自分の手元にあるかどうかである。だから、彼女が生きている間は、この絵を彼女のもとに置くことにする?? 剛三はそう約束してくれた。確かに、普通に絵を返しただけでは、彼女にとって何の救いにもならない。以前と同じように、息子に取り上げられて売り飛ばされるのがオチだろう。

「花さん、これからはずっとこの絵も一緒よ」

澁は、窓の外を眺める花にそう声を掛けながら、絵を持った介護士を手招きして呼び寄せる。彼女はすつと前に進み出ると、その絵を花に向けて持ち直した。

花はぼんやりと振り向いた。

焦点の定まらない視線が彷徨う。しかし『湖畔』を目にした途端、彼女の瞳に強い光が宿った。みるみるうちに涙が溢れていき、目尻からこぼれ落ちて頬を伝う。

「ああ……もう二度と会えないと思っていた……」

声を詰まらせてそう言いながら、おずおずと震える手を伸ばす。介護士が『湖畔』を差し出すと、花は目を細めてそれを受け取り、

幸せそうに顔をほころばせて抱きしめた。

介護士はくすつと笑い、声をひそめて悠人に言う。

「本物と思っっているようですね」

「そう思わせてあげてください」

「ええ、もちろんですわ」

しかし、実際のところは勘違いなどではない。それが本物である
と、おそらく彼女にははつきりとわかったのだらう。子供の頃から、
長い時間とともに過ごしてきた絵なのだから。そして、これからも、
彼女の命ある限りずっと??。

「良かったね、花さん」

帰りの車中、助手席の漣はニコニコしながら声を弾ませた。ペッ
トボトルのミネラルウォーターに手を伸ばし、ひとくち流し込んで
から続ける。

「私ね、怪盗フロントムやって良かったなって、ちよっと思っちゃ
った」

「怪盗なんてただの犯罪者だって、さんざん文句を言ってなかった
？」

「うん、だからちよつとだけね」

漣はシートベルトを伸ばして少し身を乗り出し、親指と人差し指
をほとんどくつつける仕草で「ちよつと」を示した。それを横目で
見た悠人は、ハンドルを握ったまま、くすりと含みのある笑みを浮
かべる。

「えっ？ 何ですか？」

「漣は本当に流されやすいなって」

「そんなことないと思うけど……」

素直だと言われたことはあるが、流されやすいと言われたのは初
めてだった。頭を巡らせながら小首を傾げる。

「自覚がないのが余計に危険だね。見ていると心配になるよ。絆さ
れやすいっていうのかな。ちよつと情に訴えてお願いすれば、何で

もしてくれそうな感じがしてね」

「私、そんなに馬鹿じゃありません」

「何でもってのは言い過ぎだったかな。でもキスくらいなら」

ゴトン?? 漣は動揺してペットボトルを滑り落とした。足元で少し転がって止まる。

彼の口からそんな言葉が出てくるとは思いもしなかった。

しかし、そこには微塵の色つばさもなく、からかっているだけということはすぐにわかった。ムツとして眉を寄せると、ペットボトルを拾い上げながら、負けるもんかと挑戦的に切り返す。

「だったら、試してみてください」

「漣、寂しいからキスしていい?」

完全に馬鹿にされていると思った。いくらなんでも、それで心を動かされる人間はいないだろう。ましてや、今さら漣にこんなことを言うなど、神経を逆なでしているとは思えない。なぜなら??

「……私をふったこと覚えてます?」

漣の初恋の相手は悠人だった。もちろん今となってはもう恋愛感情など持っていない。だが、当時は真剣に好きだったし、告白して断られたときは傷心していたのだ。

しかし、悠人は無神経にもくすくすと笑い出す。

「さすがに8歳の子と付き合うわけにはいかないからね」

そう、確かに8歳だった。自分が子供であるという自覚もあまりなく、恋愛対象として見られないと言われて深く落ち込んだが、今になって考えてみれば至極当然のことである。逆にOKする方が怖い。そう思うと急に笑いがこみ上げてきた。

「それもそうですよ」

思えば、冗談まじりの軽口とはいえ、悠人と恋愛めいた話をしたことはこれまでほとんどなかった。告白したあのときくらいである。今のこの空気なら訊けるような気がして、ずっと疑問に思っていたことをぶつけてみる。

「師匠は彼女いないんですか?」

「学生の頃はいたけど、それ以降はいたことがないよ」

不躰な質問にも動じることなく、悠人はハンドルを握ったまま淡々と答える。

「どうしてですか？」

「そんな暇あると思う？」

悠人は橘家に住み込んでおり、公私の区別なく剛三に仕えてきた。そのうえ澁たちの武術の稽古まで引き受けている。彼自身のプライベートな時間はほとんど皆無に等しいだろう。

「……そう、ですよね」

剛三がここまで彼を拘束していることに、そして自分もその一端を担っていることに、彼の言葉であらためて気づかされた。ペットボトルを両手で握りしめてうつむく。

「剛三さんは、僕と澁を結婚させたがってるみたいだね」

「えっ?!」

澁は目を見開いて悠人に振り向いた。

彼の横顔からは、感情も思考も読み取れなかった。いつものように薄い微笑を湛えたまま、優しく落ち着いた声で話を続ける。

「澁の気持ちを無視してまでってことはないだろうから安心して。いくら剛三さんでもそこまではしない。嫌だったら断ればいいだけのことだよ」

「そんな勝手な話、師匠だって困りますよね」

澁は困惑しながらも、笑い飛ばすように明るくそう言った。しかし、悠人はそれに同調することなく、前方を見つめたまま真剣な顔になった。自分たち以外は誰もいない、まっすぐに続く道を走らせながら、静かにゆっくりと口を開く。

「僕は、澁と結婚してもいいと思うけどね」

青天の霹靂。澁はとっさに何の反応もできなかった。ただ呆然とするだけである。別に結婚すると決まったわけではない。だが、悠人がそう思っているというだけで、澁にとっては十分すぎるほど衝撃的だった。

そんな澁の様子を横目で見ながら、悠人は軽く冗談めかして言う。
「澁に断られたら僕は一生独身かな」

「……………」
そんなこと言われても、だって今さら、どうしてこんな??。

澁の混乱した気持ちは言葉にならなかった。腹立たしいような、悔しいような、それでいて胸を締めつけられるような思いが、胸の中で大きくうねりながら渦巻いている。

「寂しいっていうのは本当だよ」
赤信号で車が止まる。

悠人はハンドルから手を離して振り向いた。無言で澁と視線を絡ませる。そして、おもむろに腕を上げると、助手席の背もたれに手を掛け、ゆっくりと澁に顔を近づけてきた。

澁は頭の中が真っ白になった。

力の抜けた手からペットボトルが滑り落ちる。現実から逃れるように、体をこわばらせて震える臉をぎゅっと閉じる。それでも、すぐ近くまで悠人の顔が近づいてきたのがわかった。微かな吐息が鼻に掛かる。そして??。

「イタッ！」

額に軽い痛みが走った。反射的に額を押さえて目を開く。

「わかった？ 自分が流されやすいつてこと」

いつのまにか、悠人はハンドルを握ってくすくすと笑っていた。どうやら指で額を弾かれたらしい。今の今まですつとからかわれていたのだと、澁はそのときようやく気がついた。カツと頭に血が上ったものの、確かに流されやすいと証明されてしまったわけで、強気に言い返すこともできずに口をとがらせる。

信号が青になり、車はゆっくりと滑り出す。

澁はパワーウィンドウを下げて頬杖をついた。稲が刈り取られたあとの田圃をぼんやりと眺める。少しひんやりとした風が、長い黒髪を大きく後ろに吹き流し、火照った頬から熱を奪っていった。

単調な走行音を聞くうちに、次第に冷静さが戻ってくる。

この車中での話がすべて嘘だとは思っていない。途中までは普通に会話をしていたはずだ。とりあえず、漣の質問にすぐに答えてくれたことから、彼女がいないというのは信じていいだろう。だけど、剛三が悠人と結婚させたがっている話は？

漣と結婚してもいいと言ったのは？

寂しいと言ったときの、あの瞳は？

いくら考えてみたところで、どこまでが本当なのかはわかりようがない。だが、たとえすべて本当だとしても、まわりにどう言われようとも、今さら悠人に気持ちがることなどありえない。あつてはならないのだ。

もう流されないんだから、絶対？？。

漣はキュッと唇を引き結ぶと、急に存在感の増した過去の恋心を、強い決意で片隅に追いやった。

6・白い研究所

「はっ！」

顔面に向かつて繰り出された遥の拳を、澪は左の手のひらで防いだ。そこに感じる重量感に思わず顔をしかめる。先ほどから何度も受けているせいか、痛みというより、むしろ痺れの方が強くなってきた。

一瞬、遥の攻撃が途切れる。

その隙に、澪は素早く腰を落として足払いをした。だが、その攻撃は読まれていたようで、事も無げにかわされてしまう。それどころか逆に肩を蹴りつけられ、受け身も間に合わず、背中から地面に強く叩き付けられた。

澪はゲホツと咳き込む。

それでも遥は容赦なく澪の上に馬乗りになると、なんとか反撃しようとした澪の右手をねじ伏せて、力を込めた拳を大きく振りかざした。そして、澪に向かって躊躇なくそれを振り下ろす。

??ピッ!

薄青色の空を突き抜けるように、短くも高らかに笛が鳴った。

「遥の一本」

縁側で二人を見ていた悠人は、銀の笛を片手に判定を下した。

澪の鼻先でピタリと止まった拳が引いていった。遥は先に立ち上がると、仰向けの澪に手を差し伸べる。蹴りつけられた肩に痛みを感じながらも、澪はその手を取り、軽く跳ねるようにして立ち上がった。

「1勝3敗1分けかあ」

両手を腰に当て、悔しさを滲ませながら言う。

「最近、遥の拳や蹴りが急に強くなってきたみたい」

「男女の身体能力差が出てきたんだろうね。今まで大差なかったのが不思議なくらいだよ。悔しく思う気持ちはわかるけれど、その辺

は仕方ないと割り切った方がいいんじゃないかな」

「わかつてるけど……」

悠人の言うことはもっともだと思うが、今までずっと互角にやってきただけに、置いていかれた寂しさのようなものを感じる。頭ではわかっていても、感情としては、すぐに受け入れることが出来ないのだ。

「差をつけられたくないんだったら、遥以上にトレーニングを頑張ること」

「ですよね……」

現実としてはそうするしかないだろう。もちろん遥も今までおりトレーニングを続けるわけで、澪が少しばかり頑張ってみたところで、再び追いつくことは出来ないかもしれない。だからといって努力しなければ置いていかれる一方である。

「師匠、久しぶりなんだから、アドバイスクらいしてくれない？」

ジャージの膝についた土を払いながら、遥はぶつきらぼうにそう切り出した。澪も大きく頷いて同調する。怪盗ファントムを始めるようになってから、悠人はその準備に時間を取られるらしく、あまり澪たちの訓練に顔を出さなくなっていた。そして、昔のように自ら組み手をしてくれることもほとんどなくなっていた。だから、せめてアドバイスクらいはと思うのも、弟子としては当然の心境だろう。

「そうだね……遥は劣勢になるとワントempo遅れることが多い。澪は攻撃がワンパターンになっている。つまり、遥は考えすぎ、澪は考えなさすぎてところかな。普段から数多くのパターンを訓練しておき、とっさに最適のものを選択できるようになれば理想だね」

「それ、このまえ言われたのと同じなんですけど」

澪はムツとして言い募った。一ヶ月ほど前にもらったアドバイスと、表現に違いはあるが、内容的にはまったく同じものだったのだ。適当にごまかそうとしているのか、忘れていたのかはわからないが、どちらにしても無責任に思えた。しかし、彼は穏やかな笑顔のまま

反撃する。

「まずは指摘されたことを直してね」

「うっ……」

その至極もつともな正論に返す言葉もなく、澁は恨めしそうに口をとがらせて悠人を睨んだ。一方の遙は、両手を腰に当てて、諦めたように小さく溜息をついた。

昔からこういうことはよくあった。

悠人は、その穏やかな雰囲気とは裏腹に、本質をついた鋭いことを口にする。言われた二人は、カツと頭に血を上らせたり、悔しく思ったりしながらも、その感情をやる気へと昇華させるのだ。そうやって悠人が導いてくれたおかげで、種々の武術を身につけ、怪盗ファントムのアクロバティックな動きをこなせるまでになったのである。

「二人とも今日の新聞は見た？」

悠人は思い出したようにそう言うと、後ろに置いてあった朝刊の一面を開いた。澁と遙は、それぞれ悠人の両隣に腰を下ろして覗き込む。そこには、ハンググライダーで目的地に向かう怪盗ファントムの写真が、カラーで大きく掲載されていた。

「わあ、今回はよく撮れてるね」

「また一面なんだ」

デビュー戦のあと、怪盗ファントムは立て続けに二つの案件を遂行した。両方とも一般的にはあまり知られていない絵画だったが、怪盗ファントムそのものが話題となり、大きくマスコミに取り上げられることとなったのである。ワイドショーでもコメンテーターたちがこぞって意見を述べていた。特に、過去の怪盗ファントムとの関係性は熱く論じられており、今のところ模倣犯と後継者で意見が二分しているようだった。

「ハンググライダーの操縦もすっかり板についてきたね」

「本当？ 師匠にそう言ってもらえると嬉しい」

漣は無邪気に笑った。しかし、反対側に座る遙は、いかにも面白くなさそうに仏頂面を見せる。

「僕もハンググライダーの特訓したかったのに、どうして漣だけだったわけ？」

「さあ、どうしてかな。剛三さんの指示だから仕方ないよ」

その思わせぶりな答えを聞いて、漣はどきりとした。

?? 剛三さんは、僕と漣を結婚させたがってるみたいだけどね。

先日の悠人の言葉が脳裏によみがえる。それが本当かどうかはわからないが、剛三の指示を受け、悠人と二人きりで行動することは確かに多い。三日間のハンググライダー特訓も、花のところへ絵画を届けたのもそうである。他意はないのかもしれない。しかし、あんな話を聞いてしまつては、もしかすると、という疑念が湧き上がるのも当然のことだろう。

「まあ、バイクの練習も面白かったからいいけどね」

「そつちの方はどう？ もう乗れるようになったの？」

雑念を振り払うように、漣は意識的に明るく声を弾ませた。

漣がハンググライダーの特訓をしていた三日間、遙は別の場所で大形バイクに乗る練習をしていたのだ。遙がハンググライダー特訓をうらやましがったのと同様、漣もバイク特訓をうらやましく思っていた。

「普通に乗る分には問題なし。曲芸はまだ無理だけど」

「じゃあ、今度はバイクで怪盗ファントム登場だね！」

「そんな予定はないよ」

つれない素振りで受け流す遙に、悠人はぼんと大きな手をのせた。

「遙がやってみたいのなら、剛三さんに進言してみるよ」

「別に、僕はどっちでもいいけど……」

胸中を見透かされて戸惑ったのか、遙は視線を泳がせてぼそりと言った。頬が微かに赤く染まっている。普段は年上相手でも臆することなく応酬する遙だが、師匠にはまだまだ敵わないようだ。いや、師匠の前では子供のままなのかもしれない。漣はくすりと小さく笑

みをこぼした。

「じゃあ、僕はそろそろ行くよ」

「え、もう?」

立ち上がった悠人を目で追いながら、漣は尋ねる。

「剛三さんが寂しがるからね」

悠人はそう答えてにつこりと微笑んだ。まさか剛三が寂しがりではないだろうが、このところ悠人と自室で朝食をとることが多いので、今日も彼の戻りを待っているのかもしれない。

「二人ともストレッチを忘れずにやること」

「はい」

漣たちは軽く返事をして、芝生が短く刈りそろえられた庭に降りた。徐々にまぶしくなりつつある朝日を浴びながら、二人で運動後のストレッチを始める。その間、漣は奥に入っていく悠人の背中を横目で捉え、何とはなしに、見えなくなるまでずっと見つめていた。

「いやー、憧れの美咲さんと初代ファントムにお会いできるなんて光栄っすー!!」

「まあ、ありがとう」

ストレッチを終えた漣たちがジャージ姿のままダイニングへ入ると、そこには、これまでに見たことのないくらい調子のいい篤史がいた。漣たちの両親である美咲と大地を前に、ヘラヘラと締めりのない顔をしている。

「篤史、お母さまに色目を使うのやめてくれる?」

漣は両手を腰に当てて冷ややかに言った。篤史の言葉は大地にも向けられていたようだが、美咲のような女性が好みだと公言したこともあり、どうしてもそちらの方が気にかかってしまうのだ。あらためて母親の美咲を見てみると、化粧気のない顔でも十分すぎるほどきれいで、体つきは華奢な方だが女性らしく柔らかかな丸みがあり、色気があるというのも何となく納得できる気がした。だからこそ、なおさら油断するわけにはいかないと思う。

篤史はうざったそうに一瞥を投げて反論する。

「色目じゃねえよ。純粹に科学者として尊敬してるだけだ」

「へえ、お母さまが何の研究してるのかも知らないくせに」

漑は思いきり喧嘩腰で切り返した。しかし、篤史は冷静に答える。

「『アトラス粒子衝突による生体高エネルギーの実現』だけなら一通り読んだぞ」

「えっ？ そうなの??」

美咲の研究はとても難しいと聞いている。実際、漑も論文を読もうとしたことはあったが、概要を眺めただけで読む気をなくしてしまっただけだ。そのようなものを、まさか篤史が読んでいるとは思ってもいなかった。確か、大学では工学を専攻しており、美咲の研究に関してはまったくの専門外のはずである。

「お母さまの気を引くためにそこまでやるなんて意外と努力家だね」

「おまえ、どういう目で俺を見てんだよ」

篤史は半ば呆れたようにじとりと睨んだ。負けじと漑は嫌みたらしく言い返す。

「興味ないなんて言いつつ、ヒトのお風呂を覗くムツツリでしょう?」

「入ってたの知らずに開けただけだ。ちゃんと謝っただろう」

「謝ればいいってもんじゃないんだから!」

そのときのことを思い出すにつれ、漑の怒りは再燃してきた。

「だいたい『あ、ワリイ』って何?! どうってことなかったみたいに平然と言われたんじゃ、ちつとも謝られてる気がしないよ。少しくらい動揺してれば可愛げもあるけど……」

「そんなたいしたもんじゃねえだろ」

「何ですって?!」

頬杖について飄々とあしらう篤史に、漑は顔を真っ赤にして噛み付いた。

しかし、そんな二人を眺めながら、両親はなぜか止めもせずニコ

ニコと微笑んでいる。

「ごういうのもにぎやかでいいわね」

「ああ、篤史君のような人が来てくれて良かったよ」

「澪と遥のいい話し相手になってくれそうだしね」

「ちよつと、お父さま、お母さま?!」

澪はテーブルに手をつけて身を乗り出す。風呂を覗かれた件で言い合っているのに、どうしてそういう展開になるのかわからない。剛三といい、両親といい、いったい篤史のどこが気に入ったというのだろうか。これでは彼を追い出すことなど出来そうもなく、一縷の望みも絶たれた澪の口からは、もはや溜息しか出てこなかった。

「ねえ、さつき怪盗ファントムに憧れてるとか言ってたよ?」

席について朝食が運ばれてくるのを待つ間、遥はふと隣の篤史に尋ねかけた。

「ああ、おまえらには言ってたよ。リアルタイムでは知らないんだけど、怪盗ファントムについて書かれた本とか読んでさ、俺、子供の頃からずっと憧れてたんだよな。だからハッカーやっていると『phantom』を名乗ってたってわけ」

「遥といい、篤史といい、男子ってどうしてこういうのが好きなのかしら」

二人から少し離れたところに座る澪は、頬杖をつき、眉をひそめてブックサとひとりごちる。澪からすれば、いくら格好いいからといって、実在の犯罪者に憧れるなどありえないことだった。もつとも、その正体が父親だったというのが複雑なところではあるが。

「それで怪盗ファントムを引き受けたんだ?」

「ていうか、じいさんと悠人さんの勧誘が強引でさ」

漆黒の瞳でじつと見つめる遥に、篤史は思い出したように苦笑しながら答える。

「どこで俺のことを調べたのか知らねえけど、四畳半のアパートでカップラーメンすすってたなら、じいさんと悠人さんがチェインソー

で扉をぶった切って乗り込んできたんだよ。啞然としてたら、じいさん冷ややかに言いやがった。ハツカーのくせに自宅のセキュリティはなつとらんの、ってな。マジだぜ？ あんなイカレっぷりを目の当たりにしたら、断るなんて恐ろしくて出来ねえよ」

「おじいさまに目を付けられたのが災難だったね」

漣は同情的に言った。大地と美咲も申し訳なさそうに微笑んでいる。でうちあげかと思うほどに荒唐無稽な話だが、剛三ならこのくらい平気でやるだろうことは、新しいものであればみな知っている。目的を達成するためなら手段を選ばないのだ。

「ま、結果としてけっこう楽しくやってるし、美味しいメシも食わせてもらってるし、今のところ不満はないんだけどな」

篤史はそう言ってコーヒークップを口に運んだ。その言葉どおり何の不満もなさそうな様子で、二人分はあろうかという朝食を次々と平らげていく。その豪快な食べっぷりに、美咲は目を細めてふつと笑った。

「それなら良かったわ。無理やりじゃ申し訳ないもの」

「私、無理やりやらされてるよ？」

漣が頬杖をついたまま口をとがらせると、篤史は涼しい顔でツツコミを入れる。

「なんだかんだ言っつて、いつもノリノリじゃねーか」

「そんなことないもん！」

半端な気持ちでやっていては自身にも危険が及ぶだろうし、やるからにはきちんとやらねばとは思っているが、いくらなんでもノリノリなどということはないはずだ。怪盗などただの犯罪者にすぎず、好きこのんでやっているわけではないのだから？。

「僕も最初は嫌々やっていただけ、次第に楽しくなっつていったよ」
大地はむくれる漣をなだめるように言った。そして、美咲に視線を移して言い添える。

「おかげで美咲とも会えたしね」

「ああ、じいさんが言っつたカリオスト口っばい馴れ初め話の……」

あれ事実だったんですか？」

「私もそれ聞きたい！」

篤史の直球な質問に、漣も挙手して便乗した。はぐらかされるかと思っただが、美咲は淡々と答えていく。

「半分くらいはお父さまの作り話よ。絵を返しに来たのは本当だけど、刑事なんて追ってきてなかったし、心も盗まれてないし」

「美咲さんクール！」

篤史は白い歯を見せてパチンと指を鳴らした。

美咲はくすつと笑って付け加える。

「いきなり話題の怪盗さんが目の前に現れたんだもの。ただただ驚くばかりだったわ」

「むしろ心を盗まれたのは僕の方なんだよね」

大地ははにかみながら頭に手をやって、そう告白した。ちよつといい話のようにも思えるが、そのときの美咲はまだ小学生だったはずだ。本来なら嬉しそうに人に話せることではないだろう。

「だから母さんを橘の養子にしたの？」

「まあ、実は……」

どこか非難めいた遙の質問に、大地はきまり悪そうに答える。

「私は全く聞かされてなかったんだけど、大地とお父さまは最初からそのつもりだったって」

美咲は小さく肩をすくめた。仕方ない人たちよね、と言いながらも、その表情は優しく柔らかい。はなから息子と結婚させるつもりで養子にするなど、現代日本の価値観では異常なことかもしれないが、結果的に今が幸せであるからこそ隠さず笑って話せるのだろう。

「母さんが嫌がったらどうするつもりだったの？」

「そうならない自信はあったよ」

遙の手厳しい追及にも怯まず、大地は穏やかに答える。そして、隣の美咲と笑顔を交わして小指を立てた。

「赤い糸で結ばれてるって信じていたからね」

「素敵！」

漣は両手を組み合わせ目を輝かせた。二人が今でも仲が良いことは知っていたが、結婚に至る経緯を聞いたのは初めてである。二人が運命的なものを感じていたのだと思うと嬉しくなった。もっと詳しい話を聞きたいと身を乗り出す、そうは思わない無粋な男どもに水を差されてしまう。

「今どき赤い糸なんて言う人いるんだな……」

「赤い糸ってただの勝手な思い込みだよな」

篤史はしらけたように、遥は毒気を抜かれたように呟いた。

「もうっ！ 二人ともそういうこと言わないでよ！」

漣はテーブルを拳でたたいて抗議する。せつかく両親の馴れ初め話に浸っていたのに台無しである。どうしてこの二人はこう捻くれているのだろうか、と腹立たしく思いながら、頬を膨らませてぶっきらぼうに頬杖をついた。

美咲はくすりと笑って立ち上がった。

「漣、遥、しゃべってばかりいないで、早く食事を済ませて準備しなさいね」

どことなく科学者を思わせる口調でそう言うと、肩より少し長い黒髪をなびかせながら颯爽とダイニングを出て行く。大地もカツプに残ったコーヒートを飲み干し、後を追うように小走りで行った。篤史がコーヒートを口に運びながら尋ねる。

「おまえらどこに行くのか？」

「ちよつとした健康診断だよ」

遥の答えは素っ気ないものだったが、篤史は興味がなかったのか、ふーんと軽く流してすぐに別の話題に切り替えた。相変わらずの飄々とした話しぶり、素っ気ない遥を巻き込んでいく。そんな二人の会話を聞きながら、漣は曖昧に視線を落とすと、櫻井が運んできた洋風の朝食に無言で手を伸ばした。

「お母さま、これからもずっと忙しいの？」

「ええ、そうね、研究に終わりはないから」

遙とともに後部座席に乗り込んだ漣が、運転席の美咲に尋ねると、彼女はエンジンをかけながら他人事のように答えた。ジャケットの袖口から伸びたすらりとした手で、セレクトレバーを掴む。

「会えないのは寂しいよ……」

「ごめんなさいね」

四輪駆動車はゆっくりと滑り出し、地下の駐車場からスロープをのぼって外に出た。柔らかな光が車内に溢れ込む。

「でも、あなたたちがまつすぐ育ってくれて良かったわ。悠人さんに感謝しなければいけないわね」

「うん……」

小学生くらいの頃、家を空けることが多かった両親に代わり、毎日のように、悠人が宿題を見たり遊んだりしてくれていた。相談に乗ってもらったことも多々あった。秘書業をこなしつつ子供の面倒を見るのがどれだけ大変か、今の漣ならば少しは察することができる。

「どうかしたの？ 漣」

「そのせいで、師匠、恋愛も結婚も出来なかったのかなって……」

先日の悠人の言葉が頭から離れず、どうしても思考はそちらに向かってしまう。しかし、事情を知らない遙には随分と唐突に感じられたのだろう。あからさまに怪訝な視線を漣に向けた。一方、美咲は表情ひとつ変えず、ハンドルを切って大通りに合流する。

「そうね……なら、あなたが責任とってあげたら？」

「えっ？」

「結婚すればいいのよ、悠人さんと」

「ちょ……！ なんでそうなるの?!」

漣は一気に頬を紅潮させ、助手席のシートに手をかけてガバリと身乗り出した。

美咲は前を向いたままくすくすと笑っている。

「だって漣、昔よく言ってたじゃない。師匠と結婚するって。あら

？ 愛人だったかしら？」

「それ10年くらい前の話だし！」

母親にまで言ったかは覚えていないが、確かに、無邪気によくそんなことを口にしていた。あの頃は、まだその言葉の意味を理解していなかったのだ。今となっては思い出すだけでも恥ずかしく、出来れば触れてほしくないことである。

「悠人さんは満更でもなさそうだったわよ」

「えっ……何、が……？」

「このまえ大地が、澪と結婚するか？ って冗談半分で悠人さんに訊いたのよね。そしたら、澪さえ良ければ……笑いながらだったけど、あれはけっこう本気だったんじゃないかなあ」

美咲は記憶を辿るように少し遠い目をして言う。その話を聞いていると、まるで澪自身の記憶であるかのように、悠人の表情や口調が鮮明に脳裏に浮かんできた。おそらく、先日の車中での姿と重なっているのだろう。澪はうつむきながら座席に腰を下ろした。その様子を、美咲が肩越しにちらりと一瞥する。

「あなた、他に好きな人がいるの？」

「……うん」

澪はそつと首元に手を当てて、布越しにピンクダイヤの存在を確認した。

「どういう人？」

「えーっと……今はまだ内緒にしたいんだけど……」

誠一の話は、遙以外の誰にも言っていないが、美咲になら話してもいいと思っていた。だが、それは17歳の誕生日までのことである。怪盗フロントムを引き受けた今となっては、彼氏が刑事だとはさすがに言いづらい。知られれば反対されるだろうし、悪くすれば別れさせられるかもしれないのだ。

「あら、それは気になるわね。遙は知っているの？」

「悪い人じゃないよ。ちょっと頼りないけど」

どきりとして振り返った澪を無視し、遙は躊躇いもせずさらり

と言う。それでも気持ちは察してくれたのか、相手が刑事であることには触れなかった。本当はしらを切ってほしかったのだが、第三者的立場で率直に言ってくれたことは、結果として強力な援護となつたようだ。

「あなたたちを信じて、その人のことは今は聞かないでおくわ」
美咲はそう言って車を止めた。同時に、信号が黄色から赤に変わる。

「この先、反対することもあるかもしれない。でも、あなたはあなたで頑張りなさい。後悔のないように、選択を誤らないように」

その何か含みを持たせた言い方に、澪は漠然とした不安を感じた。上目遣いでバックミラーを見ながら尋ねる。

「お母さまは後悔しているの？」

「生きていれば誰でも多少の後悔はあるわよ。どんなに真剣に考えつつもりのことでもね。言っておくけれど、後悔しているのは大地との結婚のことではないのよ。だから、あなたがそんな顔をする必要はないの」

「う、うん……」

自分の気持ちをすべて見透かされていたようで、澪はきまり悪さに肩を縮こまらせてうつむいた。

今度は遙が口を開く。

「母さんが研究に打ち込んでいるのは、後悔しないため？」

「……ええ、そうよ」

信号が青に変わった。美咲はゆっくりと車を発進させる。

「それが私と大地の意志だから。おかげで母親らしいことを何もしてあげられなくて、あなたたちには恨まれているかもしれないけれど……」

「そんなことない！ 私、お母さまのこと尊敬してるんだから！」
澪は力を込めて訴えた。寂しいと思うことはあっても、恨むなんて絶対にありえない。遙もきつと同じ気持ちだろうと思う。誰よりも格好良くて、誇りに思える、自慢の母親なのだから??。

美咲は何も言わず、前を向いたまま、ただ薄く微笑んでいた。

道を曲がるにつれて道路は狭くなり、それに比例して車通りも少なくなっていた。切り立った海沿いの坂道を上りきったところで、鬱蒼とした脇道に入り、その奥の小さな駐車場に車を停める。さらにその奥の、森にひっそりと隠されたような白い建物が、澗たちの目的の場所だった。

財団法人 生体高エネルギー研究所??。

それは、美咲が所長を務める、美咲の研究のために作られた研究所である。橘財閥と橘剛三個人の財産拠出により設立されたと聞いている。その潤沢な原資のおかげで、存分に研究ができ、結果につながったという側面もあるようだ。

澗と遥は、なぜかここで定期的に健康診断を受けている。

小さな子供の頃は、ひと月に一度のペースで受診していた。今は三ヶ月に一度だが、それでも一般的な基準と比較すれば多い方だろう。なぜそんなに頻繁に、なぜわざわざ研究所で??疑問に思った澗はこれまで何度も尋ねたが、納得のいく答えが返ってきたことはなかった。

美咲とともに、二人は研究所に向かって歩く。

ほとんど窓らしい窓も見当たらない、上から下まで真っ白な箱のような外観は、人を寄せ付けない冷たい雰囲気漂わせていた。

実際、入り口では厳重なセキュリティチェックが行われている。

美咲が認証装置にIDを入力して中指を差し込むと、白い扉がスライドして開いた。そこは四畳半ほどの小部屋になっており、奥に進むためにはさらにもう一つの扉をくぐらねばならない。三人が中に進んで外側の扉が閉まるのを確認すると、美咲は内側の扉の前に立ち、「所長 橘美咲」と明瞭な声で言った。すぐに内側の扉がスライドして開く。それで、ようやく研究所内に入ることが出来るのだ。同行者は事前に申請して許可を得なければならず、仕組みはわからないが、それ以外の同行者がいる場合は内側の扉は開かないという

話である。

「ここはファントムでも攻略するの難しそうだよね」

「ファントムは絵画のないところには侵入しないよ」

「うん、それはわかっているけど、もしもの話ね」

澪は後ろで手を組んで、にこつと遙に笑いかけた。現実にはありえないことはわかっている。だが、怪盗ファントムならどうやってこの難関を突破するだろうか、悠人ならどんな思いがけない作戦を立てるだろうか、ということに少し興味があったのだ。

「やっぱり、さすがにここは無理かなあ？」

「きつと何か手段はあると思うよ。それを見つけられるか見つけれないかってだけのこと。完璧なセキュリティなんてないって篤史も言っていたし。二人でここの実験データを盗む作戦でも考えてみる？」

そう言つと、遙は視線を流して悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「それ面白そう！」

澪はパツと顔を輝かせた。

しかし、前を歩いていった美咲は、苦笑しながら二人をたしなめる。

「あなたたち、家の外でそういう不穏な会話はやめなさいね」

「あ、そっか」

澪は肩をすくめてペロリと舌を出す。怪盗ファントムについては他言無用だとわかっているが、身内だけの安心感からか、どこかで聞かれている可能性も考慮せずすっかり話題にのぼらせてしまったのだ。それによってしまった遙も、少しづつが悪そうに笑みを浮かべていた。

三人は蛍光灯がともる無機質な廊下を進んでいく。

子供の頃、澪は今のように美咲に連れられていく途中、渋る遙を連れて逃げ出したことがあった。探険と称して、勝手に研究所内を走り回り、あちらこちらの部屋を覗こうとしたのだ。もっとも、ほとんどの鍵がかかっている開けられなかったのだが、美咲には随分

こつぴどく叱られてしまった。それ以来、無断で研究所内をうろついたことはない。だからといって美咲が案内してくれたこともなく、何度も訪れてはいるが、実際に研究しているところは一度も見えないのである。

やがて、美咲は「医療室」のプレートがかかった一室の前で立ち止まり、軽くノックをしてから扉を開けた。

「いらつしゃい、澪ちゃん、遙くん」

美咲に続いて医療室に入った澪たちを、カルテを手にした白衣の男性がにこやかに迎える。彼は名を石川といい、この副所長であると同時に、美咲の共同研究者でもあるらしい。医師免許を持っているためか、いつも彼が澪たちの健康診断をしてくれていた。

「こんにちは、石川さん。今日はよろしくお願いします」

澪が礼儀正しく挨拶をすると、隣の遙も軽く会釈した。

こちらこそよろしく、と石川は笑顔で応じながら、仕切りの薄いカーテンを開く。いつものように準備はすでに整えられていた。手前には種々の測定器が所狭しと据え置かれ、奥には心電図検査用の機器とともにパイプベッドが二つ並んでいる。気後れしそうな光景だが、澪にとつては毎度のことであり、とうの昔に見慣れていた。

健康診断の内容は一般的なものと変わらない。

基本的な身体測定、血圧測定、尿検査、血液検査、心電図検査くらいである。胸部エックス線検査については、学校の健康診断で必要十分であるため、ここでは行わないらしい。あとは、石川が対面で気になるところを診察するくらいだ。

「それでは検診お願いしますね」

「お任せください」

柔和ながらも頼もしく答える石川に、美咲は口許に微笑をのせて目を細める。そして、肩より少し長い黒髪をさらりと揺らして踵を返すと、タイル張りの床にパンプスを響かせながら医療室を出て行った。

長年にわたり健康診断をこなしているせいも、石川はもちろんのこと、溇たち受診する側もすっかり慣れたものである。細かい指示を聞くまでもなく、手順は承知しているのも、どの検査も無駄なくスムーズに進められるのだ。石川はよく「健康診断のプロだね」などと冗談めかして言っていた。

その日も健康診断は平穩無事に終わった。

結果が後日になるものもあるが、判明している限りでは、どこにも異状はないということだ。3ヶ月前に異状なしと診断されたばかりで、そのあと自覚症状も何もないのだから、当然そうだろうと溇は思っていた。

「次はまた3ヶ月後？」

立ったまま上着に手を通しながら、溇はぶつきらぼうに問いかけた。面倒に感じていることは、その口調からありありと伝わってくる。石川は少し申し訳なさそうに「そうだね」と答えて、大きな背もたれのついた回転椅子にゆったりと腰を下ろした。

「ここは自宅から遠いし面倒だろうけど、こまめに検査するのは悪いことじゃないよ。病気は早期発見が肝だからね。それだけ君たちは大事に思われてるってことなんじゃないかな」

「石川さんもこまめに検査した方がいいんじゃない？ 血圧とか血糖値とか高そう」

「ちよつと、遙っ！！」

あまりにも失礼な物言いに、後ろの長椅子で待っていた溇は、思わず弾かれるように立ち上がった。しかし、気持ちは何となくわかる気がした。おそらく彼も石川の説明には納得していないのだろう。だからあれほど挑発的に切り返したのだ。にもかかわらず、見た目そのままの温厚な性格である石川は、特に不機嫌になるでもなく、まいったなと頭に手をやって苦笑していた。

「それじゃ、二人とも気をつけて帰ってね」

研究所を出たところで、美咲は軽く右手を上げてにこやかに見送る。帰るのは漣と遙の二人だけで、仕事がある美咲はここに残るのだ。ジャケットを白衣に着替え、黒髪を後ろで一つに束ね、すっかり研究者の姿になっている。

「お母さまも体には気をつけて」

「ええ、ありがとう」

休日もないくらい研究に没頭している母親のことが、漣は本当に心配だった。今のところ大きく体を壊したことはないらしいが、こんな無理を続けていればどうなるかわからない。たまにはゆっくり休暇を取るように言っても、そうね、と気のない笑顔を見せるだけである。研究のためには一分一秒も惜しいようなのだ。そんな彼女の傍らに、常に医師の石川がついていることだけがせめてもの救いである。

漣たちは美咲と別れて駐車場に降りていく。

その途中、遙は携帯電話でタクシーを呼ぼうとしたが、漣が手を掛けてそれを制止した。

「今日は歩いて帰らない？」

「……家まで？」

少しの間のあと、遙は怪訝に眉をひそめて尋ね返した。漣は噴き出しながら答える。

「まさか、3キロくらい先にバス停があったよね。そこからバスと電車乗り継いで帰れるかなって」

さすがに自宅まで徒歩だと今日一日つぶれてしまいそうである。

歩いてとは言ったものの、そこまで無謀なことは考えていなかった。しかし、バス停までも結構な距離があり、さらにそこから何度か乗り継いで帰ると、軽く見積もっても2時間はかかるだろう。

「なんでそんな面倒なことしたいの？」

「んー、何となくそういう気分。ダメ？」

「まあいいけど……」

今ひとつ納得のいかない様子ながらも、遙はとりあえず了承して

くれたようだ。携帯電話を折り畳み、ズボンのポケットにしまうと、木々の生い茂る細道を歩き始める。漣は小走りで隣に並んで歩調を合わせた。

「今さらだけど面倒だよね。3ヶ月ごとに健康診断なんて」

崖沿いの道路を下りながら、漣は後ろで手を組んでそう切り出した。歩道もない一車線の道だが、ほとんど車通りがないため、二人はゆったりと並んで歩いている。大きく開けた海側に目を向けると荒れているというほどではないが、暗色の海面が少し波立っているのが見えた。対照的に、上方には優しい色の秋空が広がっている。そこにかかる薄い雲は、風に吹かれて、緩やかに形を変えながら流れていた。

遙は遠くを見つめて口を開く。

「小さい頃は毎月だったよね。健康診断だけじゃなくて、点滴を打ったり、薬を飲まされたり」

「そうそう！ あれ、いまだに何だったのかよくわからないんだけど、どこか悪かったのかなあ」

遙に言われて思い出したが、昔は健康診断だけでなく点滴も受けさせられていた。二人並んでパイプベッドに横たわり、オレンジ色の液体が一滴ずつ落ちていくのを、何時間も眺めていた遠い記憶がある。「元気になるおまじない」と母親が言っていたことから、何らかの治療であることは間違いないだろう。

遙は目を細めてくすつと笑う。

「漣、よく言ってたよね。私たちもうすぐ死んじゃうよ、とか」

「だってそう思うじゃない」

基本的には能天気なくらいに明るい漣だが、何か引っかかることがあると、突拍子もない極端な心配をする傾向がある。特に子供の頃はそれが顕著だった。

「死ぬような病気ではなかったにしても、毎月点滴を受けさせられてたんだから、多分どこかは悪かったんだろうね。二人ともってこ

とは、遺伝性とか生まれつきの何かかな。もう治ってはいるんだらうけど、今もそのことが心配で、こんなに頻繁に健康診断を受けさせてるんだと思うよ」

遙は論理的な推測を述べる。

しかし、漣は釈然としなかった。もしも本当に体のことを心配しているのなら、武術の訓練など、ましてや怪盗なんて危険なことをやらせはしないのではないだろうか。矛盾というほどではないが、何かしつくりとこないのだ。

「私たちこんなに元気なのに、何が心配なんだろう？」

「さあ、母さんたちの取り越し苦労だといっただけ」

緩やかなカーブに差し掛かり、漣は引き寄せられるようにまっすぐ道路の向かい側に渡った。いつも車中から視界に映っていたその風景を、あらためてじっくり見てみたかったのだ。長い黒髪をなびかせながら、大きく息を吸い込み、ガードレールに手を掛けて空を見つめる。あまりきれいとは言いがたい海から、ほのかに潮っぽい匂いが、海風に乗って運ばれてきた。

「わあ、ここけっこう怖いよ。落ちたら助からないかも」

身を乗り出して真下を覗き込むと、岩肌が剥き出しになっている切り立った岸壁が見えた。そこに波が叩き付けられては、白い泡を立てて弾けている。漣の後ろで立ち止まっていた遙は、あからさまに嫌そうな顔をひそめた。

「やめなよ、漣」

「大丈夫だって」

下を向いたまま、漣はあははと笑って答える。

「漣!!!」

突然、遙は鋭い声を上げると、驚くほどの力で漣の上腕を引いた。漣がガードレールから引き離されてよろめいても、腕を離そうとはせず、切羽詰まった様子で何かを探すようにあたりを見回している。

「ど、どうしたの？」

「いいから来て!!!」

遙は問答無用で漣を連れて道路を横切り、群生するすすきに飛び込んで身を潜める。

「な……」

なんなの？　と言いかけた漣の口を、後ろから遙がふさいだ。その胸に寄りかかる格好になりながら、漣は背後の彼に疑問の眼差しを向ける。その答えの代わりに、静かに、という囁き声が耳元に落とされた。

前方からバイクのエンジン音が聞こえた。

息をひそめて、黄金色のすすき越しに目を凝らす。あつというまに通り過ぎていき、視界に入ったのは一瞬だったが、それだけで遙が何を警戒しているのか理解した。そのバイクに乗っていた男は、以前、漣や遙をじっと見ていた男に違いない。フルフェイスのヘルメットで顔は見えなかったが、バイクもヘルメットも同じで、長身ですらりとした体型もそっくりなのだ。

とりあえず、気づかれなかったことに漣は安堵した。

遙はいまだに警戒を解いていないようで、険しい表情のままだったが、漣の口をふさいでいる手は外してくれた。ほっと息をついた漣に「待ってて」と耳打ちすると、慎重にすすきを掻き分けて顔を出し、バイクが走り去っていった方向を確認する。

「大丈夫だよね？」

漣は四つん這いになって、様子を窺おうと後ろから首を伸ばす。

と、いきなり頭を強く押さえつけられて地面に崩れ落ちた。

「な、なにっ？」

「静かに！」

遙も、隣で表情をこわばらせて頭を低くしている。

ブロロロロ???

坂の上方から先ほどと同じエンジン音が聞こえてきた。次第に大きくなる。どうやら、いったんは通り過ぎた例のバイクが戻ってきたようだ。二人は息を止めて、再び通り過ぎるのを待った。

しかし、そのバイクは漣たちの前で止まった。

男はエンジンをかけっぱなしでサイドスタンドを下ろし、フルフェイスのヘルメットを外した。20代くらいだろうか。どちらかというと色白で、すっと通った鼻筋、薄い唇、理知的な鋭い眼差し？精悍というよりは、整ったきれいな顔という印象だ。長めの前髪をざっくりと掻き上げながら、ヘルメットを片手で掴み直すと、何かを探るような険しい表情でゆっくりと振り向く。まるでそこに溲たちがいることを知っているかのように。どうして???

溲は地面に伏せたまま小さく身震いした。その肩を、遙が勇気づけるように抱く。彼の手も心なしか震えているように感じた。固唾を呑んで、彼とともに、生い茂るすすきの隙間を凝視する。

男は目を細めると、溲たちの方へ足を踏み出す。

溲はごくりと唾を飲み、胸元に手を押し当てた。心臓が壊れそうなほど強く打っている。何が起こっているのか、どうすればいいのか、頭の中は真っ白で何も考えられなかった。そのとき、肩に置かれた手がトントんと小さく動き、呼ばれるまま息を詰めて振り向く。遙は真剣な顔でバイクを指差していた。

それだけで溲は言わんとすることを理解した。そう、あの男の思惑はいまだにわからないが、今やらなければならぬのは自分たちの身を守ることに。そのためには手段を選んでいられない。二人は目を見合わせて頷き、身構える。

とつとつ男は道路脇までやって来た。茂みを掻き分けようと手を伸ばす。

その瞬間、二人は一斉に地面を蹴って飛び出した。溲は握っていた砂を男の顔面に投げつけ、怯んだ隙に、側頭部に全力で回し蹴りを放った。防御も間に合わず、それは見事に直撃する。男は小さなうめき声を上げながら、よろけて片膝をついた。フルフェイスのヘルメットが、アスファルトの道路に弾みながら転がっていく。

「溲!!!」

遙はサイドスタンドを跳ね上げて男のバイクにまたがり、急かす

ように名前を呼んだ。そして、漣が後部座席に飛び乗ったのを確認すると、いまだ目が開けられずにいるその男を残し、丁寧にゆつくりとバイクを発進させる。

「待て、おまえらっ！」

男は片目をつむって顔をしかめたまま、よろよろと走り出す。

「追いかけてくるよ！」

「追いつっこないよ！」

遙の言うとおり心配する必要はなかった。こちらは大型バイクで、向こうは駆け足なのだ。当然のように、男との距離はみるみる開いていき、やがてカーブを過ぎて姿も見えなくなった。

遙は無言でバイクを走らせている。

彼の広くはない背中に頬を寄せ、漣は、その腰にまわした手にぎゅつと力を込めた。長い黒髪が風になびいて大きく舞い上がる。少し肌寒さを感じたものの、正面から風を切っている遙に比べれば、きつとだいぶましなのだろうと思う。

やがて、漣が向かおうとしていたバス停に着いた。遙はそこでバイクを止める。

「バイクはここまで！」

「どうして？」

漣は首を傾げ、後ろから遙の横顔を窺う。

「ノーヘル、無免許、盗んだバイク。これで町中を走るわけにはいかないよ！」

「あ、そっか！」

バイクの乗り方は教わった遙だが、まだ免許は取っていないかった。ヘルメットもかぶらず走っていれば、間違いなく警察官に止められ、無免許もバイク盗難も露見することになるだろう。漣はバイクの後部座席から降りると、腕時計を確認し、バス停のポールに掲示されている時刻表を覗き込む。

「良かった、あと5分くらいでバスが来るよ！」

1時間に1本くらいしか来ないようだが、幸い次のバスまではそれほど待たずに済みそうだった。

遙はエンジンを切ってサイドスタンドを下ろし、澁の方へ足を進めると、触れそうで触れない距離で肩を並べた。その表情は少し硬く見える。どうやらまだ完全には気を緩めていないようだった。

冷たい風が二人の正面から吹き付ける。

大きく乱れる黒髪はそのままに、澁は視線を落として静かに切り出した。

「あの男、私たちを追ってあそこまで来たのかな」

「さあ、そういう感じには見えなかったけど」

男が来たのは澁たちが帰る頃である。後をつけてきたと考えるには遅すぎるだろう。今日の健康診断については家族と研究所の人間しか知らず、男がその情報をつかんでいたとも思えない。澁は小首を傾げて遙に振り向く。

「じゃあ、偶然？」

「もしかすると、あの先に用があったのかも」

「あの先……それって、研究所のこと？」

「わからないけどね」

澁と遙を付けまわしたうえ、研究所周辺までうるつくなど、いったい何が目的なのだろうか。何をするつもりなのだろうか。まるで着々と包囲網を敷かれているようで、そのうち、彼に絡めとられてしまうのではないかと不安になる。

「大丈夫かな……」

思わず、そんなかほそい声がついた。ほとんど独り言だったにもかかわらず、遙は少しでも不安を和らげようとしてくれたのか、無言で澁の頭をそつと引き寄せた。その手から伝わるほのかな温もり、澁もただ黙って身を委ねていた。

薄汚れた路線バスが、急ブレーキをかけて澁たちの前で止まる。

折扉が開くと、乗客のいないガランとしたその中に、二人は手を取り合って駆け込んだ。すぐに、バスは荒っぽい運転で走り出す。

揺れる視界の先で、置き去りにしたバイクが次第に小さくなるのを、二人は立っただま並んで見送った。

7・ 師匠の恋人

照明を心持ち落とした大広間で、ドレスアップした女性やスーツ姿の男性たちがあちらこちらに集まり、シャンパングラスを片手に和やかに談笑している。壁にはいくつもの絵画が飾られており、それらを鑑賞もしくは論評している人たちも多い。

漣は、多少の緊張を感じながらも、背筋をすっと伸ばして足を踏み入れた。淡いベージュのパーティードレスがふわりと揺れ、シャンパンゴールドのシヨールが華やかになびく。その後ろには、ダークスーツを着た悠人が付き従っていた。

「橘漣さんですね？」

入ってすぐ、盛装した中年の男性に声をかけられた。それがこの屋敷の主であり、パーティの主催者でもある、画商の中堂徹なかとう てるであることはすぐにわかった。面識はなかったが、事前に彼のインタビュ―記事を読んでおり、そこに掲載された写真も目にしていたので。

「初めまして、橘漣です。本日はお招きいただきありがとうございます」

淀みなくそう答えると、漣は唇に微笑をのせてお辞儀をした。長く艶やかな黒髪がしなやかに揺れる。

「こちらこそ、橘財閥の方に、それもこのような美しいお嬢様にお越しいただけて光栄です」

中堂はオーバーな身振りと抑揚で歓迎の意を表した。いかにも商売人らしい低姿勢な振る舞いであるが、獰猛な獣のようなぎらついた眼差しだけは隠せていない。漣は僅かに目を細めて、話題を変える。

「祖父の都合がつかなくなってしまい、本当に申し訳ありませんでした」

「いえいえ、お忙しい方と存じておりますので」

中堂は恐縮して肩をすくめると、ふと媚びるような表情を覗かせ

る。

「また機会があれば是非に、と橘会長にお伝えください」

「はい、必ず申し伝えておきます」

漣は愛想良く答えた。たとえ相手が気に入らなくても、それを表に出すことは許されない。中堂に悪い印象を与えないように振る舞うことが、今日の漣に与えられた役割のひとつである。橘家の人間としての、そして怪盗ファントムとしての??。

剛三が次に狙いを定めた絵画が中堂家にあるということ、ちょうど招待されていたパーティーに出席し、漣と悠人が屋敷を下見してくることになったのだ。定期的に開催されているこのパーティーは、絵画に関心のある富裕層に、将来有望な若手画家の作品を紹介するのが主目的で、すなわち画商の中堂にとってはビジネスの一環である。剛三にも幾度となく招待状が送られていたが、面識のない相手ということもあり、これまではことごとく無視してきたらしい。にもかかわらず、怪盗ファントムの下見にだけ都合良く利用するなど、漣は心苦しさを感じずにはいられなかった。もっとも、そんな道徳的な抗議は、いつものごとく剛三に軽く流されてしまったのだが。

中堂はドリンクを運んでいたウェイターを呼び止め、悠人にはシヤンパンを、漣にはシンデレラという名のノンアルコールカクテルを持ってこさせた。ノンアルコールとはいえ、きちんとしたカクテルグラスに入っており、見た目は普通のカクテルと大差ない。その配慮が、未成年の漣には嬉しかった。味は上品なフルーツミックスジュースといった感じで、華やかな甘みの中に酸っぱさもあり、少しずつ口をつけるにはちょうど良さそうだと思う。

「由衣、幹久、ちよつと来なさい」

少し離れたところで歓談しているグループに向かって、中堂がそうつ手招きをすると、すぐさまその輪から二人が抜け出してこちらへやってきた。ひとりは柔らかく上品な雰囲気的女性で、もうひとり

は若く活気にあふれた青年である。美しく端正な面差しがよく似ており、二人が血縁関係にあることは一目で察しがついた。

「紹介しよう、妻の由衣と、息子の幹久だ。こちらは橋財閥ご令嬢の澪さんと、会長秘書の楠悠人さん。今日は橋会長の代理でいらしてくださいましたのだよ」

「初めまして」

澪は明るく挨拶をした。由衣も優しい笑顔で応える。

「初めまして、澪さん、……お久しぶりです、悠人さん」

「高校卒業以来ですね」

これまで後ろで控えていた悠人が、穏やかに口を開いた。澪は驚いて反射的に振り返り、同じく寝耳に水だったらしい中堂も、あまり大きくはない目を丸くしている。

「お知り合いですか？」

「ええ、由衣さんとは高校の同級生でした。二十数年ぶりの再会です」

偶然に出会ったのか、予め知っていたのか？悠人は驚いた様子もなく平然としているが、普段からあまり感情を見せる方ではないため、澪にはどちらなのか判別がつかなかった。しかし、どちらにしても、これでは仕事がやりにくいのではないだろうかと心配になる。

一方の中堂は心から嬉しそうに目を輝かせていた。

「なんと奇遇ですな！ これも何かの御縁でしょうか」

現実として否定が許されないその問いかけに、悠人は言葉の代わりに笑顔で応じる。

「由衣と積もる話もあるでしょうし、どうぞごゆっくりなさってください。澪さんもどうぞ楽しんでってください。また後ほどゆっくりとお話しいたしましょう」

中堂はそう言って丁寧に一礼すると、息子の幹久だけを連れて、他の招待客の挨拶まわりに向かった。由衣を置いていったのは、久方ぶりの再会を果たした二人への気遣いというよりも、何とかして

橘財閥と繋がりをもちたいという彼自身の野望のように思えた。

「悠人さん、回廊を歩きながら少しお話ししません？」

由衣は少女のように愛らしく首を傾げて尋ねる。その声には、先ほどの落ち着いたものとは違う、緊張と期待の入り交じったような響きがあった。しかし、悠人は微笑を保ったまま事務的な答えを返す。

「いえ、私はお嬢様に付き添う義務がありますので」

「私は大丈夫よ。由衣さんとお話してきて」

まるで自分が原因であるかのような断り方に、漣は多少の腹立たしさを感じながらも、あくまでにっこりと笑みを浮かべて言う。その瞬間、彼の表情に微かな困惑が見えたような気がした。

「ですが……」

「口答えは許しません」

「承知いたしました」

お嬢様然として命じる漣に、悠人は逆らわず素直に従う。

たまにはこのくらい言ってもいいよね?? 漣は胸の内できすりと笑った。普段は弟子と師匠という関係であるが、対外的には令嬢と会長秘書として振る舞うように、剛三からも言いつけられている。小さな子供の頃は呼び方を間違わないようにするだけで精一杯だったが、最近では余裕が出てきて、その役割を演じることを楽しむようになっていた。

「あなたが橘財閥の会長秘書をしていたなんて驚いたわ」

緩やかなカーブを描く白い回廊は、片側が全面ガラス窓になっており、そこから陽光が溢れ込んでいた。由衣はガラス窓にそっと左手を置き、隣の悠人を優しい眼差しで見上げている。しかし、悠人は彼女に目を向けることなく、気怠そうに手すりにもたれかかっていた。

師匠じゃないみたい??。

こっそり後をつけて覗き見ていた澪は、これまで目にしたことのない彼の姿にドキリとした。無表情か、真顔か、笑顔か……澪が知っているのはそのくらいで、今のような隙のある表情は見たことがなかった。立ち居振る舞いも、いつもきっちりしている彼とは別人のようである。こっさういう素に近い自分をさらけ出せるのは、昔を知る相手だからだろうか。それとも？。高鳴りゆく鼓動を感じながら、澪は息を詰めて二人を注視する。

「こちらこそ、あなたが有名画商の妻に納まっていたなんて驚いた」
「美大在学中に中堂に見初められて結婚したの」

由衣は目を細めて曖昧な笑みを浮かべた。ガラス窓に置いたほっそりした左手を、そっと握りしめる。薬指にはめられたプラチナの指輪が窮屈そうに食い込んで見えた。

「画家の夢は？」

「私にそこまでの才能はなかったみたい」

おどけるように肩をすくめてそう言うと、くるりと身を翻し、悠人と同じように手すりにもたれかかった。どこか遠いところを見つめながら、過去に思いを馳せるように、その気持ちをなぞるようにゆったりとした口調で続ける。

「結婚するまでは必死に努力したのよ。なんとしても画家になりたかった。いつか、怪盗ファントムに盗んでもらえる絵を描けるようになりたかった。そうすれば、もう一度、あなたに会えるような気がして……」

「僕は怪盗ファントムじゃない」

「あなたは引退なさったのよね」

由衣はまるで事情を知っているかのように言う。

「最近、また怪盗ファントムが活動を始めたでしょう？ あなたではないみたいだけれど、無関係とはとても思えなくて。だから、この絵画を狙ってくれることを密かに期待していたの。そうしたら、もしかしたらあなたにも会えるんじゃないかって」
「相変わらず意味のわからないことを言うんだな」

悠人はあからさまに煩わしげに溜息をついた。それでも由衣は懲りずに続ける。

「今日は下見にいらしたの？」

「ええ、会長が気に入っている若手画家の作品をね」

噛み合わない問いと答え。由衣の意図をわかっているのだから、悠人はあくまでも表向きの話をした。そして、鬱陶しそうに前髪を掻き上げると、手すりから体を離して無言で立ち去ろうとする。その後ろ姿を目で追いながら、由衣は両手を重ねて胸元に置き、思いつめたような真剣な表情で口を開く。

「もしも怪盗フロントムがここに盗みに入るのなら、ついでに、私も……盗んでももらえないかしら？」

カツン??革靴を打ち鳴らし、悠人の足が止まった。ゆっくりと顔だけ振り返る。そして、満面の笑みを浮かべると、その表情とは対照的な、ぞつとするほど冷たい声で言う。

「あなたに名画ほどの価値があるとでも？」

力が抜けたように由衣の腕が降りていく。半開きの唇からは何の言葉も紡がれない。彼女は僅かに潤んだ目を細め、遠ざかる悠人の背中を、ただ寂しげにじつと見送るだけだった。

「楠サン、ちょっと」

「どうかしました？ お嬢様」

先回りして大広間の前に戻り、仁王立ちで待ち構えていた澁は、悠人の腕をつかんで人通りのない通路に連れ込んだ。奥にある部屋はすべて物置か何かのようで、通り抜けることもできないため、パーティ時にわざわざここに来る人はいないだろうと思う。

「師匠、あの態度はないんじゃないですか？」

「澁の方こそ、下手な覗き見は感心しないな」

両手を腰に当てて眉をひそめる澁に、悠人は悪びれもせずにつこりと反撃する。どうやら澁が見ていたことを知っていたようだ。知っててあんなことを言うなんて??澁はいっそう険しい顔になり、

眉間に縦皺を刻みながら、下から覗き込むようにして悠人を睨んだ。
「ねえ、由衣さんって師匠の元カノ？」

「よくわかったね」

悠人は笑顔を保ったまま答える。その余裕の態度が、漣にはますます腹立たしく感じられた。

「彼女、まだ師匠のことが好きなのよ。なのにあんな冷たい言い方……」

「関係ないよ」

悠人の瞳に鈍い光が宿った。

「いい迷惑だね。二十数年ぶりに会って突然あんなことを言う彼女の方がどうかしてるだろう。もう二度とつきまとわれたくないんだよ。僕は漣と結婚するんだから」

最後の言葉に、漣は大きく目を見開いた。

「師匠、あの……結婚って……」

「ああ、すまなかった。時間をかけてと思っていたんだが、すっかり先走ってしまったな……まあそういうことだから、今さら由衣とどうこうするつもりはないし、こんな大事な時期に現れて本当に迷惑しているんだ。漣ももう由衣のことなんか気にしなくていい。そのあまりにも身勝手な言いように、漣はカツと頭に血を上らせた。」

「私、師匠と結婚なんて絶対しませんから!!」

怒りまかせにそう言い放って睨みつけると、踵を返し、全力で駆け出しながらギュツと目をつむる。

頭が混乱していた。

悠人の言った「そういうこと」とは、どういうことなのだろうか。先日は剛三が結婚させたがっていると話していたのに、そうではなく、悠人自身の意志だったということなのだろうか。どちらにしても、了承してもいないのに決定事項のように言うなんて、ましてやそれを言い訳として持ち出すなんて、馬鹿にしているとしか思えなかった。そして何よりも、あの温厚な悠人が他人の気持ちをお容赦

なく踏みにじったという事実が、とても信じられなく、とても許せなかった。

「きゃっ……！」

細い通路から飛び出して曲がるうとした漣は、そこにいた人物と正面からぶつかった。慣れないハイヒールで足下もぐらつき、バランスを崩して廊下に倒れ込む？はずだったが、すんでのところで相手に抱き留められる。

「あ……ありがとうございます……」

「いいえ」

につこりと微笑んで紳士的に漣を立たせたその相手は、先ほど紹介された中堂家子息の幹久だった。その優しげな顔立ちとは裏腹に意外と胸板が厚く、男らしく逞しい体つきをしている。まだパーティー中にもかかわらず、どうしてこんなところにいるのだろうか。いや、それより問題は？？。

「あの、もしかして、話……聞いてました？」

漣が上目遣いでおずおずと尋ねると、彼は少しまり悪そうに肩をすくめた。

「すみません、聞くつもりはなかったんですが」

「えっと……どのあたりから……でしょうか？」

「シシヨーと結婚なんて絶対しませんから、というところだけですよ」

その答えを聞いて、漣は小さく安堵の息をついた。由衣が悠人の元力ノだとか、今でもまだ未練があるとか、彼女の息子には絶対に知られたくないし、知られてはならないことである。

「同じですね」

「えっ？」

「うちも、父が勝手に縁談を持ってきて進めようとするんです」

幹久は真面目な顔でそう言うと、光の溢れるガラス窓の方へ足を進めた。母親譲りのすらりとした手を、木製の手すりにそっと置き、

薄い雲のかかった柔らかな青空を見上げて目を細める。

「僕はまだ八タチになっただばかりなのに……いいえ、年齢は関係ないですね。父には生意気だと言われるかもしれませんが、自分の伴侶は自分で見つけたいと、子供の頃からずっとそう思ってきたんです」

「私もです」

幹久も似たような境遇に置かれているのだと、そして同じような考えを持っているのだと知り、澪は急に親近感を覚えた。弾んだ足取りで彼の隣に進むと、顔を上げ、親しみを込めてニコリと微笑みかける。彼も、目を細めて優しい微笑みを返した。

「どれだけ時間がかかってもとという覚悟でいましたが……もう、見つけられたかもしれません」

私も、見つけられたのかな??。

澪は胸元の小さなピンクダイヤに手を重ねて、そつと目を閉じた。これからも誠一と過ごしていきたい、人生をともに歩んでいきたい??この気持ちは決して一時的なものではないと信じている。実現するには困難を伴うかもしれないが、それでも諦めるつもりはない。「少し、歩きませんか?」

「ええ」

誘われるまま、澪は幹久と並んで光の溢れる回廊を歩く。通路の脇に立っていた悠人が、じつとこちらを見ていることに気づいたが、目を合わせることもせず素知らぬ顔で通り過ぎた。

「澪、まだ怒ってるの?」

「だってひどいんだもん」

ノートパソコンに向かう悠人を睨みながら、澪はベッドの上で胡座をかいたまま、むくれて思いきり頬を膨らませた。今日の出来事を思い返すだけで頭が沸騰しそうである。下見の報告書作りさえなければ、こんなところ、すなわち悠人の部屋になど来たくもなかった。

「女心を踏みにじるなんて最低じゃない」

パーティ会場に戻ってから、悠人の由衣に対する態度はひどいものだった。他の人がいるときは常識的に振る舞っているが、由衣と二人になると、途端に冷ややかな言葉を吐いて彼女をはねつける。いくら彼女の想いを受け入れる気がないとはいえ、いい大人の取る態度ではないだろう。

「そういう溇も、男心を踏みにじってるけどね」

「今は師匠の話をしてるの！」

前のめりになって語気を荒げると、そのまま、眉を寄せてじとりと彼の横顔を見つめる。

「どうしてそこまで由衣さんのこと邪険にするのかなあ？」

そう尋ねかけても、悠人はまるきり無視してキーボードを打ち続ける。まるで触れてほしくないと言わんばかりだ。二人の間には何か余程のことがあったのだろうか。溇は回廊でのやりとりを思い起こしながら、その場でごろんと横になった。老朽化したスプリングがギシギシと濁った音を立てる。

「溇、まだ髪が乾いてないんじゃないの？」

「悔しいからわざと師匠のベッドを濡らしてるんだもん。そうよ、この冷たいベッドで冷たい態度を反省すればいいんだわ」

悠人はちらりと溇に視線を流し、くすつと余裕の笑みを浮かべた。完全に子供扱いされている？溇はムツとしたが、確かに幼稚な仕返しだという自覚はあったので何も言えなかった。寝転んだまま大きな枕を抱きしめ、報告書作りを続ける悠人をじつと見つめる。

「ねえ、由衣さんとはどうして別れたの？ 師匠がふったの？」

「……彼女、何かと思い込みが激しくてね」

少しの間のあと、悠人はキーボードを叩きながら静かに口を開く。「溇も聞いててわかっただろうけど、僕のことを怪盗ファントムだと思っ込んでいて、何かにつけて決めつけたように探りを入れてきてさ」

「思い込みっていうか、それほとんど事実だしね」

厳密に言えば怪盗ファントムは大地になるのだろうが、悠人はその影武者をやっていたのだから、彼女の推測はほぼ的を射ていることになる。とはいえ、それを認めるわけにいかないことは、漣にもよくわかっていた。

「いくら違うと言ってもまるで聞く耳を持たなくてね。疑うのも確信するのも勝手にすればいいと思っていただけ、いちいち僕に言ってくるのが鬱陶しくて仕方なかった。それでも僕なりに耐えていたよ。だけど、大学も別々になったし、いい機会だと思って高校卒業で彼女とも別れたんだ」

「由衣さんは打ち明けてほしかったのよ。きっとそれだけだったんだと思う」

秘密を守り続けねばならなかった悠人も、秘密を打ち明けてもらえなかった由衣も、互いにつらかったのだろう。怪盗ファントムさえなければ、恋人としての時間を楽しく過ごせていたかもしれない。もしかしたら結婚していた可能性だってあるのだ。そう考えると、漣にはとても他人事とは思えなかった。もしも、誠一に怪盗ファントムだと疑われたとしたら??。

「やけに彼女の肩を持つね」

「そういうわけじゃなくて……ねえ、やっぱり今からでも遅くないんじゃない？ やり直そうよ。師匠と結婚するなら怪盗ファントムのことを話してもいいんでしょう？ 由衣さんはもう子供だって成人してるんだし、離婚にそれほど支障があるわけでもないと思うの」
ベッドから体を起こして真剣に訴える。しかし、悠人には伝わらなかつたようだ。

「漣、僕をやっかい払いしようとしてない？」

「やっかい払いだなんてそんな！ 私はただ師匠に幸せになってもらいたいだけ」

「どうかな」

マウスを操作しながら軽くそう言つと、椅子をまわして漣に向き直つた。

「一通り書き終わったから、確認を頼むよ」

「あ、はい」

澪は抱きしめていた枕を戻してベッドから降り、椅子を譲ってもらってノートパソコンに向かう。そこには中堂家下見の報告書ファイルが表示されていた。怪盗ファントムの実行計画立案用のものである。それを作成するのは悠人の役目だが、念のため、下見に同行した澪も内容を確認することになっていた。

「わあ、すごい。いつのまにこんなに調べてたんですか？」

報告書には、屋敷の間取りや窓の形状、錠の種類、天井の高さ、通風口の位置など、こと細かに書き記されていた。今日のパーティーだけで調べたとは信じられないくらいである。

「下見に行つたんだから当然だよ」

悠人は事も無げにそう答え、隅の戸棚からドライヤーとブラシを取り出した。澪をノートパソコンに向き直らせると、まだ湿り気のある少し乱れた髪を、手際よくブラシでとかしながら乾かしていく。澪はされるがままで画面を見つめながら、子供の頃はよくこうしてもらったな、とおぼろげな懐かしさに浸っていた。

「ねえ師匠、ここ幹久さんの部屋よ」

間取りの空白を眺めているうち、ふとそのことに気づき、画面を指さしながら指摘する。

悠人はドライヤーを切った。

「……行つたの？」

「うん、英国風のおしゃれな部屋だったよ。ベランダにはティーテーブルが置いてあって、そこで紅茶をごちそうになっちゃった。今の時期はそのベランダから月がきれいに見えるんだって。今度は月下の淡い光の下でお会いしましょう、なんて言ってたけど、さすがにちよつと格好つけすぎだよな」

澪はそう言つてクスクスと笑つたが、背後の悠人は無言のままだった。不思議に思つて振り返ると、彼は感情の窺えない表情で、ドライヤーを体の横に降ろして棒立ちになっていた。

「まさか、本当に彼と結婚する気じゃないだろうね？」

「なにそれ！」

思わず、漣は素っ頓狂な声を上げた。

「どうしていきなりそうなるんです？ 師匠だって聞いてたんじゃないんですか？ 幹久さん、結婚したい人がいるみたいなこと言っただけ……」

「そう、だったね」

悠人は目を閉じて小さく笑った。

「もしかして、やきもち？」

「かもね」

悪戯っぽく尋ねた漣に、悠人は軽い口調で応じると、ドライヤーのプラグを抜いて元の戸棚にしまおうとする。その広い背中をぼんやりと眺めながら、漣はあらためて彼のことについて冷静に考えてみた。

「師匠って私と結婚したいみたいなこと言ってますけど、別に女として好きだとかそういうわけじゃないんですよ。寂しいから誰かにそばにいてほしいけど、今から探すのは面倒だし時間もなし、身近なところで手を打とうとしてるだけのこと。強いていうなら昔からずっと一緒にいたから気楽だし、みたいな理由？ 私なら怪盗ファントムのこと秘密にしないでいいですもんね」

「そんなふうに思ってた？」

「当たってますよね？」

漣は椅子の背もたれに手をかけて後ろに身を乗り出し、戻ってきた悠人に同意を求める。

「んー、半々ってところかな」

「どこが間違ってるんです？」

まっすぐ見上げてそう尋ねると、悠人はふっと小さく微笑んで漣の肩を抱き、腰をかかめてゆっくりと顔を近づけてきた。一瞬、漣はドキリとして身を引こうとしたが、先日の車中でのことを思い出し、心持ち視線を逸らしつつも強気に言いつのる。

「二度も同じ手が通用すると思ってるんですか！ 私にだって学習能力くらいあり……」

途中で、悠人に口をふさがれた。あたたかい唇が押しつけられたかと思うと、無遠慮に舌までもが差し入れられ、性急な動きで漣の舌を絡め取る。あまりのことに何も反応できずにいると、悠人は僅かに顔の角度を変え、漣の唇を、舌を、さらに深く貪っていく。抵抗して押しのけようとした手には、ほとんど力が入らなかった。

やがて、名残惜しげに唇が離れる。

漣は苦しげにはあつと息を吸い込むと、痛いくらいに脈打つ鼓動を感じながら、まぶたを震わせてそつと薄目を開いた。至近距離にある彼の顔。その瞳の奥には、まるで別人のような激しい情欲が燃えたぎっていた。熱い吐息が漣の唇に掛かる。

ゾクリと背筋に冷たいものが走った。

本能が警鐘を鳴らして無意識に身をこわばらせる。しかし、顔を隠すように大きくうなだれた彼が、小さく息をついて体を起こすと、そのときにはもういつもの穏やかな表情に切り替わっていた。まるで何事もなかったかのように、にっこりと微笑んで言う。

「わかった？ どこが間違っているのか」

「私、師匠とは結婚しませんから……！」

漣はカツと顔を真っ赤にしてそう宣言すると、弾かれるように立ち上がり、濡れた口元をぞんざいに手の甲で拭いた。

「どうして？」

背後から聞こえる優しくも寂しげな声。

漣の胸に罪悪感がよみがえる。それでも??自分たちのために尽くしてくれた彼には、言いようのないくらいに感謝しているが、だからといって結婚を受け入れることはどうしてもできないのだ。理解してもらうには正直に話すしかないだろう、そう心を決めて、背を向けたまま慎重に言葉を落としていく。

「師匠のことは嫌いじゃないけど……私、他に好きな人がいるんです」

「付き合ってるの？」

悠人の静かな問いかけに、澪は無言でこくりと頷いた。

「もしかして、ピンクダイヤの贈り主？」

「えっ?! どうしてわかったんですか？」

驚いて振り返ると、悠人はニコニコしながら肩をすくめていた。

「何となくね。自分で買ったっていうのが不自然だと思ったし、それに、澪にとってもよく似合っていたからね」

ドレスを着てパーティに行くという話になったとき、用意されたネックレスを断り、誠一にもらったピンクダイヤのペンダントをつけていったのだ。彼氏にもらったなどと言うわけにはいけないので、自分で買ったと嘘をついてごまかしたが、やはり高校生にしては高価すぎて無理があったようだ。

「ごめんなさい……」

「じゃあさ、澪がもしその人と別れたら、僕と結婚してくれるかな？」

澪が弱みを見せたことで調子に乗ったのか、悠人はしたたかにもそんな提案をしてきた。強引にヒトの唇を奪っておいて謝りもしないで??さすがに澪はムツとして眉をひそめた。

「そんな条件、飲む必要ないですよね？」

「その人と添い遂げる自信ないんだ？」

「あります!」

間髪入れずに言い返す。挑発であることくらいわかっていたが、それでも構わない、いつそあえて乗ってやろうと思った。澪には絶対的な自信があったのだ。そのことを証明すれば、悠人も諦めざるをえないだろう。

「わかりました。もし彼と別れたら師匠と結婚します……でも、そうはなりませんから」

まっすぐ悠人を見据えて断言する。そして、深々と一礼すると、乾きたての長い髪をなびかせて部屋をあとにした。自分の想いは誰にも邪魔させない??澪は唇を噛みしめながら、その決意を強く胸

に刻んだ。

8・シンデレラ

中堂幹久の目の前には、鉄鎖でがんじがらめになった長脚のアクリルケースが据え置かれていた。そこに収められた「アンドロメダ」は、その隙間から、神々をも嫉妬させたと言われる美しい肢体を覗かせている。

「やはりアンドロメダには鎖がよく似合いますね」

不安そうに顔を曇らせる父親をよそに、幹久は悠然とそう言っ
て口の端を上げた。

久世輝彦の「アンドロメダ」を戴きに参ります??。

先日、怪盗フロントムから中堂家宛てに、そんな予告状が届いた。久世輝彦の「アンドロメダ」は、彼の代表作である星座シリーズの第13作で、アンドロメダ座の由来となったギリシア神話の一場面、つまり、生贄となった王女アンドロメダが岩場につながれているところを描いたものである。シリーズは全12作といわれてきたが、第13作のアンドロメダが存在するという噂は昔から根強くあり、そして幸運にもその実物を探し当てたのが中堂徹だったのだ。幻の絵画という話題性はもちろんのこと、その絵の素晴らしさもシリーズ随一であり、文化的・金銭的価値は計り知れない。怪盗フロントムが狙うにはふさわしい絵画といえるだろう。

だからといって易々と盗まれるわけにはいかない。

それゆえ可能な限りの万全を期すべく、広いホールの中央に「アンドロメダ」を収めたアクリルケースを置き、それを鉄鎖で何重にも巻き付けたうえ、こうやって家族3人で取り囲んで見張っているのだ。他にも見知った警備員が4人、扉側と窓側に分かれてそれぞれ待機している。怪盗フロントム相手にしてはいささか心許ない体制だが、大人数ではかえって紛れ込む余地を与えることになるため、

絵画付近は信頼のおける少人数で固めた方がいだろうという幹久の判断だった。

「幹久、これで本当に大丈夫なんだろうな？」

「どうでしょう、相手はあの怪盗フロントムですからね」

幹久は軽く笑いながら肩をすくめた。

その無責任な言いように、徹は幾分かムツとしたようである。いかめしい表情で口を真一文字に引き結ぶと、後ろで手を組み、アクリルケース付近を行ったり来たりと落ち着きなく歩きまわる。

「やはり銀行の貸金庫に預けておいた方が良かったのではないか？ 何も馬鹿正直にこんなところに置いておく必要もあるまい。これでは盗りに来いと言っているようなものだぞ」

「あまり無粋なことをしては、お得意様方にもあきれられますよ」
そう言つて、幹久は鎖にそつと手を置く。

「古風な怪盗を迎えるには、それなりの作法があるのですから」
「作法？」

「相手はリスクを冒してまで予告をしてくれています。それに応じ、こちらも正々堂々と迎え撃つべきでしょう。いわば真剣勝負ですよ。それに、今さらどうこうするわけにもいかないのでは？ あと数分で予告時間なのですから」

徹は釈然としない様子だったが、もう何も言わなかった。ただ祈るように鎖を握りしめる。その向かい側で、由衣もほっそりした白い手を鎖の上に置いた。これも幹久の提案で、暗闇になつても鎖を外されたときにわかるように、念には念を入れて3人ともが鎖に手を掛けておくことにしたのだ。

外で歓声が上がった。

徹の眉間に深い縦皺が刻まれた。むき出しになった額にはじわり脂汗が滲む。鎖を握りしめる手に思わず力が入り、静寂のホールに濁った金属音が響いた。

「犯罪者のくせに随分と人気があるようだな」

「ええ、僕も彼女のことは好きですよ」

「何を言っておるのだ、おまえは……」

呆れるというよりも面食らったように徹が言いかけた、そのとき???

ふっと音もなく照明が消えた。

「どうした?!」

「怪盗ファントムの仕業ですよ。落ち着いてください」

幹久は少しも慌てることなくそう言うと、鎖に手を置いたまま、もう一方の手で内ポケットから小型の懐中電灯を取り出した。スイッチを入れてアクリルケースを上から照らす。

「アンドロメダは無事です」

徹も自らの目でそれを確認して安堵の息をついた。

しかし、安心するのはまだ早い。

幹久は懐中電灯を扉の方に向けて大きく声を張る。

「そちらは問題ありませんか？」

「はい！ 扉は開けられていません!!」

光量が足りないので彼らの姿までは窺えないが、その声はよく知っている警備員のものに間違いない。怪盗ファントムやその仲間になりすまされていることはなさそうだ。幹久は続いて反対側へ懐中電灯を向ける。

「そちらは異常ありませんか？」

「はい、窓からの侵入はありませんし、人影も見えません！」

こちらにもよく知った声である。幹久は少しだけほっとした。しかし、当然ながらまだ気を抜くわけにはいかない。小さな懐中電灯ではあまりよく見えないが、天井や床、他の壁などに光を向けていく。こちらからは見えなくとも、相手に対する牽制にはなるだろう。鎖はほとんど動いていない。3人が触れているので音が立つこともあるが、外れていないことだけは確信できる。

ジリリリリ???

突然、耳をつんざくほどの大音量で警報ベルが鳴り響いた。幹久

は思わず顔をしかめて奥歯を食いしばり、懐中電灯を持つ手で片耳を押さえたが、鎖に置いた手だけは決して離さなかった。

「とうとう屋敷内に入ったようですね?!」

「この警報はここまでうるさかったか?!」

叫ぶように声を張らないと、隣の父親ともまともに会話できないくらいである。昨日の点検ではもう少し常識的な音量だったのに、いったいどうしたというのだろうか。それを警備員に確かめようにも、この状況で彼らに声を届かせるなど到底不可能と云わざるを得ない。今の自分にできることは、フアントムが来るかどうか見張ることだけ?? 幹久は扉の方に懐中電灯を向け、息を詰めてじっと目を凝らす。

いい加減、耳がおかしくなりそうだと思ったところで、ピタリと警報ベルが止み、照明が元に戻った。

反射的に安堵の吐息をもらしつつも、急激な明るさの変化に追いつけず、手をかざしながら顔をしかめて目を伏せる。そして、何気なく下方のアクリルケースに視線を向けると??。

「アンドロメダがない!」

鎖もアクリルケースもそのままそこにあっただが、中のアンドロメダだけが忽然と消えていた。にわかには信じられず、目の錯覚かと横からも覗き込んでみたが、やはりどう見てもケースの中は空っぽである。

「フアントムだ!」

警備員のその声に振り向くと、窓側の警備員と幹久たちのちょうど真ん中あたりに、アンドロメダを抱えた怪盗フアントムが立っていた。顔には白い仮面がつけられていたが、さらりと揺れる長く艶やかな黒髪、ピンと姿勢よく伸ばされた背筋、短いプリーツスカートから伸びるすらりとした脚、それらはまさしく??。

「捕まえる!」

怪盗フアントムに見とれていた幹久の隣で、ようやく事態を把握した父親が、標的を指さしながら怒鳴りつけるように指示を出す。

警備員たちはハツとして一斉に駆け出すが、ファントムは鮮やかにそれをかわしていくと、窓を開け放つてベランダに飛び出した。そして軽やかに柵に飛び乗り、ひさしに飛び移り、あっという間に屋上へ上がってしまう。警備員たちは為すすべもなくただ呆然と見送るしかなかった。そして、上空からひらりと舞い落ちてきたメッセージカードには、「囚われの王女アンドロメダを救出いたしました」とだけ書いてあった。

「やられましたね」

幹久は苦笑しながら肩をすくめた。しゃがんでアクリルケースを下から覗き込むと、頑丈なはずの鉄鎖が一部ちぎれていた。落ちている鎖のかけらは、明らかに鉄とは違う素材である。どうやら簡単にちぎることができるよう、一部だけ比較的多い素材に替えられていたようだ。そして、アクリルケースの底も、簡単に抜けるよう細工が施されていた。いったい、いっとうやって準備がなされたのか見当もつかない。完敗としかいいようがないだろう。

「幹久、笑っている場合ではないだろう」

「保険は掛けてあったのでしょうか？」

「それは、そうだが……しかし……」

「いい話の種ができたじゃないですか。世間で話題の怪盗ファントムと直接対決なんて、誰でも経験できることではありません。きっとみなさん聞きたがると思いますよ」

こつこつという話の種があればパーティに人が集まりやすいし、商談に繋げていくこともできるだろう。まんまと盗まれてしまったとはいえ、相手が怪盗ファントムであれば、同情されることはあってもマイナス評価につながることはないはずだ。

「おまえ、前向きだな」

「嬉しいんですよ」

その答えを聞いた徹は訝しげに眉をひそめたが、幹久は気に留めることなく、怪盗ファントムの消えていった窓の外に目をやった。そして、外から吹き込んでくる冷たい夜風を受けながら、もうそこ

にはいない彼女の姿を思い浮かべて、ふっと柔らかく微笑んだ。

「ご苦労だったな。今回もよく頑張ってくれた」

剛三は机の上で両手を組み合わせて、労いの言葉をかけた。

無事に「アンドロメダ」を手にして戻った怪盗ファントムの面々は、剛三の書齋に集まり、いつものように簡単な報告会を始めるところだった。まだこの絵を届ける仕事は残っているが、やつかいな盗みの方は完了し、程度の差はあれど各々安堵した表情を見せている。

「おじいさま、今回は誰がこれを返しに行くんですか？」

「おまえは本当にせっかちな。順に話すから待ちなさい」

「はい」

澁は肩をすくめて返事をした。盗みの方はやはり罪の意識があつて好きになれないが、本来の持ち主に返しに行くのは別で、逆にいえばそれがあるから怪盗ファントムを続けていられるのかもしれない。相手が心から喜んでいるのを見ると、そのときばかりは自分も素直に嬉しく思えるのだ。

剛三は悠人に目配せして「アンドロメダ」を掲げさせた。

「噂に違わぬ素晴らしい絵だな」

剛三はしみじみと感嘆を込めてそう言うと、いつものように絵の講釈を始める。

「このアンドロメダは、久世輝彦の星座シリーズの……」

「申し訳ありません剛三さん、少しお待ちください」

ふと何かに気づいたらしく、悠人は軽く右手を挙げて剛三を制した。そして、目の前に「アンドロメダ」を立てかけたまま、裏側からその『何か』を慎重に引き剥がす。目隠しと思われるキャンバスと同色同地の布、そしてその下にあるものは??。

「まさか、罨だったり……?」

「発信機じゃないはずだけだな」

盗んだ絵画に発信機の類がつけられているかどうかは、家に持ち

込む前に、専用の機械でくまなく調べることになっている。もちろん今回も例外ではない。それで探知されなかったということは、篤史の言うように発信機ではないのだろう。

悠人は剥がしたものを一瞥すると、皆に見えるように机の中央に置いた。

「メッセージカードと指輪？」

澪は身を乗り出して、不思議そうに覗き込む。そこにあつたのは名刺より一回り大きなサイズのカードと、シンプルな金属製の指輪だった。最初、指輪はカードの上に載っているのかと思ったが、どうやら両面テープで貼り付けられているらしい。そして、カードの方には丁寧な手書き文字で何かが記されている。

親愛なる怪盗フロントム様

今宵 11時50分、私の部屋へお越しください。

窓を開けてお待ちしております。

?? 中堂幹久

「挑戦状かなあ？」

澪は書かれたメッセージを読み上げると、首を傾げて誰にとともにそう尋ねた。しかし返答はない。このメッセージの意図するところを量りかねているようで、皆一様に難しい顔をして考え込んでいるた。

「挑戦状だとしたら、この指輪は何なんだ？」

「ちよつと勝手に取っちゃっていいわけ?!」

同じくカードを覗き込んでいた篤史は、非難する澪を無視し、無造作にペリッと指輪を剥がした。人差し指と親指でつまむように持ち、電灯の光に掲げながら、あちらこちらに向きを変えつつ観察する。

「これ本物のプラチナみたいだな。シンプルだけどころ高いんじゃないか? こんなものを貼っつけるなんて、さすが金持ちはや

ることが違うな……ん？ 内側に何か文字が彫ってあるぞ……名前かこれ？」

そう言いながら、手元に引き寄せてその刻印を読み上げる。

「MIKIHISA to REI」

「……えっ?!」

一瞬遅れて、澪は素っ頓狂な声を上げた。二人の名前が入ったプラチナの指輪など、まるで婚約指輪か結婚指輪のようであるが、幹久からそんなものをもらう心当たりは微塵もない。だいたい彼とはこの前のパーティで一度会っただけである。

「どういうこと？ 澪」

「こつちが知りたいよ!」

冷やかな口調で遙に尋ねられ、思わず澪はむきになって言い返す。

「幹久さんとは、付き合ってるわけでも何でもないんだからね!」

「そうじゃなくて、問題は怪盗ファントムの正体がバレてるってことだよ」

「えっ……あ、そうか!」

カードの宛名は「怪盗ファントム」だが、指輪には「to REI」と彫られている。つまり、怪盗ファントムの正体が澪であると、幹久に知られているかもしれないということだ。

「でも、私、ファントムのことなんて何も話してないんだけど……」

「おまえって、誘導尋問に引っかけたっても気づかなさそうだよなあ」「半ば呆れたように篤史にそう言われ、澪はムツとして唇をとがらせる。

「そもそもまだバレたと決まったわけじゃないでしょう？ 確かに指輪にはREIって書いてあるけど、漢字でもフルネームでもないし、私のことじゃないかもしれないもん」

「じゃあ誰なんだよ」

「そこまではわからないけど……あっ、そうこの前のパーティのときね、幹久さん、結婚したい人がいるようなことを言ってたの。」

もしかしたらその相手の名前がREIなんじゃないかな。彼女のこ
とを怪盗ファントムかもしれないと疑ってたところへ、ちょうど予
告状がきたから、この機会に結婚も含めた諸々のことに決着をつけ
ようとして呼び出した、とかね。それだったら指輪の辻褃も合うで
しょう?」

「漣の言っていることが正解だろうな」

それまで黙って聞いていた悠人が、腕を組みながらその仮説を認
めた。途端に、漣はパツと表情を明るくし、机に手をつけて勢いよ
く身を乗り出す。

「ね、そうですね!」

「ただ、ひとつだけ認識違いをしている」

悠人はそう言って顔を上げると、じつと漣の双眸を見つめた。

「幹久の結婚したい相手というのは君だ」

「……は?」

漣はきよとんとした。

「君はわかっていなかったみたいだが、あのとときの伴侶を見つけた
という話は、君のことを指して言ってたんだよ。あいつはそれで求
婚しているつもりだったんだろう。そして、そのときの君の笑顔を
見て、了承を得たものと勘違いしているはずだ」

「……えっと、本当に?」

信じがたい気持ちで聞き返す。確かにそういう解釈も出来なくは
ないが、いくら何でも出会ったその日というのは、あまりにも非
常識でありえないことだと思う。ドラマでもここまで突飛な話はな
かなか見ない。しかし、なぜだかわからないが、悠人はそう確信し
ているようだった。

「まあ、漣が鈍いというのもあるが、突っ走りすぎる幹久の方が問
題だろうな」

「それはどうでもいいけど、結局、漣がファントムだとバレてるっ
てことだよな?」

遙は頬杖をついて尋ねる。

「何の根拠もなく勝手に思い込んでいるだけだ。無視しても問題ない」

悠人は少しも動じることなく断言した。しかし、それこそ根拠のない憶測に基づく暴論でしかないだろう。澪を安心させようとしているのかもしれないが、とても素直に頷くことは出来なかった。

「無視つて……本当に大丈夫なのかな……それに指輪……」

「明日は燃えないゴミの日だったな。ちょうど良かったよ」

何が気に障ったのか、彼は急に感情的になってそう吐き捨てた。

口調にも表情にも隠しきれない苛立ちが窺える。いつも冷静な彼らからぬその態度に、皆は一樣に目を大きく見開いて啞然とした。

「悠人、どうしたんだおまえ」

「……失礼いたしました」

剛三の声を耳にして、悠人は落ち着きを取り戻したようだ。小さく息をついて続ける。

「幹久は、佐藤由衣の息子です」

「佐藤……？ ああ、あのサイコ女か」

「サ……サイコ……??」

澪は目をぱちくりさせて聞き返した。佐藤というのは由衣の旧姓と思われるが、それで通じるということは、剛三も彼女の高校時代を知っているのだろう。が、あまり良い印象は持っていないようだ。剛三は机の上で両手を組み合わせると、深い溜息を落として説明を始める。

「佐藤由衣は悠人が高校生のときに付き合っていた女でな。悠人が怪盗フロントムを始めるとすぐに、その正体が悠人ではないかと疑い始めて、それはもう悪魔のようなしつこさで追及し、悠人を精神崩壊寸前まで追いつめたのだ。それ以来、悠人は女嫌いになり、今も独身というわけだ」

「なんか、ちよつと違うような??」

澪は眉をひそめて首を傾げた。大まかな話は悠人から聞いたとおりだが、受ける印象は随分と違っている。精神崩壊とか、女嫌いとい

か、すべて本当のことなのだろうか。剛三には話を脚色する傾向があるようなので、今回も大袈裟に言っているだけかもしれないと思う。

「あのサイコ女の息子ならば、思い込みだけで暴走するのも確かに頷ける。まあ、漣に惚れているのならば、無闇矢鱈と騒ぎ立てるところもあるまい。もし騒がれたところで証拠は何もないのだからな。悠人の言うように放っておけばいいだろう」

「でも、指輪は返したいな……なんか悪いし……」

自分のことを想って作ってくれたであろう指輪を、事情はどうあれ、燃えないゴミに捨てるなんてことはしたくなかった。それに、このまま指輪を返さなければ、結婚を承諾したと勘違いされてしまふ可能性もある。思い込みの激しい人であればなおのことだ。

「警察はもう中堂家から引き上げているし、中堂夫妻もメッセージカードや指輪の話は知らないようだ。おそらくその幹久つてやつのは独断なんだろう。今にして思えば納得がいくんだけど、まんまと盗まれたのに、あいつ何か嬉しそうだったんだよな」

篤史は怪盗フロントムが去ったあとの状況を簡単に説明する。仕掛けてあった盗聴器で知り得たのだろう。それによって、幹久が個人的に話をしたがっているだけ、という推測が幾分かは裏付けられたといつてもいい。

「私、返すだけ返してこようかな」

「畏でないという確証はないし、どちらにしても危険であることに変わりはない。どうしても返したいのなら郵便で送り返せばすむだろう。何も一々あいつの言うとおりにすることはないんだ」

「でも……」

漣は困惑ぎみに顔を曇らせた。

「漣を行かせるわけにはいかない」

悠人は強い意志を感じさせる口調できっぱりとそう断じる。もはや何を言っても無駄に思えた。漣は口を引き結んでうつむくと、膝の上に両手を重ね、机に置かれた指輪をそつと見つめて目を細めた。

夜11時50分??。

指定されたその時間、怪盗ファントムはベランダの手すりに軽やかに降り立った。空気は身が引き締まるように冷たく、背後には、神秘的な光を放つ満月が浮かんでいる。その月明かりを浴びて、さりと揺れる長い黒髪が艶やかに煌めいた。

部屋の照明は消えていた。

不気味なほどひっそり静まりかえったそこには、誰かがいるようには思えなかったが、よく見てみればひとつだけ微かにゆらめく人影があった。幹久である。彼は大きく開いたガラス窓からベランダに進み出ると、カクテルグラスを持ったまま窓枠にもたれかかり、手すりに立つファントムを仰ぎ見ながら柔らかく目を細める。

「思ったとおり、あなたには月下の淡い光がよく似合う。先ほどよりもずっと凛としていて美しい」

口元に小さく笑みをのせてそう言うと、ファントムに差し出すように、大仰に腕を上げてカクテルグラスを掲げた。その縁が、月の光を受けて強い輝きを放つ。そして、中に注がれているオレンジ色の液体も、細やかに波打つたびに、夕暮れ時の水面のようにキラキラと煌めいた。

「さつきよりも美しいんだとよ」

「篤史、笑いすぎっ!!」

くくくつと体を揺すって笑い続ける篤史の背中を、漣は握りこぶしで軽く叩いて抗議した。

中堂家付近の駐車場に停めた車の後部座席で、漣、篤史、悠人の3人は並んで座り、篤史の膝に載せられているノートパソコンの画面を覗き込んでいた。そこに表示されているものは、怪盗ファントムに取りつけたカメラから送られてくる映像で、今はまっすぐにファントムを見上げる幹久の姿が映し出されている。

「まあ確かに遙の方が品はあるよなあ」

「どうせ私には品なんてないですよ」

澪はふてくされてシートにもたれかかり、思いきり口をとがらせた。

招待状に応じる形で指輪を返しに行くことに、悠人は強硬に反対していたのだが、澪の心中を汲み取ってくれたのか、幾分か譲歩して条件付きで了承してくれることになった。

その条件というのは、澪の代わりに遙が怪盗ファントムとして行くことである。

どうせ指輪を返してくるだけであり、顔を見せることも会話をすることもないのだから、澪でも遙でも同じだというのが悠人の言い分だった。しかし、自身の結婚が絡む話で身代わりなど、澪としては不誠実な気がして抵抗があった。澪には行かせられないと言いつつ、遙には行かせようとすると、そんな悠人の態度にも納得がいかない。問い詰めてみると、どうやら澪を危険な目に遭わせたくないというよりも、澪の流されやすい性格の方を懸念しているようだった。そんなことはないかと反論したい気持ちはあったが、かつて流されやすいところを見せてしまった悠人の前では分が悪く、そこまで厚顔でない澪は何も言えなくなってしまった。

そういうわけで、今、幹久の前に立っている怪盗ファントムは遙である。

遙は、最初こそ嫌そうな素振りを見せていたものの、意外にも拒否することなくすんなりと承知してくれた。不思議に思ってた聞いてみたところ、澪を行かせるのは不安だから仕方ない、というのが引き受けた理由らしい。信用されていないことについては複雑な気持ちもあるが、いつでもこうやって澪を守ろうとしてくれることに対しては、素直に嬉しく思っていたし感謝もしていた。

けれど、まさか幹久にまで、遙の方がいいと言われることになるなんて??。

「気にするな、漣。あいつはただ適当に口説き文句を並べているだけだ」

「別にフォローしてもらわなくても大丈夫ですから！」

せつかく悠人が氣遣ってくれたにもかかわらず、そのことが少し気恥ずかしくて、漣は感謝するどころか思わず強気に言い返してしまふ。そんな漣を横目で見ながら、悠人は余裕の態度でくすりと笑った。いつものことながら完全に子供扱いされているようである。

「ファースト、指輪だけ返したら、適当に切り上げて帰ってこいよ」
篤史はヘッドセットのマイクを通し、緊張感のない声で指示を出す。綿密な計画を立てているいつもの盗みとは違い、今回は指輪を返すだけであり、危険もないと判断したようで、随分と気楽にしている様子が見てとれた。剛三にいたっては全面的に悠人に任せて家で寝ているくらいである。

しかし、漣はそこまで楽観的になれなかった。

当事者なので当然といえば当然だろう。これは漣自身の人生に関わることであり、大袈裟に言えば、遥に自分のすべてが委ねられていることになるのだ。息を詰めて両手を組み合わせると、画面を見つめながら、何事ありませんようにとひたすら心の中で祈り続けた。

「これは、僕があなたのために作ったものです。シンデレラ、あなたにお似合いのカクテルだ」

ノンアルコールだから未成年の漣にお似合いだ、という意味ではもちろんなく、童話のシンデレラになぞらえているだろうことは、聞いている誰もがすぐにわかった。そして、11時50分という時間指定のわけも??。

「そろそろ12時になりますね。魔法が解けて素顔のあなたに戻る時間です、僕のシンデレラ。それともアンドロメダの方がお好みでしょうか。ご希望とあらば、怪盗のしがらみに囚われたアンドロメダ姫を救い出すperlセウスとなりますでしょう」

幹久はカクテルグラスをティーテーブルに置くと、芝居がかった身振り手振りをつけて、聞いているだけで恥ずかしくなるようなセリフを次々と畳みかけた。今回ファントムが盗んだ絵画が「アンドロメダ」だったので、それになぞらえて上手いことを言っただけなのかもしれない。

当然ながら、怪盗ファントムは無言のままである。

それでも、幹久に頓着する様子は見られなかった。ふっと愛おしむように微笑むと、胸元に手を当て、今度は落ち着いた口調で滔々と話し始める。

「僕は、君が怪盗ファントムだと知りながら、それでも構わないと思って求婚しました。ただ、どうしてこんなことをしているのか、それを聞かせてほしいのです。何か理由があるのでしょうか。事情によつてはこのまま続けることも許すつもりですし、何なら力を貸すことも検討します。僕の本心としては、このような危険なことから足を洗っていただきたいのですが」

そう言つて、軽く笑いながら肩をすくめる。

「指輪は受け取っていただけましたか？」

それまで無反応を貫いていた遙だったが、その核心を突いた言葉によつやく動きを見せる。送りつけられた指輪をポケットから取り出すと、白手袋をはめた指でつまみ、幹久の方へ腕を伸ばしてそれを示した。月の光を浴びて、プラチナが柔らかな輝きを放つ。幹久は満足そうに目を細めると、手のひらを上に向け、怪盗ファントムへとすつと伸ばした。

「僕がはめて差し上げましょう。さあ、こちらへ」

差し出されたそのすらりとした手の上に、遙は小さな指輪を置き、さらに自分の手を重ねると、短いスカートをひらめかせて軽やかにベランダに降り立った。二人は手を取り合ったまま正面から向かい合う。微かな夜風がそよぎ、長い黒髪がさらさらと音を立てて揺れた。

「ちょっと、遙、どういうつもり?!」

漣は篤史を押しつけんばかりの勢いでノートパソコンを覗き込む。映像は遙の視点であり、遙自身の姿は見えないが、映像の動きと幹久の言葉でどういう状況なのかは察しがついた。指輪だけ渡してさっさと帰ってくればいいのに、なぜわざわざベランダに降りたのだろう、なぜこんなに至近距離で幹久と向かい合っているのだろう?彼の考えが読めなくて苛立ちと不安が募る。

「面白くなってきたな」

篤史はニヤニヤしながらそんな不謹慎なことを言う。

その隣の悠人は、腕を組んだまま、ただじつと幹久の映し出された画面を眺めていた。行動を起こさないのは、面白がっているからではなく、おそらく問題なしと判断していることだろう。しかし、漣には、このような危険な状況を看過できるだけの余裕はなかった。

「やだもう見てられない! 篤史マイク貸して!!」

「バカ、今だと相手にも声が聞こえちまうだろう!」

漣は篤史のヘッドセットを奪い取ろうとするが、篤史は漣を押し返して必死に抵抗する。狭いところでもみくちゃになっている二人の隣で、悠人は顔色一つ変えず、篤史の膝から落ちそうになったノートパソコンを受け止めた。その画面から目を離すことなく静かに口を開く。

「漣、遙を信じてもうしばらく様子を見よう」

「……師匠がそう言うのなら」

漣は神妙に答えると、おとなしく元の場所に座り直した。

師匠に言われるまでもなく、遙のことは信頼しているつもりである。そう、冷静に考えてみれば、遙が考えもなしに行動しているとは思えない。だから、今はただ信じて見守るだけ??漣は唇をきゅっと噛みしめながら、篤史の膝に置き直されたノートパソコンを再び覗き込んだ。

ボーン、ボーン、ボーン??。

暗い部屋の中から、レトロな柱時計の音が聞こえる。

幹久は怪盗ファントムと手を取り合ったまま、もう片方の手で白い首筋にそっと触れた。

「仮面のままであなたは十分に美しい。けれど、伴侶となる僕の前で仮面は要らない。もう12時を回りましたし素顔に戻りましょう……橘濤さん」

まだ師匠の言うとおりだと決まっていけない、指輪のREIが自分以外の誰かであってほしい?? 濤がしつこくも抱き続けていた一縷の望みは、このとき完全に絶たれてしまった。ドクン、ドクン、と飛び出しそうなほどに強く打つ鼓動を感じながら、顎を引き、まずまず食い入るようにノートパソコンの映像を見つめる。

幹久は焦らして楽しむかのように、怪盗ファントムの首筋に置いた手を、ゆっくりと艶めかしく上方に滑らせていった。指先が顎をなぞる。そして、ついに仮面に手を掛けようとした、そのとき??

「イタツ!!」

遙がその手首を素早くひねり上げた。つながれていた二人の手は離れ、指輪はベランダの床に落ちて転がる。

「れっ、濤さん! 怖がらなくても大丈夫です。ここには僕たちしかいません……だから、仮面を……いえ、この手を……っ! お願いです、僕を信じてください。あなたを愛しているのですから!」

おそらく肩や腕にかなりの痛みがあるのだろう。幹久は額に汗を滲ませながら懸命に訴える。時折、苦しげに声を詰まらせていたが、それでも辛うじて笑顔を崩していないのは、ある意味で賞賛に値するかもしれない。

遙はパツと拘束を解いた。

いきなりのことで幹久はよろけたが、体勢を立て直してもう一度ファントムと向かい合うと、大きく安堵の息をついてニツコリと微笑んだ。こんな仕打ちを受けたというのに少しも懲りていないようである。ゆっくりと仮面に手を伸ばしながら、口を開いて何かを言おうとした、その瞬間。

ガッツ??。

幹久の顔面に黒い革靴がめり込んだ。遙が蹴りつけたその足を引くと、額から頬にかけて斜めに靴底の跡がついていた。もう意識をなくしているであろう彼は、鼻血を垂らしながら、スローモーシヨンのようにゆっくりと仰向けに倒れていった。

「はる……じゃなくてファースト……あの、ちょっとやりすぎじゃないかな？」

篤史から借りたヘッドセットを装着した漣は、マイクを通しておずおずと遙に話しかける。

ノートパソコンには伸されて大の字になっている幹久が映し出されていた。自分の身を守るためにやむを得ない状況ならまだしも、こつも一方的に攻撃したのでは、さすがに幹久に申し訳なく思わざるをえない。

「ちゃんと加減はしてるから大丈夫。ただ気絶してるだけだよ」

「じゃなくて、何も顔を蹴りつけることなかったんじゃ……」

「怪盗ファントムを呼びつけようなんて二度と思わせないためには、このくらいやらないと効き目ないんじゃないかなって。声が出せない状況だったから行動で示したんだけど、何か問題？」

遙はしれつと聞き返す。

ここはありがとうと答えるべきなのだろうか。しかし、やはり度が過ぎている気がするし、これで効き目があるかどうかも疑わしい。それどころか恨まれて逆襲される可能性もなくなはないのだ。ただ遙は自分のためにやってくれたわけで??漣はぐるぐると思考を巡らせるが、結論にはたどり着けない。

「これでもう十分に目的は達しただろう。帰ってくるんだ」

悠人は、漣が装着したヘッドセットのマイクを引き寄せて遙に告げる。

「了解」

ノートパソコンのスピーカーからぶっきらぼうな答えが返ってきて

た。どことなく物足りなさそうな口調に聞こえるが、師匠の命令だからか、言われたとおりにするつもりのもりのようである。

遙は疲れたように大きく溜息をつきながら、床に落ちた指輪を拾い上げ、それをカクテルグラスの中に投げ入れた。オレンジ色の液体の中を揺らぎながら沈んでいき、チン、と微かな音を立てて底に落ちる。そして、悠人に持たされたメツセイジカードを内ポケットから取り出すと、そのカクテルグラスの脚もとに無造作に投げ置いた。

宛先違いにより受取拒否??。

それは、怪盗ファントムから幹久への最後のメツセイジだった。

ようやくすべての役割を済ませた遙は、軽く床を蹴って飛び上がり、再びブランダの手すりにすくっと立った。明るい月の光が、その姿をくつきりと闇夜に浮かび上がらせる。そして、倒れたままの幹久を肩越しに一瞥すると、手すりを踏み切り、長い黒髪を華麗になびかせて夜空へと飛び出した。

これですべての問題が片付いたわけではない。

そのことは澪もわかっていたし忘れてもいなかったが、とりあえず一段落したことで胸を撫で下ろし、緊張の糸が切れたようにほっと大きく息をついてシートに身を預けた。その途端、一気に耐えきれないほどの眠気が押し寄せ、それに吞まれるように目を閉じると、すっと心地よく眠りの奥底へ意識が沈んでいった。

その安らかな寝顔を、帰りの車中ずっと悠人が見守っていたことは、澪は知るよしもない??。

「まだ宿題終わらないの？」

「えっ？」

シャーペンペンシルを握ったまま動きを止め、ぼんやりと考えごとをしていた澪は、不意に声をかけられて反射的に振り向いた。絹糸のように艶やかな黒髪がさらりと頬にかかる。

「そろそろ寝たいんだけど」

「あ、うん……」

澪は学習机に広げてあった教科書やプリント類を片付けている。上の掛け時計に目を移すと、針は11時半を指していた。もうこんな時間だなんて??澪は寝そべっていたベッドから起き上がり、教科書とノートを閉じた。けれど、ベッドからは降りようとせず、軽く握った手を膝に置いてうつむいた。

ここは澪の部屋である。

澪は、宿題をするという名目で押しかけて、彼のシングルベッドを占領していた。さすがに毎日というわけではないが、わりとよくあることで、二人にとってはごく日常的な光景である。だが、これほど遅くまでいることはあまりなく、そういう意味では非日常的な状況ともいえるだろう。

宿題はとうに終わっていた。

それでも自分の部屋に戻らずここに居続けたのは、他にもうひとつ別の目的があったからである。それを切り出せず悩んでいるうちいつしかこんな時間になっていたのだ。どちらかというと今日の目的はそちらの方で、宿題はただの口実といっても過言ではない。だから、このまま、すすすごと帰るわけにはいかなかった。

澪はようやく決意を固めると、ベッドの上で正座して上目遣いで

切り出した。

「あのね、遙、相談っていうか聞いてほしいことがあるの」

「そんなことだろうと思ったよ」

遙は事も無げにそう言うと、椅子を回して漣の方に体を向ける。

「で、何？」

「うん……ちよつと言いつらいんだけど……」

「昔からそんな話はさんざん聞かされてるよ」

何を今さらと言わんばかりの呆れ口調だが、確かに彼の言うことはもつともである。両親や友人に言えないようなことでも、遙にだけは話すことができた。誠一を好きになつたときも、悩みを聞いてもらつたり、アドバイスを求めたりしていた。けれど、今回はその遙にも言いつらい。なぜなら、それは??。

「師匠のことなんだけどね」

二人にとって悠人は親も同然の存在であり、その認識を崩しかねない話をするには、遙に対して申し訳ないという気持ちが少なからずあつた。しかし、自分の胸の内だけにとどめておくのは苦しく身勝手かもしれないが、誰かに話して少しでも楽になりたいと思つたのだ。そして、その「誰か」は遙しか考えられなかつた。

漣は、堰を切つたように話し出した。

天野俊郎の『湖畔』を娘のもとへ返却に行ったときのこと、中堂家のパーティでのこと、悠人の部屋で報告書を作成したときのこと、誠一と別れたら師匠と結婚すると約束したこと?? 漣自身の感情は挟まずに、できるだけ事実のみを述べていく。しかし、客観的に話せば話すほど、現実感が乏しくなっていくように感じられた。

「ふーん……師匠がね……」

ずっと真剣な顔で聞いていた遙は、漣の話が終わると、吐息まじりにそうつぶやいた。反応に困るのも当然だろう。漣自身でさえ受け止めきれない話を、いきなり信じろという方が無理である。

「やっぱり信じられない？」

「にわかには信じがたい話だけど」

彼はそこでいったん言葉を切り、椅子の背もたれに身を預けて溜息をついた。

「澁がそんな嘘をつくとは思えないしね。それに、実はちょっと気になってたんだよ。このところ様子がおかしかったから、もしかしたら何かあったんじゃないかって。まさかそこまでとは思わなかったけど」

「おかしかったって、私が？」

澁はきよとんとして小首を傾げる。

「師匠と結婚すればって母さんが言ったときの反応は過剰だったよ。それに、たまに思い詰めた顔で師匠を見てるしね。師匠の方も、澁と幹久の話になるとあからさまに機嫌が悪くなったりして、なんか嫉妬でもしてるみたいに見えたんだよ」

言われてみれば、確かに悠人のことを意識していたような気がする。ただ、彼の方はどうなのかよくわからない。遙が指摘したようになるなど、澁にはとても信じられなかった。

「でも、それを言ったら遙だっておかしかったよ？ 幹久さんに指輪を返しに行ったとき普通じゃなかったもん。やっぱりどう考えても顔を蹴りつけるのはやりすぎだよ」

「結果的にはあれで良かったよね」

「それは……そうだけ……」

顔を蹴りつけられたことが利いたのか、幹久は怪盗ファントムと澁は別人という結論に達したようだった。数日後に橘家へやってきて、剛三と澁に勘違いしていたことを白状して詫び、そしてあらためて澁に結婚を申し込んできた。驚くべきことに、この短期間で新たに作り直したという指輪まで用意してきていた。が、剛三は認められないと一蹴し、澁も心苦しく思いながらもやんわりと断った。これで幹久が本当に諦めたのかはわからないが、とりあえず一段落ついたといえるだろう。

「師匠もずいぶん安心してたよ」

「そう……」

それ以外に言葉が見つからず、漣はゆっくりと目を伏せた。意味もなく手元を見つめる。その様子を、遥は椅子の肘掛けに左腕を置いて、無表情で眺めていた。

「師匠と結婚すればいいんじゃない？ 僕は賛成」

「ちよつと、遥、いきなり何?!」

漣は手をつけて身を乗り出した。

「師匠だったらフロントムのことを隠さなくていいし、じいさんも父さんも、母さんもそのつもりなら何の問題もないよね。みんなが幸せになつてすべて丸く収まるんじゃない?」

「私の幸せは無視?!」

「何が不満なわけ?」

遥はじとりとした目で尋ね返した。漣は当惑して顔を曇らせる。

「不満とかそういうことじゃなくて……師匠のことは好きだけど、それは家族みたいなものだし……。第一、私には誠一がいるもん。遥だつてわかつてるでしょう?」

恨めしそうにそう訴えかけると、遥は真顔でじつと考え込んだ。

「誠一、ヤバいんじゃない?」

「……え?」

「誠一と別れたら師匠と結婚する、って約束したんだよね? だったら誠一の方に圧力をかけるんじゃないかな。漣に別れるつもりがなくても、誠一が別れるって決めたらどうしようもないし。同じ高校生ならまだしも、大人相手なら容赦しないだろうね。ありとあらゆる手を使って潰しにかかると思うよ。ま、誠一ひとりくらい赤子の手をひねるようなものだろうけど」

漣は困惑ぎみに眉を寄せて、口をとがらせた。

「師匠はそんなことする人じゃないよ」

「師匠じゃなくてじいさんだよ。じいさんも漣と師匠を結婚させたがつて話だし」

それを聞いて、漣の中で先ほどの推論が急に現実味を増した。剛

三ならば本当にやりかねない。漣は弾かれるようにベッドから飛び降りると、教科書もノートも残したまま、短いスカートをひらめかせて一目散に遙の部屋を飛び出した。

悠人の部屋からは細く光が漏れており、微かに物音も聞こえる。どうやら彼はまだ寝ていないようだ。漣は表情を硬くして唾を飲み込むと、コンコンと遠慮がちに扉を叩く。

「はい」

中から悠人の声が聞こえた。

ややあつて、カチャリと扉が開き、彼が無防備な姿を現した。着替えようとしていたのか、シャツの胸元が大きくはだけており、顔には疲労が色濃く滲んでいた。漣と目が合うと、その目を大きく見開いてぱちくりと瞬きをする。

「夜這い？」

「違います」

漣は冷ややかに答えた。それから少し顔を曇らせて切り出す。

「師匠にお話があつて来たんですけど……」

疲れているようなのでまた後日にします??そう続けるつもりだったが、言いよんどんだきり曖昧に目を伏せる。後日なんて悠長なことを言っているうちに、剛三が行動を起こしてしまうかもしれない。そう思うと、遠慮している場合ではない気がしてきた。

「入って」

悠人はそう言つて大きく扉を開いた。

まるで心情を察したかのような申し出に、漣は素直に甘えることにして、促されるまま彼の部屋に入ろうとする。が、途中でピタリとその足を止めた。不思議そうにしている悠人を上目遣いで窺いながら、おずおずと念を押すように言う。

「あの、何もしないでくださいね？」

「何もしないよ」

悠人は噴き出しながら答えた。扉を開けたまま部屋の中に戻り、

シャツのボタンを下から留め始める。

「安心していい、僕の理性は鉄壁だ」

「……ずいぶん脆い鉄壁ですね」

漑はこれ以上なくらいの低い声で嫌味を落とした。先日ここで強引に唇を奪ったばかりなのに、よく臆面もなくそんなことが言えるものだと思う。しかし、悠人はシャツの裾をズボンに入れると、顔だけ振り向けてくすりと笑った。

「この前は漑が地雷を踏んだからいけないんだよ」

「それって、由衣さんのこと？」

「もうその話はするんじゃないぞ」

彼は疲れたように息をつき、どっかりと椅子に腰を下ろした。そして、ちらりと漑に横目を流して言う。

「キス、初めてじゃなかったよね？」

その無遠慮な質問に、漑は頬を染めながら眉を寄せる。

「……だったら何ですか」

「だいぶ罪悪感が少なくてすむよ」

「はあっ？」

思わず素っ頓狂な声が出た。詫びるところか正当化しようとするなんて??そのあまりにも勝手な言いように、開いた口がふさがらなかつた。両手を腰に当てると、少し前屈みになってしかめ面を見せつける。

「初めてじゃなければいいってもんじゃないです。ちゃんと反省してください。だいたい、あのときはまだ彼氏がいるなんて言っただけですよね? もし初めてだったらどうしてくれたんですか」

「むしろその方が嬉しかったけど」

「罪悪感ドコいったんですか!」

カツとして責めるように募っても、悠人は悪びれもせずニコニコしている。漑の口から大きな溜息が漏れた。横柄に腕を組んで扉にもたれかかると、うさんくさそうな視線を彼に投げかける。

「鉄壁の理性も嘘八百ですよね」

「そんなことはないよ。ハンググライダー特訓の山ごもりのときだつて、澪が裸で出てきても平静を保っていたら、二晩一緒のベッドで寝ても何もしなかつただろう？ 澪がやたらと煽るから大変だつただけだね」

「あつ、煽つてなんかっ……！」

そのときはまだ悠人の気持ちなど知らず、随分と無防備に振る舞っていた記憶がある。裸で出てきたというのは少し語弊があり、シヤワーを浴びたあとでバスタオルがないことに気づき、悠人に取ってきてもらっただけのことだ。一緒のベッドで寝たというのも事実ではあるが、彼のベッドがあまりにも粗末だったので、なぜかダブルベッドだった澪の方と一緒に寝ようと提案しただけのこと。今に思えば剛三の策略だったのかもしれないが……。

「入らないの？」

悠人の声で、澪は現実に戻された。戸口に立つたまま、軽く口をとがらせる。

「本当に何もしないでくださいね。師匠に本気出されたら、私じゃ敵わないんですから」

「わかってるよ」

クスクスと笑う悠人を横目で睨みながら、澪はわざと足音を立てて中に入ると、荒っぽくベッドに腰を下ろして彼と向かい合った。そのとき自分の脚があらわになっていることに気づき、自意識過剰かもしれないが、こんなときに短いスカートをはいてきてしまったことを少し後悔した。

空調の静かな運転音が澪たちを包む。

おそらく帰ってきたばかりだったのだろう。脚に触れるシーツはひんやりと冷たく、部屋の中もまだほとんど暖まっていなかった。

窓に引かれたカーテンは中途半端なところで止まっている。

「それで、何の用かな？」

悠人は椅子に深く腰掛けたまま悠然と尋ねた。まるでこの状況を

楽しんでるかのようである。しかし、当然ながら、澪の方はそんな気分になれるはずがない。膝にのせた両手をグツと握りしめると、そこに視線を落として切り出す。

「このまえ約束した話なんですけど……」

「ああ、彼氏と別れたら僕と結婚するって話だな」

「そう、その話……やっぱり撤回させてください!」

緊張で体をこわばらせながら全力でそう言いきり、勢いよく頭を下げた。息を詰めてじっと返答を待つ。

「駄目だよ」

耳に届いたのは感情のない声。

澪はそろりと顔を上げ、大きな漆黒の瞳で追い続けるように尋ねる。

「どうしても?」

「そうだなあ……」

悠人は思わせぶりに腕を組んだ。そして、斜め上に視線を流してぼつりと言う。

「条件次第では譲ってあげてもいいかな」

「本当ですか? どんな条件ですか?!」

ようやく見えた一筋の光明に、澪は必死に食らいついた。今にもベッドから飛び出さんばかりに身を乗り出す。その勢いに気おされることなく、悠人は悪戯っぽい笑みを浮かべて見つめ返すと、組んだ腕をほどいて答える。

「澪が僕との結婚を了承してくれること」

「ふざけてるんですか!」

「いたって真面目なつもりだけど」

沸騰したようにいきり立つ澪に、悠人は飄々と言葉を返した。それから少し表情を引き締めて続ける。

「僕の目的はそれなんだからね。誰がみすみすチャンスを手放すと思っ?」

その瞳には強い意志が秘められていた。

ゾクリ、と背筋が震える。彼が本気でこの結婚を考えているのだ

と、そして彼の思うままに事態が進んでいるのだと、漑はあらためて強く思い知らされた。次第に速くなる胸の鼓動を鎮めるように、右手を胸に押し当てながらも、どうしても消せない不安に顔を曇らせる。

悠人は訝しげに首を傾げて、漑を覗き込んだ。

「あれだけ自信満々だったのにどうしたんだ？ 彼氏と喧嘩でもしたのか？」

「そうじゃなくて……おじいさまが、彼にひどいことをするんじゃないかと思って……。おじいさまも私と師匠を結婚させたがってるんでしょう？ こんな約束をしてるなんて知ったら、きつと何がなんでも別れさせようとする。私のために、彼の人生をめちゃくちゃにしたくないの」

悠人に説明するというよりも、自らの気持ちを吐露するように言う。それによつて情けをかけてほしいという下心もあつたかもしれない。しかし、そう都合良くはいかなかった。

「だったら、そうなる前に別れてしまえばいいんだよ」

悠人は涼しい顔で非道な発言をする。

「絶対に嫌です！」

「彼の人生を台無しにしてもいいのか？」

「そんな意地悪なこと言わないでっ……」

漑は追いつめられて泣きそうになった。それでも精一杯の気力を奮い起こし、潤んだ瞳でまっすぐに悠人を見据えて言う。

「お願いします、私、師匠のことを嫌いになりたくありません。私のことを思ってくれるんだったら、約束を白紙に戻してくれませんか？」

「それはちょっと虫が良すぎるんじゃないかな」

自分でもそう思っていただけに返す言葉がない。けれど、今の自分には頼み込むしか術がなかった。これで駄目ならどうすればいいのだろう。懸命に思案するものの何一つ良案は浮かばない。部屋が暖まってきたせいか、焦りのせいか、額に薄く汗が滲んできた。空

調の音にさえ追い立てられるような気持ちになる。

「澪の必死さに免じて妥協してあげるよ」

「えっ？」

悠人は唐突にそう言って立ち上がった。そして、澪の正面からベッドに片膝をのせると、細い肩に手を掛けて仰向けに倒し、無表情のまま覆い被さるように顔を近づける。ベッドがギシギシと耳障りに軋んだ。

「ちよつと師匠、何を……?!」

澪が狼狽して声を上げると、息が触れ合う寸前の距離で彼の動きが止まった。感情の読み取れない瞳が、真上から澪を捉えている。

「約束を白紙に戻せば、僕が澪と結婚できる確率はかなり低くなる。それならばせめて今夜一晩だけでも手に入りたい、そういうことだ。つまりこれが約束をなくす条件だよ」

澪は息をのんだ。

「そんなの駄目！ やめてください!!」

「心配しなくても無理強いはいしない。選ぶのは君だ。条件を飲んで約束を白紙に戻すか、条件を拒否して約束を続行するか……君の彼の命運もかかっている。じっくり考えるといい」

そんな??。

条件を飲めば約束は取り消してもらえ、誠一とも付き合い続けられる。誠一もひどい目に遭わなくてすむ。だけど、その条件は彼に対する裏切り行為に他ならない。自分にはできない。やはり別れるしかないのだろうか。悠人と結婚するしか道はないのだろうか?? 視界が大きく歪む。澪は瞬きもせず彼を見つめながら、目尻から一筋の涙をこぼした。

「そこまで嫌がられると傷つくな」

ふっ、と悠人は曖昧な笑みを浮かべ、親指でそつとなぞるように涙の跡を拭った。そして、いったんベッドから降りて澪の隣に座り直すと、大きく息を吐きながら背中を丸め、膝の間で固く両手を組み合わせる。

「約束は取り消さない」

「……………」

漣は仰向けのまま白い天井を見つめていた。瞼が僅かに震えている。けれど何も言えなくて、ただぎゅっとシーツを掻き集めるように掴んだ。

「でも心配しなくていい。剛三さんには言っていないし、言いつもりもないから」

「……………えっ？」

一拍の間のあとに、小さくそう言っただけの方に視線を向ける。目に入るのは少しくたびれた広い背中だけで、表情を窺うことはできなかった。漣はおそろおそろ体を起こすと、顔を傾げながら、すぐ隣に座している彼をじっと見つめる。下を向いた横顔は真剣そのもので、少なくともからかっているわけでないことだけはわかった。

「この約束は僕と漣だけのフェアな約束だ。もちろん妨害するようなこともしない」

「本当？」

思わず聞き返してしまう。悠人は優しく目を細めて振り向いた。

「僕が嘘ついたことある？」

「たくさんありますけど……………」

困惑しながら眉をひそめて答えると、悠人はそうだったねと声を立てて笑った。そして、漣の頭に大きな手をぼんと置き、小さな子供にするようにニッコリと笑いかけて言う。

「でもこれは本当だから」

それから表情を険しくして、漣を見つめたまま静かに言葉を繋ぐ。「ひとつ言っておくと、剛三さんにとっては約束なんて関係ないと思うよ。そんな約束あるうがなかるうが、邪魔なものはすべて排除するだけだからね。今はまだ彼氏のことを知らないだろうけど、いざ知るところとなったとき、邪魔者と認定して行動を起こすかもしれない」

それは十分に説得力のある話だった。だとすれば、悠人はそれが

わかっていながら、澪が気づいていないのをいいことに、半ば脅すようにあんな条件を持ちかけたことになる。ほとんど詐欺じゃない?? 澪はそのことに対する怒りと、絶望的な展開への不安に、眉根を寄せて口を引き結んだ。

悠人は自嘲ぎみにふつと笑った。

「どうも澪に嫌われることばかりしてしまうな」

「嫌いになったりしません……なれませんか」

それが澪の率直な気持ちだった。彼の行為については腹立たしく思っているが、結局のところ、彼のことは嫌いになれそうもない。自分たちが共有した17年という時間の積み重ねは、それほど軽いものではないのだ。

「澪、僕は君のことが好きだ」

今さらのように、悠人はそんなことを言う。

結婚のことは何度も聞いていたが、好きだと言われたのは初めてかもしれない。わかっていなかったわけではない。けれど、はつきりと言葉にされると、胸がギュツと締めつけられて息が詰まりそうになった。それをごまかすように、澪は精一杯の笑顔を作って冗談めかす。

「そういうことは最初に言わないとダメじゃないですか」

「澪が18になるまで待つつもりだったんだ」

悠人はどこか遠くを見やり、静かに言った。僅かに目を細めて続ける。

「いろいろと想定外のことが起こったせいで、こんなことになってしまったけれど、本当は今の時点では結婚についてほめかすだけの予定でね」

悠人と二人で『湖畔』を返却に行ったときのことが、澪の脳裏によみがえる。そう、あのときが始まりだった。それまではずっと家族のような存在だったのに、急に結婚などと言われ、彼のことを意識せざるをえなくなってしまったのだ。

「なぜだろうな、澪が了承してくれるものと当然のように思い込ん

でいた。僕以外の人を好きになるとは考えもしなかった。でも、君は変わってしまった。こんなことなら、僕の気持ちをもっと早くに伝えておくべきだったと後悔しているよ。そうすれば澪も素直に受け入れてくれたかもしれない……だろう?」

彼に同意を求められるが、澪には答えることが出来なかった。確かに、誠一と知り合う前だったら、そういう選択肢もなかったとはいえない。けれどそんな話は無意味である。どちらにしても過去に戻ってやり直すことなど不可能なのだから??。

悠人はそつと振り向いて澪を見つめた。

「澪、もしも心ならず僕と結婚することになっても、心を閉ざさないで今までと変わりなく接してほしい。身勝手なことばかりしておいて、こんなことを頼める立場ではないが、必ず君を大事にすると誓うから……」

真摯な言葉がずっしりと澪の心にのしかかる。茶化すことも笑い飛ばすこともできず、かといって頷くわけにもいかず、その重みに耐えるように、ただ固く口を結んでうつむいていた。無意識のうちに握りしめたスカートの裾は、跡が付きそうなほど強く皺になっていた。

力チヤリ??。

憔悴した足取りで、澪は扉を開けて部屋を出た。凜と冷えきった廊下の空気が、火照った体には心地よく感じられる。ぼんやりとしていた頭も明瞭になってくるようだった。

どうしてこんなこと??。

やる方のない溜息を落とし、ドアノブからそつと手を離す。そのとき、すぐ隣に、腕組みした遙がいることに気がついた。驚いて思わず声を上げかけたが、遙が人差し指を唇に当てたのを見て、すんでのところでそれを呑み込んだ。

黙って歩き出した遙に並んで、澪も同じ速度で歩く。

「聞いてたの?」

悠人の部屋から遠ざかると、漣は後ろで手を組んでぼつりと尋ねた。

「万が一ってこともあるから、いざというときは助けに入ろうかと思っ」

遙は足を止めることなく答える。無表情の横顔からは、彼がどういう気持ちでここへ来たのか、読み取ることはできない。漣は大きく顔を上げ、窓越しに星空を見つめて目を細めた。

「もし、私が条件を飲むって言ったら……止めに来てくれた？」

「師匠はただ試してただけで、本気じゃなかったと思うけどね」

「そっか……」

漣は白い吐息をもらした。澄んだ冬空に鏤められた星々は、何かを語りかけてくるかのようにキラキラと瞬いている。目の奥がじわりと熱くなった。そつと瞳を閉じて小さく息を吸い込むと、何かを振り払うようにパツと表情を晴らし、黒髪をなびかせながらくると遙の前に躍り出た。

「ね、今日は遙のところで寝させて？」

「急になに？ 嫌だよ、狭いんだから」

遙はいつものように投げやりな口調でそう答えた。

「今日だけでいいから」

「どうして？」

溜息さえ聞こえてきそうな眼差し。

漣は戸惑いがちに笑みを浮かべると、身を翻してゆっくりと一歩ずつ足を踏み出す。

「……さみしいんだもん。家族が一人、家族じゃなくなったみたいで」

こんなことくらいで自分たちの関係が壊れたりはしない。けれど、ただ純粹に信じていた頃とまったく同じというわけにはいかない。彼の想いを知ることではなくしてしまったもの、変わってしまったものは、きつともう二度と元通りにはならないだろう。

不意に、左手が何かに包まれた。

それは遙の手だった。最初はひやりと冷たく感じたものの、触れ合ったところから熱が生まれて、次第にじんわりとあたたかくなってくる。女の子のようにほっそりとした彼の手が、このときばかりはやけに大きく感じられた。

「僕はいつまでも漣の家族だから」
そつと落とされた言葉。

多分、それは今の自分が一番ほしかったもの??漣はうつむいて目頭を押さえると、小さく頷き、繋がれたままの彼の手をギュッと握り返した。

「知らなかったなあ、誠一が絵に興味あったなんて」

久しぶりに二人の休日が重なったとある日曜日、漣と誠一は、都立西洋美術館のイタリア・ルネサンス美術展に向かっていた。誠一の提案である。たまには美術館できれいな絵を見るのもいいんじゃないかと言われ、漣も賛成したが、その彼らしからぬ高尚な発言については少し驚きを感じていた。

「誠一が興味あるのってエッチなゲームくらいかと思ってたのに」
「それを蒸し返すなって……」

誠一は苦笑すると、ブルゾンのポケットに両手を突っ込んで空を仰いだ。

「実はそこまで絵に興味があるわけじゃないんだよな。今まで美術館なんて数えるほどしか行ったことないし。今回、ルネサンス展を見に行く気になったのは、たぶん怪盗ファントムの影響なんだろうなあ」

「えっ……?!」

唐突に出てきたその名前に、漣の心臓はドクンと跳ねた。

「漣も知ってるよな？ 世間を騒がせている絵画泥棒」

「うん、聞いたことはあるよ」

早鐘のような鼓動を必死に抑えながら、控えめにそう答える。いつもと違う不自然な口調になったが、誠一に気付いた様子はなく、ポケットに手を入れたまま淡々と足を進めていた。

「そいつに関連して、最近テレビや雑誌でよく絵画の特集が組まれていてな。あれこれ見ているうちに、何となく興味をひかれるようになったんだよ。そういうのは俺だけじゃないみたいで、美術館の入場者数はどこも増加傾向にあるらしい。だからといって、怪盗ファントムを容認するわけにはいかないけども」

怪盗ファントムを容認しない??警察の人間としては至極まっつと

うな発言である。彼がそう考えるだろうことはわかっていたし、覚悟もしていたつもりだったが、それでもはつきり口にされるとやはり居たたまれない気持ちになる。

「もし、美術館でファントムと鉢合わせしたらどうするの？」

「もちろん捕まえるさ」

誠一は力強く断言する。が、すぐにふつと微笑んで振り向いた。

「といつても今日は来ないだろうし、心配しなくても、俺たちのデートが邪魔されることはないよ」

無論、澪が心配しているのはそういうことではない。だからといって訂正するわけにもいかず、うつむいたままハンドバッグを後ろに持ち直し、そうだといいんだけど……と曖昧に言葉を濁した。

「怪盗ファントムは予告なしに盗まないから大丈夫だよ。美術館が通報してない可能性もないとはいえないけど、少なくとも都立西洋美術館というのはありえないだろうな」

「え？ どういうこと？」

澪は瞬きをしながら顔を上げた。

「怪盗ファントムがこれまで盗んだ絵画は、すべて近代日本人作家の作品なんだよ。先代からずっとね。だから、西洋美術しか扱っていない都立西洋美術館には、怪盗ファントムの目当てとなるものはないはずなんだ」

「へえ……」

先代のことはよく知らないが、澪たちがこれまで盗んだものは、確かにすべて近代日本人作家の作品である。ただ、それを決めているのは祖父であり、澪としてはそんなことに気付きもなかったし、何か意味があるのかもわからない。

「もうひとつ豆知識」

澪の感嘆したような反応が嬉しかったのか、誠一はそう声を弾ませる。

「怪盗ファントムは東京都内でしか活動してないらしいよ。おそらく東京都民なんだろう。自分の土地勘のあるところだけに標的を絞

つているといふ説が有力だ。やることは大胆なくせに、意外と慎重なところがあるんだよな……だから捕まらないんだろっけ」

またしても澁の知らない事実を誠一から聞かされる。核心に迫る内容ではなく、ただの分析でしかないが、澁の不安を煽るには十分だった。

「随分詳しいみたいだけど、誠一、ファントム担当じゃないよね？」

「仕事は関係ないよ」

誠一は苦笑しながら答えた。それから、少し目を細めて静かに続ける。

「刑事が言うのは問題かもしれないけど、実は俺、子供のころ怪盗ファントムに憧れてたんだよ。テレビのニュースとか食い入るように見ててな。もつとも、そのころはまだ怪盗の意味もよくわかってなかったし、単純に見た目やパフォーマンスが好きだったってだけの話だけど」

「そ、そう……」

澁の顔が僅かに引きつった。よりによって自分と最も親しいといえる人が、子供の頃のこととはいえ、怪盗ファントムに憧れていたなんて?? いや、子供の頃だけなら問題はなかった。さすがにもう憧れてはいないだろうが、今でも関心はあるらしく、怪盗ファントムの動向には大いに注目しているようだ。これではちょっとしたことで正体を疑われかねない。ただの雑談でも上手く対処できる自信がないのに、核心を突かれでもしたら、嘘をつくのが苦手な自分ではごまかしきれないだろうと思う。

「もしかして、呆れてる？」

「えっ？」

誠一の声で現実に引き戻された。苦笑を浮かべる彼を目にすると、慌ててふるふると首を横に振る。

「そうじゃなくて……遥も同じようなこと言ってたから、ちょっとビックリしちゃって」

「遥が？ そっちの方が意外だな」

これがきつかけとなり、話題は怪盗ファントムから遙へと移っていく。なんとかこの状況を乗り切れそうなことに、漣はほっと安堵するが、同時に小さく刺すような痛みが胸に走った。しかし、そのことは、意識の奥底へそつと静かに沈められた。

「やっぱりけっこう人が来てるね」

混雑というほどではないものの、美術館の正面は、小学生から老年寄りまで多くの人たちで賑わっていた。二つあるチケット売り場にも列が出来ている。誠一の言うように怪盗ファントムの影響もあるのかもしれないが、このイタリア・ルネサンス美術展には誰でも知っているような有名な作品が展示されており、絵画や美術に詳しくなくても興味をひかれる人は多いのだろう。

誠一が前売り券を持っていたので、チケット売り場ではなく直接入口の方へ向かう。そこにも多少の列はできていたが、進みは早く、ほとんど待つことなく入れそうだった。二人はその最後尾に並び、ほどなくして受付まで来ると、誠一は係の女性に前売り券2枚を手渡した。

??瞬間。

漣たちの背後を何かが勢いよく通り抜けていった。つむじ風が起こり長い黒髪を舞い上げる。不思議に思いながら美術館内に振り向くと、その視線の先には??。

「怪盗ファントムだ!!!」

館内にいた誰かが叫んだ。黒いジャケットとプリーツスカートを身につけた人物が、長い黒髪を大きくなびかせながら、啞然とする人々の間を、素早い身のこなしで縫うように突っ切っていく。

それを目にした途端、漣は我を忘れて駆け出していた。

「おい、漣!」

呼び止める誠一の声も耳に入らない。脇目もふらず、黒い背中だけを追って全力疾走する。

すぐに距離は縮まる。

後ろからジャケットの腕を掴んでうつぶせに引き倒すと、手首をねじり上げながら馬乗りになり、もう片方の手を背中側に押さえつけた。顔を覆っていた白い仮面は、床に倒れた衝撃で顔から外れ、カラカラと軽い音を立てながら滑るように転がっていく。

あつというまの出来事だった。まわりはみな怪訝な顔をしている。「溇！ 大丈夫か?!」

少し遅れて誠一が走ってきた。その手には溇の白いハンドバッグが握られている。追いかけるときに放り投げた記憶があるので、それを拾ってきてくれたのだろう。

「うん、私は平気」

溇は拘束の手を緩めることなく、小さく微笑んで答える。

誠一はほっとしたように息をついた。そして、両手を腰に当てながら、まじまじと見下ろして言う。

「しかし、まさか怪盗ファントムを捕まえるとはな」

「……えっ?」

溇はあらためて捕らえた人物に目を落とす。見事なくらいに怪盗ファントムそっくりの衣装を身につけているし、髪型もほぼ同じといってもいいくらいだが、自分でなく、遥でもなく、全くの見知らぬ女性である。

「違うの！ この人はただのニセモノ……よね?」

「そうだけど悪い?! 放してよ！ 痛いじゃない!!」

彼女は横目でキツと睨みつけながら、じたばたして拘束を振り払おうとするが、溇は逃さないようしっかりと握りしめる。先ほどの身のこなしからすると運動神経は悪くなさそうだし、女性にしては腕力もある方だと思うが、この体勢ではどう頑張っても溇から逃れることはできないだろう。

「だよなあ、ファントムにしちゃあ、脚が太いと思ったんだ」

溇たちを見下ろしていた野次馬のひとりが、両手を腰に当てながらそう言っ、ガハハと豪快に笑い声を響かせた。つられるように、あちらこちらで遠慮がちに失笑が起こる。

「脚だけじゃなく全体的に太めなんだよな」

「それに本物はもうちょっと背が高いだろ」

「そうそう、足もこんな短くねえしな」

今度は若い男性たちのグループが、口々にそんなことを言い始めた。

「悪かったわね!!」

偽ファントムは頭から湯気が立ちのぼりそうなくらい真っ赤になっていた。自業自得といえばそうなのかもしれないが、さすがに同じ女性として少し気の毒になり、漑は同情的な眼差しを彼女に向ける。しかし??。

「どちらかっていうと、こっちの嬢ちゃんの方がファントムっぽいよな」

突然、野次馬の矛先は漑に向けられた。一瞬、漑は何を言われているのか理解できず、指をさされたままぼかんとするが、その意味に気付くと大きく息をのんで目を見開いた。

「私?! ちょっとそれ絶対に違いますから!」

「おいおい、そんなにムキになって否定することもないだろう。嬉しくないのか? 怪盗ファントムって巷じゃスタイル抜群の美少女怪盗とか言われてるんだぞ?」

「嬉しいわけじゃない! は、犯罪者なんだからっ!!」

漑は顔を上気させながら必死に反論したが、なぜか相手の男性は腰を屈めて噴き出した。

「確かにそうだ、悪かった悪かった。にしても真面目な嬢ちゃんだなあ」

彼が陽気にそう言うと、まわりもつられて笑い出した。誠一も一緒になって笑っている。

どうやら怪しまれてはいないようだ。そのことについてはほっと胸を撫で下ろしたものの、からかわれたように感じてムツとし、漑は無意識のうちに偽ファントムを掴む手に力を込めていた。

「痛っ! いつまでこうしてるつもり?! いいかげん放しなさい

よ！」

偽ファントムが再びじたばたして喚き始めた。

「もともと何も盗むつもりはなかったの！ ただの大学サークルの余興よ！ 怪盗ファントムの格好で美術館を一周してくることになつて、私は先輩の命令で仕方なくやつただけなんだから」

「大学生にもなつて、やつていいことと悪いことの区別もつかないのか」

誠一は説教じみた口調でそう言いながら、ブルゾンの内ポケットから携帯電話を取り出した。それを見た偽ファントムの顔がさっと青ざめる。

「ちよつとやめてよ！ 何も盗んでないじゃない！！」

「でも君、入場料、払ってないよね？」

「は?!」

彼女は全力で目を丸くした。

「払うわよ、払えばいいんでしょ！」

やけっぱちのように声を張り上げる彼女に、誠一は冷やかな視線を投げかけた。再びブルゾンの内ポケットに手を差し入れると、黒い手帳を取り出して開き、床に倒された彼女の鼻先にそれを掲げる。

「警視庁捜査一課の南野だ」

偽ファントムはぎよつとして目を見開き、絶句した。野次馬たちからは「おおー」と感嘆の声が上がる。誠一は警察手帳をしまつと、手にしていた二つ折りの携帯電話を開いた。

「君が本物が偽物かもまだわからないからな」

「サークルの余興だつて言つたでしよう?!」

「言いわけは取り調べのときにしてくれ」

そう言つと、素早くいくつかのボタンを押して携帯電話を耳に当てる。観念したのか、彼女はもう暴れることも騒ぐこともなかった。

「捜査一課の南野です」

おそらく警視庁のどこかに電話したのだろう。ここでの出来事や

現在の状況などを的確に説明していく。普段はほとんど意識していないが、こういう一面を見ると、やはり誠一は刑事なのだ実感せざるを得ない。タイル張りの床に押さえつけられた偽フロントムの後ろ姿が、おぼろげに自身と重なり、漣はその手首を掴んだままきゅっと口を引き結んで眉を寄せた。

その後、現場にやってきた刑事たちとともに、漣と誠一も警視庁へ行くことになった。

調書作成のためである。

漣が調書をとられるのはこれで二度目だった。以前、誠一と出会うきっかけとなった事件のときに、やはり警視庁で調書をとられたことがあったのだ。そのときに捜査一課の刑事たちと知り合いになり、一時期はよく差し入れを持って遊びに行ったりもしていた。しかし、今回は担当の課が違うらしく、見知った刑事はひとりもいなかった。

調書作成は十数分で終わった。

自宅まで車で送るといふ担当者の申し出を断り、漣は応接室で誠一が戻ってくるのを待たせてもらうことにした。彼は取り調べに立ち会っているので時間がかかりそうだと聞いたが、このままさよならも言わず一人で帰る気にはなれなかった。

ふと思いついて自宅に電話をかけたが、すでに警察の方から連絡がいつていたようで、執事の櫻井が大袈裟なくらいに心配していた。怪我もなく無事だということも、調書をとるだけということも聞いていたが、それでも漣の元気な声を耳にするまでは安心できなかったらしい。こんなことなら、もう少し早く電話しておけばよかったと申し訳ない気持ちになる。

自宅への電話を終えたあと、出されたお菓子をつまみながらお茶を飲んでみると、今度は悠人から電話がかかってきた。さすがに彼は落ち着いた口調だったが、心配している様子はひしひしと伝わってきた。ただ、それは漣自身でなく、漣の状況、つまり警察と関わ

っていることに向けられているようだった。偽者とはいえ怪盗ファントム関連の事案となれば、彼の不安もわからなくはない。

「でも、本当に今日の事件のことしか聞かれてないし、言っていない。疑われてもいませんから。少しは私のことも信じてほしいんですけど」

『澪は自分で墓穴を掘っても気付かないからな』

「いくらなんでもそこまでひどくありません！」

思わずむきになって言い返すと、電話の向こうで悠人がくすくすと笑い出した。

『じゃあ、とりあえず信じることにするよ。まだ帰れないのか？』

「あ……もう少し、かな？」

誠一のことを話すわけにはいかないので言葉を濁す。あとのくらくらいかかるのか、澪には見当もつかない。

『今なら抜けられそうだから迎えに行くよ』

「えっ?!」

澪は素っ頓狂な声を上げて、ソファから飛び上がった。携帯電話を耳に当てたままあたふたする。

「あ、えつと、でも友達と一緒にだから……」

『もちろん友達も乗せていってあげるよ』

下手なごまかしのせいで、ますます難儀な展開になった。誠一と悠人を会わせるわけにはいかない。どうにかしてこの危機的状況を回避しなければならぬが、焦れば焦るほど頭が混乱してしまい考えがまとまらない。携帯電話を持つ手がじわりと汗ばんでくる。

『友達つて、彼氏？』

沈黙を破ったのは悠人だった。

いきなり凶星を指されて心臓が止まりそうになったが、もう言い抜けられないと思い、澪はこくりと頷きながら小さく肯定の返事をする。受話器から微かな吐息が聞こえた。

『わかった。あまり遅くならないうちに帰ってこいよ』

悠人は怒ることも責めることもなく、それ以上の干渉をすること

もなく、ただ保護者として最低限の言葉だけを返した。その静かな声に胸を衝かれ、漣は携帯電話を耳に押し当てたまま目を伏せる。

「ごめんなさい」

『別にデートを禁止した覚えはないよ』

「そうじゃなくて、嘘をついたから……」

『漣に嘘をつくように強要している僕が、それを咎めるわけにはいかないだろう。どうせならもっと上手く嘘をついてくれ。ごまかし方が下手すぎて心配になってくるから』

悠人はそう言って笑った。

どうして信じられなかったのだろう、妨害しないと云ってくれた彼とその言葉を。彼がそんなことをするような人でないことはわかっていたはずなのに。漣は今さらながら心苦しさを感じてうつむく長い黒髪がさらさらと肩から落ち、カーテンのように視界を遮った。

『漣、好きだよ』

まるで心情を察したかのような不意打ち。こんなときにこんなことを言うなんて反則だと思いつつ、不覚にもドキリとしてしまい、そんな自分に納得がいかず耳元を赤く染めながら眉をひそめた。

「……あの、少しは自重してください」

『かなり自重しているつもりだけどね』

悠人はしれつと答える。その態度は腹立たしいが、冷静に考えてみれば確かにそうなのかもしれない。漣と二人きりのときにしかそういう一面を見せないのだから。

「……もう切りますよ」

『ああ、彼氏によろしくな』

「言いませんから！」

からかいぎみに掛けられた言葉にカツとして言い返し、漣は携帯電話を切った。それを折りたたみながら、ふうと細く息を吐く。悠人はまったく諦めていないようだ。今後もこういうことが続くのだろうか。そして、いずれは彼の望むとおりになってしまふのだろうか?? 静かに語られた真摯な想い、燃えたぎるような眼差し、重ね

られた唇の感触が、その熱とともによみがえってくる。

「ひゃあ！」

ガチャリ、とすぐ後ろで扉が開き、漣は飛び上がりそうになった。バクバクと暴れる鼓動を抱えて振り返ると、そこには目をぱちくりさせている誠一が立っていた。

「どうしたんだ？」

「ううん、何でもなし。ちょっと考えごとをしてたから」

漣は小さく肩をすくめてそう取り繕うと、携帯電話をそっとポケットにしまった。

「もう帰れるの？」

「ああ、長いこと待たせて悪かったな」

少し疲れているようだが、誠一は笑顔を見せて答える。

それだけでもややもやした気持ちが晴れていくようだった。今はもう余計なことを考えたくない。漣はソファに置いてあったハンドバッグとコートを掴み取ると、戸口で待つ彼のもとへ一目散に駆けていった。

「どうやらサークルの余興というのは本当だったみたいだな」

二人並んで廊下を歩いていると、誠一は当然のように偽ファントムの話の切り出した。漣としてはなるべく避けたかったのだが、急に話題を変えるのも不自然だと思い、とりあえずおとなしく耳を傾けることにした。

「サークル仲間や友達からも証言をとったが、すべて偽ファントムの供述と一致している。本当に美術館を一周するだけのつもりだったんだろう。念のため、これから関係各所の家宅捜索をしてくるとは言っていたけど」

「へえ、そこまでするんだ……」

「怪盗ファントムの格好をしたから一応な」

警察が慎重になるのも当然のことかもしれない。すでに幾度となく怪盗ファントムにしてやられており、警察の威信も失墜しかけて

いる今の状況では、どんな些細な手がかりでも無視できないのだから。

「残念だったな」

「えっ？」

「本物だったらまた表彰してもらえたのに」

「ああ……そんなの別にいいよ」

そのことだったのかと安堵して、澪は苦笑を浮かべる。誠一と出会うきっかけとなった事件、つまり逃走中の殺人犯を取り押さえたことで、澪は警視庁から感謝状を贈られていた。もし怪盗ファントムを捕まえたとなれば、再び感謝状を贈られることは間違いないだろう。ただ、それは絶対にありえないことなのだが??。

「おう、南野じゃないか！」

通りかかった一室から出てきた体格のいい男性が、豪快な声を廊下に響かせた。誠一の先輩刑事の岩松である。澪とも顔見知りであるが、間に誠一を挟んでいるため気付いていないようだ。分厚いファントムを脇に抱え直しながら、不思議そうに誠一を見下ろして尋ねる。

「おまえ、こんなところで何やってんだ？ 今日是非番だろう？」

「そうなんですけど、美術館で偽ファントムを捕まえてしまっ

誠一は慌てる様子もなくさらりと答えた。

「なんだ、あれを捕まえたのはおまえだったのか」

「あ、いえ、正確には自分ではなくて……」

「お久しぶりです、岩松さん！」

そう言いながら、澪は誠一の背後からひょっこり飛び出し、後ろ手にハンドバッグを持ちながら、屈託のない晴れやかな笑顔を見せる。岩松の顔にもぱつと笑みが広がった。

「澪ちゃんじゃないか。久しぶりだなあ！ ぱったり来なくなつて寂しかったぞ」

もともと誠一に振り向いてほしいがゆえに通っていたので、目的を達成してその必要がなくなつたわけだが、岩松を始めとする仲良

くなつた刑事たちに会いたいという気持ちはあつた。それでもあえて行かなかつたのは、誠一と付き合っていることを隠しておける自信がなかつたからである。当然ながらそんな理由を口にできるはずもなく、漣はただ曖昧にごまかし笑いを浮かべるだけだつた。

「もしかして漣ちゃんが捕まえたのか？」

「あ、はい、偶然出くわしちゃつて」

そう答えると、岩松の顔が曇つた。漣の頭に大きな手を置いて覗き込む。

「あまり無茶なことはするんじゃないぞ？」

「気をつけます」

漣は小さく肩をすくめた。それほど危ないことをしたつもりはなかつたが、心配してくれる気持ちが嬉しくて素直にそう答えていた。岩松は笑顔で頷きながら体を起こすと、腰に手を当て、並んだ二人を交互に見て不思議そうに言う。

「それで、なんでおまえら一緒なんだ？」

「美術館で偶然会つたんですよ」

ギクリとした漣とは対照的に、誠一はいたつて冷静に答える。それは、警視庁に来る前に二人で示し合わせたことで、偽ファントム担当の刑事たちにも同じ説明をしていた。彼らには特に疑われることはなかつたが、岩松には引つかかるものがあつたようだ。

「偶然？」

「本当に偶然ですっ！」

漣はそう力説した。岩松は怪訝に眉をひそめて考え込むと、ゆっくりと視線を戻す。

「もしかして、漣ちゃんの言つてた『好きな人』って、南野のことだつたのか？」

「ちつ、違いますよ！ 全然違います！ 変なこと言わないでください！」

確かに好きな人がいると言つたことはあつたが、一年以上も前のことであり、そんなどうでもいい話をよく覚えているものだと思

感心してしまう。しかし、凶星でも認めるわけにはいかず、漣は懸命に両手を振って否定するしかなかった。

「漣、もういいよ」

誠一は額を押さえてうなだれ、溜息まじりに言った。そして、小さく息を吸って顔を上げると、真剣な眼差しを岩松に送りながら、意を決したように口を開く。

「すみません岩松さん。自分たちは、1年ほど前から付き合っています」

「ちよつと誠一……！」

二人の交際を隠していたのは、恥ずかしいとか、照れくさいとか、言い出しにくいとか、そういう心情的な理由ではない。漣の年齢が問題になりかねないからだ。それなのに自分から白状するなんて？あまりのことに、漣は頭の中が真っ白になった。

「で、でもっ！」

とつさに口をついた逆接の接続詞。何を言おうとしているのかわ分でもわからなかった。額に汗を滲ませて必死に思考を巡らせると、パツと岩松に向き直り、こぶしを握りしめながら全力で言い放つ。

「私たちは清く正しいお付き合いだから！！」

人通りのない無機質な廊下に、漣の声が反響した。

付き合っていることを認めてしまった以上、彼の立場が悪くならないようにするには、こう言うしかないと思ったのだが、なぜか誠一は絶望的な顔で大きく頭を抱えてしまった。

「漣ちゃん、俺が刑事だってことは知ってるよな？」

「あ、はい……？」

当たり前前のことを岩松に問いかけられ、漣は戸惑いきみに返事をした。

「刑事の仕事は何だと思う？」

「犯罪者を逮捕すること、ですか？」

「そう、そのためには何を？」

「……全力疾走？」

澁が首をひねりながら答えると、岩松はハハハと声を上げて笑った。

「まあそういうときもあるが、普段は地道に聞き込みをやってるんだ。それが仕事の大半だといってもいいくらいさ」

澁は怪訝に眉を寄せて小首を傾げた。何の脈絡もなく刑事の仕事を語り出したわけではないだろうが、一向に話が見えず、もやもやしたものが胸にわだかまる。かといって、それを聞き出すのも何となく怖いような気がして躊躇われた。

岩松はふつと表情を緩めて言葉を繋ぐ。

「だから、相手が嘘をついているか見分ける力が自ずとついてくる。逆にいえば、そうでなければ刑事は務まらない。俺は現場一筋20年だ。澁ちゃんが必死に南野を庇おうとしていることくらい、すっかりお見通しさ」

「あつ……」

返す言葉はなかった。今さら何を言ってもごまかしようがないだろう。澁は表情をこぼらせて目を伏せる。しかし、事の重大さを理解しているのかいないのか、誠一に深刻な様子は窺えず、両手を腰に当てて疲れたように軽く溜息をつくだけだった。

「刑事じゃなくてもわかると思いますよ」

「まあ、そついやそつだな」

岩松は白い歯を見せた。そして、澁を覗き込みながら、大きな手をぽんと頭にのせる。

「みんな澁ちゃんみたいにわかりやすいと、俺たちも苦労しなくて済むんだがな」

「あの、このこと……」

澁は上目遣いでおずおずと切り出す。

岩松は頭をかきながら、鼻から小さく息をついた。

「誰にも言わないでやるよ。バレて問題になっても庇ってはやれないけどな」

「ありがとうございます！」

澪はぱつと表情を明るくすると、大きく弾むように頭を下げた。長い黒髪が軽やかに舞う。知られた相手が岩松で良かったと心から思った。隣では、誠一も深々と頭を下げている。ちらりと盗み見た横顔には、隠しきれない安堵が滲んでいた。

岩松の目が優しく細められる。

「良かったよ、澪ちゃんが幸せそうで」

「はい！」

澪は満面の笑みを浮かべて答えた。

「また遊びに来てくれ、と言いたいところだが、澪ちゃんの場合はすぐにボロが出るからな。高校卒業するまでは来るんじゃないぞ」

岩松はそう言うと、左手を振りながら背を向けて歩き出した。その大きな背中に、ふたりは感謝をこめて深くお辞儀し、遠ざかっていく後ろ姿を見えなくなるまで見送った。

まだ夕方を少し過ぎたくらいの時間だが、冬の日暮れは早く、外はもうすっかり夜の帳が下りていた。寒さもいっそう厳しさを増しているようだ。軽く息をつくだけで、白いもやがふわりと浮かび上がる。

「バレちゃったね」

並んで歩く誠一を見上げ、澪は後ろ手にハンドバッグを持ちながらエヘへと笑った。

「笑いごとじゃないんだぞ。まあ、澪を連れてきたときから覚悟はしてたけどな」

「私のせいなの？ 私、一生懸命ごまかそうとしたよ？」

口をとがらせてそう詰め寄ると、誠一は前を向いたまま飄々と言い返す。

「澪、墓穴って言葉を知ってるか？」

「……………」

悠人にも電話で同じようなことを言われたばかりである。まったく関係のない二人から言われてしまうのは、やはり自分にそういう

面があるからだろうか？？そんなふうには考えてはみるものの、自覚はなく、すぐに納得して受け入れることは難しい。

「今度こういうことがあったら、頼むから黙っててくれないかな」
謙虚になろうとしていた漣も、この追い打ちにはさすがにムツとして口をとがらせた。しかし、そんな漣を横目で見ながら、誠一はくすつと小さく笑った。宥めるように頭に手を置くと、濃紺の空を見上げて息を吸い込む。

「ずっと漣と一緒にいたいんだよ。だから……」

「うん、私もずっと一緒にいたい」

漣は彼の腕をギュツと抱え込んで寄りかかる。大っぴらにできない関係である以上、本来こういったことは控えねばならないが、今このときだけは許してほしいと思った。誠一も同じ気持ちだったのだろう。無言のまま、優しい眼差しで肩に寄りかかる漣を見下ろしていた。

目の前を白いものがふわりと落ちていく。

ふたりは同時に顔を上げた。上空からはらりはらりと舞い降りる雪を目にして、どちらともなく足を止める。

「積もるかな？」

「東京に積もるのは嘘だけだよ」

「嘘？ なにそれ？」

漣がきよとんとして聞き返すと、誠一は白い息を吐いて笑った。

「青森のばあちゃんの口癖。東京が嫌いみたいでさ」

彼の祖母が青森にいることさえ漣は知らなかったが、その懐かしむような口調を聞いていると、何となく割り込むのを躊躇ってしまい、ただじつと彼に寄りかかりながらその横顔を見つめていた。

「嘘はまあともかくとして、確かに雪はほとんど積もらないよな。

この雪も、積もるような降り方じゃないし、積もったとしても多分すぐに融けるよ」

「そっか……」

嘘も雪みたいに融けてなくなってしまえばいいの？？漣はふと

そんなことを思う。けれど、それは叶わぬ願い。澪自身が望む望まないにかかわらず、言えないことは次から次へと増えていく。もしかすると、最も嘘をつきたくない相手に、最も多くの嘘をつかなければならないのかもしれない。

綿のような雪が頬に触れ、融けて水になった。

澪はその沁み入る冷たさに目を細めると、冷えた指先で、そつとなぞるようにそれを拭いた。

「セカンド、10分前だ。そろそろ準備してくれ」
「了解」

澁は高層ビル屋上の隅にペタンと座ったまま、ヘッドセットから聞こえる悠人の指示に、寒さに身を震わせながら返事をした。それだけで白い息が浮かぶ。どうせなら早く始めてしまいたい??そんな投げやりなことを思いつつ、膝を抱えてそこに顔を埋めた。

今日はデビュー戦のときと同様に、ハンググライダーで目的の美術館に降り立つ予定になっている。一度であればまだしも、二度三度と繰り返し返せば、必然的に行動を読まれる危険性も高くなるだろうし、澁としてはまったく賛成できなかった。しかし、剛三は、澁の忠言など聞く耳を持たない。久しぶりに派手な登場を演出できることが嬉しいらしく、迷惑この上ないが、今日はいつも以上に鼻息を荒くしていた。

すでに怪盗ファントムの衣装は身につけ、ハンググライダーも組み立ててあり、あとは仮面をかぶってハーネスを装着するくらいである。澁は溜息をつきながら、足もとの白く冷たい仮面を手にとった。そのとき???

ガシャガシャン!!

ビル内部へと通じる扉が乱暴に開き、そこから男が飛び出してきた。澁は慌てて仮面をつけて息を潜める。屋上はかなりの広さがあり、そのうえ夜で照明もほとんどないため、隅の物陰にいた澁には気付いていないようだった。

鍵をかけてあったのに、どうして???

遠目でありはつきりとは判別できないが、ブルゾンとジーンズというラフな格好で、少なくとも警察官や警備員には見えなかった。彼は焦つてきよるきよるとしたあと、思い出したように扉を閉めに走る。しかし、閉めようとしたその扉がすさまじい勢いで開き、彼

は弾き飛ばされて背中から倒れ込むと、額を押さえて苦しげな呻き声を上げた。

「もう逃げ場はないぞ！」

そう怒号を上げて飛び出してきた二人は??。

うそっ!!

漣は両手で口を押さえて息を呑んだ。

それは警視庁捜査一課の岩松、そして、あるうことが誠一だった。往生際悪く這って逃げようとする男に、岩松は素早く飛びかかり、体ごとのしかかって両腕をコンクリートに押さえつけた。その手首に、誠一は手錠をかける。そして、安堵したように大きく息をつくと、額の汗を拭いながら体を起こした。

「南野、おまえは屋上を一通り調べてこい。ここへ逃げ込んだのは理由があるのかもしれない。鍵まで用意していたみたいだからな」
「わかりました」

岩松の指示を受け、誠一は小走りで漣のいる反対側へ向かった。すぐにこちらへ来なかったことには幾分ほっとしたが、それでもこのままではいつか見つかってしまうだろう。漣は青ざめながら、声を潜めてヘッドセットに助けを求める。

「副司令、どうしよう！ 刑事が来たの！」

「何っ?!」

さすがの悠人もこれには驚きを隠せなかった。しかし、冷静さは失っていない。すぐさま落ち着いていた声で状況を尋ねていく。

「気付かれていないのか？」

「はい、でも時間の問題です」

「いま仮面は？」

「つけてます」

「ハンググライダーは？」

「準備してあります」

「刑事は何人？」

「二人。でも一人は犯人を取り押さえてるから動けないと思う」

澪は出来うる限り端的に答えていく。余裕のある状況でないことは、誰よりも澪が一番わかっていた。恐怖感に押しつぶされそうになりながらも、取り乱さずにすんでいるのは、悠人なら何とかしてくれると信じているからである。

「セカンド、予定より早いがすぐに飛ぶんだ」

「わかりました」

そう返事をするやいなや、音を立てないよう素早く立ち上がり、ハーネスの装着にかかる。誠一は徐々に近づいてきているが、まだ気付いてはいないようだ。しかし、静止しているときと比べて、動いている今は格段に目につきやすい。

「出来るだけ刑事とは関わらず逃げ切れ。もし飛び立つ前に気付かれたら、怪我を負わせない程度にダメージを与えて時間を稼ぐんだ。催涙スプレーを使ってもいい。相手が男性でも君なら出来る」

澪自身も出来れば何事もなく逃げ切りたいと思っている。誠一に蹴りを入れたり催涙スプレーを噴射したりという酷いことはしたくないのだ。どうか気付かないで??そんな精一杯の願いもむなし、誠一はこちらに顔を向けると、ピタリと動きを止めて目を見開いた。「え? 怪盗ファントム……?」

呆然としてうわごとのように言う。しかしすぐにハッと我にかえると、ファントムから目を離すことなく、全身に緊張を漲らせながら声を張り上げる。

「岩松さん! 怪盗ファントムです!! 怪盗ファントムがいます

!?!?!」

「何だと?!」

とはいえ、岩松は手が離せず身動きがとれない。誠一は迷わず一人で突進してきた。その迫力と勢いに圧倒され、澪は思わず後ずさりながら最後の金具をはめる。そして、大急ぎでハンググライダーごとビルの縁に乗り、飛び立つべく体を外に向けようとした、瞬間??強烈なビル風が下方から吹き上がった。短いプリーツスカートは簡単に捲れ上がり、翼は大きく煽られバランスを崩す。

「!!!」

「危ない!!!」

誠一の顔から血の気が引いた。ビルの外側に倒れていく怪盗ファントムを、捕まえようとするのではなく、懸命に助けようとして手を伸ばす。

しかし、彼に助けられるわけにはいかない。

むき出しになった太ももに指先が届きかけた、その瞬間、漣はビルの縁を蹴って後ろ向きに空中へと飛び出した。同時に、視界の隅で何かが白く光った気がしたが、それが何なのかは確認できなかった。

「ファントムーっ!!!」

誠一が必死の形相で叫んでいる。

漣は乱気流に揉まれながらも何とか空中で体勢を立て直し、ゆっくりと旋回すると、目的の美術館へと進行方向を定めた。遠ざかりながら肩越しにチラリと振り返ると、誠一は縁に手をつけて身を乗り出したまま、いつまでもじっとこちらを凝視していた。

「もうイヤ!」

部屋に入るやいなや、漣はきれいに整えられたシングルベッドに飛び込み、枕元にあつた大きなクッションをぎゅっと抱え込んだ。泣きたいけれど泣いてはいない。ただ、無性に何かに縋りつきたくて、そこに深く顔を埋める。まだ戸口にいた部屋の主である遙が、静かに扉を閉めながら、あきらめたように溜息を落とすのが聞こえた。

ハンググライダーで高層ビルから飛び立ったあと、予告時間より少し早かったことを除けば、何の問題もなく鮮やかに盗みを完遂することができた。それゆえ、あの危機一髪の事態は、先ほどの反省会においてほとんど笑い話になっていた。しかし、当事者としてはそう簡単に片付けられないし、片付けてほしくもない。

「本当に心臓が止まるかと思ったんだから! 刑事が来ただけでも

驚きなのに、それがよりによって誠一だなんて……手が届きそうなところまで追ってこられて、バレるんじゃないかと生きた心地がしなかった!!」

その刑事が恋人だったことは遙にしか言っていない。それゆえ、彼にやり場のない気持ちを受け止めてもらおうと思ひ、ここへ押しかけてきたのだが、彼の態度はまったく期待に添うものではなかった。

「でもパンツ見られたの誠一で良かったんじゃない?」
「そういう問題じゃないっ!!」

漣はベッドから跳ね起きて言い返した。長い黒髪がさらりと揺れる。

「このままじゃ、いつか捕まっちゃうよ?」

「捕まらないようにするしかないよね」

まるで他人事のような答え。そんなに突き放した言い方をしなくてもいいの??? 漣は椅子に腰掛けようとする彼を睥睨し、少し頬を膨らませると、クッションをぎゅっと抱きしめて目を伏せる。

「私、自信ない……」

それは何も今に始まったことではない。これまで自信を持ったことなど一度もなく、いつも不安を抱きながら、ただ命じられるままにやってきたのである。けれど、今日のことですます不安が募り、怪盗ファントムを続けることが怖いとさえ思い始めていた。

「ねえ、もうこんなことやめない? やめようよ?」

「じいさんが聞き入れてくれるとは思えないけど」

むう、と漣はしかめ面で唇をとがらせる。剛三の自己中心的な性格は、言われるまでもなく、嫌というほどよく知っている。確かにいくら訴えたところで聞き入れられはしないだろう。そのくらいの優しさがあるのなら、そもそも怪盗などという犯罪行為をやらせたりはしないはずだ。

遙はふっと小さく笑った。

「漣は上手くやってるから自信を持っていいよ。今さらやめたいな

んて言わないでさ、ハタチまでの期間限定なんだから、その間だけ頑張ってみようよ。喜んでくれる人もいることだしね」

「まあ、遙がそう言うのなら……」

完全に納得のいかないまま、漣は低い声でぼそりと答える。漣をメインに据える今の怪盗ファントムは、彼の本意の形ではないはずだが、それでも続行を望んでいるのだろうか。それとも、割り切つて前向きに考えているだけなのだろうか。

「じゃあ、僕はもう寝るから」

気がつけばとうに0時をまわっていた。

遙は机に片手をつけて立ち上がり、部屋の灯りを消すと、漣を押しつけながらベッドに潜り込んだ。仰向けで目を閉じて本当に眠るつもりのようなのだ。その枕元で、漣は膝を抱えて彼を見下ろし、不思議そうに首を傾げる。

「帰れって言わないの？」

「好きにすれば？」

ともすれば冷たく聞こえる返答であるが、そうではなく、彼なりの優しさなのだろうと漣は解釈した。好きにすればいいということは、ここにいてもいいということである。なんだかんだ言っても、遙はいつだって漣のことを気にかけてくれて、誰よりも気持ち察してくれる、一番の理解者であることは間違いない。

「……ありがとう」

漣はくすつと小さく笑ってそう答えると、遙の隣に潜り込み、クッションを枕にして横になった。二人が寝るには少し狭いベッドであるが、だからこそ、一人のときよりもあたたかさを感じられた。

「おはよー」

漣と遙は連れだって教室に入ると、窓際に集まっている友人たちへと足を進めた。一人は男子で富田拓哉^{とみたたくや}、二人は女子で鳴海綾乃^{なるみあやの}と野並真子^{のなみまこ}である。友人というよりも幼なじみといった方が近いかもしれない。幼稚舎から高校までずっと同じ学校、同じクラスであり、

その気楽さゆえか、何となくこのメンバーで一緒に過ごすことが多いのだ。

「なに見てるの？」

漣はすぐ後ろの自席に座りながら尋ねる。

「これこれ」

富田は手にしていたものを漣の机に広げて置いた。

それは三流スポーツ紙だった。

怪盗ファントムの活躍がカラー写真入りで大きく報じられている。いや、報じるといっものは言い過ぎかもしれない。大半は記者の下世話な興味と妄想を書き並べただけのものだ。いかにも三流スポーツ紙らしく、美少女怪盗、スクープ、などという言葉が下品に踊っている。

「きのうのファントムは久々に派手だったらしいぜ」

「へえ、そうなんだ……」

興奮して声を弾ませる富田から、漣は微妙に狼狽えながら目を逸らした。正体が知られそうになったとか、怪しまれたとかいうことはないが、この話題が出るだけでいつもヒヤヒヤして寿命が縮みそうになる。

「やっぱり怪盗はこうでないとな！」

「うん、見ててワクワクするよね」

真子はおっとりした丸顔をほころばせて富田に同意する。しかし、逆に、富田は何かを思い出したように急に表情を曇らせた。

「でも仲間が捕まったとかテレビで言ってたよなあ」

「あれは、仲間の可能性があるってただだよ？」

二人が話題にしているのは、きのう高層ビルの屋上に逃げてきた男のことである。コンビニのレジで強盗しようとする刃物を見せたが、現場に偶然居合わせた刑事に気付いて逃げ出し、かつて勤務していたビルに逃げ込んで捕らえられた、というのが事の顛末らしい。

もちろん、その男は仲間でも何でもなし。

しかし、偶然にも怪盗ファントムの待機場所に逃げ込んでしまっ

たことで、その一味ではないかというあらぬ容疑を掛けられているのだ。ただ、逮捕事由は強盗未遂の件だけである。怪盗ファントムの件はこれから捜査されるのだから、いずれ無関係であることは証明されるだろう。

「怪盗ファントムがコンビ二強盗なんてするわけないし、私は仲間じゃないと思うな」

たいした根拠がないにもかかわらず、真子はなぜか確信したかのように声を弾ませる。その物言いに、澪は何か引っかかるものを感じた。

「ねえ、もしかして真子も怪盗ファントムが好きなの？」

「うん、悪いことをしているのはわかってるんだけどね」

彼女は少し気恥ずかしそうに肩をすくめて肯定した。白く柔らかな頬にほんのりと赤みが差している。それを見た綾乃は、両手を腰に当てて盛大に溜息をついた。

「ったく、真子は流されすぎ」

「綾乃ちゃんは興味ないの？」

真子に尋ねられた途端、綾乃の眉間に深い縦皺が刻まれた。むすつとして腕を組む。

「はつきりいって不快。美少女怪盗とか言われてるけど、顔なんてちっとも見えてないしさあ。こんなものを美少女とか言っておりがたがってるヤツの気が知れん。絶対、マスクをとったらガツカリってパターンだよ」

「ガツカリ……」

澪は斜め下に視線を落としてぼそりとつぶやいた。

「ま、スタイルいいのは認めるけどね」

「そうそう、澪にそっくりなんだよな」

そう言つと、富田は腰を屈めて、じっと観察するような目で覗き込んできた。比較対象は机の上に広げられている。慌てて、澪は少し乱暴に彼の顔を向こうへ押しやった。

「じ、じろじろ見ないでよ！ やらしいっ！」

「そうだぞ、富田、そんな怪盗と比べるな！」

綾乃は両手を腰に当てて富田を睨み、きつい口調で責め立てる。

「比べるまでもなく澗の方が断然上なんだよ」

「怪盗ファントムも負けてないと思うけどな」

富田はニヤニヤしながらそう言い返すと、机の上のスポーツ紙を開いた。その中面には？。？。

「きゃあああつ！！！」

クラス中が振り返るほどの悲鳴を上げながら、澗は全力でスポーツ紙を掻き寄せ、くしゃくしゃになったそれを机の上で抱き込んだ。顔は火照って湯気が出そうなほど真っ赤になっている。

その紙面にデカデカと掲載されていたのは、スカートがめくられて白いパンツが丸見えになっている怪盗ファントムの姿だった。誠一の後ろ姿も少しだけ写っていたようだ。つまり、これはきのう高層ビルの屋上で撮られたものだと思われる。飛び立つ瞬間、強烈な白い光を見た記憶があるが、あれがカメラのフラッシュだったのかもしれない。

「どうしたの？ 澗、そんなにウブだっけ？」

綾乃は眉をひそめて不思議そうに尋ねた。両隣の富田も真子も驚いたような顔をしている。理由がわかつている遙だけは、一歩引いたところで、頭を押さえて溜息をついていた。冷やかな視線を澗に流して言う。

「自分ってわけじゃあるまいし、たかがパンツで過剰反応だよ」

「か、かわいそうじゃない！ 怪盗とはいえ女の子なんだから……」

彼の発言が助け船だったことは理解していた。素直にそれに乗っかればよかったのだが、たかがパンツと言われたことで、澗は思わぬカッとなり反論してしまう。その苦し紛れの主張に、綾乃たちの表情はますます怪訝に曇った。

「なにそんなに必死になつてんの？」

「もしかして、それおまえなのか？」

「えっ？」

まさかの富田に凶星を指され、澪は大きく目を見開いて硬直した。否定しなければと焦りはするものの、頭の中が真っ白になってしまい、何ひとつとして言葉が出てこない。

「財閥のご令嬢が怪盗なんてするわけないよー」

そんなとき、いつもと変わらない真子の声がふんわりと降ってきた。おかげで、張りつめていた澪の心は、幾分か落ち着きを取り戻す。しかし、まだこの窮地を脱したわけではない。富田は親指と人差し指を顎に添えながら、難しい顔で考え込んでいる。

「いや、怪盗の正体は金持ちって話も結構あるぞ」

「澪がファントムだったら全力で応援するけどね」

綾乃は悪戯っぽく白い歯を覗かせた。その表情からしても、口調からしても、おそらく本気だったわけではないのだろうが、このときの澪にそれを察する余裕はなかった。

「ちよつと綾乃なに言ってるの、窃盗は犯罪なのよ?!」

くしゃくしゃのスポーツ紙を抱え込んだまま、顔を真っ赤にして言い返す。

それを見下ろしていた富田と綾乃は、一拍の間の後、同じタイミングでははと豪快に笑い出した。富田は大きく顔を上げて声を響かせ、綾乃はおなかを押さえて前屈みになり肩を震わせる。その隣では、つられるように真子も遠慮がちに笑っていた。

「ったく、これだもんなあ」

「澪は絶対にありえないな」

笑いすぎてうつすら涙さえ浮かべながら、富田と綾乃は口々に言う。澪には何がおかしいのかさっぱりわからなかったが、なぜか疑いが晴れたようなので、とりあえずそのことについては素直に胸を撫で下ろした。が??。

「遥ならやりかねないけどね」

そう綾乃に付言されてビクリとする。彼に矛先が向けられるとは思わなかっただけに驚きは大きい。しかも、半分ほど当たっているとなればなおのこと。どうするつもりなのかと心配になりながら、

そつと遙に視線を流すが、彼は無表情のまま顔色ひとつ変えていなかった。

「僕が女装してやってるとでも？」

「そんなムキになるなよ」

淡々と言い返した遙を、綾乃は軽く笑い飛ばす。しかし、富田は妙に真剣な顔つきになると、遙の全身を上から下までじつと嘗めるように見つめた。

「でも、遥ならやってやれないことはないよな。女装でもかなりイケるんじゃないか？ 見た目は滯とそっくりだし……一卵性だっけ？」

「男と女なんだから一卵性はありえない」

これまで数え切れないくらい受けてきた質問に、遙はうんざりしながら投げやりに答えた。富田も何度が聞いているはずだが忘れていたのだろう。思い出したように「あ、そうか」と小さくつぶやくと、頭に手を当てながらへらつと笑って言う。

「ていうか、おまえ本当は女だったりして」

完璧な地雷。

はつきりと口にしたことはないものの、遙がコンプレックスに感じていることは、いつも一緒にいる滯にはよくわかっていた。案の定、遙はあからさまにムツとした表情を見せた。が、すぐに小さく溜息をつくと、じとりとした眼差しを向けながら冷静に問いかける。「一緒にお風呂に入っておきながら、そういうこと言う？」

「あ、そういえば……」

富田は記憶をたどるように斜め上に視線を流した。やがて、どういうわけか耳元がほんのりと色づいてくる。

「富田やらしい！ なにカオ赤くしてんだよ！！」

「べつ、別にそんなこと……！」

綾乃に勢いよく責め立てられ、あたふたと弁解にならない弁解をする。しかし、何を考えていたのかは、いくら問い詰められても白状しようとしなかった。応酬を続ける二人を眺めながら、遙は面倒

くさそうに声を上げる。

「で、僕の疑いは晴れたわけ？」

「あ、悪かった、悪かった」

富田はへらへら笑いながら答えた。

「別に本気で疑ってたわけじゃないんだ。おまえらがフロントムやつてるんだとしたら、親友の俺らにだけは打ち明けてくれてるはずだしな」

「さあ、それはどうかな？」

綾乃は意味ありげに目を細め、口の端を上げる。

「こつ見えて、澪はけつこつ秘密主義だからね。彼氏のことも隠してるし」

「綾乃っ！！ どうしてそのこと……！！」

ガタツと澪は弾かれるように立ち上がる。付き合っている人がいるということは、綾乃たちには言っていない。この場で知っているのは遥だけだと思っていた。なのに、どうして??。

「あ、本当だったんだ」

「……えっ？」

きょとんとして聞き返すと、綾乃は人差し指を立てて得意げに話し始める。

「澪、高校に入ってから付き合い悪くなっただし、それに、このまえの誕生日からネックレスするようになったでしょ？ 普段はシャツの下に隠してるけど、体育の着替えのときにいつも外してるの見てるんだよね。そのときの澪の顔がまたちよつと嬉しそうでさ。これはもしかしたらもしかして、って思ったわけ」

嬉しそうな顔をした自覚はないが、あとは彼女の言うとおりである。ここまで言い当てられては反論のしようもない。

「ホントよく見てるね……」

「そりゃあ、目の保養だもん」

「もっつ」

二カツと白い歯を見せる綾乃を、澪は軽く睨み、溜息をつきなが

ら腰を下ろした。くしゃくしゃのスポーツ紙に八つ当たりするように、さらにくしゃくしゃに丸めていく。綾乃と真子は笑っていたが、富田はよほど驚いたのか呆然としたまま固まっていた。

「ほっ、本当なのか？ 彼氏って……」

「ん……まあ……」

今さら否定するわけにもいかず、漣は曖昧にそう答える。と、富田は勢いよく机に両手をつき、漣を覗き込むと、目の色を変えて必死に追及してきた。

「誰？ 誰なんだよ？！ 俺……じゃないよな？」

「アホ！」

綾乃は彼の後頭部をスパンと叩いた。

思わず乾いた笑いを浮かべながら、漣は顔の前で両手を合わせて肩をすくめる。

「ごめん、今はちょっと言えない。卒業したら話すから」

それを聞いた綾乃の眉がピクリと動いた。

「遙は知ってるの？」

「言わないよ」

遙は無表情のままにべもなく撥ねつけたが、綾乃は腕を組み、何かを確信したようにニヤリとして漣を見下ろす。

「ははーん」

「な、何よ……」

「秘密にしているのは相手の立場を慮ったことだな」

漣の心臓がドキンと跳ねた。綾乃はさらに理詰めで追い込んでいく。

「卒業したら話すってことは、漣の年齢が問題ってことだよな。同じ高校生ならそんなこと気にするわけないし、相手は大人、それもかなりお堅い職業の人間じゃないかな。たとえば、常に品行方正なことが求められている公務員とか」

「あ、綾乃……」

ここまでではすべて正解である。今すぐ逃げ出したい気持ちだが、

そうするわけにもいかず、澪は息を詰めてただ祈るしかなかった。その反応を楽しむように、綾乃は腕を組んだまま含み笑いでもったいつける。そして、たっぷりすぎるほどの間をとったあと、立てた人差し指を澪の鼻先に突きつけて言った。

「ズバリ！ この学校の先生でしょ！」

「……は？」

澪は口を半開きにして、ぱちくりと瞬きをした。

「本当なの、澪ちゃん？」

「違う、それ絶対に違うから！」

心配そうに尋ねる真子の声で我にかえり、澪は大きくぶんぶんと両手を振って否定する。しかし、綾乃はまったく信じていないようだ。遥に目配せしながら富田と真子の肩を抱き込み、澪に顔を近づけると、自分たち以外には聞こえないような声をひそめて言う。

「私は数学の鈴木があやしいんじゃないかと思ってる」

「すず……！」

「声でかい！」

のけぞりながら大声を上げる富田の顔面を、綾乃は容赦なく平手で叩いて窘めた。他のクラスメイトに知られないよう配慮してくれているのだろうが、そもそも彼女の言っていることがまったく的外れである。

「違っつたら！ なんでそうなるわけ?!」

澪は身を乗り出して言い返す。それでも綾乃は取り合おうとしない。

「鈴木って結構イケメンで優しくて、女にもてないわけじゃないのに、30代半ばでまだ独身でしょ？ だからホモじゃないかとか噂されてたんだよね」

「綾乃ちゃん、前もそんなこと言ってたよね」

真子はどこか申し訳なさそうに苦笑を浮かべた。澪も以前に聞いたことはあったが、信じようという気にはなれなかった。事実なのかどうかはわからないが、そんな噂を立てられるのはひどい話だし、

同情して庇うような発言をしたこともある。

「でさあ、一度、美術部メンバーで真相を確かめに、職員室へ押しかけて行ったことがあるんだよね。そしたら、鈴木、おかしそうに笑いながら否定してさ、君らが卒業する頃に結婚するかもね、って」
「だから何なの」

綾乃が何を言いたいのかわからず、漣は眉をひそめて小首を傾げた。しかし、綾乃はますます嬉しそうにニツと笑い、額が当たりそうなくらいにぐいっと顔を近づける。

「とぼけてもダメだぞ。つまり、鈴木はうちの同級生と卒業後に結婚するってことで、これまでの話を総合すると、その相手は漣としか考えられないじゃないか」

「それ何もかも飛躍しすぎ!」

漣は全力で言い返すと、くしゃくしゃのスポーツ紙に肘をついて頭を抱え込んだ。このまま違うと否定し続けても、思い込みの激しい綾乃は信じてくれそうもない。違うと証明することはとても難しい。できるとすれば??。

「あの、ここだけの話にしてくれる?」

そろりと顔を上げて綾乃を見つめ、そして真子と富田にも視線を送り、おずおずと懇願するように尋ねる。隣の机に腰掛ける遙にもちらりと横目を流したが、面倒くさそうに溜息をつくだけで、特に止めたり反対したりという様子は窺えなかった。

「お、とうとう認めるか?」

「じゃなくて……」

ひやかす綾乃を軽く制したあと、漣は胸に手を当てて深呼吸すると、そつと言葉を落とす。

「刑事なの」

「けっ…!」

叫びそうになった綾乃の口を、いつのまにか彼女の背後に来ていた遙が、後ろから手で押さえつけて塞いだ。じたばた暴れても離そうとしない。綾乃のようなオーバーリアクションはとらなかつたも

の、真子も同様に驚いているようで、信じられないといった面持ちをしていた。

「遙くん、本当なの？」

「まあね」

遙は軽くそう答えると、ようやく綾乃を解放した。彼女は苦しげに大きく息を吸い込んで振り返し、涙目で遙を睨むが、彼はまるで意に介さず涼しい顔をしている。

「他言無用だから気をつけて」

「わかつてるって！」

綾乃は腹立たしげに返事をした。真子もにっこりと頷いて同意する。しかし富田は？。？。

「俺は認めないぞ！」

ダンツ、と漣の机に勢いよく両手をつき、真剣な眼差しで覗き込む。

「目を覚ませ、漣！ おまえ弄ばれてんだよ、その不良スケベオヤジに……！」

「ちょっと、知りもしないのに勝手なこと言わないでよ！」

漣はカツとして身を乗り出した。

「なんで不良って決めつけてるわけ?! それにオヤジって年じゃないもん! まだ20代だし! スケベ……じゃない……とは言えないけど……」

「うわあああああ！」

間もなく始業の時間だというのに、富田は錯乱したように大声を上げながら教室を出て行った。綾乃は腹を抱えて大笑いし、真子も遠慮がちに笑っている。遙にいたっては、額を押さえて大きく溜息をついていた。だが、漣には何がなんだかさっぱりわからない。

「富田どうしたの？」

彼の消えていった方を指さしながら尋ねる。

「青春だよねえ」

「はあ？」

綾乃の答えにますます混乱して、漣は眉を寄せる。しかし、綾乃も真子も笑い続けるばかりで、漣の疑問に答えてはくれなかった。やがて始業のチャイムが鳴り、二人は小走りで自席に戻っていく。遙も、漣の頭をぼんと軽く叩くと、無表情で後ろの自席へ歩いて行った。

「ねえ、富田まだ怒ってるの？」

「別に怒ってるわけじゃ……」

今日の授業がすべて終わったあと、テスト前で部活もないため、漣たち5人はそろって正門に向かって歩いていった。しかし、富田は今日一日ずっと暗い顔をしており、今も漣を見ては溜息ばかりついている。おそらく今朝のことが原因なのだろう。

「秘密にしたのは悪かったかもしれないけど、私にだって事情があるんだもん。富田のことは、もちろん綾乃も真子もだけど、みんなちゃんと友達と思ってるよ？」

「わかったから！ 友達友達いうな！」

富田は苛ついたように前髪をくしゃくしゃと掻いた。わかったとは言っているが、わかっていないのだろうか、信じていないのだろうか？ 漣は怪訝に顔を曇らせる。そんな二人を横目で見ながら、綾乃はニヤニヤしていた。

「漣は本当に罪作りだねえ」

「どつという意味？」

「ずっとそのままの漣でいてよ」

「何よそれ」

漣は唇をとがらせる。しかし、綾乃の不可思議な発言は、今に始まったことではない。聞き返してもいつもごまかされてしまうので、もう深くは追及せず、できるだけ軽く受け流すことにしていた。

「許可を取ってからにしてください」

正門のところで、警備員が誰かと揉めているようだった。この学

校では、部外者が敷地内に立ち入るには、事前に学校側の許可を得なければならぬ決まりになっている。それは保護者も例外でないという厳しいものだ。そのため警備員と言いついては、合意になっていることは時折あり、特にめずらしい光景でもなく、生徒たちはみなチラリと一瞥するだけで通り過ぎていく。

澪もつられるように正門の方に目を向けたが、警備員の陰になり、相手の姿はほとんど見えなかった。しかし、気にすることなく綾乃たちに向き直ると、みんなでとりとめのない話をしながら笑い合う。「では呼び出してもらえませんか？」

「どういったご用件でしょうか？」

「それ、は……」

「お帰りになってください」

「ちょっと待ってください！」

何気なく耳に入ってきた聞き覚えのある声に、澪はドキリとする。まさか、この声って??。

「誠一?!」

半信半疑で振り向いた澪の視線の先には、警備員のトランシーバーに手を伸ばしている誠一がいた。通報を止めようとしていたのだろうか。大声を上げた澪に気付くと、ほっとしたように表情を緩ませる。

「澪、良かった！」

そう言つて警備員の脇をすり抜け、敷地内にいる澪に駆け寄ろうとした。が、警備員が素早く後ろから羽交い締めにする。誠一に悪気はなかったのだろうか、これでは完全に不審者であり、取り押さえられるのも無理はない。「もしかして澪の彼氏?!」などと綾乃たちが色めき立っているが、構っている場合でなく、澪は慌てて誠一のもとへ駆けていった。

「すみません！ この人、私たちの知り合いなんです。ちょっと慌てていただけで悪意はないと思いますし、すぐに出て行かせますから、今回だけは見逃してもらえませんか？」

「承知しました」

警備員も澁が橘財閥令嬢であることは知っており、それゆえ簡単に聞き入れたというのもあるだろう。誠一の拘束を解くと、一步下がりが、生徒であるはずの澁に恭しく一礼した。

「澁、本当に助かったよ」

「どうしたの？ 学校にまで来て……」

「そつだ、澁！」

誠一は澁の両手を包み込むように握りしめる。ちょうど下校時で他の生徒たちがまわりに大勢いることもあり、澁は当惑したが、あまりにも真剣な彼の表情に何も言えなくなった。わざわざ学校にまで来たうえ、これだけ焦っているということは、余程の緊急事態なのだろうか。いったい何が？？大きく不安を煽られ、ゴクリと唾を飲み込んだ、そのとき。

「パンツ見せてくれっ！！」

鈍色の寒空に、誠一の必死な声が拡散した。

「何もいきなり殴ることはないだろう」

澁が怒りまかせにズンズン進んでいく後ろで、誠一は顔をしかめて側頭部をさすりながら、それでも遅れないように早足でついてきていた。その隣には仏頂面の遙も歩いていく。だが、一緒に帰るはずだった綾乃たちの姿は見当たらない。おそらく、これ以上のややこしい事態を避けるため、遙が来ないように説得してくれたのだろう。

「その鞆、やけに重量感あるけど何が入ってるんだ？」

「教科書に決まってるでしょう?!」

澁は肩をいからせ、振り返りもせず歩き続ける。その怒りは一目瞭然のはずだが、誠一は悪びれる様子もなく、原因となった話をさらりと蒸し返す。

「で、パンツなんだけど」

「さっきからパンツパンツって何なの?! 私にだけこつそり言うならまだしも、学校みんなの前であんな大声で叫ぶなんて……綾乃たちの間では、誠一のあだ名はパンツ男に決定よ!」

「まあ自業自得だな」

誠一は軽く肩をすくめて答えた。が、澁からすれば的外れもいいところである。カツと頭に血を上らせると、長い黒髪を舞わせて振り返り、彼の鼻先に人差し指を突きつけてズンと詰め寄る。

「あのね、困るのは誠一じゃなくて私なの! パンツ男は元気い? パンツ男はどうしてるう? とか、死ぬまで綾乃にからかわれるのよ?!」

「死ぬまでって大袈裟だろう」

「少しは責任感じてよ!!」

澁はあくまで大真面目に言っているのだが、誠一はそう受け止めていないようだった。まあまあ、とちよつと困ったように苦笑しな

がら、沸騰寸前の溲をひたすら宿めるだけである。

二人の隣で、遙が面倒くさそうに溜息をついた。

「誠一、まず事情を説明してくれない？ 理由も言わずにパンツ見せてじゃ、ただの変態だよ」

「ああ、そうだな……」

誠一は真面目な顔になつて思考を巡らせ始めた。その様子に、溲は幾何かの緊張を覚える。彼がなぜこんなことを頼みに来たのか、だいたいのところは見当がついていた。それは、おそらく??。

「きのうのことなんだが……偶然、怪盗ファントムに遭遇してな」「それってコンビ二強盗を捕まえたときの？」

遙は白々しくそんなことを尋ねる。

「ああ、ニユースでやってたから知ってるかもしれないが、そのコンビ二強盗犯が逃げ込んだビルの屋上に、待機中の怪盗ファントムがいてな。捕まえようとしたんだが、あと一歩というところで逃げられてしまったんだ」

冷静な声音に悔しさが滲んだ。しかし、誠一はすぐにパツと表情を晴らす。

「でもそのとき、ファントムのスカートが風でめくれて、パンツが丸見えになつたんだよ。暗かったしハッキリとは見えなかったけど、そのパンツが溲の勝負パンツによく似ていたんだ」

「べ、別に勝負パンツじゃないし！」

溲はゆでだこのように顔を赤らめて否定した。同じものをたくさんまとめ買いたしたので、それを穿いていることが多いだけである。

誠一と会うから特別なものを選んでいるわけではない。だから、きのうも偶々それを穿いていたのだが??。

しかし、誠一は軽く流して話を続ける。

「まあ、そのときは似てると思っただけなんだが、さっきこれを見て……」

そう言つて、懐から小さく折りたたんだ新聞を取り出す。例のスーツ紙だ。中面を外側にしてあつたようで、広げるまでもなく、

パンツ写真が目飛び込んできた。

「きゃあっ!!」

漣は悲鳴を上げ、誠一の手からそれを奪い取った。

「念のため言っておくが、それ、漣じゃなくてフロントムだからな……でも、これ同じパンツだろ？ レースの形や付き方、股上の長さ、脚ぐりの角度、どれをとってもまったく同じなんだよ」

「どれだけよく見てるのよ、ヒトのパンツ！」

もちろん見られていることはわかっていたが、ここまで詳細に観察されていたのかと思うと、あらためて何ともいえない恥ずかしさがこみ上げてきた。そして、こんなことまで覚えている彼の記憶力を恨めしく思う。

誠一は拜むように顔の前で両手を合わせた。

「頼む！ フロントムを捕まえるための貴重な手がかりなんだ」

「イヤよ！ そんな怪盗、私にはどうでもいいもん！」

「冷静になれよ。どうしてそう嫌がるんだ？ 今さらだろ……」

「今さらとか言わないで！ 恥ずかしいものは恥ずかしいの！」

漣は頑として首を縦に振らなかった。恥ずかしいというより意地になっていたのかもしれない。しかし、冷静に考えてみたところで、結論が変わることはないだろう。自分の正体を暴くための手がかりを、刑事である彼に提供するわけにはいかないのだから。

「漣のパンツを見て、それが捜査にどう役立つわけ？」

遙がじとりとした目で懐疑的に尋ねる。だが、誠一は曲がりなりにも刑事であり、さすがにそのあたりは手抜きなく考えられていた。

「怪盗フロントムが穿いていたパンツを確認したいんだ。漣に見せてもらって新聞の写真と照合する。同じものであれば、そのパンツを貸してもらって、ひとつひとつ販売店を聞き込みにまわろうかと」「イヤー!! 絶対に嫌っ!!!!」

漣は両手で頭を押さえて絶叫した。百歩譲って誠一だけに見せるのならまだしも、それを持って聞き込みにまわるなど冗談ではない。

拷問にも等しい行為だ。

「捜査協力は国民の義務だぞ」

「国家権力の横暴だわ！」

漣は奪い取ったスポーツ紙をぐっと握りしめて反論する。

「ねえ、誠一って捜査一課だよな？ 怪盗ファントムの担当じゃないと思うんだけど」

隣から、遙が再び二人の話に割り込んでくる。頭に血が上ったせいですっかり忘れていたが、確かに、彼は怪盗ファントムの担当ではない。先日、本人の口から聞いたので間違いないだろう。

「えっと、それは……」

誠一は斜め上に視線を逃がしながら、人差し指で頬を掻いた。

「捜査二課に協力しているわけでもないよね。さっき学校の警備員と揉めてたとき、警察手帳を見せるどころか、刑事であることすら言わなかったし。それってやっぱり正式な捜査じゃないからでしょ？ 職務じゃなければ職権濫用になるからね」

「君は鋭いな……」

遙に痛いところを指摘され、観念して力なく言葉を落とす。

「そういうわけだから、漣、誠一に協力することないよ」

「そ、そうなんだ……」

幾分かの申し訳なさを感じながらも、漣はひとまず胸を撫で下ろした。遙が味方になると心強い。相手が大人だろうが刑事だろうが容赦なく論破してくれるのだから。しかし、誠一も刑事の端くれである。手がかりを目前にしながら、そう簡単に引き下がったりはしない。

「そう言わずに協力してくれ！ 刑事としてでなく俺個人として頼むよ。怪盗ファントムをギリギリのところまで取り逃がして悔しいんだ。二課の連中にもさんざん嫌味を言われたし、できることなら、俺のこの手で捕まえて汚名返上したいんだよ」

「それは……気持ちわかるけど……」

情に訴えられると漣は弱い。あれほど頑なに拒んでいたのに、こ

こへきて少し気持ちが悪らつき始めた。好きな人が汚名を着せられているのであれば、力になりたいとは思うが、だからといって捕まえることはできないわけで??。

ビツ、ビーー。

クラクションが鳴り、一台の車がゆっくりと溲たちの隣に滑り込んで止まった。エンジンが緩やかに唸り続ける中、助手席のパワーウィンドウがゆっくりと下り、そこからスーツ姿の男性が身を乗り出して顔を覗かせる。

「師匠！」

溲は大声を上げて目をぱちくりさせた。悠人はいつも大通りの方を走っており、この住宅街を通ることはほとんどなく、それゆえまさか彼だとは予想もしなかった。

「女の子が往来でパンツパンツ叫ぶものじゃないよ」

「あつ……すみません……」

まさか聞かれているとは思わなかった。一体いつから聞いていたのだろうか??少し疑問に感じながらも、溲は肩をすくめて素直に謝る。悠人はそれを見てにつこり微笑むと、隣へ視線を移し、急に真面目な顔になって切り出した。

「警視庁捜査一課の南野誠一さん、でしたね」

「はい……」

誠一は表情を硬くしてぎこちなく頷く。

「えっ、二人は知り合いなの??」

「一度、顔を合わせたことがあるだけだよ」

混乱して二人を交互に見る溲に、悠人はさらりと答える。いったい何の用件だったのか、いつどこで会ったのかなど、気になることはいろいろあったが、尋ねる間もなく彼は誠一との会話に戻ってしまった。

「それで、ウチの溲と遥が何か？」

「いえ、溲さんに捜査協力をお願いしていたところで……」

誠一が少し言葉に詰まると、悠人は静かに口を開く。

「南野さん、ご存知だと思いますが、漣は17歳で未成年です。そういうことでしたら、直接この子に尋ねるのではなく、私を通してにしていただけですか？」

落ち着いた中にも威厳を感じさせる語調。その重くのしかかるような雰囲気、誠一は完全に圧倒されていた。ごくりと唾を飲み込むと、戸惑いを見せながら遠慮がちに尋ねる。

「お父さま、ですか？」

「いえ、保護者代理といったところです。この子たちの両親は二人とも忙しいものでね」

あまり一般的な話でないため、誠一にはピンと来なかったのだろう。不思議そうな目をよこしたので、漣は無言で頷いてみせる。両親が忙しくてあまり一緒にいられないということは、誠一にも何度か話したことはあったが、だからといって普通は保護者代理などが出てきたりはしない。

「乗ってください、南野さん。漣と遙も」

「え……？」

「こんなところで立ち話も何ですから、続きは私たちの家でしまし
よう」

誠一は傍目にもわかるくらい緊張していた。

その隣で、漣も少し緊張しながら複雑な表情を浮かべていた。何かと鋭い悠人のことだ。こうなってしまうとは、誠一が彼氏だと気付くのも時間の問題だろう。もしかしたら、もうすでに？。

鉛色の空は、今にも雨粒が落ちてきそうなくらいに、どんよりと重く垂れ込めていた。

悠人は濃色のスーツを身につけたまま、革張りのソファに身を預け、悠然とした所作でコーヒーを口に運んだ。その向かいで、誠一は出されたコーヒーに口もつけず、背筋をピンと伸ばして座っている。ローテーブルの上には互いの名刺が置かれていた。

「南野さん」

「……はい」

カチャリ??コーヒーカップをソーサに戻す音が、やけに大きく応接間に響いた。悠人はゆっくりと膝の上で両手を組み、体を起こすと、正面から隙のない眼差しで誠一を見つめた。

「溇にどのような捜査協力をお求めでしょうか？」

「怪盗ファントムに関することなんですが……」

誠一がそう切り出すと、悠人はふつと鼻先で笑った。

「また怪盗ファントムですか。担当でもないのに、随分と執着していらつしやる」

「……」

最初に悠人と顔を合わせたときも、誠一は担当外である怪盗ファントムの捜査をしていた。確かにこれでは不審がられても仕方がない。しかし、悠人は不審に思うというよりも、むしろ呆れているような感じだった。

「私の関知することではありませんがね。それで？」

「はい、その怪盗ファントムが穿いていたパ……下着と同じものを溇さんがお持ちだったので、確認させていただけないかと思いましたが……」

そう答えながら、誠一は懐からスポーツ紙を取り出し、半分ほど広げて机の上に置く。溇が乱暴に奪って握りしめたせいで、だいぶ紙面が皺になっているが、怪盗ファントムのパンツは問題なく確認できた。悠人は無表情でそれを一瞥すると、口を開く。

「なぜ、そのようなことをご存知で？」

「えっ？」

誠一は顔を上げた。悠人は彼を見つめたまま、わかりやすく補足しながら言い直す。

「なぜ、あなたが溇の持っている下着をご存知なのかと」

「あ……」

たちどころに誠一の顔から血の気が引いた。何の言い訳もできず、

ただきゅつと口を結んでうつむく。重苦しい沈黙が続き、前髪のかかった額にも、膝で握ったこぶしにも、じわじわと汗が滲んできた。「まあいいでしょう」

対照的に、悠人は怖いくらいに冷静だった。

「それで、まさか澪を疑っているわけではないでしょうね」

「いえっ、そのようなことは決して……」

誠一は即座に否定すると、少し呼吸を整えてから続ける。

「ただ、間違いがないか確認させてもらって、同じものであればその下着をお借りしたいと」

「澪は嫌がっているのでしょうか？」

「はい……しかし……」

「私も認めるわけにはいきません」

悠人は毅然と一蹴する。しかし、それだけでは終わらせなかった。

「同じものかどうかは、澪にその新聞を見せて確認させます。同じであればメーカーをお教えます。あとはメーカーの方に問い合わせれば、捜査に必要な情報は揃うでしょう」

「は……はい……」

その的を射た提言に、誠一は萎縮して消え入りそうに返事をした。確かにこれなら澪に嫌な思いをさせずにすむし、多少の手間はかかるが、必要な情報も問題なく手に入れられるだろう。

「それでよろしいですね？」

「ありがとうございます」

悠人に念を押されると、誠一は慌てて頭を下げて礼を述べる。顔にも体にもずつと無駄な力が入っていたが、ようやくほつと息をついて弛緩することができた。しかし、彼は大事なことを忘れていた。「南野さん、最後に一つだけ言っておきます」

「はい……？」

やや間の抜けた声を返した誠一に、悠人はまっすぐ視線を向ける。「あなたと澪のことを認めただけではありませんから」

口調こそ穏やかだったものの、瞳は冷たく、反感を募らせている

ことは明らかだった。それどころか、絶対に許さないといい気迫さえ感じた気がした。まだ少し話をしただけの段階で、なぜそこまで??今の誠一に、その真意を察する術はなかった。

「じゃあ……はい、これあげる」

悠人の指示で、澪はスポーツ紙の写真を一通り確認したふりをすると、渋々ながらカタログを取り出して誠一に手渡した。有名女性タレントを使った可愛らしくスタイリッシュな表紙で、そうと知らなければ、下着のカタログということはわからないかもしれない。

「通販？」

「そう、お店でも売ってるみたいだけど」

注文したページは折り曲げであるので、あえて教えていないが見ればどれだかすぐにわかるだろう。怪盗ファントムの手がかりを与えることに不安はあったが、悠人によれば、決定的な証拠とはなれないので心配無用らしい。それどころか捜査を攪乱できるとまで言っている。何はともあれ、ようやくこの件に決着がついた??澪は腰に手を当てる深く溜息をついたが、ふと顔を上げると、彼がさっそくカタログをめくっているのが目に入る。

「やだ! あとで見てよ!」

思わずカツと頬を赤らめて手を伸ばし、無理やりカタログを閉じさせると、誠一は悪かったと言いながら苦笑した。おそらく過剰反応だと思っているのだろう。そのデリカシーの欠片もない態度に、澪は唇をとがらせて腕を組んだ。

「誠一、師匠に何か言われた？」

澪のベッドに腰掛けていた遙は、目の前の二人を眺めながら、投げやりな口調でそう尋ねる。その瞬間、思い当たることがあったのか、誠一の表情ははつきりとわかるくらいに凍りついた。

「何かって……?」

「バレたよね、澪と付き合ってること」

「あ、ああ……まあそうらしいが……」

そのことは漣もすでに覚悟していたが、悠人のことを信じていたので、気にはなっても心配はしていなかった。というより、心配しないよう自分に言い聞かせていた。だが、誠一の態度がおかしいのを見て、急に不安の波が押し寄せてくる。

「何か、言われたの？」

「……認めてないって」

誠一は硬い声でぼそりと答えた。

しかし、漣からしてみれば、悠人が二人の仲を認めないなど、とうにわかりきったことである。それだけかとほっとした気持ちもあるが、面と向かって彼に言ったのだと思うと、やはり胸のざわつきは止められない。誠一は理解していないだろうが、ある意味、宣戦布告のようなものだから??。

「当然だよな」

東の間の静寂を破り、遙は醒めた目を誠一に向けた。

「師匠からすれば、誠一なんてただの頼りない男にしか見えなかっただろうし、こんなのに漣を任せられない、漣は自分が幸せにするんだって、そう思ったんじゃないかな」

「ちよつと、遙！」

「それはどういう……」

何を言い出すのかと慌てる漣の隣で、誠一は怪訝に眉を寄せて尋ねかけた。

遙は気怠そうにベッドに手をつき、天井に顔を向ける。

「師匠は漣のことが好きで結婚したいと思ってて、ついでにいえば漣の初恋も師匠で、何となくうちの家族では公認みたいになってるんだよね。つまり、正式に決まったわけじゃないけど、いわゆる婚約者みたいなものかな」

「いい加減なこと言わないで！」

たまらなくなつて、漣は感情的に言い募った。

「漣……遙の言ったことって……」

「あ、婚約者なんかじゃないから！ 初恋だつて小学生のときの話

だし」

表情の曇った誠一を安心させようと、漑は精一杯の笑顔を作って釈明する。しかし、さすがに嘘をつくわけにはいかず、全否定までは出来なかった。そのせいか、誠一の眉は、ますます不安そうにひそめられる。

「でも、彼の方は漑のこと……」

「大丈夫、私、頑張るから!!」

「頑張るって……何を？」

その単純な問いかけに、漑は何も答えられなかった。半開きの口をゆっくりと閉じてうつむく。何をどう頑張ればいいのか、漑本人にもわかっていない。意気込みだけが空回りしている状態だった。代わりに、遥がその質問を引き取る。

「それだけ漑と誠一が付き合うのは難しいってことだよ。漑がどういう家に生まれたのかわかってるよね？ 覚悟がないんだったら身を引いた方がいい。僕からの二度目の忠告」

それは誠一に向けられたものであるが、同時に、漑にも向けられているように感じた。怪盗をやっている家の人間が、刑事と付き合いするのは難しいと？ 遥には以前からそう言われている。意地悪でないことは十分に承知しているし、彼の心配ももっともであるが、漑としてはどうしても諦めたくなかった。

「あの、遥は大袈裟に言ってるだけだから……気にしないで、ね？」

「そう……か……」

取り繕うように漑が言うと、誠一は曖昧に返事をする。とても納得しているようには見えないが、追及しようとはせず、ただ困惑ぎみに薄く微笑むだけだった。彼のその態度は、漑をひとまず安堵させた一方で、心の片隅に小さな棘と寂寥感を残した。

「どうしていきなりあんなこと言ったの？」

門の外で誠一を見送ったあと、冷たい風に吹かれながら、漑は並んで立つ遥にぼつりと尋ねた。あんなこと、としか言わなかったが、

それが何を指しているのか、彼には考えるまでもなくわかったよう
だ。

「覚悟があるかどうか、これでわかったんじゃない？」

「いきなり言われたんじゃない、誰だってビックリするよ」

漣はムツとして横目で遙を睨んだ。覚悟なんてそう簡単に持てる
ものではない。真摯に受け止めたからこそ、誠一は戸惑ったり考え
込んだりしたのだと思う。

遙はズボンのポケットに両手を突っ込み、身を翻して歩き始めた。
「もしこれで逃げるようなら、それだけの男だったってこと」

「逃げたりなんか……」

漣はアスファルトの先を見つめながら、もうそこにはない後ろ姿
を思い浮かべ、おぼろげな声でつぶやくように言う。信じているは
ずなのに、なぜか強く主張できなかった。体の横で無意識にこぶし
を握りしめる。

遙は足を止め、顔だけをわずかに振り向けた。

「漣、もう戻ろうよ」

「……うん」

漣は小さく頷いた。そして、少しだけ息を吸って口を引き結ぶと、
くるりと振り返って彼のあとを追った。目の覚めるような冷たい風
が頬を打つ。それは、まるで弱気になった漣を叱咤しているかのよ
うだった。

「あの、師匠……？」

漣が声をかけても、悠人は微動だにせず窓の外を見つめていた。

すべてが済んだら応接間に来るように??悠人にあらかじめそう
言われていたので、漣は誠一を見送ってここへ来たのだが、どうい
うわけか彼は振り向いてもくれなかった。当惑しながら戸口に立ち
尽くしていると、彼は深く息をつき、少し皺になったシャツの背中
を向けたまま話し始める。

「悪い人ではなさそうだな。むしろ人が好すぎるくらいだ。漣がど

うして彼を選んだのか、わかる気がするよ」

冷静すぎるくらいに誠一のことをそう評すると、再び息をつき、ゆっくりと振り向いて窓枠にもたれかかった。そして、きつちりと締められたネクタイの結び目に指を掛け、薄く苦笑しながら付言する。

「でも、まさか刑事だったとはね」

「お願い、おじいさまには内緒にしてください」

漣は、長い黒髪をなびかせながら悠人に駆け寄った。縋るように彼のシャツを掴み、切羽詰まった顔で見上げる。しかし、悠人はそつと視線を外して、どこか遠くを見やりながら考え込んだ。

「どうしたものかな……」

「約束したじゃないですか！」

「刑事とは知らなかったからね」

少し笑いながらそう言うのと、宥めるように漣の頭に優しく手を置く。だが、これしきのことでは、今の漣はごまかされない。シャツを掴む手に力を込め、さらに詰め寄って思いの丈を訴えかける。

「私、怪盗フロントムのごことは絶対に言いませんし、知られないようにします！ だから……」

「嘘をつくのは苦手だろう？」

「それでもちゃんとやります」

確かに嘘をつくのは苦手だが、出来ないわけではない。今までだつて騙してきたのだから？ そう思ったものの、悠人には伝わらなかったのか、その顔にわずかな驕りを落とした。

「彼は本気で怪盗フロントムを捕まえようとしている。それも職務ではなく自らの意志でだ。その彼と一緒にいて、笑い合つて、嘘をついて……それで君は苦しくないのか？」

「苦しくても耐えます」

怯むことなく断言する漣を、悠人はじっと見つめ返す。

「……漣」

不意に悠人の顔が近づいてきて、漣はドキリとしたが、彼はただ

そつと額を合わせただけだった。そこから彼の体温が伝わってくる。懐かしい感覚、優しい温度、安心する匂い??よくそうしてもらった幼い日々なのが脳裏によみがえり、胸が熱くなった。

「僕では駄目なのか？」

絞り出すような切ない声が静かに響く。

「僕ならば澪に苦しい思いをさせなくてすむ。何も秘密にすることはない。ありのままの澪でいてくれればいい。遙には負けるかもしれないが、それ以外の誰よりも澪のことを見てきたつもりだ。だから、誰よりも君をわかっているし、誰よりも君を想っているし、誰よりも君を幸せにする自信がある」

気持ちは痛いくらいに伝わってくるし、とてもありがたいことだとも思っている。けれど、どうしても受け入れるわけにはいかないのだ。澪はそつと彼の胸元を押し、触れ合わせていた額を離してうつむく。

「私は、彼のことが好きなの……」

心苦しさを感じながらも、無慈悲な返答を口にのせる。他にも伝えたい思いはあるのだが、胸の内でわだかまるばかりで言葉にならない。そのもどかしさにきゅつと唇を噛む。

「君たちの仲を引き裂くことは容易だが……」

ビクリ、と澪の体がすくんだ。

「そうではなく、出来れば君の意志で僕を選んでほしい。絶対に後悔はさせないから」

そう言っつて、悠人は澪の両肩に手を置き、それから包み込むように優しく抱きしめる。逃れようとすれば出来たはずなのに、澪はなすがまま、悠人の胸に身を預けて寄りかかった。あたたかい。このまま何も考えることなく、ただ子供のように甘えていたかった。幼かったあの頃のように??。

「しばらく待つよ。春までには答えを出してほしい」

その声で現実を引き戻される。

澪に選択を委ねてはいるものの、行き着く先はひとつしかない。

与えられたのは心の準備をする時間だけ。もしかすると、気付いていなかっただけで、最初から彼の腕の中に捕らえられていたのかもしれない。この状況を打破する方法など、どこにもないのでは？？ 遷はそのことに薄々気付き始めていたが、現実として受け止めるだけの勇氣を持てずにいた。

13・行き詰まる二人

「やっぱ無理かなあ」

誠一は溜息まじりに弱気な独り言を漏らすと、蛍光ペンを持ったまま、背筋を反らして大きく伸びをした。凝り固まった体を感じる適度な刺激が心地良い。思わず欠伸も出そうになるが、自席ではまずいと思い、眉をしかめながら何とか噛み殺した。

机の上には、下着メーカーから入手した通販購入者リストが広げられている。

怪盗フロントムに繋がる情報として、スポーツ紙の写真や下着のことを捜査二課に報告したが、彼らはあまり重要視していないようだった。容疑者に対する裏付けのひとつとしてなら有用だが、ここからフロントムの正体を割り出すのはほぼ不可能に近い、ということである。その意見には誠一も同意する。だからといって、放置しておくのもどうかしく、自分ひとりで捜査することにしたのだ。

まず、可能性がありそうな14〜39歳女性を対象にしてみたが、9割方がこの範囲内であり、あまり絞り込むことは出来なかった。さらにそこから東京都内在住の者を選び出してみる。今はこの作業を進めているところであり、それなりに減りそうな手応えを感じているものの、数百人の単位では残りそうだった。

あとは一人ずつ回ってみるしかない。本人と会えば、体型等からもっと絞り込めるはずである。

だが、たとえある程度の目星を付けられたとしても、おそらく捜索令状は請求できず、フロントムに繋がる確実な証拠を得るのは難しいだろう。やはり決定力に欠けるのだ。おまけに、あまり考えたくはないが、通販以外に直営店での販売もあるというのだから？。それでも絞り込んでおくことに意味はあるだろうと、折れそうな気持ちを立て直し、再び蛍光ペンを握って購入者リストに向かった。「手伝ってやるうか？」

飾り気のない白いマグカップを手にした岩松が、香ばしい匂いを漂わせながら、背後からひよっこりと覗き込んできた。

「いえ、黙認してもらえるだけで有り難いです」

目の前でファントムを取り逃がした誠一に同情しているのか、岩松をはじめとする捜査一課の同僚たちは皆、この担当外の捜査を黙認してくれていた。もちろん、それは本来の職務が忙しくないときに限られる。

「あれ、これ澪ちゃんじゃないか？」

何気なくリストに目を落としていた岩松が、そのうちのひとつを指さして顔を近づける。そこには確かに彼女の名前があった。下手に詮索されると立場が危うくなりかねないので、澪から情報を得たことは伏せていたが、彼女も通販購入者であるため、当然ながらリストには名前が挙がっているのだ。

「そうみたいです」

誠一はごまかし笑いを浮かべて曖昧に答えた。

「澪ちゃんがファントムだったりしてな。ホントよく似てるしなあ」

「ちょ、悪い冗談はやめてくださいよ」

思わずギョツとして振り向くと、岩松はニツと白い歯を見せる。

「そろそろ予告時間だぞ」

どこことなく面白がるようにそう言って、彼はそばにあったリモコンでテレビをつけた。リポーターの興奮した声がフロアに響く。その場にいた同僚たちも、ほとんどが手を止めて振り向いた。まるで野次馬のように、呑気に談笑しながら、怪盗ファントムの登場を待っている。

テレビのデジタル時計が予告時刻ちょうどを告げた。

そのとき、ライトアップされた怪盗ファントムの姿が、ブラウン管の大きな画面に映し出された。凜とした佇まい、すらりと長い手足、艶やかにびく黒髪??顔は仮面で隠されているものの、確かに、澪によく似ていると認めざるを得ない。

ふう、と誠一は溜息をついた。音を立てないように立ち上がると、

そつと扉を開け、空調のきいていない廊下に足を進めた。冷たい壁にもたれかかりながら、携帯電話を取り出して澪にかける。

トウルルルル、トウルルルル??。

何度か呼び出し音が鳴ったあと、留守番電話センターに繋がり、感情のない女性の声が流れてきた。誠一はゆっくりと電話を切る。

別に繋がらなくても不思議ではない。ただ、自分の欲した安心が手に入れられなかっただけのこと。そう思いながらも、指先にはいつのまにか力がこもっていた。

「事件だ、現場へ向かえ！」

扉越しに聞こえた、緊迫感の漲る声。

誠一はハツとして顔を上げる。ガラスの向こうでは、慌ただしく人が動き始めていた。岩松もすでに刑事の顔になっている。それを見てすっかり現実を引き戻されると、携帯電話を内ポケットにしまいながら、急いで捜査一課のフロアへ飛び込んでいった。

「悪かったな、あまり電話もできなくて」

「ううん、お仕事だもん」

澪は屈託のない笑顔でそう応えると、いつものように小さな丸テーブルの前に座った。すでに何度となく遊びに来ているので、緊張感はなく、まるで自宅にいるかのようにくつろいでいる。誠一はそのまま台所へと向かい、ガスコンロにヤカンをかけて、マグカップの準備を始めた。

電話もできないほど忙しかったのは、この一週間、大きな事件の捜査にかかりきりだったからである。

ちょうどテレビで怪盗ファントムを見ていたときに第一報があり、それから、ほとんど家に帰ることなく捜査に当たっていた。報道で初動捜査の遅れを指摘され、長期化するなどと言われていたため、皆いつも以上に躍起になっていたように思う。その甲斐もあつてか、きのう、一週間も経たずに容疑者を逮捕することができたのだ。

「あんなに早く犯人を捕まえちゃうなんてすごいね」

この逮捕にどのくらい自分が貢献できたかわからないが、こう素直に感嘆されるとやはり頬が緩む。その相手が恋人であれば尚のことだ。

「ファントムの方はまだ全然だけどな」

照れ隠しにそう言つと、漣は複雑な表情を浮かべた。

「そっか、全然……なんだ……」

「すまない、無理を言ったのに」

「ううん、気にしないで」

彼女はパツと笑顔を作ると、胸元で小さく両手を振った。せつかく情報を提供してもらったのだから、良い結果を聞かせてやりたいと思うが、あまりこちらに充てる時間もとれず、意気込んでみても簡単にいくものではない。彼女に気を遣わせてしまったことにも、申し訳なく思う。

「やつぱり難しいよね」

「まあな……」

あれだけで怪盗ファントムを突き止められる可能性はかなり低い。限りなくゼロに近いくらいだ。諦めたわけではないが、それが捜査に当たつてみての率直な感触だった。戸棚からティーバッグを取り出しながら、クッションを抱える漣をちらりと盗み見る。

「今のところ、いちばん怪しいのは漣なんだよな」

「えっ？」

「岩松さんもそう言ってるし」

手を止めることなく淡々とそう言つと、彼女は息を呑み、大きく目を見開いたまま硬直した。むきになって抗議してくるかと思つたのに、それとは対照的なこの反応に、誠一は少しばかりの当惑と焦りを感じた。

「冗談だよ」

「えっ……」

漣の表情が、驚きから怒りへと変化していく。

「もっつ！ ひどい！ー！」

感情のままに声を上げると、膝にのせたクツシヨンに勢いよくこぶしを振り下ろした。小さな口をきゅっと引き結び、うつすらと涙の溜まった瞳で、迫力があるとは言いがたい睨みをよこす。それを、誠一は軽く笑って受け止めた。

「溼が、怪盗ファントムであるはずがない??。」

久しぶりに彼女と会って、話して、あらためてそう確信した。この素直でまっすぐな子が、犯罪に手を染めるなど考えられない。何より、こうも騙されやすくは、刑事たちの目を欺いて盗みを働くなど、とても出来はしないだろう。疑う方がどうかしているのだ。

だが、それはあまりにも安易な結論である。個人的な感情で刑事としての目を曇らせ、ただ自分の信じたいものを信じただけの結果にすぎない。そのことに、このときの誠一はまだ気付いていなかった。

ヤカンがカタカタと揺れ、シューシューと白い煙を吐き始めた。

誠一はコンロの火を止めると、ティーバッグを入れたマグカップに熱湯を注ぐ。そのとき、居間で座っていた溼は、唸る携帯電話をハンドバッグから取り出し、ディスプレイで相手を確認してからその電話に出た。

「はい、師匠?」

師匠というのは、橋財閥会長秘書をしている楠悠人のことだ。溼たち兄妹にとっては、保護者代理であり、武術の師匠でもあるらしい。それだけでなく、溼のことが好きで結婚を望んでいるとも?? 誠一はヤカンを握りしめたまま、ティーバッグの沈んだ紅茶に視線を落とした。

「えっと、少しなら……」

溼は、誠一の方を気にしながらも、電話の向こうの彼にそう答えた。

「三者面談? ……はい……私はいいですけど、師匠は忙しいのに

……うん……」

三者面談というのは、教師、生徒、保護者の三者で行う進路関係の面談だろう。疑っていたわけではないが、このことで、本当に彼は保護者代理なのだ実感する。誠一はヤカンをコンロに戻し、十分に役目を果たしたティーバッグを取り出して捨てた。そして、湯気の立ち上るマグカップを両手に持って、澁のいる丸テーブルへと向かう。

「本当に少しは自重してください」

澁はほんのりと頬を染めながら、少し口をとがらせて電話の相手に言っていた。

誠一はテーブルにマグカップを置くと、彼女のすぐ隣にクッションを引いて腰を下ろす。彼女は少し動揺したようだが、戸惑いの目をよこしただけで、逃げようとも電話を切るうともしなかった。

『今、どこ？』

受話器から相手の声が漏れ聞こえる。澁は困惑ぎみに眉を寄せた。

「……友達の家です」

『友達、ね』

少し笑いを含んだ声音。その答えが嘘であることは見透かされているようだ。しかし、澁は謝るところか、逆にムツとして声をとがらせた。

「いけませんか」

『春までは待つって言ったからね』

待つ？ いったい何を？ 誠一が疑問に思っただけで横目で窺うと、彼女は暗く表情を沈ませていた。何かはわからないが、無性に嫌な予感がする。耳に全神経を集中させながらも、平静を装って紅茶を口に運んだ。

『あまり遅くならないうちに帰ってこいよ』

「わかっています」

いかにも保護者といった悠人の発言に、澁はやや反抗的な口調で答えると、携帯電話を切つてすぐハンドバッグにしまった。そのままじつと下を向いていた彼女の前に、誠一はもう一つのマグカップ

を差し出して尋ねる。

「楠さん？」

「うん……」

澪はマグカップに手を伸ばしながら、小さな声を落とす。

「一緒に住んでるのか？」

「そうだけど……」

「大丈夫なのか？」

彼女に気のある男が同じ屋根の下で暮らしているとなれば、心配するのは当然のことだろう。澪には武術の心得があり、並みの男であればねじ伏せられるが、悪いことに相手はその武術の師匠なのだ。もし彼に変な気でも起こされたら、逃れるのは難しいのではないかと思う。しかし、澪は心底意外だというように、目をぱちくりさせながら、慌てて両手をふるふると振った。

「一緒の家だけど部屋は別々だし、全然大丈夫だから！ 小さいときからずっと一緒に住んでるんだもん。今さらそんな……ていうか、無理やりどうこうする人じゃないよ……」

「ならいいんだけど」

今のところ、危険な事態には至っていないようだが、今後もそうだと保証はどこにもない。彼女が彼のすべてを理解しているとは限らないのだ。だが、それを言ったところで、聞き入れてはもらえない気がした。もう一度、紅茶を口に運んで、遠くを見やりながら小さく息をつく。

「俺たち、結婚できるのかな」

ぼつりとそうつぶやくと、隣で紅茶を飲みかけていた澪は、大きく目を見開いてゲホゲホとむせた。気管に入ったらしく、肩を揺らしながら涙目で咳き込み続けている。誠一は慌ててその背中をさすり、覗き込んだ。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

明らかに動揺した声。彼女はおずおずと上目遣いで誠一を窺う。

「でも、いきなりどうしたの？」

「いきなりでもないだろう。この前、漣のそういう話が出ていたし、この前というのは、誠一が初めて橘家に連れて行かれたときのことである。漣は何を言いたいのか察したらしく、きまりが悪そうに、困惑したような面持ちで目を伏せた。そんな彼女の頭に、誠一はほんとは優しく手を置いて言う。

「少し、話してもいいか？」

漣はこくと頷いた。

誠一はマグカップに手を掛けると、細波が揺れる紅い水面に視線を落とした。向かい合って話すのが何となく躊躇われ、そのまま彼女に目を向けることなく口を開く。

「漣には結婚なんてまだ現実味のない話だろうけど、俺はもうすぐ30だし、同級生や同期でも結婚した奴らがちらほら出てきてるんだ」

「うん……」

漣はそう相槌を打ちながら、崩していた膝をゆっくりと引き寄せ、抱えた。短いプリーツスカートからすらりとした脚が伸びている。真面目な話をしている今の誠一には目の毒だ。反対側にそっと視線を逃がすと、小さく呼吸をし、落ち着いた口調で語っていく。

「だから、結婚については否応なく意識させられる。もちろん俺には漣しかいないし、今すぐってわけじゃないけど、いつか漣と結婚できればって……漠然とそんなことを思っていた。けど、そのたびに絶望的な現実がちらつきました。俺なんかじゃ、漣の家とは到底釣り合わないし、漣の家族に反対されるだろうってな」

漣は黙って聞いていた。その横顔は長い黒髪に隠されている。

「それが怖くて、最近はなるべく考えないようにしていた。漣はただ若いからと自分に言い訳をして……要するに逃げてたんだな。漣の置かれた立場を聞かされて、身を引けと言われて、そのときはっきりと自覚したよ」

だからといって、どう行動すべきかはまだわからない。ただ、逃

げている場合でないことだけは確かである。

「澪は……どうなんだ？」

「どうって、何が……？」

「楠さんでもいいのか？」

澪は首を横に振った。眉根を寄せて自分の足もとを見つめる。

「師匠のことは好きだけど、そういうのじゃなくて、ずっと本当の家族みたいに思ってた……なのに、急にこんな話になって……私……」

彼女は溢れくる感情を押しとどめるように、声を詰まらせた。やがて小さく息をついて言葉を繋ぐ。

「結婚とかまだよくわからなけど、私、誠一とずっと一緒にいたいよ……」

気持ちと同じだった。

誠一は左手を伸ばして澪を抱き寄せた。体ごと自分に寄りかからせ、腕の中に閉じ込める。このぬくもりを失いたくない。けれど、彼女の家族が、本当に楠悠人との結婚を望んでいるのだとしたら？。

不意に、澪が首を伸ばして唇を重ねてきた。

あたたかく、柔らかく、それでいて確かな感触。ほどなくして名残惜しげにそつと離れる。それでも息の触れ合う距離でとどまったまま、視線を上げ、濡れた漆黒の瞳をまっすぐ誠一に向けた。

ドクンと心臓が収縮し、体の芯が熱くなる。

今度は誠一の方から彼女に唇を重ねた。ただ触れ合わせるだけでなく、衝動の赴くまま、少し性急に舌を割り入れる。まだあまり慣れていない彼女が、ぎこちなくも懸命に応えてくれるのが愛おしい。艶やかな黒髪から、頬、鎖骨、胸、腰、そして剥き出しの太腿へと彼女の形をなぞるように右手を滑らせていく。指先にしつとりとした素肌を感じながら、顔の角度を変え、息が上がるほどに深く口づけをかわす。

「れ、い……」

「やめ……ないで……」

時間を気にして手を引きかけた誠一は、その吐息まじりの甘い声で、僅かに残っていた理性をすっかり崩壊させられた。何の解決にもならない行為にただ呑み込まれていく。まるで、互いの存在を確かめ合うかのように、互いの不安を紛らわせるかのように。そして、行き詰まるこの状況を、一時でも忘れようとするかのように?。?

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

学校から帰るとすぐ、漣と遙は剛三の書斎に呼び出された。てつきり怪盗フロントムの打ち合わせだと思ったのだが、扉を開けると二人の見知らぬ男性が執務机の前に立っていた。二人とも折り目正しいスーツを身につけており、一人は剛三と同年代、もう一人は悠人と同じくらいの年頃に見える。漣が戸惑い一つも軽く会釈すると、年配の方の男性は、にっこりと人当たりの良い笑みを浮かべた。

「紹介しよう」

そう言つて、剛三は立ち上がった。

「こちらは警察庁長官の楠昭彦さん、そして、警察庁警備局公安課の溝端彰さんだ」

「けっ……?!」

大声を上げそうになり、漣は慌てて指先で口を押さえる。まさか正体を知られたのだろうか？ 逮捕しに来たのだろうか？ 橘家も会社も何もかもおしまいなのだろうか？ 絶望的な考えが、次々と脳裏を駆け巡つていく。

その横で、遙は冷静に首をひねった。

「楠つて、もしかして……」

「そう、よく気付いたな。さすがは遙」

剛三は嬉しそうに声を弾ませる。

「楠長官は、悠人の父君だ」

「えっ……ええー?!?!」

漣は有らん限りの声を上げてのけぞった。

二人をまじまじと見比べてみると、確かに、目元や顔の輪郭などは似ている気がする。楠長官が見せている穏やかな微笑みも、いつもの悠人と重なるものがあつた。しかし、これまで悠人から父親の話聞いたことはなく、それどころか実家に帰っている様子もなく、

どうやら父親との仲はあまり良くなさそうだ。今も、剛三の背後に立ったまま、眉ひとつ動かすことなく無表情で前を向いていた。

もしかすると??。

ふと頭をよぎった仮説に、漣はごくりと唾を飲む。

先代ファントムをやっていたことを父親に知られてしまい、そのせいで、折り合いが悪くなったのではないだろうか。警察庁長官の息子が怪盗の一味など許されるものではない。縁を切られるどころか逮捕されても仕方がない。やはり、部下を連れて訪ねてきたのは??最悪の懸念を顔に滲ませると、まるで見透かしたかのように、剛三はニヤリと口の端を上げて言う。

「おまえたちには言っていなかったが、先代のときから取引しておつてな。怪盗ファントムを黙認してもらう代わりに、要請があれば公安の手助けをする」と

「……えっ?」

漣はとっさに話が呑み込めなかった。構わず剛三は続ける。

「黙認といっても、このことを知っているのは警察庁の上層部と公安の一部だけで、ファントムを逮捕しようと躍起になっている刑事たちは、あくまでも本気がかかってくるからな。気を緩めるでないぞ」

「はあ……」

少しずつ理解が追いついてきたが、あまりにも信じがたい話で、漣は気の抜けた返事しかできなかった。警察が怪盗を黙認というものもありえないが、その怪盗に手助けを頼むなど、常軌を逸しているとしかいいようがない。遙も同じ気持ちだったのか、隣で呆れたように大きく溜息をついていた。

「今日は仕事の依頼に来ました。よろしく頼みますよ、可愛いファントムさん」

楠長官は人なつこい笑みを向けて言う。

戸惑いつつも、漣はちょこんと頭を下げた。怪盗ファントム黙認の代償と言われては、釈然としない気持ちはあっても、断ることな

どできるはずがない。それに??警察が怪盗にどのような仕事を頼むのか、少しだけ興味をひかれていた。

「長澤朗 衆議院議員」

「あ、テレビで見たことある」

書齋脇の打ち合わせ机には、いつもの面々に加え、楠長官と溝端が席に着いている。溝端が手持ちの写真を机の中央に差し出すと、澪は身を乗り出し、思わず野次馬のような能天気な声を上げた。隣の篤史に冷ややかな目を向けられ、慌てて身を引き、小さく肩をすくめながら下を向く。

楠長官は優しく微笑んだ。が、すぐに表情を引き締めて本題に入る。

「総理よりも力があると云われる陰の権力者だが、数多くの不透明な金の流れが噂されている」

「めずらしい話でもなかつ。公安が介入するほどの件とは思えんが」

フン、と剛三は鼻を鳴らした。

楠長官は机の上で手を組み合わせ、落ち着いた口調で続ける。

「癒着の相手が問題なのです。いくつもの過激派や宗教団体から不正に資金提供を受け、彼らの利益となるよう行動しており、今もある法案を通さないよう裏工作をしていると聞いています」
「なるほどな」

そう言うと、剛三は不敵に口の端を上げる。

「その法案とやらを通さないと、警察庁として都合が悪いというところか」

「否定はしません」

楠長官は顔色ひとつ変えずに認めた。

澪はそつと眉をひそめる。過激派とか、宗教団体とか、法案とか、馴染みのない物騒な単語が飛び交い、何か途方もない話だというのはわかるが、あまりにも世界が違いすぎて、今ひとつ現実味を感じ

ることができない。

「あの……そんなに深刻な問題なら、本職の人たちで捜査した方がいいと思いますけど」

「もちろん私たちも捜査を行ってきましたが、確たる証拠が手に入られないのです。相手が相手だけに、こちらも慎重にならざるを得ず、警察という枠の中では限界がありました」

楠長官は静かにそう言い、視線を上げた。

「そこで、盗みのプロであるあなた方に、ぜひご協力を賜りたいと」
「プロって……私たちお金をもらってませんし、ボランティアです」
澪は反感を露わに言い返す。もちろん、自分たちが罪を犯しているという事実は理解しているが、誰かを救うためという免罪符までは手放したくなかった。もっとも、楠長官に深い意図はなかったよ
うで、にっこり微笑みながら優しく言いあらためる。

「それだけ凄いいいことだよ、澪ちゃん」

それでも、澪のもやもやした気持ちは晴れなかった。彼に悪気はないのかもしれないが、犯罪に関して褒められても、やはり素直に喜ぶわけにはいかないだろう。

「それで、何を盗めばいいの？」

それまで黙って聞いていた遙が、じれったそうに重く淀んだ空気に切り込んだ。

すぐに溝端が返答する。

「長澤議員の自宅二階にある書斎に、インターネットに接続していない、スタンドアロンのパソコンがあります。そのデータを盗み出していただきたい」

「そこに証拠があるってこと？」

「確証はありませんが、可能性は高いと思われます」

溝端は細い眼鏡をクイツと押し上げた。その官僚的な口調も、感情のない表情も、隙のない仕草も、何もかもが冷徹なエリートという雰囲気醸し出している。対照的に、楠長官はどこまでも人当たりが柔らかく穏やかだった。

「どうでしょう、頼まれてもらえますかな？」

「良かるう。ただし、方法はこちらに一任してもらおう」

剛三は厳しい表情で答えるが、それでも楠長官の笑顔は崩れない。「もちろんそれで構いません。よろしくお願いいたします」

彼はそう言つて深々とお辞儀をする。隣の溝端も、無表情のまま頭を下げた。まるで警察側が礼を尽くして頼んでいるかのように見えるが、それがただの体裁にすぎないことは、おそらくここにいる誰もが無言のうちに承知していた。

「大丈夫かなあ」

楠長官たちの訪問翌日から速やかに準備を始め、数日後のこの日、とうとう依頼を実行に移すことになった。しかし、その方法を聞いた澁は、大きな不安を感じずにはいられなかった。

「普通にこつそり侵入した方が楽なんじゃない？」

「まあ、剛三さんだからね」

隣の悠人が軽く苦笑しながら答える。その常套句で片付けてしまふのもどうかと思うが、実際に剛三の意向には逆らえないのだから、そう答えるより他に仕方がないのかもしれない。

「ファースト、こちらの準備は完了した。実行開始だ」

『了解』

運転席に座る篤史がヘッドセットで指示を出すと、近くで待機している遙から短い応答があった。いかにも面倒くさそうな投げやりな声である。公安の手伝いが嫌なのではなく、自分の役回りを不満に思っているらしい。計画を確認しているときに、どうして自分だけ雑用なのか、もっと面白いことがしたかった、と口をとがらせてブツブツこぼしていた。

それでも、きちんと役割を果たすのが遥である。

間もなくガシャンと派手にガラスの割れる音がして、そこからモクモクと白煙が上がった。彼が二階の書斎に煙り玉を打ち込んだのだ。家政婦と思われる女性の悲鳴も聞こえる。もちろん煙は無害な

ものであるが、何も知らなければ、さぞや驚くだろうことは想像に
難くない。

すぐに、漣の膝にのせたノートパソコンが緊急通報を受信した。
本来はセキュリティ会社に送信されるものだが、長澤家のものだけ
こちらで受けるよう細工したのである。漣は画面を操作してヘッド
セットで対応した。

「こちらはSKセキュリティサービスです」

「あのっ、煙が！ 窓が割られて……！！」
年配の女性がパニックになって叫ぶ。

「はい、すぐに緊急対応員を向かわせますので、煙には近づかない
ようにして、落ち着いてお待ちください。警察にはこちらから通報
しておきます」

「お願い、早く来てっ！」

「数分でお伺いしますので大丈夫ですよ」

慌てふためく彼女をどうにか宥めて、漣は通話を切った。ふう、
と大きく肩を上下させる。上手くできたか自信がなかったが、隣の
悠人に優しく微笑まれて、ようやく少し安堵することができた。

コホン、と篤史がわざとらしく咳払いした。

「何よ」

「別に」

彼は前を向いたまま澄まし顔で答える。いつもはつきりと言葉に
しないので、何を知っているのかわからないが、このところ悠人と
のことを冷やかすような言動が多い。別に師匠とは何でもないんだ
から?? 漣は何度もそう言いかけたが、結局、一度も口にするこ
とは出来ていない。

ガラガラガラ???

ワゴン車の引き戸を開けて、遙が後部座席に乗り込んできた。漣
の隣に座って覆面マスクを外し、仏頂面のまま、くしゃくしゃにな
った髪を掻き上げる。

「さて、行きますか」

遥の無事を確認すると、篤史は軽く意気込んでヘルメットをかぶった。すでに防護ベストや警棒などは装備しており、準備は万端に整えられている。悠人も同じ格好をしていた。澁だけは別で、黒のパンツスーツに黒縁眼鏡、長い黒髪を後ろでまとめるという、地味な社会人風の出で立ちだ。三人は遥を残して車から降り、徒歩で、目的の長澤家へと向かった。

「SKセキュリティから来ました」

「私は通報を受けて警視庁から」

玄関口で応じた少しふくよかな家政婦に、三人は嘘の身分を告げた。念入りにも、澁は偽物の警察手帳を掲げて見せている。そのポーズは意識的に誠一を真似ており、こんなときにもかわらず、少しだけ気持ち浮き立ってしまった。しかし、家政婦はまだ動揺が治まっていないらしく、気もそぞろで、警察手帳などほとんど気に留めていなかった。

「二階に何か黒いものが投げ込まれたようで、煙が……」

「状況を確認してきますので、一階でお待ちいただけますか」

「はい、どうぞよろしくお願いします」

家政婦は不安を顔に滲ませながら、深々と頭を下げた。

「刑事さん、話を聞くのでは？」

「え……？ あ、はい！ そのときのお話を聞かせてくださいね」
他人事のようにぼんやりしていた澁は、悠人に促されて我にかえり、慌てて家政婦に向き直ってそう言った。とつさに刑事らしからぬ口調になってしまったが、疑われてはいないようだ。まだ怯えている彼女を気遣いながら中に誘導する。その横で、悠人と篤史は一礼し、軽い足取りで二階へ駆け上がった。

ダイニングキッチンで、澁と家政婦は向かい合って座った。

話を聞くといいっても、すべて澁たちが計画を立てたので、何が起こったかは当然わかっている。長澤議員が仕事で不在なことも、奥

さんが所用で出掛けていることも調査済みだ。さらに、この家からの電話発信と着信はジャックし、相手と繋がらないようにしていたので、まだ主と連絡が取れていないことも承知していた。

つまり、この聞き取りの目的は、家政婦をここに足止めすることだけである。

もちろん彼女がそんな事実を知るはずもなく、澪が質問すると、申し訳ないくらい真面目に答えてくれた。しかし、根っからの話し好きらしく、緊張が解けるにつれ、大いに楽しそうに話を脱線させていく。澪もあれこれ質問を浴びせられて冷や汗をかいたが、何とか適当に誤魔化して切り抜けた。

「お嬢さんみたいな可愛らしい子が来てくれて良かったわあ。刑事なんてみんな、目つきが悪くて、柄も悪い、いかつい男ばかりと思っていたから、少し不安だったのよ」

そう言つて、家政婦はホホホと笑った。澪は小さく肩をすくめる。「刑事にもいろいろな人がいますよ」

「お嬢さんはどうして刑事になったの？」

「えっ？」

想定外の質問に焦りながらも、必死に頭を巡らせ言葉を紡ぎ出す。「えっと、世の中の役に立ちたくて……」

「まあ、若いのに立派ねえ」

疑いもせず感嘆されたうえ、優しい眼差しを向けられ、澪は申し訳なさに居たたまれなくなる。騙す相手が悪い人ばかりであれば気が楽なのだが、必ずしもそうはいかないのがつらいところだ。

「それにしても遅いわねえ。何をやっているのかしら」

家政婦は思い出したようにそう言つと、頬に手を置きながら二階の方へ視線を向ける。

「あつ、あちらは危険ですし、警備員に任せておきましょう」

「それもそうね。お嬢さんとお話してるのも楽しいし」

澪としてはそれも困る。これ以上、突っ込んだことを聞かれたら綻びが出そうだ。左耳のイヤホンで聞いた篤史たちの報告によると、

該当のパソコンはすぐに見つかったが、パスワード解析とデータ移行に時間がかかっているらしい。どうか早く終わって、と心の中で祈りながら笑顔を作る。

すると???

コンコン、とノックされて扉が開いた。

「確認調査、一通り終わりました。投げ入れられたものに毒性はなく、癩癩玉のようなものと思われませう。おそらく近所の子供の悪戯ではないでしょうか」

「そうですか、安心しました」

悠人が説明すると、家政婦は胸に手を当ててホッと息をついた。

「簡単に片付けておきましたが、まだ破片が残っているかもしれないので、お気をつけください」

「ご丁寧にありがとうございます」

軽く一礼して出ていく悠人と篤史を、家政婦は玄関まで送りに行く。澪も慌てて立ち上がった。

「あっ、あの！ 私もこれで失礼します！」

「あら、もっとゆっくりしていらしたら？」

せつかくの話し相手を手放したくないのだろう。家政婦はにっこりとして言う。

「お気持ちは嬉しいのですが、私もそろそろ署に戻らないと……」

「そうね、お仕事だったのよね。私ったら長々とお引き留めしてごめんなさい」

「いえ、楽しかったです」

澪は薄く微笑む。そこには少しの本心も混じっていた。嘘に気付かれないかずっと気がかりだったし、騙していることを申し訳なくも思ったが、それでも、彼女が温かく気さくに接してくれたことは、作戦とは関係なく素直に嬉しかった。

「探してるものは見つかった？」

スーツから普段着に着替えた澪は、黒髪をなびかせて剛三の書斎

に入ると、打ち合わせ机で作業している篤史に尋ねた。彼は防護ベストとヘルメットを外したくらいで、まだセキュリティ会社の制服を身につけたまま、真面目な顔でノートパソコンに向かってる。

「いま搜索してるところ。しばらく待ってろ」

「うん」

澁は隣に座って頬杖をついた。その打ち合わせ机についているのは、データ搜索作業をしている篤史、それを斜め後方から見張る公安の溝端、急かさず待っている悠人と遙、そして今やって来たばかりの澁である。楠長官は今日は来ておらず、剛三は中央の執務机で他の仕事をしているようだ。

「探してるもの以外には何が入っているの？」

「ほとんどが不正の証拠になりえるデータだよ」

誰にともなく尋ねた澁に、悠人は些末なことであるかのようにさりりと答えた。

「長澤議員ならばそのくらい揉み消すことは可能だろう」

執務机の剛三が口を挟む。

「ええ、だからこそ例のデータが必要なのです」

溝端も同調する。その口ぶりは冷静だったが、眼鏡の奥の瞳は燃えたぎり、怖いくらいに鋭い光を放っていた。職務に対する忠誠心なのだろうか。それとも、彼自身の正義感なのだろうか？このときの澁には、彼の静かなる情熱の正体がまだわかっていなかった。

「おし、暗号化フォルダ開いた！」

篤史の声で、澁たちは一斉に振り向く。

これまでの搜索作業で目的のデータは見つかっておらず、残るは唯一暗号化されていたこのフォルダのみだった。おそらく、最も秘密にしたいファイルが、ここに保存されているはずである。

「探してるものはあったの？」

「それはこれから確認するところ……って、はあっ?!?!」

澁が画面を覗き込もうとした瞬間、篤史は裏返った声を上げ、そ

して力まかせにノートパソコンを閉じた。壊れるかと思うくらいの勢いである。漣だけでなく、遙も、悠人も、みな不思議そうな顔をしていた。篤史は閉じたノートパソコンに手を掛けたまま、きゅつと口を引き結び、額にじわりと汗を滲ませる。

「漣と遙はあっち行ってる」

「ちょ……！ 何よそれ！！」

「子供には見せられないんだよ……！！」

カッとして噛みついた漣に、篤史はその何倍もの迫力で怒鳴り返した。彼がここまで感情的になったのは初めてである。少なくとも漣は見たことがなかった。気おされて咄嗟に言葉が出てこない。

「漣、遙、向こうで座ってて」

「……はい」

さすがに悠人に命じられては従わざるを得ない。漣はしぶしぶその返事をして、遙とともに、示された対面側にまわって座る。篤史は険しい目つきでそれを確認すると、気持ちを落ち着けるように息をつき、悠人と溝端に覗き込まれながら、そろりとノートパソコンを開いた。

「……何だ、これは」

「さあな。お偉い議員さんの趣味だろ」

溝端が面食らったように尋ねると、篤史はキーボードに手を置き、吐き捨てるように答えた。悠人も画面を眺めながら眉をひそめている。三人とも見るからに不快そうで、何かはわからないが、それが余程のものであることが窺えた。

「こういう写真ばかりなのか？ 他にはないのか？」

「ファイルは全部画像らしいが、中は開けてみないとわかんねえよ。今やってんだから黙って待ってる」

篤史はかなり苛立っているらしく、遙か年上の溝端に、失礼なくらいぞんざいな口調で返事をした。ただ、その間も手は動かし続けている。それを見て溝端は口をつぐんだ。書斎にはカシヤカシヤという乾いた打鍵音だけが残った。

「ねえ、何なんだろう？ 何だと思う？」

「普通に考えれば、エロかグロのどっちかだろうね」

画面を見ることを許されない澪と遙は、目の前の三人の様子を窺いながら、顔を近づけてひそひそと話し合う。しかし、部屋が静かだったこともあり、あまり離れていない三人には、話の内容まで丸聞こえだったようだ。

「子供が余計な詮索するなっ」

篤史は画面から目を離すことなく叱り飛ばす。しかし、さほど年齢の変わらない彼に、こうやって何度も子供扱いされては、澪としてはどうしても反発したくなる。

「そんなに子供じゃないもん」

「17歳は間違いなく子供だ！」

「澪、篤史の言うとおりだよ」

悠人が畳みかけるように篤史を援護する。そのことに、澪はますます釈然としないものを感じた。

「都合のいいときだけ子供扱いするんだから……」

許可なく強引なキスをしたり、結婚を迫ったりしておきながら、こんなときだけ子供扱いなど狡いとしか言いようがない。しかし？。

「澪は大人扱いされたいの？」

「……子供のままでいいです」

につこりと満面の笑みで尋ねられると、そこはかかない身の危険を感じてしまい、不本意ながらも引き下がるしかなかった。

遙は二人から顔をそむけると、どちらに呆れているのか、大きく溜息を落として頬杖をついた。篤史は少しうつぶき声を堪えるように笑っている。そして、執務机に向かっていた剛三は、こちらに視線を流してニツと口の端を上げた。いろいろと言いたいことはあるものの、下手すると藪蛇になりかねないので、澪はあえて知らんぷりを決め込んだ。

「でも、篤史ひとりだけで確認するのって効率悪くない？」

話を逸らそうと何気なくそう言うと、正面の三人は一斉に顔を上げた。一瞬、澪はビクリとする。

「だって、ほら、私たちには見せられなくても、師匠なら見てもいいんでしょう？ 二人で分担した方が早く終わると思うんだけど。」

師匠だって篤史ほどじゃないけどパソコン使えるよ？ 名前とか住所とか書かれてる画像があるか確認するくらいなら出来るはずだし……特殊な方法であぶり出さないと確認できないなら仕方ないけど……」

「それだっ！！」

「えっ?!」

篤史は唐突に澪を指さして大声で叫ぶと、ノートパソコンにかぶりつき、これまでの何倍もの速度でキーボードを叩き始めた。視線もせわしなくあちらこちらと動いている。その表情は真剣そのものだった。

「画像そのものに直接書かれてるんじゃないやなくて、画像ファイルに情報として書き込まれているかもしれない」

澪にはその意味がわからなかったが、何かをひらめいたのは確かだろう。

「出たっ！」

しばらく作業に没頭していたかと思うと、短く歓喜の声を上げ、ほっとしたように椅子の背もたれに身を預ける。その両側から、悠人と溝端が、前のめりになって画面を覗き込んだ。

「これで間違いないでしょう」

そう言って、溝端は中指で眼鏡を押し上げ、篤史にちらりと切れ長の目を流す。

「天才ハッカーにしては随分手際が悪かったですね」

「まったく、よりによって澪に気付かされるとはな」

篤史は不本意だと言わんばかりに、苦々しい顔で吐き捨てた。

「何よ、素直に感謝してくれてもいいじゃない」

澁は口をとがらせて抗議する。しかし、自分の言葉のどれがヒントになったのかは、実のところよくわかっておらず、あまり声を大きくして言うことはできなかった。

篤史は後頭部で手を組み合わせる。

「方法としては難しいわけじゃなく初歩的なものなんだよ。けど、まさかあのジジイがやってるとは思わなかったし、この画像を見て完全に逆上してたからな」

「仕方がないだろう」

悠人が体を起こしながら静かに言う。

「フォルダのパスワードを破ったとしても、この画像を見れば、それだけでたいいていの人間は納得してしまう。これを隠すためにパスワードを掛けたんだとね」

「なるほど、趣味と実益を兼ねた保管方法というわけですか」

溝端は抑揚のない声で相槌を打つと、ノートパソコンの画面を冷ややかに見下ろした。

「どうやら、一つのファイルが一人または一企業の情報になっているようですね。おそらく他のファイルにも書き込まれているでしょう。すべて取り出すにはどのくらいかかりますか？」

「全ファイルにあると想定すれば1時間くらい」

「今すぐやってください」

「ああ、やっておきますので休憩してきていいですよ」

篤史はいかにもうざったそうにそう言い、再びノートパソコンに向かうと、溝端を追い払うかのごとく手をひらひらさせた。しかし、彼は鉄仮面のようにピクリとも表情を動かさない。

「私が目を離すわけにはいきません」

「勝手にしろ」

まるきり信用していないであろう口ぶりに、篤史は眉間に皺を寄せ、前を向いたまま突き放すように言う。そして、関わり合いにならないとばかりに、必要以上に画面に顔を近づけて作業を始めた。

「二人とも、夕食を済ませておいで」

悠人が、正面の漣と遙にそう促した。

掛け時計はすっかり夕食の時間を指している。それを見て、漣は思い出したように空腹を感じた。打ち合わせのため、昼食が早めだったせいもあるのだろう。今にもおなか鳴りそうである。

「行こう、漣、おなかすいた」

遙も同じだったようで、そう言いながら、さっそく机に手をついて立ち上がった。つられるように漣も立ち上がる。一人で作業を続ける篤史のことが気になったが、ここにおいても自分に手伝えることはない。今は、素直に悠人の言葉に甘えることにした。

「はあっ?!」

再び発せられた篤史のただならぬ声に、書齋を出ようとしていた漣たちの足が止まった。振り返ると、彼が画面を覗き込んだまま固まっているのが見えるが、その画面に何が映し出されているのかまではわからない。

漣たちを見送ろうとしていた悠人も、怪訝な顔で振り向いた。

「どうしたんだ、篤史」

「あ、いや……」

いつになく篤史の歯切れが悪い。すると、斜め後ろにいた溝端が口を切る。

「財団法人 生体高エネルギー研究所??当然ご存知でしょうが、

橘美咲女史が所長を務める研究所です。長澤議員は、不正に提供を受けた資金の多くをそこに流しています」

「……えっ?」

青天の霹靂??。

あまりにも突飛な話で思考が追いつかない。母の研究所が長澤議員から資金を受け取り、その資金というのは、過激派や宗教団体から不正に得られたもので??漣は必死に反芻するものの、内容の難

しさゆえ、結局ぼんやりとしか理解できない。それでも、深刻な事態であることを感じ取り、じわりと嫌な汗が滲んでくる。遙も、隣で険しい顔を見せていた。

「知っておったのだな？」

執務机の剛三が、鋭い眼差しを溝端に投げる。それでも彼は平然とした態度を崩さない。

「証拠はないと申し上げました」

「敢えて我々に曝かせるとは、警察庁も良い趣味をしておるな」

「感謝していただきたい。あまり他には知られたくないでしょう」

溝端は一步も引かず、百戦錬磨の剛三と渡り合っている。彼自身の性格もあるのかもしれないが、こちらの弱みを握っていることが何より大きいのだろう。だからといって、しおらしくなるような剛三ではない。逆に、今にも斬りかからんばかりに睨みつけて言う。

「あまり図に乗るでないぞ」

「ご忠告、痛み入ります」

威圧的な声にも動じることなく、溝端は軽く受け流した。

澗は僅かに目を細める。この一連のやりとりからすると、まるで美咲の不正が決定事項のようである。少なくとも、二人はそれを前提に話をしていた。しかし、にわかには信じられなかったし、信じたくもなかった。

「お母さまが不正なお金をもらってたって、本当なの……？」

「十分に有り得る話だ。研究にはいくらでも金がかかるからな」

剛三は事も無げに首肯した。すぐに悠人が補足する。

「しかし、研究一筋の美咲が主導できるものとは思えません。おそらく大地が咬んでいるのではないかと。もしかすると、美咲は何も知らないということも考えられます」

「なるほどな……」

剛三は真剣に考えながら頷く。

「問題は、なぜ長澤議員が資金を提供していたのかということだ。何の見返りもなくそんなことをする奴ではあるまい。美咲の研究で

利益を享受する算段をつけていたとしか思えんが、そのあたりのことは何かわかっておらんのか」

溝端は横目でノートパソコンの画面を一瞥した。

「ファイルには書かれていないようですね。もし、何かわかりましたらお知らせいたします。ご承知いただいているとは思いますが、捜査の妨げになりますので、橘美咲女史にも、橘大地氏にも、その他の誰にも、なにとぞ今回の件はご内密にお願いします」

澁は口を引き結んでうつむいた。肩から落ちた黒髪がさらりと頬を掠める。こんな話を聞いたあとで、何事もなかったように両親と顔を合わせるなど、自分出来るのだろうか。両親の不正を完全に信じたわけではない。だからこそ、本人の口からきちんと言っていて、話し合いたいのに、それすら許されることがもどかしい。許されずとすれば、それは捜査が終わったときで??。

「お母さまの研究所、どうなるの……?」

「ご安心ください。この件が表沙汰になることはありません。長澤議員の罪を曝くためでなく、取引材料として、これらの証拠を使わせていただく所存ですので。当然、研究所への金の流れはストップすることになるでしょうが」

溝端はいたって事務的に答えた。非難しているようにも、嫌味を言っているようにも聞こえない。しかし、彼の思考がまったく掴めない分、澁には、その答えがかえって空恐ろしく感じられた。

澁、遙、悠人の三人は、廊下に出ると、音を立てないように書斎の扉を閉めた。当初は、澁と遙だけで夕食に行くはずだったが、急に悠人も一緒に行くと言い出してついでにきた。おそらく、澁たちがシヨックを受けていないか、心配しているのだろう。

窓から見える風景は、もうすっかり紺色に塗り替えられていた。その下方で、黒い枯れ木が音もなく揺れる。

澁はほんのり冷えた空気を吸い込み、溜息をついた。

「これで、いいのかな」

「何が？」

遙が素っ気なく尋ねた。少し躊躇いつつ、漣は後ろで手を組んで答える。

「長澤議員も、研究所も、何の罰も受けないみたいなこと言ってるから」

「漣は、母さんや父さんが逮捕されてもいいの？」

その挑発的な物言いに、幾分ムツとしながらも冷静に言葉を返す。「別に逮捕してほしいわけじゃないよ。私だってそんなの嫌だし、困るし、このままずっと平穏な生活が続けばいいって思ってる。だけど……もし本当に、お母さまやお父さまが悪いことをしてるんだつたら……」

「それをいっただら僕らも同じだよ。窃盗してるわけだし」

「それは……そうなんだけど……」

遙の指摘があまりに身も蓋もなく、漣は思わず言葉に詰まった。確かに自分たちも罪は犯している。が、私利私欲でなければ、他人を傷つけるものでもない。一方の長澤議員は、過激派や宗教団体と繋がり、日本を危険にさらして大金を得ているのだ。そして、その金を、本当に研究所が受け取っているのだとしたら??。

「漣」

考え込んでいた漣の頭に、悠人が優しく手を置いた。それからふつと微笑み、語りかける。

「漣の考えていることは正しい。これからもずっとその気持ちを忘れずにいてほしいと思う。だが、現実には、正義よりも最善を選択することは少なくないんだ。納得はしなくてもいい。ただ、自分ではどうにも出来ないことであれば、あまり深く思い悩まない方がいい」

それは、漣を傷つけることなく宥めるために、慎重に選んだ言葉なのだろう。けれど、どこことなく、彼自身に言い聞かせているようでもあった。師匠もつらいのかもしれない??漣はそう感じたが、硬い表情のまま、ただこくりと頷くことしかできなかった。

悠人に促されて、澗たちはゆっくりと歩き出す。

誰も口を開こうとはせず、三人の靴音だけが、静寂に包まれた廊下に冷たく響いた。

「終わったー！」

昇降口から外に出ると、澪は両手を空に突き出し、大きく伸びをして息を吸い込んだ。空は鉛色に垂れ込めているが、空気は新鮮で心地良い。利きすぎた暖房でぼうつとした頭も、少ししゃっきりとしてきた。

隣を歩くスーツ姿の悠人は、お疲れさま、と温和な微笑みで澪をねぎらった。

今日は高校の三者面談だった。

本来は保護者が出席するものだが、両親とも忙しく、その代理として悠人が来たのである。こういったことは今回が初めてではない。学校側も橘家の事情は理解しており、入学当初から、戸籍上無関係の悠人を保護者代理として認めていた。

面談の内容は、主に進路のことである。

澪は文系を選択しているが、担任には、以前から理系に変更することを勧められていた。特に理系分野の成績が良いわけではないが、おそらく母親が名の知れた科学者なので、澪にもその才能があると思われるのだろう。おまけに、意欲さえあれば遙にも負けないはずだと、何の根拠もないことを本気で言うのだ。そのたびに、澪は辟易としていた。

「お母さまのせいで、変に期待をかけられちゃってつらいな」

「気にすることはないよ。澪は澪でやりたいことをやればいい」

人影のない静かな石畳を歩きながら、つい弱音をこぼした澪に、悠人は優しく励ましの言葉を掛ける。けれど、澪の顔はなおさら曇った。

「やりたいこと、特にないんですよ。将来の夢とかも全然なくて

……」

遙は橘家を継ぐように言われているが、漣の将来は誰にも決められていない。しかし、せつかくの自由にもかかわらず、いまだ方向性を定めることさえ出来ずにいた。

思い悩む漣を見て、悠人はくすりと笑った。

「僕もそうだったよ」

「えっ？ 師匠も？」

「そんなに意外？」

「はい……」

漣はまじまじと悠人の顔を見つめた。彼が将来について悩む姿は、想像もつかない。

「師匠はどうやって大学や学科を決めたんですか？」

「僕と一緒にのところにしろ、って大地に言われてね」

悠人は苦笑しながら答える。

漣はこのときまで二人が同じ学科だったことを知らなかった。同じ高校・大学出身だとは聞いていたが、学部や学科のことまでは話題に上らなかつたのである。

「何学科だったんですか？」

「工学部生物工学科だよ」

「理系、だったんですね」

「見えない？」

「そんなこともないですけど」

そう答えたものの、二人とも文系のイメージがあつたので、少し意外に思ったのは事実だった。しかし、白衣で実験する姿を想像してみると、けっこう似合っている気がして、思わずくすすと笑みがこぼれる。

「無理に大学に行かなくても構わないよ」

「えっ？」

漣は振り向いた。

悠人は足を止めることなく続ける。

「専業主婦という道もあるだろう？ もちろん強制ではないよ。僕は澪を縛るつもりはないから、大学へ行きたければ行ってもいいし、働きたければ就職してもいいけど、そういう選択肢もあるということ」と

その一方的な内容に、澪は眉をひそめた。

「あの、師匠と結婚するのは決定事項なんですか？」

「そう言わなかった？ 時期については澪の希望も聞くよ。僕としては少しでも早い方がいいんだけど、現実的には次の夏休みか、卒業式のあとくらいかな」

悠人は少しも悪びれずに言う。

ムツとして、澪は横目で睨みつけた。彼が結婚を決めていることはわかっていたが、一応、春までは返事を待つと言っていたはずだ。せめて自分の発言には責任を持つてほしいと思う。だいたい、早い方がいいといつても、怪盗ファントムの仕事も終わらないうちに結婚だなんて？？そこまで考えたとき、ふと、ある疑問が頭をよぎった。

「私たちって警察に黙認されてるんですよね？ だったら誠一に話しても……」

「それでも法を犯していることに変わりはない」

彼の声に厳しさが宿った。

「確かに僕たちは私利私欲で動いているわけではないし、黙認もされているけれど、悪いことをしているという自覚は持つべきだ。気の緩みは破滅に繋がりがかねない。そもそも警察庁にとっても機密事項なんだよ。これ以上、誰にも知られてはならないということは、きちんと理解しておいて」

「……はい」

ピシヤリと言われて、澪には返す言葉がなかった。

悠人の指摘したこともあるが、考えてみれば、肝心の誠一がどう受け止めるかもわからない。いくら警察に黙認されているとはいえ、彼自身の正義が許さない可能性もある。そう思うと、急に怖くなっ

てきた。

「さ、これからどこへ行こうか」

「えっ？」

考え込んでいるうちに、いつのまにか悠人の黒い小型車の前まで来ていた。駐車場に他の車は見当たらない。彼は助手席側のドアを大きく開き、につこりと満面の笑みを浮かべる。

「嫌だと言っても一晩付き合ってもらうからね。面倒なことを押しつけられたんだから、そのくらいのご褒美がないとやってられないだろう？」

それを聞いて、漣はくすりと笑った。

「遥とも三者面談のあとで御飯を食べに行きましたよね」

「ああ、あれは二人きりで男どうしの話がしたくてね」

「えっ？ それどういう話ですか？」

「内緒」

悠人はあつさり和一蹴する。

「ヒントだけでも」

「ダメだよ」

漣が食い下がっても、彼の答えはにべもなかった。いくら粘ったところで聞き出せそうもない。ここは素直に諦めて、帰ったら遥に聞いてみようかな？ などと少々ずるいことを考えながら、悠人に促されて助手席に乗り込む。

「で、どこへ行こうか。晩御飯まではまだ少し時間もあるし、行きたいところがあれば連れて行ってあげるよ」

悠人は開いたドアに片腕をのせ、助手席の漣を覗き込んで尋ねた。

漣は少し考えて、答える。

「じゃあ、海が見たい」

「海ね、了解」

悠人はにつこりと微笑んで助手席のドアを閉めた。そして、反対側から運転席へ乗り込み、カーナビに手早く目的地を設定すると、エンジンをかけてゆっくりと発車させた。

タブン、タブン??。

下方から、コンクリートに打ち付けられる水音が聞こえる。眼前には細波立った黒い海面が広がり、どこからか運ばれた小枝の塊や捨てられた空のペットボトル、ビニル袋などを不規則に揺らしていた。ところどころ油も浮かんでいるようだ。そのせいか潮風には僅かに異臭が混じり、視覚的にも嗅覚的にも、さわやかな海のイメージとはほど遠い。

「確かに海だけど……」

「あしたの予定を全部キャンセル出来たら、きれいな海へ連れて行ってあげられたんだけどね」

悠人は肩をすくめて苦笑する。

しかし、漣とてりゾート地のような海を期待していたわけではない。思ったより少し酷かっただけのことだ。薄汚れた白い柵に両腕を置き、そこに顔をのせて、鈍重な冬の海をじっと眺める。不意に強まった冷たい潮風が、頬を掠め、長い黒髪をさらりと吹き流した。「海の匂いってね、私、お母さまを思い出すの。研究所が海の近くだからかな。健康診断で研究所に行くときくらいしか、お母さまとゆっくり過ごせないし……」

そう言うと、目を伏せて薄く微笑む。

研究に明け暮れている母親との思い出は、ほとんどが研究所に関わるものだった。けれど、それを悲しいとは思わない。優秀な科学者である母親は、漣にとって誇りであり、憧れてさえいたからだ。なのに、その研究所で不正が行われていたなんて??。

「漣、大丈夫か？」

心配そうに声を掛けた悠人に、漣は精一杯の笑顔を見せた。

「平気です。私には師匠や遙がついているんですから。師匠には、橘家のことで面倒ばかりかけて、申し訳なく思ってますけど……今日三者面談だって……」

「漣はそんなことを気にしなくていいんだよ」

悠人は澪の頭にポンと大きな手を置いて言う。その言葉に嘘はないだろう。ただ、面倒をかけられたことは否定しておらず、この現状については、やはりそれなりの不満を感じているのだと確信する。「お父さまって、そんなに忙しいんですか？」

「まあ、忙しいのは忙しいと思うけど、家に帰れないほどではないはずだよ。帰ってこないのは、少しでも美咲と一緒にいたいからだろうね」

「……えっ？」

その意味がわからず、澪は振り向いて聞き返した。

「仕事が終わると研究所に行ってるんだよ。知らなかった？」

「うん……」

仕事が忙しいと聞かされていたためか、不在のときはすべて仕事だと思い込んでいた。いや、実際に昔はそう言っていたはずだ。今ではもう尋ねることさえなくなつたが、小さな子供のころは、両親が家に帰ってこない理由を悠人や祖母によく尋ねていた。そして、答えはいつも「仕事」だったのだ。

悠人はズボンのポケットに片手を入れて、うつむいた。

「美咲は研究に明け暮れているからわかるが、大地があれこれ僕に押しつけるのは、多分、面倒なことをしたくないからだろうね。興味のあること以外はやりたがらない奴だから……」

そう言っつて小さく息をつく、顔を上げ、遠い眼差しを空に向ける。

「大地は、昔から自分勝手に気ままに自由だった」

「淡々とした口調。しかし、そこには深淵な感情が潜んでいるように感じられた。」

「美咲のこと……いくら気に入ったからといって、まだ小学生の女の子を、いずれ結婚するつもりで引き取るなんて、僕には狂っていると思えなかった」

怪盗ファントムとして絵画を取り返した大地は、一目見て、本来の持ち主である美咲に心を奪われた。そして、彼女に身寄りがない

いことを知ると、剛三に頼んで養子として橘家に迎える??それが倫理的に褒められるものではないことは、澪も理解している。

「でも、剛三さんも乗り気でね。僕の反対意見は聞き入れてもらえなかったよ。幸か不幸か、小笠原の事故に遭って、大地と美咲の気持ちは通じ合ったみたいだけど」

結婚前のことだが、大地と美咲が小笠原へ向かう途中、乗っていたフェリーが沈没するという事故に遭ったらしい。生存者はこの二人だけだったようだ。科学者としての橘美咲を特集していた新聞記事で、この話を知ったのだが、当事者である両親から直に聞いたことはまだない。

「事故に遭ったから……?」

「きっかけはそうだろうね。あの事故で、美咲にとって大地は命の恩人になったんだ。それまでも兄としては慕っていたようだけど、それとは違う、危うささえ感じるくらいの慕い方をするようになってね。事故からしばらくの間は、片時も離れようとはしなかった」

それは初めて聞く話だった。過去のこととはいえ、自立した今の美咲とは別人のようで、澪は少しばかり戸惑いを感じてしまう。しかし、よく考えてみれば、無理もないのかもしれない。まだ10代前半の少女が、あれほどの大事故に遭えば、心に深い傷を負うだろうことは容易に想像がついた。

「今の研究の道に進んだのも、大地の意向らしいよ」

「じゃあ、お父さまが才能を見いだしたってこと?」

「そういうことになるかな。でも、彼女にとっては幸せだったのかどうか……」

以前の澪なら、迷うことなく「幸せだ」と言い返していただろう。しかし、研究所の不正を知ってしまった今では、そう断言する自信はなくなってしまった。美咲が関与していたのはわからないが、研究所としての不正は間違いないらしく、そこまで追いつめられていたとしたら、もしかしたら??。

「大地が何を考えているのかわからない」

悠人は、白い柵に腕を置きながら言う。

「昔から相談してくれたことなど何ひとつなかった。いつも自分で勝手に決めて進み、そして僕を巻き込んでいく。他人がどうなるうとお構いなしさ。僕は彼のことを友人だと思っていたけれど、彼は都合よく利用していただけなのかもしれない」

「……恨んでいるの？」

「そういう気持ちもないとはいえない。でも、結局のところ彼が好きなんだらうな」

初めて聞く悠人の本音。

今日の彼は、今まで語らなかつたことを次々と口の上している。研究所の不正を知った影響だらうか。漣と同じように、もしかすると漣以上に、やりきれない思いを抱えているのかもしれない。言葉の端々からそれが滲んでいるような気がした。

漣が無言で立ち尽くしていると、悠人はふっと柔らかく微笑んで振り向いた。

「何より、彼のおかげで漣と会えたわけだしね」

そう言いながら、人差し指で漣の横髪をすくい、ゆっくりとなぞるように耳に掛けていく。たったそれだけのことで、くすぐったさとは別のものを感じてゾクリとする。表情に出したつもりはなかったが、悠人にはすっかり見透かされたようで、意味ありげに彼の口角が上がった。漣はほのかに頬を染めたまま、唇をとがらせる。

「師匠も最近は随分自由に見えますけど」

「大地を見習ってみただよ」

悠人はしれっと答えた。そして、薄い唇に笑みをのせると、白い柵を握り、仄暗い鉛色の空を仰ぎ見る。

「人生で一度くらい我が儘になっても構わないだらう？」

「……そういう言い方、ずるいです」

鈍い痛みが胸に走る。漣は目を細め、鼻筋の通った彼の横顔をそっと見つめた。大地の我が儘に振り回され、剛三の野放図に付き合わされ、自分たちの世話まで押しつけられてきた、そんな彼がたっ

たひとつ望むことだとしたら??。

「冷えてきたね。そろそろ行くところか」

悠人が振り向きながら言う。

陽が落ちたのか、あたりは急速に暗さを増していた。風もさらに冷たくなっている。短いプリーツスカートでは覆いきれない太腿も冷え切っているようだ。澪はこくりと頷き、白い柵から手を離れた。

「何が食べたい？」

「……温かいもの」

少し考えて、そう答える。

「温かいものね、了解」

悠人は笑いを含んだ声で復唱すると、澪の肩に手を回し、駐車場に向かって歩き出した。

次第に重なっていく二つの足音。

彼の隣はとても居心地がいい。小さいときからずっと大好きで、尊敬していて、言いようもないくらい感謝もしている。そんな彼に結婚を望まれるのは、幸せなことなのかもしれない。どのみち、誰よりも一緒に歩んでいきたい人とは、引き離されてしまうのだから?? 澪は眉を寄せ、思考を振り払うように小さく頭を振った。その現実を認めている。だが、正面から向き合う覚悟までは、まだ持てずにいた。

「今まで師匠と何してたわけ？」

若干の怒りを含んだぶつきらぼうな口調。

剛三の書齋へ向かう途中、並んで歩く遙に、漣は何の前置きもなくそう尋ねられた。一瞬、きよとんとしたものの、すぐに言わんとすることを理解する。後ろで手を組み合わせてくすと笑うと、少し前屈みになり、長い黒髪をさらりと揺らしながら彼を覗き込んだ。遙だつて三者面談のあとごはん食べに行つたじゃない

「僕はごはんだけで、その日のうちに帰ってきたけどね」

遙はツンと答えるが、漣は目を輝かせて無遠慮に踏み込んでいく。

「ね、ごはんのとき、師匠と二人でどんな話をしたの？」

「内緒」

「男どうしの話って聞いたけど……」

「ノーコメント」

「ちょっとだけでも」

「言わない」

遙の態度は、悠人以上に取り付く島もなかった。当てが外れて、

漣は拗ねたように口をとがらせる。

「じゃあ、私も答えない」

「いいよ、別に」

自分から訊いたにもかかわらず、もう興味をなくしたかのように、彼は涼しい顔でそう受け流した。これでは漣の方が困ってしまう。募る悔しさに眉をひそめながらも、ぼそりと小声で言い訳をする。

「ホテルのプールで泳いだだけだからね」

「一晩中？」

「まさか。もちろん部屋には泊まったけど……」

三者面談が終わったあと、埠頭で海を見てから食事に行き、その後ホテルのスイミングプールで泳いだ。久しぶりに悠人と50mの

タイムを競って、何度挑戦しても勝てなかったけれど、一時でも面倒なことを忘れられて凄く楽しかった。いい気分転換になったと思う。

そして、夜はそのホテルに泊まったが、やましいことなど何ひとつない。

子供の頃はよく一緒に寝ていたし、今も泊まりがけで下見に行ったりしている。結婚の話が出てからは、さすがに多少は意識もするが、何もしないという彼の言葉を信じているし、これまで実際に何も起こっていない。そんなことは遙も知っているはずなのに、今日に限って何を気にしているのか、漣にはわからなかった。

「師匠と結婚することに決めたの？」

「……そんなの、まだわからないよ」

単刀直入に不躱なことを訊かれ、漣は少しムツとする。それでも遙は容赦なかった。

「早く決めなよ。これじゃ二股だよ」

「二股って……師匠とは、別に……」

漣には二股を掛けているつもりなど微塵もない。それだけに、遙の言葉には軽く衝撃を受けた。きっぱりと否定すべきだったが、口から出た言葉は、なぜか自信のなさそうなたどたどしいものだった。彼は前を向いたまま付言する。

「それに、先延ばしにすればするほど傷つくことになるから」

漣は小さく首を傾げた。

「誠一が？」

「二人とも」

先延ばしにすることで誠一の傷が深くなるのは、何となく理解できなくもないが、漣の傷も深くなるというのはどうということだろうか？その理由が掴めず悩んでいると、遙はふと思出したように尋ねる。

「それよりテレビは見た？」

「えっ？ テレビ？」

溼はさらりと黒髪を揺らして振り向き、ぱちくりと瞬きをした。

「怪盗ファントムが狙っている『ある少女の肖像』について教えてください」

最前列の若い女性レポーターが、パイプ椅子から立ち上がった尋ねた。

すると、この会見の主役と思われる恰幅のいい男性が、フラッシュを浴びながら、勝ち誇ったような不敵な笑みを浮かべて答える。
「『ある少女の肖像』は、天野俊郎が元華族に依頼されて手がけた肖像画で、描かれている少女は、橘財閥会長の亡くなった妻だと聞いている。これまで世間にはあまり知られていない作品だ。しかし、彼の他作品と比較すると圧倒的に価値は低く、なぜファントムが欲するのかはわからない」

今度は後方の男性レポーターから声上がる。

「その絵を見せていただけませんか？」

「残念ながらご容赦いただきたい。怪盗ファントムに盗みのヒントを与えることになりかねませんからな。無事に守りきれたときは、何らかの形でみなさんに披露することをお約束しよう」

別の男性レポーターが手を上げて立ち上がる。

「ファントム対策はすでにお考えでしょうか」

「丁寧な予告状をいただいたのだ。こちらも真正面から相對したいと思う」

そう答えて一呼吸おくと、まっすぐに前を見据えた。

「見ているか怪盗ファントム。扉は開けておく。二階応接室にて、この内藤自らが肖像画とともに迎えしよう」

会場にどよめきが起こり、目のくらむような無数のフラッシュが焚かれた。その中心に座る男性は、せり出した腹を見せつけるようにふんぞり返りながら、いかにも満足そうに口の端を上げていた。

パチン??。

打ち合わせ机に設置されたテレビの電源が切られた。

録画映像を見ていた溲たち怪盗ファントムの面々は、黒くなった画面から目を離し、どことなく重たい空気に包まれながら机の中央に向き直る。

「今朝の予告状を見た内藤からの返答だ」

剛三は眉間に皺を刻んだ。

「わざわざ自社にマスコミを呼び集めて会見したらしい。良い話題作りになると思ったのだろう。メディアを利用して成り上がってきた内藤らしい下品なやり口だ。あのような輩の手に、一秒たりとも瑞穂の肖像画を置いておきたくはない」

苛立ちを露わにしてそう言うと、ギリギリと奥歯を噛みしめ、握りつぶさんばかりにリモコンを握りしめる。無言の空間に、張りつめた軋み音が響いた。

会見をしていた男性は、内藤茂という実業家である。

これまで何かと剛三に対抗意識を燃やしていたようだが、当の剛三は歯牙にも掛けず、さまざまなちょっかひも動じることなく黙殺してきた。しかし、瑞穂の肖像画を手に入れたなどと言われては無視できない。面会したいという内藤の要求を、不本意ながらも、初めて受け入れることになったのだ。

事前に調査したところ、その肖像画はどうやら本物らしいことが判明した。剛三は存在すら知らなかったが、瑞穂が嫁ぐ前、彼女の父が馴染みの画家に描かせたもののようなのだ。最愛の娘の姿を手元に残しておきたかったのだろう。所有者である瑞穂の父が亡くなったあと、長きにわたり行方不明だったが、最近、天野俊郎の未公開作品としてひっそりと市場に現れ、それを内藤が150万円で購入したのである。

剛三は買い取らせてほしいと頭を下げたが、内藤は応じなかった。しかし??。

「飽きたら無料でお譲りしますよ。ただし、傷だらけになっている

「かもしれませんがね」

「あからさまな挑発口調で言う。」

内藤はそれだけのために瑞穂の肖像画を手に入れたのだろう。無視され続けたことに対する復讐だったのかも知れない。だが、剛三からすれば逆恨みもいいところだ。このような横暴を許せるはずもなく、絵画関係ということもあり、怪盗ファントムに肖像画を救出させようと決めたのである。

「しかし、予想外の行動で計画が狂ってしまったな……」

剛三は眉間の皺を深くする。

「でも、扉を開けて待っていてくれるなら楽ですよな」

「バカもん！ 真に受ける奴があるかっ!!」

場を和ませようとした溼の言葉も、苛立っている彼には通じず、思いきり怒鳴り返されてしまった。遥は溜息を落しながら頬杖をつき、悠人は声を立てずに苦笑している。が、篤史だけは険しい表情を崩さなかった。

「現時点での問題は三つ」

おもむろにそう言って、三本の指を立てる。

「一つ目、俺らが警備員として潜入することは不可能になった。内藤は警備会社に依頼するつもりはないらしい。万が一、これから依頼することがあったとしても、直前では準備のための時間が足りないからな」

当初の計画では、篤史が警備員の一人に成り済ますことになっていたが、さすがに警備員を雇わないのではどうしようもない。ただ、この件については事前に想定済みのはずである。何の愛着も持っていない、たかだか150万円の絵のことで、あの内藤が警備など頼みはしないだろう？と、先日の打ち合わせで剛三に指摘され、別案を考えておくよう言われていたのだ。

篤史は眉を寄せて、言葉を継ぐ。

「二つ目、警備システムが利用できなくなった。内部監視や陽動作

戦に、内藤邸の警備システムをハッキングして使う予定だったが、あの会見以降、どういうわけかすべての警備システムが切られている」

このことは悠人も遥も初耳だったようで、ハツと目を見張った。漣は小首を傾げながら尋ねる。

「それって、こっちの計画が読まれてるってこと？」

「過去の事件から推考した可能性はあるだろうな」

篤史は淡々と答えた。それから、小さく溜息をついて続ける。

「三つ目、仕掛けた盗聴器やカメラも一つ残らず見つけられて外された。今は内藤邸の様子を知る術はない。つまり、計画はまっさらな白紙に戻ったってことだ」

これまでずっと冷静に述べていたが、最後だけ少し投げやりな口調になった。準備がすべて水の泡になったのだから無理もない。今回は悠人が別件で忙しかったため、篤史が中心となって進めており、それゆえ悔しさもいっそう大きいのだろう。

しかし、悔しいだけですむ話ではない。

予告時間が刻々と近づいてきているのに、ここにきて白紙状態など、いったいどうするつもりなのだろうか。いっそ中止にしてくれた方がありがたいが、怪盗フロントムのイメージを考えれば、そう簡単に予告を撤回するわけにもいかないはずだ。漣は眉をひそめ、八つ当たりぎみに口をとがらせる。

「私的なことにフロントムを利用するからバチが当たったんですよ」「なんだとツ！」

剛三はクワツと目を見開き、筋張った両こぶしを激しく机に叩きつけた。

「おまえは瑞穂が陵辱されてもいいというのか?!」

「陵辱って、そんな大袈裟な……」

凄まじい勢いで噛みつかれ、漣は困惑ぎみに身をのけぞらせる。

悠人は小さく微笑んだ。

「確かに、今回の件は私情を挟んでいるが、絵の尊厳を守るとい

理念には反していないよ」

言われてみれば、この案件が今までで一番理念に叶っているのかもしれない。浅はかな目的のために傷つけられる絵画を救い出す？それは、所有者でも作者でもなく、絵そのものの尊厳を守ることには他ならないのだから。もっとも、剛三は瑞穂の肖像画を取り返すことしか考えていないようだが。

「今から計画を練り直しても、その準備をする時間がない」
篤史は机の上で手を組みながら言う。

「外部からのサポートが難しいこの状況では、怪盗ファントムにすべてを任せて、正面突破で絵を奪ってきてもらうしかないと思う。内藤には秘書兼ボディガードの屈強な男が二人、常に付き従っているそうだが…… 溇、おまえやれそうか？」

「私は反対です」
尋ねられた溇を差し置いて、悠人が声を上げた。そのまま毅然と続ける。

「溇には荷が重すぎる。今回は、全面的に遥に任せた方がいいですよ」

「私、やります」
溇は手を上げて言った。

やりたいと思ったわけではない。けれど、体が反射的に動いていた。遥の方がすべての能力において上であることは認めており、反感などは持っていないが、なぜかこのときばかりは大きく気持ちが悪わついたので。

振り向いた悠人の表情は厳しかった。

「これは失敗が許されない。意地は捨てて考えるんだ」
「…… 大丈夫です。必ずやり遂げますから」

まるで心を見透したかのような彼の言葉に、溇は少し当惑したが、ゆっくりと右手を握りしめながらそう断言した。そして、小さく息を吸い込んで顔を上げると、にっこりと力強く笑ってみせた。

その日の夜??。

澪は近くのビルからハンググライダーで飛び立つと、緩やかに弧を描きながら、内藤邸の正面玄関前にすっと静かに降り立った。門の外側には数多くの野次馬やマスコミが集まっており、歓声とも野次ともつかない声を上げて騒々しく盛り上がっている。対照的に、敷地内には警備員も警察も見当たらず、不気味なくらいに静まりかえっていた。

玄関の扉は、宣言通り大きく開け放たれていた。

こつこつというわかりやすいパフォーマンスをすれば、マスコミが食いつき話題になる。そういう計算もあるのだろう。昔から過剰な売名行為でのし上がってきた人物らしく、剛三は彼のそういうところを嫌悪しているようだった。

澪はハンググライダーをその場に置き、用心しながら玄関へと足を踏み入れた。

『セカンド、二階へ上が……』

「副司令?」

イヤホンから聞こえていた悠人の声が、途中で雑音に呑み込まれた。妨害電波で通信を阻害されたようだ。事前にそういう可能性もあるとは聞かされていたが、実際に連絡が取れなくなるとやはり不安になる。が、前に進むしかない。

正面には、待ち構えるように幅広な階段があった。

畏がないか確認しながら、澪は一步步慎重に足を進めていく。

屋敷に響くのは自分の足音だけで、あたりに人の気配は感じられない。本当に警備は頼まなかったようだ。

階段を上りきると、すぐ目の前が応接室である。飾り彫りが施された木製の扉??澪はその前に立ち、ごくりと唾を飲む。一瞬、ドアノブに触れることに躊躇したが、この扉を開かなければ始まらない。覚悟を決めると、白い手袋をはめた手で、両開きの扉をゆつくりと押し開いた。

「ようこそ、怪盗のお嬢さん」

広い部屋の奥に内藤が立っていた。その両側には、いかにも屈強そうなスーツ姿の男性二人が付き従っている。篤史が言っていた秘書兼ボディガードのようだ。

「君が欲しがっているのは、この絵かな」

そう言って、内藤は肖像画を前に掲げて見せつけた。額装されていない剥き出しのキャンバスを、素手で無造作に掴んでいる。そこからは絵に対する敬意など欠片も感じられなかった。漣は顎を引き、仮面の下でキュツと下唇を噛みしめる。

内藤は口もとを斜めにした。

「私にとっては何の価値もないものだが、君にとってはそうでもないのだろうか？」

彼の右手には金色の四角い何かが握られていた。親指で蓋を跳ね上げ、何かをカチツと押すと、薄青色の炎が現れる。どうやらライターのようだ。その炎で、彼は無言のまま肖像画の下方をあぶり始めた。キャンバスの縁が茶色く変色し、焦げくさい匂いが広がる？。

ハツタリじゃない、本当に燃やしてる！！

漣は大きく息を呑み、はじかれたように内藤に向かって突進する。が、部屋の中ほどまで来たとき??。

「……っ?!」

足もとがすくわれ、体が宙に浮き、視界が大きく反転した。一瞬、何が起こったのかわからなかったが、あたりを見まわしてすぐに理解した。内藤の仕掛けた罠にかかり、網に絡め取られ、天井から吊されているのだと。もがいても思うように動けない。体は腰から二つ折りになっており、下手すると自分の膝で仮面を打ちつけてしまいうそだ。めくれているスカートを直すこともできない。端から見たら、とんでもなくはしたない格好になっていることだろう。

内藤がゆったりと近づいてきた。

「まさか、これほど簡単に捕らえられるとはな。他にもいくつか罠

を準備してあったが、少々買い被りすぎだったのかもしれん」

吊された怪盗ファントムを見上げながら、顎に手を添え、いかにも愉しそうに声を弾ませる。そして、残虐な笑みを瞳に宿すと、粘り気のある眼差しをいやらしく這わせていく。漣の全身にゾクリと悪寒が走った。

「一部では性別不明と言われているが」

「……っ!」

内藤の無骨な指が、網越しに漣の太腿に触れた。口から飛び出しそうになった悲鳴を何とか呑み込む。しかし、それで終わりではなかった。ゆつくりともつたいつけるように、もしくはじつくりと味わうように、太腿をなぞりながら付け根の方へと滑らせていく。漣は涙目で唇を噛みしめながら、身をよじり、見つからないよう密かに内ポケットを探った。

「女で間違いないようだな」

ひどく下卑た声が耳に届く。

「すぐに警察に引き渡すのは惜しい。顔はまだわからんが、体はなかなか良さそうだからな。少し楽しませてもらってからでも遅くはないだろう。拘束具も用意して……」

シユウウウツ?。?

漣は内ポケットから取り出した催涙スプレーを、内藤の顔面に噴射した。

「うぐああああ!!」

至近距離で直撃を受けた内藤は、悲鳴を上げて倒れ込み、絨毯の上で目を押さえてのたうちまわる。

後方に控えていたボディガード二人は、この失態に青ざめ、大慌てで主のもとへ駆け出した。しかし、漣が一人にスプレーを吹きかけると、彼は呻き声を上げ、目を押さえながら膝から崩れ落ちた。もう一人は距離を取って足を止め、身構えながらジリジリと回り込むように横歩きする。漣はその彼に噴射口を向けたまま、もう片方の手でナイフを取り出し、網に少しずつ切れ目を入れていく。思い

のほか頑丈だったため、くぐれる大きさになるまで数分かったが、なんとか無事に脱出することができた。

しかし、まだ仕事が残っている。

ボディガードをスプレーで牽制しつつ、足もとの内藤を避けながら、無造作に投げ出された肖像画へにじり寄っていく。これを持ち帰らないわけにはいかないのだ。しかし、あと少しで手が届こうかというとき??。

ガンッ!!

後頭部に衝撃が走った。前のめりに倒れ込んだ溼の上に、男が馬乗りになり、背中側で腕を押さえて動きを封じる。

「おまえ、目は大丈夫なのか？」

「浴びた量が少なかったからな」

頭上で言葉が交わされる。

溼を押さえ込んでいるのは、催涙スプレーを浴びせたボディガードのようだ。どうにかして逃れようともがいてみるが、相手の方が格段に体格が良く、おまけに武術の心得もあるようで、まったくもってビクともしない。殴られた後頭部が熱く、視界がグラグラと揺れてきた。

「よくやった」

内藤は苦しげに目を押さえながら、体を起こそうとする。

「まだマスクは外すなよ。素顔は私が曝いてやる」

「こいつは危険です。すぐに警察を呼んだ方が……」

「冗談ではない。ここまでのことをやられたんだ。たつぷりと仕返しせねば気が済まん。そして、マスクミを集めて大々的に晒してやる。警察に引き渡すのはそのあとだ」

そう言いながら、片手で目を覆ったまま立ち上がる。よろける彼の体を、手の空いているボディガードが支えた。内藤の目はまだ見えていないと思われる。だが、回復するのも時間の問題だろう。

このままでは、何もかもがおしまい??。

頭の中で警鐘が鳴り響くものの、体は動かさず、目の焦点も合わな

くなってきた。仮面の内側に汗が伝う。それでも歯を食いしばり意識を保とうとしていた、そのとき。

「バサバサツ??。」

派手に風を切るような音を立て、黒い何かが視界を横切っていく。しかし、それが何か考えるより前に、漣の意識はすつと闇に沈んでいった。

大人たちの話し声が聞こえる。

会話の内容はわからないが、優しくて穏やかな声、心地よく響くリズム。

ゆつたりと波に揺られているようで、何だかとても懐かしい。

けれど、それは次第に遠ざかっていく。

どうして?

お願い、私を置いていかないで、私をひとりにしないで??。

「漣、気がついた?」

「お母さま……?」

無意識に伸ばした手の向こうに、並んで見下ろしている悠人と美咲の顔が見えた。少し離れたところには遙もいる。状況の掴めない漣は、混乱した頭であたりを見まわしながら体を起こした。ここは、自分の部屋に間違いない。怪盗ファントムの赤いシャツを身につけたまま、ボタンを上から三つほど外され、いつも使っているこのベッドに寝かされていたようだ。確か、内藤邸でボディガードに取り押さえられて、それから??。

「えっと、私、どうして……?」

「師匠が助けてくれたんだよ」

遙が答える。

「やっぱり漣一人に任せるのは不安だからって、先代ファントムの格好でこっそり乗り込んで行ってね。漣が上手くやれてたら出番はなかったはずなんだけど」

気絶する寸前に目の前を横切った黒いものは、マントを翻した悠人だったようだ。あらためてその姿を見てみたいと思ったが、もういちど着てほしいなど、今は頼める状況でも雰囲気でもない。遠慮がちに悠人を見上げて首をすくめる。

「あの、すみませんでした」

「この程度で済んで良かったよ」

悠人は微笑んだ。

「肖像画は……？」

「ちゃんと盗んできたよ」

その答えに、澪はほつと胸を撫で下ろす。そして、隣的美咲に視線を移した。

「お母さまはどうして？」

「澪が心配だからに決まってるでしょう？ これでも母親ですからね。悠人さんから連絡をもらって飛んできたわよ」

確かに、白衣こそ着てなかったものの、仕事用のスーツを身につけたままである。髪も、いつも研究所でしているように、後ろでひとつに束ねているだけだった。

「大地は出張中で、すぐには戻ってこれられないの。ごめんなさいね」「ううん」

こんなことで大事な仕事が目撃になつては、かえって申し訳が立たない。会えないことに寂しさを感じるものの、そこまでの贅沢を言うつもりはなかった。美咲が心配して帰ってきてくれたこと、そして母親だからと言ってくれたこと、それだけで十分である。

ふと、美咲は思い出したように言う。

「そうそう、さっき石川さんに診てもらってね。すぐに意識が戻ったら問題はないだろうけど、頭を打ってるから、念のため設備の整った病院で検査してもらった方がいいって」

「うん、そうする……石川さんは？」

「先に研究所に戻ってもらったわ」

やはり、研究が相当忙しいということだろう。澪は薄く微笑む。

「ありがとうございます、って石川さんに伝えてください」

「ええ、必ず伝えておくわ」

美咲は笑顔で答えた。普段は凜とした姿を見せている彼女の、こういう無邪気な表情は、娘の澪から見ても可愛らしいと思う。小柄で女性らしくて、愛くるしくて、それでいて頭も良くて??自分には足りないものばかりで羨ましくなる。

「寝ていなくて大丈夫か？」

ぼんやり考えごとをしていると、不意に悠人が割り込んできた。覗き込まれた顔の近さに動揺しつつも、澪はこくりと頷く。無理をしているわけではない。殴られた後頭部に若干の痛みは残っているが、それ以外はもう何ともなかった。

しかし、美咲は腰に手を当て、まるで子供のように口をとがらせる。

「悠人さん、少しは反省してます？ フアントムをやるなどは言わないけれど、あまり危険なことはさせないでほしいわ。決めているのはお父さまなんでしょうけど……でも、せめてもっと気をつけてあげてね」

「肝に銘じておきます」

悠人は体を起こしながらそう言うと、含みのある視線を澪に流す。

「僕だつて未来の妻は大事にしたいからね」

「ちよつと、なに勝手なこと言つて……!!」

澪は頬を染めてあたふたした。二人きりのときならまだしも、今は母親も一緒だというの??。

しかし。

「あら、悠人さんとの結婚、もう決めたんじゃないの？」

美咲は拍子抜けするくらい軽く言った。おそらく悠人から聞かされていたのだろう。この様子からすると反対ではなさそうだ。以前にも勧めるようなことを言っていたので、驚きはしないが、だんだんと外堀を埋められているようで怖くなる。

「まだ、決めたわけじゃ……」

「今の彼氏、刑事ですってね」

「うん……」

そこまで知っていたことにはさすがに驚いた。しかし、どう反応すればいいのかわからず、複雑な表情で、縋るように白いシーツをぎゅっと握りしめる。

「すべてを捨てる覚悟があるなら、貫き通しなさい」

「……えっ？」

澪は怪訝に顔を上げた。

「本当に彼のことが好きなら、本当に彼と結婚したいなら、諦める前にまだできることはあるはずよ。でも、覚悟がないのなら、悠人さんと結婚した方が幸せになれると思うわ。最終的に決断を下すのは、澪、あなた自身だということを覚えておきなさい」

美咲は澪を見据えて言った。

確かに理想論としてはもっともな話である。しかし、いくら好きな人と一緒になるためとはいえ、他のすべてを捨てるなど、現実的には不可能ではないだろうか。結局のところ選択肢は一つしかない気がする。

「美咲、あまり煽らないでくれるか」

悠人は苦笑しながら言う。

美咲は束ねた黒髪を揺らして振り返ると、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「あら、自信がないの？」

「澪を不幸にしたくないだけだよ」

少し押されぎみに悠人は答えた。誤魔化すように、大きく顔をそむけて話題を変える。

「そうだ、澪も元気になったことだし、剛三さんのところへ行こうか」

「うん」

澪は頷き、急いで胸元のボタンを留める。プリーツスカートのフックも外されていたので、布団から出る前にそれも留めた。剛三に

も篤史にも心配を掛けただろうし、早く元気になったことを知らせなければと思う。

「美咲もだよ」

「えっ？」

研究所に戻ろうとしていたのか、ハンドバッグを手に取った美咲は、きよとんとして悠人に振り向いた。不思議そうに瞬きをする。しかし、悠人は何も答えず、ただにっこりと満面の笑みを浮かべていた。

「あら、これもしかしてお母さま？」

「だから美咲を呼んだんだよ」

執務机に置かれた瑞穂の肖像画を目にすると、美咲はパツと顔を輝かせ、少女のように愛らしく声を弾ませた。その様子を、悠人が後ろからあたたかい眼差しで見守っている。

「私にも見せて」

隣から、澪はひょっこりと顔を出した。描かれた瑞穂を見ようと思ったのだが、肖像画そのものよりも、つい隅の焼け焦げに目がいってしまう。ライターであぶられるシーンが脳裏によみがえってきた。

「やっぱり、少し焦げちゃってるね」

「これくらいで済んで良かったわい」

剛三は椅子の背もたれに身を預けながら、溜息まじりに答えた。

「絵の価値がわからぬ奴は本当にやっかいだな。そもそも保管方が悪かったようで、埃や汚れがこびりつき、かなり傷もついている。少し修復をした方がいいだろうな。そのあとは、額に入れてここに飾っておくつもりだ」

澪は頷いた。

そして、あらためて肖像画に目を落とす。絵の中の祖母は、今の澪よりも少し若いくらいに見える。まだあどけなさが残っていたが、表情は凜としており、可愛らしさの中にも気品漂う美しさがあった。

「瑞穂おばあさま、きれい」

「うむ。本当に美しく、慎ましやかで、気品のある娘であった。なぜ、この品の良さが受け継がれなかったのか……」

剛三は気難しそうに眉を寄せると、腕を組みながら、じつりと観察するような視線を澗に流す。それだけで、彼の言いたいことは十分すぎるほど理解できた。

「どうせ私は上品じゃないですっ」

澗はやけっぱちにそう言って、口をとがらせる。と、背後から抑えた笑い声が聞こえた。

「澗は現代的なだけだよ」

「それ、フオローになってます？」

そう言って眉をひそめて振り返り、悠人を睨む。どうも論点がずれている気がするが、いくら詰め寄っても、彼はただニコニコするだけで答えようとしない。

「美咲、そんな顔をするでない」

ふと、宥めるような剛三の声が聞こえた。澗たちはつられて目を向ける。

「何もおまえが責任を感じることはないのだからな」

「誤解ですわ。少し他のことを考えていただけです」

「なら良いが……」

にっこりと答える美咲とは対照的に、剛三は釈然としない様子だった。

「もしかして、何か困ったことでもあるのか？」

「誰だって多少の困難は抱えているでしょう？」

「……美咲、もっと私たちを頼っても良いのだぞ」

剛三はもの言いたげに美咲を見据えた。おそらく研究所の不正資金提供という事実を受けての言葉だろう。もつとも、美咲が関与しているかわからないし、そうであったとしても、この曖昧な言い方では伝わっていないかもしれない。

「お父さまには十分に良くしていただきました」

美咲は小さく微笑む。しかし、剛三の表情はいつそう険しくなつた。

「私はおまえの父親だ。遠慮はいらん」

「では、ひとつだけお願いいたします」

「うむ」

手を組んで次の言葉を待つ剛三に、美咲はくすつと笑つて言う。

「澗と遙に、あまり危険なことをさせないでくださいね」

剛三は大きく目を見開いた。そして、眉を寄せて渋い顔になると、めずらしく困惑を露わにした口調で言い返す。

「そうではなく、おまえ自身のことです……」

「私は二人の母親です」

美咲は彼の発言を遮り、凜然と言った。

「……今後は気をつけよう」

ようやく観念したのか、剛三は溜息まじりにそう答える。

美咲は振り返つて満面の笑みを見せた。澗もつられて笑顔を返す。だが、あの剛三が美咲に言いくるめられてしまった事実には驚きを隠せない。そもそも、たじろいだ姿を晒すことからして信じがたい。いつもの強引な態度はどこへいったのだろうか。

血は繋がってなくても、おじいさまにとっては娘つてことなのかな??。

そう思うと、澗の頬は自然と緩んだ。

二人が形だけの親子でないと感じられたことが無性に嬉しく、そして、少し羨ましかった。

「ほつ……本当に大丈夫なんですか？」

『セカンド、僕の指示を信じるんだ』

怪盗フロントムの衣装に身をまとった漣は、風呂敷に包んだ絵画を抱えて逃走していた。足を止めることなく、ちらりと後ろを確かめる。いまだに刑事一人と警官二人が追ってきていた。

失敗したわけではない。これも計画のうちである。

いつもはヘリコプターや下水道、あるいは群衆に紛れるなどの手段で引き上げていたのだが、マンネリは良くないという剛三の一存で、警察に追われつつ街中を逃走することになったのだ。危険なことをさせないでという美咲の願いはどうなったのだろうと、漣は不満に思ったが、悠人がいつでも助けられるよう待機しているため危険はないとのことである。もっとも、それは剛三に云わせればの話だが??。

住宅街に入った漣に、新たな指示が飛ぶ。

『セカンド、正面の道には警官が二人待ち構えている。右手の住宅の間を突っ切り、向こう側の道路へ抜けるんだ。男子高校生が一人歩いているから注意して』

「了解」

そう答えて、住宅を仕切るブロック塀に飛び乗り、軽やかにその上を駆けていく。両側の住人のうち一人に気付かれたが、窓を開けて身を乗り出しただけで追ってはこない。並みの人間には、そう簡単に追いかけるはしないだろう。

視界が開けて素早くあたりを見渡すと、数メートル先に、街灯にうつすら照らされた男子高校生らしき姿が見えた。悠人が言及した人物だと思われる。この距離ならば追ってきてても逃げ切れると確信して、漣は躊躇なく塀を蹴り、くたびれたアスファルトにすたりと着地した。

「……漣？」

よく知った声。

漣はドキリとして振り向いた。薄暗いうえに距離もあるため、顔までにはよく見えなかったが、おそらく間違いないだろう。その男子高校生は、漣の同級生で幼なじみともいえる富田拓哉である。怪盗フアントムの衣装を身にまとい、仮面をつけたこの姿を見て、彼は「漣」と呼びかけた？？その事実を理解し、漣の背筋は凍りつく。

『セカンド、どうした？』

イヤホンからの声にも反応できない。しかし。

「見つけたぞ、怪盗フアントム！」

富田の背後から駆けてきた警官を目にすると、ハッと我にかえった。すぐさま、長い黒髪を大きくなびかせて背を向け、強く地面を蹴り、少しだけ騒々しくなった住宅街を疾走していく。呆然と立ちすくんだ富田をその場に残して？？。

「富田にバレたかもしれない？！」

「シート！ 声が大きいわ！！！」

翌朝、遙にきのうのことを相談すると、彼は目を見張って大声で聞き返した。慌てて、漣は立てた人差し指を唇に当てる。悠人にも、篤史にも、もちろん剛三にも知られたくない。怖々とあたりの廊下を見まわしたが、誰の姿もなく、とりあえずはほっと胸を撫で下ろした。

「どうして反省会の人に言わなかったのさ」

「だって……そう決まったわけじゃないし……」

漣の言い訳に、遙は呆れかえって溜息をついた。そして、いかにも面倒くさそうに口を開く。

「どつという状況だったの？」

「うん……」

漣は目を伏せて頷いた。

「住宅街を走って逃げていたときにね、たまたま歩いていた富田の

前に飛び降りたんだけど、いきなり『漣？』って名前を呼ばれて……しかも、無視して逃げればよかったのに、ついすっかり振り返っちゃって……」

「仮面はつけてたんだよね？」

「うん」

「何か声を出したりしたの？」

「ううん」

「富田にどこか掴まれたりした？」

「触れられてもないよ」

矢継ぎ早の質問に、漣は一つずつ端的に答えを返した。遙は鞆を肩に掛け直しながら言う。

「じゃあ、しらを切り通すんだね。富田に何を言われても、知らない、わからない、なに言ってるの？　ってね。証拠はないんだから、漣さえ認めなければ大丈夫だよ」

「うん、わかった」

緊張ぎみだった漣の表情がようやく緩んだ。くるりと遙の前に回り込んで微笑むと、長い黒髪をなびかせながら、玄関の扉を開けて外に出る。そして、のんびりと出てくる遙を急かし、二人並んで学校へ向かって歩き出した。

「そっか、今日は富田と日直だったんだ……」

教室に入った漣は、黒板に書かれた日直二人の名前を見て立ち尽くした。よりによって昨日の今日で、富田と日直など、ついていないとしか言いようがない。

「なんだよ、その微妙に嫌そうない方は」

「ひゃっ！」

いきなり耳元で本人の声がして、漣は心臓が飛び出しそうになった。身を引きながら振り返ると、すぐそばに富田が立っていた。漣のあからさまな過剰反応のせい、きのうの出来事のせい、何ともいえない複雑な表情を見せている。

「朝っぱらからセクハラとは、さっすが富田だねえ」

「やってねえし！」

すでに自席に着いていた綾乃が、クラス中に聞こえる声でからかうと、富田は白い歯をむき出しにして言い返した。この二人の言い合いは日常茶飯事であるが、気のせいか、今日の富田はあまり乗り気でないように感じられる。ふう、と小さく息をついて澪に向き直った。

「今日はよろしくな」

「う、うん……」

彼は普段より幾分ぶっきらぼうに言うと、自分の席に腰を下ろし、頬杖をついて窓の外に目を向けた。きのうのことには触れていないものの、それが気になっていられるうことは明白だ。知らないふりをしてくれるのか、二人きりのときに言ってくるのか？どちらかわからないだけに、富田と接する機会の増えるこの日直は怖かった。

放課後になっても、富田は切り出してこなかった。

すっかり人のいなくなった教室で、澪は黒板消しをクリーナーにかけ、富田は自席で日誌を書いている。これまでも二人きりになる機会は何度があったが、富田はいつさい怪盗ファントムには触れてこなかった。もしかしたら勘違いだと思ってくれたのかな？と、澪はいささか都合の良いことを考えながら、クリーナーのスイッチを切る。ウウーン……と一気に唸り音が小さくなり、教室はしんと静まりかえった。運動部の掛け声が遠くに聞こえる。

「澪、おまえさ……きのうの夜、何してた？」

富田が真面目な口調で尋ねてきた。澪の心臓がドキンと跳ね上がる。

「いきなり、何……？」

その声はあからさまにうわずっていた。もっと落ち着かなければ、普段どおりに話さなければ、ということとはわかっているのだが、冷静になるうとすればするほど焦りが大きくなる。

富田はそつと日誌を閉じた。

「今日、何か用があるか？」

「ん……別にないけど……」

聞かれるまま正直に答えたあとで、漣はハツとして息を呑んだ。

おそらく、富田はこれから怪盗ファントムの件を問い詰めるつもりなのだろう。予定があると答えるべきだったが、今となつては後の祭りだ。顔から血の気が引いていく。

「じゃあ、これが終わったらどこか……」
ガラガラガラ??。

富田の発言を遮るかのように、派手な音を立てて、後ろの引き戸が大きく開かれる。そこには帰ったはずの遙が立っていた。スタスタと教室に進み入ってくると、富田の後ろの自席に鞆を投げ置き、乱暴に椅子を引いてどっかりと腰を下ろす。

「忘れ物か？」

「まあね」

曖昧にそう答えながら、机からノートを取り出して鞆に放り込んだ。そして、おもむろに顔を上げると、振り返っていた富田を、漆黒の瞳でじつと正視して言う。

「富田、せつかくだから付き合つてよ」

「え？ 付き合つて、どこへだ……？」

何かを警戒するように、富田は硬い表情で引きぎみに尋ね返す。

「久しぶりにパフェが食べたいんだけど」

「ああ」

安堵したような吐息混じりの声。どうやらその答えを素直に信じたらしい。実際に何度も二人で食べに行ったことがあるからだろう。富田も意外と甘いものが好きで、遙に誘われると、嫌がることなく付き合ってきたのである。けれど??。

「悪いけど、今日は……」

ちらりと漣を見て断ろうとする。が、逆に漣はパツと顔を輝かせた。

「私のことなら気にしないで！」

割り込むように声を張り上げると、富田に駆け寄り、机に置かれた日誌を手にとり掲げる。

「あとは私がやっておくから、遥と一緒にパフェしてきてよ」

漣としては、何がなんでも遥と行ってもらわなければ困るのだ。

急かすように肩を押すと、富田はしぶしぶながら鞆を持って立ち上がった。そして、その鞆を肩に掛けながら、遥と並んで教室を出て行った。

二人は学校近くのフルーツパーラーに入った。

品のある落ち着いた雰囲気の内装で、パフェも美味しく、遥も富田も気に入っている店だ。

遥は迷うことなくフルーツパフェを、富田も少し迷って同じものを注文した。ウエイトレスが戻っていくと、それきり、どちらも口を開こうとはしなかった。遥はいつもどおり平然としていたが、富田は落ち着きなくそわそわとしている。

やがて、フルーツパフェが二つ運ばれてきた。

富田はほっとしたように息をつくと、さっそくスプーンで生クリームをすくって食べ始めた。同様に、遥も黙々とパフェを口に運んでいく。そんな彼らに、まわりの女性たちはチラチラと好奇の目を向けるが、遥も、富田も、そんな視線にはもう慣れっこだった。

「漣を呼び出して何するつもりだったの？」

パフェの残りが少なくなったところで、遥はいきなりそう口を切った。

富田のスプーンは空中で固まる。

「まさか、おまえ……それを阻止するために俺を誘ったのか？」

「富田が漣だけを呼び出すなんて、今までなかったと思うけど」

遥は瞬きもせず彼の目を見つめて言う。富田はきまり悪そうに目を逸らすと、そのまま眉を寄せて考え込んだ。やがて、小さく息を吐いて慎重に口を開く。

「俺さ……、きのう間近で怪盗ファントムを見たんだ」

「それで？」

遙は先を促す。富田は表情を険しくし、ごくりと唾を呑んだ。

「あれは、溲だ」

「ファントムが？」

「ああ……」

そう言うと、スプーンをそっとグラスの中に置き、テーブルの上で両手を重ねた。その指先にはグツと力がこもっている。まるで、溢れそうな感情を押しとどめているかのようだった。

遙はパフェを口に運びながら言う。

「溲なら帰ってからずっと家にいたけど」

「……それ本当か？」

「僕の部屋でグダグダと宿題やってたよ」

富田は目を伏せて考え込んだ。眉間に縦皺を刻むと、そっと上目遣いで遙を見据える。

「てか、おまえも仲間なんじゃないのか？　もしかしたらおまえの家族も……ファントムってヘリとかよく使ってるけど、おまえんちならすぐに調達できるだろうし……」

遙は手を止め、眉をひそめた。

「何？　富田はウチを犯罪一家だって言いたいのか？」

「……すまん、言い過ぎた」

富田は両手を合わせて許しを請う。由緒ある橘財閥に対して、また友人の家族に対して、随分と失礼な物言いだっただので謝罪もやむを得ないだろう。しかし、納得はしていないようだ。

「でもなあ、あれはやっぱり溲に間違いないぜ。ずっと昔から溲のことを見てきたし、顔は見えなくてもわかるんだよ。それに、溲って呼びかけたら振り向いたし……」

「声があったから振り返っただけじゃない？」

「それは、そうかもしれないけど……」

そう答えながらも、釈然としない様子で首を傾げた。

遙はパフェをすくいながら尋ねる。

「ねえ、もし漣がファントムだったらどうするつもり？」

「そんなのわからねえよ……けど、とりあえず本当のことを知りた
いんだ。なんでこんなことやってるのか理由を聞かせてほしい。警
察に突き出すつもりはないぜ。でも、こんなこと続けてたらいつか
捕まっちゃうかもしれないし、できれば説得してやめさせたい。友
達だから言えることってあるだろ？」

「そうだね。けど、漣はファントムじゃないよ」

遙は素っ気なく答えてから、畳みかけるように続ける。

「確かに、髪型や背格好が似てるのは認めるけど、漣にはあんなこ
とをするだけの度胸も頭脳もないよ。富田はさ、漣のことばかり
考えてるから、そう見えたんじゃない？」

「うっ……」

富田は頬を赤らめてのけぞった。それでも、容赦ない追及の手は
緩まない。

「隠す気ないんでしょ？ 気付いてないの漣本人くらいだよ」

「……………」

何か言いたげに半開きの口が動くが、それが言葉になることはな
かった。富田はそつと唇を引き結んでうつむくと、テーブルの上に
置いた手を握りしめた。その顔は、今にも湯気が立ち上りそうなく
らい真っ赤になっている。

遙は溜息をついた。

「ねえ、漣のどこがいいわけ？ ただのお調子者のバカだよ？」

「バカって……」

富田は顔を上げて言い返す。

「そりやおまえと比べたらそうかもしれないけど、だいたいいつも
校内で5位以内だし、全国模試でも名前が載ってたりするし……」

「勉強の話じゃなくて、なんにも考えずに生きてるってこと」

遙はぶっきらぼうにそう言い放つと、最後のひとすくいを口に運
び、スプーンをグラスの中に投げ置いた。銀色の持ち手が縁に沿っ

てまわり、カラリと乾いた音を立てる。

「遷は考えるって言われないと考えないんだよ」

「確かに、成績いいわりにバカっぽいところはあるよな……」

それには富田も同意するしかなかった。難しい顔で考え込みながら腕を組む。そんな彼を、遷は頼杖をつきながら醒めた目で見つめていた。

「やっぱり顔がいいの？」

「ん……まあ、それもないわけじゃないが……」

富田は歯切れの悪い答えを返し、コップに手を伸ばした。氷が融けきつてぬるくなつた水を、渴いた喉を潤すために少しだけ流し込む。そのとき??。

「じゃあ、僕でもいいんだ」

何気ない口調で爆弾発言が落とされる。富田は目を白黒させて、コップを机に戻しながらゲゲホとむせこんだ。涙目になりつつも、机に両手をつけて勢いよく遷に詰め寄る。

「おまえいきなりなに言い出すんだ!」

「ダメなの？」

「当たり前だつ!!」

「どうして？」

遷は不思議そうにちょこんと小首を傾げた。大きな漆黒の瞳がまっすぐ富田を捉えている。その仕草も表情も、まるで遷を真似たかのようにそっくりだった。邪気があるのかわからないのかわからず、富田は調子を狂わされる。

「どうして……おまえ男だろ……」

「男じゃいけない？」

「いけないとかじゃなくてだな……ん？」

言い返すうちに混乱してきたらしく、首を捻りながら、浮かした腰をゆっくりと椅子に下ろす。

それでも遷は引き下がらなかった。

「僕のこと嫌いなのか？」

「嫌いじゃねえよ」

「じゃあ、好きなんだ？」

「……友達としてだぞ？」

富田は微妙な面持ちで釘を刺す。これまでずっと友達づきあいをしてきた遙に、唐突にこんなことを言われては、当惑や不安を感じるのも致し方ないだろう。その遙の方はといえば、思考の読めない瞳で富田を見つめ返していた。

「溇のことは諦めた方がいいよ」

「彼氏がいるのはわかってるよ」

富田は苦々しげに吐き捨てた。そして、拗ねた子供のように、口をとがらせてぼそりと付け加える。

「けど、そのうち別れるかもしれないねえし」

「溇には婚約者がいるんだよ」

話が大きく飛躍した。富田はぱちくりと瞬きをする。

「……えっと、彼氏？」

「そうじゃなくて、うちのじいさんが勝手に決めた婚約者だよ。長年じいさんの秘書をやってて、僕たちの保護者代理でもある人なんだけど」

「ああ、あの人か……」

よく知っているわけではないが、これまで何度か目撃しており、挨拶したこともあるため、遙の説明だけですぐに思い至ったようだ。顎に手を添え、頭を巡らせながら斜め上に視線を向ける。

「じゃあ、彼氏はどうなるんだ？」

「別れるしかないよ。まだ相手には言っていないみたいだけどね」

遙は簡単に言う。だが、富田はやるせなさを滲ませながら、唇を噛みしめた。

「富田が同情してもどうにもならないよ」

「ああ……」

確かに、富田には橘家の事情に口を挟む権利はないし、挟んだところで聞き入れられるはずもない。それが現実である。いつそう神

妙な顔つきになって考え込むと、遠慮がちに切り出した。

「おまえにもいるのか？ 親の決めた婚約者とか……」

「今のところは聞いてないけど、そのうちあるかもね」

遙はどうでもよさそうな口調でそう言うと、空になったグラスを横にどけ、テーブルに腕を置いて身を乗り出した。

「だから、僕にしといたら？」

「いや、何でそうなるんだよ」

富田は脱力して額を押さえた。けれど、遙は真顔のまま言い募る。

「男ならそもそも結婚だとか望みを持たなくて済むよね」

「まあ、それは……一理あるような、ないような……」

「いったい僕の何がいけないわけ？」

じれったそうに追及の言葉をぶつけると、テーブルに手をつき、大きく身を乗り出してズイッと顔を近づけた。その近さに、富田はビクリとしてのけぞる。

「いつ、いけないとかじゃなくてだな……」

「じゃなくて、何？」

「な……なんだっけ……えっと……」

富田はソファの背もたれに張り付いたまま、しどろもどろになった。

「ねえ、富田、キスしたことある？」

「キ……？！」

遙はさらに身を乗り出し、額が触れ合うくらい近づくと、艶のある唇に薄く笑みをのせる。富田の脳内はその一瞬で限界値を振り切った。瞬きすらできず、体を硬直させたままゴクリと唾を呑む。

「お、俺……」

「じっくり考えればいいよ。何日でも、何ヶ月でもね」

遙は僅かに目を細め、くすつと小悪魔のような笑みを浮かべて言った。

「おかえり！」

澪はフレアのミニスカートをひらめかせて玄関に駆け下りると、ようやく帰ってきた遙を笑顔で出迎えた。ざっくりと編まれた白いセーターの胸元に、半分ほど袖に隠れた手を置いて言う。

「さっきは助けてくれてありがとう」

「とても見ていられなかったからね」

遙はちらりと目を向けただけで、足を止めることもなくさっさと階段を上っていく。しかし、澪は気にせず追いかけて、後ろで手を組んで覗き込んだ。

「富田、何か言ってた？」

「疑ってた。ていうか、確信してた」

遙は前を向いたまま答える。大方そうだろうと予想していたので、驚きはしないが、不安が募るのは止めようがない。それでも、澪が落ち着いていられるのは、遙という信頼できる味方がいるからだろう。

「疑いは晴らせたの？」

「一応、その時間は僕の部屋にいたって言うておいたけど、完全に信用してないみたいだね」

「そっか……」

澪は力のない声で相槌を打った。しかし、遙は淡々とした口調のまま続ける。

「今は他のことで頭がいっぱいだろうから、次に怪盗ファントムが話題になるまでは大丈夫だと思う。でも、あくまで応急処置だから、できるだけ早いうちに何か手を打たないとね」

「他のこと？ 応急処置??」

澪は不思議そうに小首を傾げて瞬きをした。遙は足を止め、ゆっくりと意味ありげな視線を流す。

「富田は単純だからね」

そう言つと、片方の口の端を上げた。

その日の夜??。

怪盗ファントムの次の案件が、剛三から発表された。

標的となる絵画の写真を見せられつつ、それにまつわる話と、奪わねばならない理由を聞かされる。今回も、本来の持ち主に返却することが最終目的だ。澁にも異存はなく、頷きながら真面目に聞いている。

舞台は、橘の屋敷からほど近い美術館だった。

悠人が全体の計画と各々の役割を説明していく。今回は取り立てて難しくないということだが、何重にも代替手段が用意されているあたり、篤史にはない彼の慎重さや緻密さが窺える。

一通りの説明が終わると、遥が手を上げて立ち上がった。

「どうした、遥」

「前回のことだけど、澁が逃走中に同級生と鉢合わせたみたいで、今そいつに正体を疑われて」

あまりにも唐突な暴露に、澁は啞然とした。みんなには出来れば内緒にしておきたかったことであり、何の相談もなく話した遥を恨めしく思うものの、さすがに嘘をつくわけにはいかない。

「本当か？」

「うん……」

悠人に尋ねられると、小さく肩をすくめるしかなかった。すぐに遥は補足する。

「仮面をつけて顔を見られたわけじゃないし、証拠は何もないから、しらを切り通せばすむ話なんだけど、澁だからそれも難しくくて」「そうだろうな……」

悠人は溜息まじりに同意する。剛三も、篤史も、まったくだと言わんばかりに大きく頷いていた。

「だから、次で疑惑を晴らしたいと思って」

「何かいい策でもあるのか？」

「気乗りはしないんだけど……」

遥はあからさまに嫌そうな声で前置きすると、恨みがましく澁を一睨みし、それから彼の考える作戦を説明し始めた。

数日後??。

「富田ー！ こっちこっち」

綾乃はつま先立ちで背伸びをしながら、大きく手を振り、人混みの向こうに見える富田を呼んだ。一緒にいた澁と真子も小さく手を上げる。富田は人垣を縫いながら、なんとか三人のもとに辿り着いた。

「はー……結構、野次馬って来るもんだな」

ぐったりして腰に手を当てる。彼の言うとおり、あたりはまるでお祭りのように人が溢れていた。そのせいか正面の車道も通行止めになっている。澁たちの学校から近いこともあり、同じ学校の生徒もちらほらいるようだ。日が沈んで冷え込みが厳しくなり、吐く息も白いが、その周辺だけは沸き立つような熱気に包まれていた。

「ていうか、綾乃、おまえ怪盗フロントム嫌いじゃなかったのかよ」
「せっかく近くに来るっていうんだから、とりあえず見とかないかね」

綾乃はニカツと白い歯を見せた。

「ったく、結局ミーハーなんだよな」

富田は呆れたように白い溜息をつくど、そろりと澁に目を向けた。
「おまえ、こんなところにいていいのか？」

「それどういう意味？」

あらかじめ心の準備をしていた澁は、過剰な反応をせず、本当にわからないといった感じで尋ね返す。そのリアクションに、富田は意表を突かれたようだ。

「あ、いや、別に……」

あたふたと否定しながら言い淀んだが、それでもまだ澁を気にして、ちらちらと不安そうな眼差しをよこしている。心配しているのだろう。なにせ、怪盗フロントムの正体は澁だと思っているのだから??。

ざわざわ、と、急にあたりが騒がしくなった。

「来たよ、ほら！」

綾乃が勢いよく指さした方を見上げると、夜の帷が降りた空の彼方に、白いハンググライダーがぼんやりと浮かび上がっていた。ただ目を凝らさないとよく見えないくらいだ。しかし、次第に大きくなり、やがて操縦者の姿まで認識できるようになる。

間違いなく怪盗ファントムだ。

野次馬の頭上をすつと横切り、緩やかに弧を描くと、美術館の正面玄関前に降り立った。そして、長い黒髪をさらりと舞い上げながら、襲いかかる警備員を次々とかわし、まるで挑発するように鮮やかに翻弄していった。野次馬の集まる門のすぐそばにも来て、存分にその姿を見せつけていく。熱気は最高潮になった。

「わあ、私、実物初めて見た！」

真子は手袋をはめた両手を組み合わせて、目をキラキラ輝かせている。普段おしとやかな彼女とは思えないはしゃぎっぷりだ。隣の綾乃は、その様子を微笑ましげに眺め、そして腕を組みながら漣に振り返った。

「やっぱちよつと漣に似てるかもね。漣の方が女の子らしいけど」
的確な指摘に、漣は苦笑する。

怪盗ファントムとして美術館に降り立ったのは遥である。その間に、漣は富田たちと一緒に怪盗ファントムを見に行き、別人であることを納得してもらおうという計画だ。このために、遥はハンググライダーの操縦まで習得したのだから頭が上がらない。

富田は怪盗ファントムと漣を交互に見て唾然としていた。それから、門にかじりついてファントムを凝視すると、ジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、手早くどこかにかけて耳に当てる。

「あ、遙か？」

『……富田？』

「ああ……、おまえ本当に遥なのか？ 今どこにいるんだ？」

『……ちよつ』

「ちよつ、おま……切りやがった!!」

富田は目を大きく見開き、信じられないといった様子で、握った携帯電話に向かって叫ぶ。

隣で耳をそばだてていた綾乃は、腹を抱えて大声で笑い出した。

「いきなりそれじゃウザいわ、確かに」

電話に出たのは、当然ながら遥ではない。遥の携帯電話は篤史に預けてあって、富田から電話がかかってきたら、あらかじめ録音しておいた音声から適切なものを選んで流すことになっていた。普段からぶつきらばうな遥だからこそ成り立つ計画だったのかもしれない。

「風邪ひいたって言ってたし、寝てたのかもしれないよ」

真子が冷静に推察する。遥がここに来なかったのは、風邪ぎみだからというのが表向きの理由だ。それでも、富田の不満は収まらない。

「だからって、あれだけ熱烈アプローチしておきながらうざいはねーだろ！」

「熱烈アプローチって？」

漣がきよとんと尋ねると、彼はギクリとして顔を引きつらせた。

「あ、いや、それはその……」

急にたじたじになり、言い訳もできないまま目を泳がせる。ほんのり頬も紅潮してきた。綾乃はじとりとした視線を送ると、両手を腰に当て、思いきり胡散臭そうに下から覗き込む。

「あんたたち、いつのまにそういう関係になってたわけ？」

「誤解だ！ 遥が一方的に迫ってきただけで、俺は別に……」

富田は両手をふるふると振って弁明する。

「もしかして、最近、様子がおかしかったのってそのせい？」

「……俺、おかしかったか？」

「うん。遥くんを見てぼーっとしてるが多かったよ」

真子が指摘すると、彼の顔はみるみるうちに真っ赤になった。富田は単純だからね？ 先日の遥の言葉と合わせて考えると、富田に迫ったというのは、怪盗ファントムから気を逸らせようとしての行

動だったのだろう。だが、それは富田の気持ち弄ぶ行為であり、
漣としてはさすがに申し訳なくなる。

「あのね……、多分だけど、遙はちよつとからかっただけだと思う
よ」

「やっぱそつだよなあ」

富田は溜息をつきながら、まるで火照りを冷ますかのように、顔を上げてぼんやりと遠くの空を見やる。綾乃は横向きで間合いを詰めると、ニツと白い歯を見せ、彼の脇腹を肘でつついてからかうように言う。

「なにになに？　もしかしてマジで落とされちゃった？」

「落とされてねえし！」

富田はむきになって言い返した。小さく吐息をついて前髪を掻き上げると、ちらりと漣に視線を流す。

「悪かった」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

わあっ、とまわりで再び大きな歓声が上がった。

バリバリバリ……と大きな音を立てて近づいてきたヘリコプター。それを待っていたかのように、絵画を抱えたファントムが美術館の屋上に姿を現し、垂らされた縄ばしごに飛び乗って颯爽と去っていく。どうやら本来の目的の方も問題なく達成したようだ。漣はほっと安堵すると、気になっていた富田の横顔をそつと盗み見た。

「こつちこそ、ごめんね??」

伝えられない言葉を心の中でそつと呟く。少し、胸が締め付けられるように疼いた。

「師匠、おまたせしました。って、あれ？」

漣は美容室で着付けとヘアメイクをしてもらうと、悠人を待たせていた喫茶店に入り、歩幅を小さく刻みながら奥の席へと駆けていく。しかし、そこにいたのは彼だけではなかった。向かいには、彼とよく似た体格の男性が座っている。

「漣、あけましておめでとう」

「お父さま?!」

にこやかに振り返ったその男性は、漣の父親であり、悠人の親友でもある大地だった。濃紺色のトラッドなビジネススーツを身につけ、ネクタイまできっちりと締めている。おそらく仕事帰りなのだろう。それでも、まったくといっていいほど、疲れた顔を見せていない。

「その振袖も髪型もよく似合ってるよ」

「ほんとですか？」

漣は声を弾ませながら、腕を少し広げて、その場で軽やかに回って見せる。鮮やかな赤地に色とりどりの花が咲き誇る、上品ながらも人目を惹きつけるデザインで、漣自身もとても気に入っていた。髪も振袖に合わせて結い上げ、可愛らしく華やかな髪飾りをつけている。

「師匠に見立ててもらったんです」

「へえ、結構いいセンスしてるね」

大地はソファの背もたれに腕をかけ、上から下まで観察し、いかにも意外そうな口調で言う。

「そういえば、お父さまはどうしてここに？」

「おまえたちと正月を過ごすつもりで家に帰っただけど、漣と悠人は初詣に出掛けたっていうから、合流させてもらおうと思って来たんだよ。邪魔だったかな？」

「そんなことないです」

澗は屈託のない笑顔で答える。が、悠人は仏頂面で、大地の横顔を睨みつけていた。

「澗、行くぞ」

感情を押し込めたような声でそう言うと、コートと伝票を持って立ち上がり、ストールをまとった澗の肩を抱いて歩き出す。大地も慌ててコートを引つ掴み、軽い駆け足で追いかけてきた。

「おいおい、そう急ぐこともないだろう」

悠人はその言葉を聞いて足を止めると、澗の肩に手をのせたまま、冷たい表情でゆっくりと振り返った。そして、持っていた伝票を大地の胸元に押しつけ、怨念のこもった仄暗い眼差しを向けて言う。

「馬に蹴られて死んでしまえ」

それは、まるで呪詛のようだった。

空は厚い灰色の雲に覆われ、頬を打つ風は容赦なく冷たい。

いつ雪が降り出してもおかしくない天気だった。

車通りのほとんどない細い道路を、三人は澗を中心に並んで歩く。着物の澗を気遣い、悠人も大地もゆっくりと足を進めてくれている。さらに、悠人は包み込むようにしっかりと澗の手を握っている。転倒を心配していることだろう。その気持ちはありがたいが、まるきり子供扱いされているようで、素直に喜ぶことはできなかった。反対側では、大地がニコニコと人なつこい笑みを浮かべている。

「澗も悠人も元氣そうで良かったよ。活躍はいつも新聞や雑誌でチェックしているけどね」

「あはは……」

澗は曖昧に受け流した。怪盗という犯罪行為にもかかわらず、健全な課外活動のような言いようには、何とはなしに複雑な気持ちになっってしまう。それが自分の親であればなおのことだ。もっとも、彼は先代のファントムでもあるのだから、当然といえば当然なのか

もしれない。

「遙も元気にしてますよ」

「ああ、さつき帰ったときに話をしたよ。一緒に行かないかと誘ったんだが、篤史君とDVD三昧の方が楽しいそうさ。年中行事に興味がないのは相変わらずだな」

大地は軽く笑いながら言う。

遙も事前に何度か誘ったのだが、遙にも篤史にも面倒くさいからといって断られた。最近わかったことだが、二人は意外と趣味が合うらしく、休日にはよく篤史の部屋で一緒にDVDを見ているようだ。これまでもあまり誰とも遊ぼうとしなかった遙が、気の合う仲間を見つけたのであれば、たとえ相手が篤史であっても嬉しく思う。

「そうさ、遙にも渡したんだが……」

大地は思い出したようにコートのポケットを探った。そして、にっこり微笑んで小さな赤い袋を差し出す。

「はい、お年玉」

「わあ、ありがとうございます！」

遙はパアッと顔を輝かせて受け取った。かなり厚みのある感触だ。口は折り曲げてあるだけで封をされていなかったもので、はしたないとは思ったものの、親指で押し上げてちらりと中を覗いてみた。入っていたのはおよそ五枚ほど、それもすべて一万円札のようである。

「こんなに……？」

「ここ二年くらい忘れてたからね。あとは仕事の手当分かな」

大地は冗談めかして言う。

仕事というのは怪盗ファントムのことだろう。その手当にしては安すぎるような気がして、遙は思わず苦笑するが、そもそも手当をもらう性質のものでないことは理解していた。これで利益を得ているわけではなく、きれいな言い方をすれば、絵画の尊厳を守るためのボランティアなのだ。

「何でも金で解決できると思うなよ」

「まったく、いつまで拗ねてるんだよ。デートを邪魔したのは悪か

「つたけどさ」

大人げなくふてくされる悠人に、大地は呆れ口調で言い返した。それから、ふいに真面目な顔になって切り出す。

「悠人、おまえ本当に漣と結婚するつもりなのか？」

「ああ」

悠人は狼狽えもせず平然と肯定した。が、大地は不満げに口をとがらせる。

「それならそう言いに来いよ。美咲には報告したみたいだけど、どうして僕のところには来ないんだ？ 父親だぞ？ お父さん僕に娘さんをください、って挨拶しに来るのが筋だと思っただがね」

「都合のいいときだけ父親面するな」

悠人はピシヤリと突っぱねた。

「ずっと家にも帰らずほったらかしにしておきながら、たまに思いつきで可愛がつて、それで父親としての役目を果たしているつもりなのか？ おいしいところだけ持っていこうなんて狡いんだよ。漣と遙が出来た子だからいいが、普通だったらとつくにグレてもおかしくない家庭環境だぞ」

「二人をいい子に育ててくれたおまえには感謝してるって」

大地はあっけらかんと笑って言う。そんな彼を、悠人は横目でじつりと睨みつけた。

「だったら、漣をもらっても文句はないな」

「もともと反対するつもりはないよ。おまえが漣と結婚して橘を継いでくれれば、僕は自由にやりたいことをやれるし、むしろそうやってくれるとありがたい。橘を継ぐなんて僕には不向きだしね」

大地は穏やかにそう答えると、コートのポケットに両手を差し込んだ。

しかし、悠人はますますムツとして言い返す。

「そういつつもりで言ってるんじゃない」

「わかってるって」

大地は笑顔で軽く受け流した。そして、悠人に視線を送り、優し

く慈しむように目を細める。

「良かったよ、おまえに好きな人ができて」

学生るとき以来、悠人にはずつと恋人がいなかったと聞いているが、それ以前に、好きな人さえいなかったということだろうか。もしかしたら大地がからかっているだけかもしれない、と思ったが、悠人に反論しようとする様子は見られなかった。

「ところで、おまえらどこまでいったんだ？」

大地はふいにそう尋ねると、首を伸ばして興味深げに漣たちを覗き込む。

「どっ……？！」

「まだキスマでしかしていない」

湯気が出そうなほど真っ赤になる漣の隣で、悠人は顔色一つ変えずさらりと答えた。

「したんじゃないです！　されたんです！！」

漣は紅潮したまま大慌てで力説する。そこだけは誤解されたくない部分だった。しかし、漣の意図をわかっているのかいないのか、大地は感心したような眼差しを悠人に向けて言う。

「へえ、おまえにしては頑張ってるな」

「それ反応がおかしいですから！」

漣は感情的に声を上げると、今度は反対側の悠人に威勢よく詰め寄る。

「だいたいああいうのはノーカウントじゃないんですか？！」

「それならそれでいいけどね」

悠人は拍子抜けするくらいあっさり引き下がった。そして、にっこりと満面の笑みを浮かべて続ける。

「じゃあ、結婚式での誓いのキスを僕たちの初めてにしようか」

「……あの、まだ師匠と結婚するなんて決まっていなくて」

漣は顎を引き、調子づいた悠人を咎めるように上目遣いで睨んだ。それでも彼はニコニコと微笑んでいる。まるで、何もかも自分の望みどおりになると確信しているかのようにだった。もっとも、このま

まではいずれそうなることは避けようがないのだが。

大地はぬつと覗き込んで尋ねる。

「澪は嫌なのか？」

「嫌、っていうんじゃないんですけど……」

もちろん悠人のことは好きだし、一緒にいられると嬉しい。感謝も尊敬もしている。けれど??。

「彼氏のことか吹っ切れないだけだよ」

「ああ、刑事の……」

悠人が端的に述べると、大地は得心して頷く。誠一の話していかなかったはずだが、悠人や美咲から聞き及んでいたのだろう。渋い顔になりながら腕を組んだ。

「さすがに刑事はまずいよなあ」

「……………」

澪の顔に翳りが落ちる。それに気付くと、大地はふつと目を細めて微笑みかけた。

「悠人はいい奴だよ。僕が保証する」

「それは、わかってますけど……」

「僕はね、澪にも悠人にも幸せになつてほしいんだ」

結い上げた髪を崩さないように、大きな手がふわりと置かれる。

彼の気持ちや思いは理解はできるのだが、素直に首肯するわけにはいかず、だからといって闇雲に否定することもできない。口を閉ざしたまま、微妙な面持ちで目を伏せるしかなかった。

「だったら邪魔しないでほしいんだがな」

不意に、反対側から棘を含んだ声が聞こえた。

「それよりも、もっと美咲のことを大事にしろ」

「言われるまでもなく大事にしてるけど？」

大地はしれつと答えた。悠人の眉間に深い縦皺が刻まれる。

「何をやってるのか知らんが、美咲を巻き込むな」

曖昧な言い方だが、研究所の不正を指していることは間違いなかった。大地主導で行われた可能性が高く、美咲は何も知らないかも

しれない、と悠人は当初から主張していたのだ。それが事実かどうかはわからない。ただ??。

「すべて美咲自身の意志だよ」

大地は不敵な笑みを唇にのせ、まるで挑発するかのように言う。

一瞬、空気が張りつめたように感じた。しかし、悠人は冷ややかな一瞥を送っただけで、そのことについてはもう触れようとしなかった。

神社の大きな赤い鳥居をくぐり、石畳で舗装された参道を歩いていく。

さほど大きくなく、有名でもない神社だが、意外と多くの初詣客で賑わっていた。家族連れや恋人どうし、友達どうし、あるいは一人など、老若男女さまざまな人たちの姿が窺える。澗と同じように晴れ着で盛装した女性も、多くはないがちらほらと目についた。

すぐに、拝殿の近くまで辿り着いた。

屋根付きの小さな手水舎で手を漱ぎ清めてから、拝殿前の石段を上り、三人それぞれが賽銭を入れて両手を合わせる。

いつまでも誠一と一緒にいられますように。お願い、神様??。

澗は、両側の二人を気にしながらも、どこかにいるはずの神様に真剣に訴えかけた。願いごとは去年と同じだが、願う気持ちはほとんど別物である。ただ幸せだったあのときとは違い、終わりが現実になるうとしている今は、もはや神様に縋るしか為すすべがなかった。

「澗は何をお願いしたの?」

「内緒です」

大地に尋ねられると、澗は小さく肩をすくめてそう答えた。刑事はまずいと言われたばかりなのに、臆面もなくこの願いを口にできるほど、図太い神経は持ち合わせていない。幸い、大地はそれ以上しつこく追及してこなかった。今度は悠人に目を向けて言う。

「おまえは？」

「今年中に澪と結婚できますように」

悠人は涼しい顔で答える。以前は春まで返事を待つと言っていたはずなのに、次第に強引になるその態度に、澪は乾いた笑いを浮かべるしかなかった。そして、神様は競合する願いのどちらを優先するのだろうか、と真面目に考え込んでいると？。

「奇遇だな。僕も、悠人と澪が無事に結婚できるよう願っておいたよ」

大地が嬉しそうに声を弾ませた。二人が同じ願いをしていたとなると、単独の願いである澪の方が分が悪い。もつとも、それは神様が多数決主義ならばの話だが、どうしても不安にはなってしまう。

悠人は胡散臭そうな視線を大地に流した。

「嘘をつけ」

「本当だよ。たくさんある願いごとのひとつだけどね」

大地はコートのポケットに手を差し入れ、白い息を吐きながらそう言くと、大きく広がる空を見上げて薄く微笑んだ。目に掛かるくらい長く伸びた前髪が、冷たい風に吹かれてさらさらと揺れる。その間から覗く瞳には、灰色にくすんだ曇天が映し出されていた。

三人はゆっくりと参道を戻っていく。

両側に二つほど出ている屋台から、焼きそばやフランクフルトの匂いが漂ってきたが、大地も悠人も興味がないのか目もくれなかった。澪は美味しそうな匂いにひかれたものの、ちらちらと眺めただけで、あえて足を止めることなく通り過ぎていく。

「さ、これからどうする？」

大地は少し前屈みになって悠人に尋ねた。しかし、悠人は正面を向いたまま振り向きもしない。

「大地、おまえはもう帰れ」

「つれないこと言うなよ」

「ホテルのレストランに予約を入れてある。二名でな」

その話は澪も初耳である。とはいえ、最近ではよくあるパターンなので驚きはしなかった。

「電話して三名に増やせないか訊いてみるよ」

大地は不機嫌になるでも諦めるでもなく、当たり前のように指示を出した。逆に、悠人の方がムツとして横目で睨みつけている。しかし、何を言っても無駄だと悟ったのか、渋々ながら内ポケットから携帯電話を取り出した。

澪は、電話をかけようとする悠人から少し離れて、何とはなしにあたりを見まわした。すると、参道脇にひっそりと佇む、こじんまりとした神社のような建物が目に入った。賽銭箱も置いてあるようだ。それを見た瞬間に名案が浮かび、思わずパツと顔を輝かせて大地に振り返る。

「お父さま、私、あそこでお参りしてきますね」

「大事なお願いし忘れちゃった？」

大地がニコニコしながら尋ねてきたが、澪は笑ってごまかし、逸る気持ちのまま小刻みに走り出した。願いごとを忘れていたわけではない。もう一度、たったひとつの願いごとを祈るのだ。大地と悠人に負けるわけにはいかないのである。

その小さな神社には、先客がいた。古びたジーンズにブルゾンというラフな格好をした長身の男性で、風邪をひいているのか、顔の大半が隠れるくらい大きな衛生用マスクをしている。手を合わせるでも賽銭を入れるでもなく、ブルゾンのポケットに両手を突っ込んだまま、じつと何か考えごとをしているように見えた。

邪魔をしないように、澪はそろりと忍びよって隣に立ち、賽銭を用意しようとハンドバッグを開ける。

そのとき、男性が勢いよくパツとこちらに振り向いた。

何なの???

澪は訝しげに眉をひそめる。

彼は大きく目を見開いて澪を凝視していた。表情はよくわからないものの、愕然としている様子だけは見てとれる。何か気に障るこ

とをしただろつか、どこかで会ったことがあるだろつか??そんな疑問を抱きながら、ほとんど隠れている彼の顔をチラチラと横目で観察する。

まさか???!

漣はハツとし、飛びかかるようにして男のマスクを剥ぎ取った。

その顔は??。

「やっぱりあのときのバイク男!!」

まさか、いきなり手が出てくるとは思わなかったのだらう。男はすっかりマスクを取られてから、慌てて顔半分を覆って後ずさり、悔しそくに奥歯を強く噛みしめた。そして、険しい目つきで左右を覗くと、意を決したように身を翻して駆けていく。

「待って!!」

漣はすぐに追いかけてしようとしたが、この着物ではまともに走れず、砂利に足を取られて転びそうになった。よろけて地面に落としたハンドバッグから、小銭が濁った音を立ててあたりに散らばる。

「誰かあの人を捕まえて!! 痴漢です!!」

最後の手段とばかりに、漣は有らん限りの声を張り上げて男を指さす。今日は偶然だったのかもしれないが、彼が自分や遙を付けまわしていたのは間違いない。わざわざ戻ってきたこともあるのだから、言い逃れのしようもないだらう。いったい何が目的なのか、どういう理由なのか、どうしても本人から聞き出したかったのである。逃げかけていた男はギョツとして振り向いた。

「漣、大丈夫か?! 何をされた?!」

「あの人を捕まえて!!」

ただならぬ声を聞いて駆けつけた悠人に、漣は必死に指示を出す。男は我にかえって再び走り出すが、悠人が凄まじい勢いで追い、逃げ道を迷う男との間はすぐに詰められた。男は足を止めて振り返ると、迫りくる悠人に対して身構える。悠人も少し手前で身構えた。二人ともジリジリと摺り足で相手の出方を覗っている。

先に均衡を破ったのは悠人だった。

素早く腰を落として足払いをするが、男にはあっさりかわされてしまう。が、あらかじめそれを見越していたようで、すぐさまみぞおちを狙って低いところから拳を繰り出した。しかし、それさえも男には受け止められてしまう。いったん身を引こうとするが、一瞬早く、男の膝蹴りが悠人の側頭部に入った。悠人の体は、受け身を取りながら、湿った土の上に叩きつけられる。

「師匠！」

「平気だ」

漣が駆け寄る間に、悠人は顔をしかめつつも立ち上がった。あたりを見まわしながら土を払う。そのときには、もう男の姿は見えなくなっていた。今から追いかけても捕まえることは難しいだろう。悠人が無事だっただけでも良かったと思わねばならない。

「それより大丈夫なのか？ あの子に何をされた？」

「あ……すみません、痴漢ていうのは嘘なんです……」

漣はしゅんとしてうなだれた。

悠人は怪訝に眉を寄せる。

「どういうことか説明してくれないか？」

「痴漢って聞いて、悠人、完全に逆上してたんだぞ」

いつのまにか来ていた大地が、悠人に携帯電話を手渡しながら、軽く窘めるような口調で言う。その携帯電話は悠人のものだ。通話中のそれを投げ出して、一目散に駆けつけてくれたのだろう。漣は申し訳なさに身を縮こまらせる。

「あの子、以前から私や遥のことを付けまわっていて……だから、何が目的なのか聞き出したかったの……」

もともと隠すつもりはなかった。拙いながらも率直に説明すると、悠人は目を大きく見開いた。

「どうして早く言ってくれなかったんだ」

「別に、何かされたわけじゃないし……」

「何かあってからでは遅いんだぞ」

「うん……」

冷静ながらもどこか歯がゆそうな彼の物言いから、責めているのではなく、漣の身を心から案じているのが伝わってくる。そのことがとても嬉しく、とても心苦しかった。

「あの男……」

大地はふとそう呟くと、顎に手を添えてじつと考え込んだ。

「もしかしたら、僕も見たことがあるかもしれない。研究所の近くをうろついている男がいるんだよ。いつもフルフェイスのヘルメットでバイクに乗っているから、顔まではわからないが、背はあのくらいだし、体格も似ている気がするんだよな」

「そう、そのバイク男です！」

漣は奪ったマスクを握りしめながら力強く肯定した。同一人物である保証はないものの、漣の見た男もバイクに乗っており、おそらく間違いないだろうと思う。

「目的は、美咲の研究か……」

大地はぼつりと言葉を落とした。何度も研究所付近で目撃しているとなると、やはり研究所に目的があると考えるのが妥当だろう。健康診断でしか行かない漣でさえ、一度だけだが、その帰り道に遭遇しているのだ。

悠人は男の逃げ去った方を見やり、表情を険しくした。

「あの男、かなりできるぞ」

それは、漣も見えていて感じたことである。あの男は悠人と対等以上に渡り合っていた。少なくとも、動きの切れや素早さに関しては、相手の方が数段上といえるだろう。以前、漣と遙が逃れられたのは、彼の虚をついたからに他ならない。もし、あの男が本気で何かを仕掛けてきたとしたら??。

「守ってくれるんだろう?」

大地はいつになく真面目に問いかける。

「ああ、守るさ……」

悠人は嘸みしめるようにそう答えると、漣の肩に手をまわし、強く自分のもとへと抱き寄せた。指先からも感じる痛いくらいの力。

そこから彼の真摯な想いと決意が伝わってくるようだ。けれど、そのことが、逆に澁の不安と戸惑いを大きく煽っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1566k/>

東京ラビリンス

2011年10月3日03時35分発行